別冊歴史読本

新選組隊士録

幕末維新を戦い抜いた474人の人物列伝

別冊歴史読本

新選組隊士録

幕末維新を戦い抜いた474人の人物列伝

別冊歴史読本

新選組隊士録

新人物往来社

別冊歴史読本83号

平成10年9月8日発行（第23巻41号）

新人物往来社

新選組隊士録

9784404026514

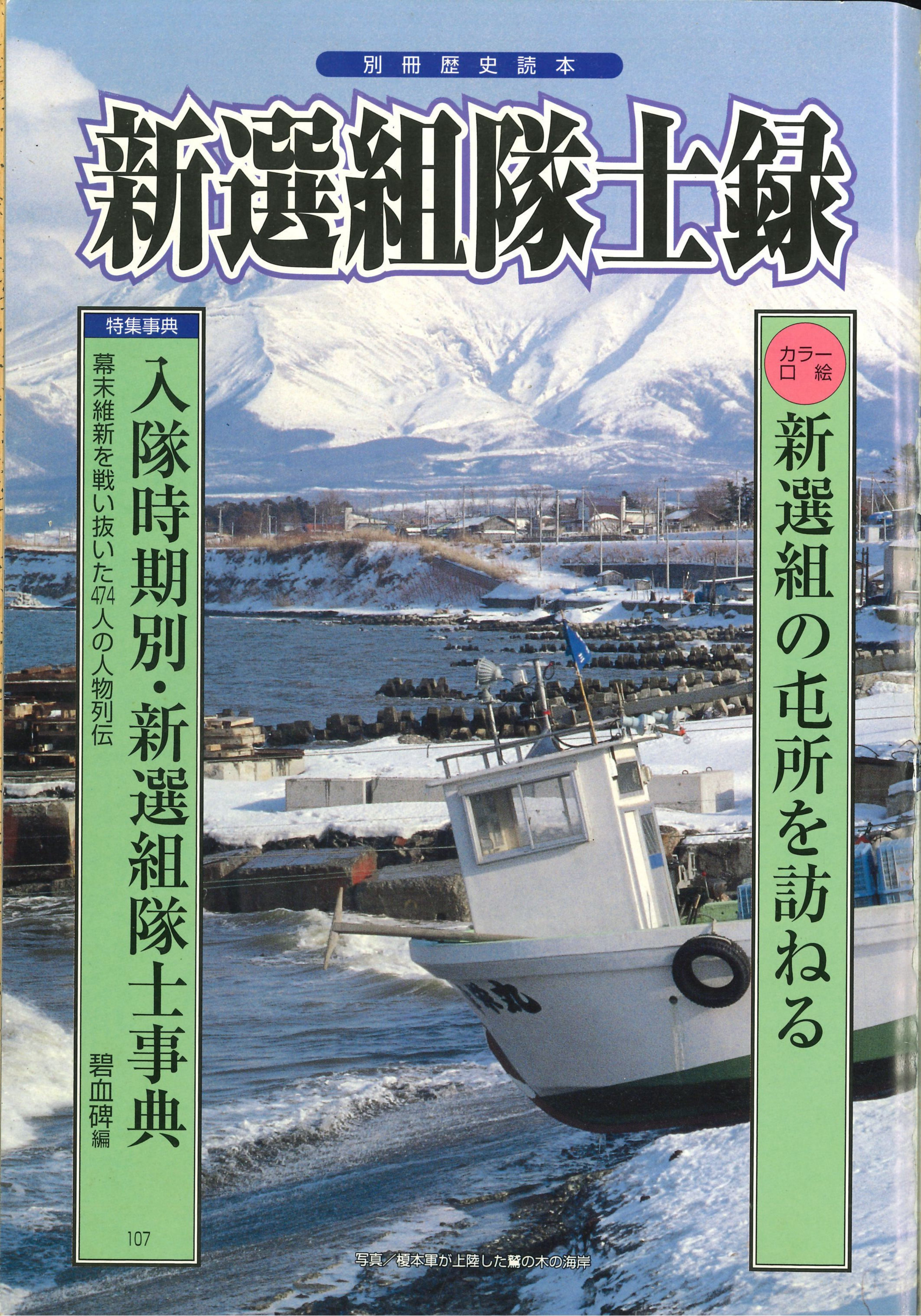
1929421016003

定価：本体1600円＋税

雑誌69647-83

ISBN4-404-02651-X

C9421 ¥1600E



別冊歴史読本

新選組隊士録

カラー口絵

新選組の屯所を訪ねる

特集事典

入隊時期別・新選組隊士事典

幕末維新を戦い抜いた474人の人物列伝

碧血碑編

写真／榎本軍が上陸した鷲の木の海岸

最新刊

池田大作全集

絶賛発売中！

●第48回配本――対談 第14巻

★菊判・上製箱入り 本体価格2,381円 ※消費税が別に加算されます。

二十世紀を代表する
二人の知的巨人との
誠実な対話は、
「平和」と「希望」の
輝く地平を指し示す

「生命の世紀」への探求

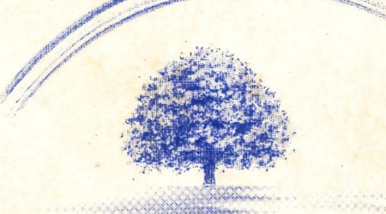
●現代化学の父 ライナス・ポーリング共著

ノーベル化学賞・平和賞を受賞、アインシュタイン博士らとならび称される20世紀最大の科学者との世界不戦、恒久平和への提言。

世界市民の対話

●アメリカの良心 ノーマン・カズンズ共著

被爆した日本の若い女性たちの渡米治療等に奔走した米国ジャーナリズム界の巨人との「平和論」「希望の哲学」を縦横に語る。



〒160-8070 東京都新宿区信濃町18 聖教新聞社 TEL03(3353)6111〈大代表〉

特集史論

人員構成と組織から見る新選組の歩み

文久三年の創設から明治二年の箱館降伏までの活躍を人物と編成から解き明かす　菊地　明　10

近藤　勇　夷狄討伐を新選組の目的とした局長　伊東　成郎　18
土方　歳三　近代戦争の指揮官に変身した鬼副長　山村　竜也　22
沖田　総司　青春を燃焼した総司の幻の恋人とは　古賀　茂作　26
井上　源三郎　鳥羽伏見の戦いで死んだ温厚な剣士　久住　裕子　30
山南　敬助　脱走の罪で切腹した文武両道の副長　清水　隆　34
山崎　烝　密偵と医者の二足の草鞋を穿いた男　島津　隆子　38
永倉　新八　貴重な資料を残した新選組の語り部　山本　博司　42
原田　左之助　美男で豪胆の「死損ねの」副長助勤　野田　雅子　46
斎藤　一　西南戦争まで戦い続けた警視庁警部　赤間　倭子　50
藤堂　平助　新選組と決別した「近藤勇の四天王」　結喜しはや　54

芹沢　鴨　暗殺された豪胆粗暴な局長の熱き志　結喜しはや　58
新見　錦　謎に包まれた新選組創設時の幹部！　伊東　成郎　60
平間　重助　遁走した副長助勤のその後の消息…　清水　隆　62
平山　五郎　粛清された神道無念流免許皆伝の腕　山村　竜也　64
野口　健司　突然の切腹の裏に秘められた罪状は　古賀　茂作　66
松原　忠司　疑問の多い〝壬生心中〟の真相を探る　島津　隆子　68
島田　魁　誠の一字に徹して初志を貫いた生涯　山本　博司　70
武田　観柳斎　勤王思想家だった甲州流軍師の最期　赤間　倭子　72
伊東　甲子太郎　油小路に散った北辰一刀流の道場主　野田　雅子　74
谷　三十郎　「千石のもの」と評された槍の腕は？　久住　裕子　76

篠原泰之進　78
谷　万太郎　79
中島　登　80
相馬　主計　81
野村利三郎　82
楠木小十郎　83
稗田　利八　84
田村銀之助　85
市村鉄之助　86
森　常吉　87
神子畑邦彦

赤誠一途の道をゆく　土方歳三の足跡完全踏破記録　釣　洋一　88

特集年表　新選組詳細活躍年表　菊地　明　96

索引……168

写真／土方歳三の故郷日野の夕景

新選組屯所を訪ねる

文久三年二月、浪士組として上洛した近藤勇たちは壬生村で分宿し、やがて新選組が誕生する。新選組は壬生の八木源之丞邸や前川荘司邸を屯所とし、その後、壬生から西本願寺、不動堂村へと移っていった。屯所は、さまざまな事件の舞台となり、また、隊士たちの日常生活の場所でもあった。ここでは各地に残る遺跡から往時を偲んでみよう。

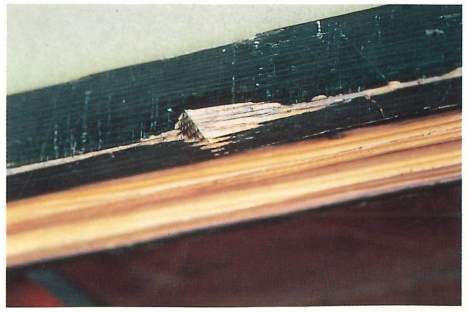
壬生

◆八木邸の外観

◆八木邸の庭

◆八木邸の内部

◆八木邸の内部



◆芹沢鴨暗殺のときの鴨居の刀傷

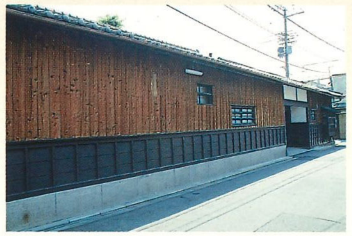
◆八木邸の芹沢鴨と平山五郎が暗殺された部屋

◆前川邸の外観

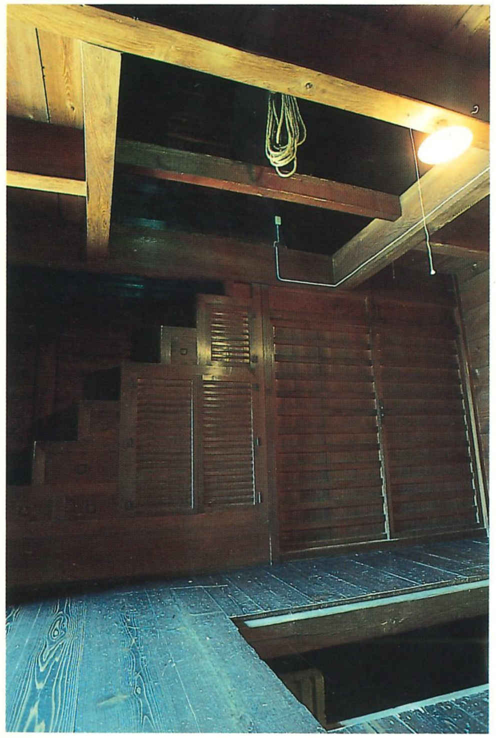
◆前川邸の土蔵外観

◆刀傷の残る前川邸長屋門の出窓の枠

◆前川邸の長屋門



◆前川邸の外観



◆古高俊太郎を拷問したという前川邸の土蔵

◆前川邸の雨戸に近藤勇が書いたという落書き「勤勉　活動　努力　発展」と書かれている

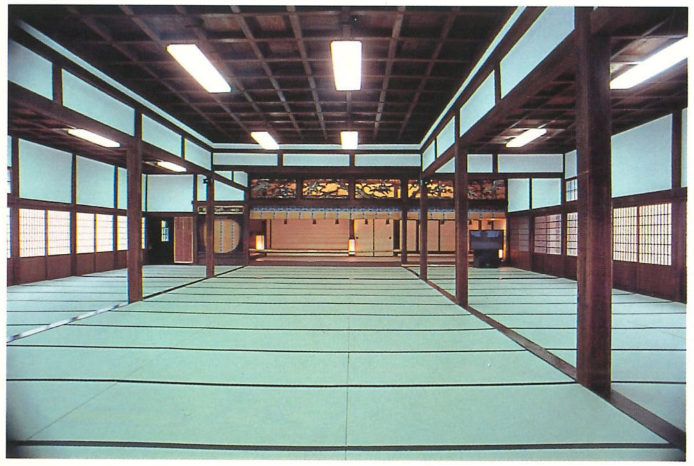
◆本徳寺本堂と大広間外観

◆本徳寺本堂の外観

◆本徳寺本堂廊下の柱の刀傷

◆本徳寺本堂の内部

◆蓮如堂外観



◆本徳寺大広間の内部

◆本徳寺大広間の外観

西本願寺

慶応元年三月、新選組の屯所は壬生から西本願寺へと移り、西本願寺の北集会所と太鼓番屋が使用された

◆西本願寺太鼓番屋

不動堂村

慶応三年六月、西本願寺よりこの地へ移ったが、道路拡張などで、当時とは景観が異なっている

姫路

新選組が屯所とした西本願寺の北集会所の建物は、学林（龍谷大学）の大講堂として使用するために解体されたが、明治六年、姫路の本徳寺の本堂として移築された。本徳寺は、蓮如ゆかりの由緒ある寺で、英賀道場として開基された。

また一説には本徳寺の大広間の建物は不動堂村屯所の建物を移築したともいわれている

◆本徳寺山門

新選組隊士録

新選組はある時期、大坂の万福寺（天王寺区）に屯所を設けていた。
慶応元年五月には町人勤王家の藤井藍田を連行したと記録にみえる。
万福寺は火災にあったが、出来る限り旧状に復元されている

大坂

◆万福寺本堂の外観

◆万福寺本堂の外観

◆万福寺の庭園

◆新選組が座敷牢に使ったとされる小部屋

◆伏見奉行所跡の碑

伏見

慶応三年十二月、新選組は伏見奉行所へ宿営し、
屯所としたが、鳥羽・伏見の戦いで敗走した

写真／やまだ　しげる

特集史論

人員構成と組織から見る新選組の歩み

菊地　明

文久三年の創設から明治二年の箱館降伏までの活躍を人物と編成から解き明かす

▼壬生浪士組の創設メンバー

文久三年二月八日、幕府によって募集された二百三十余名の一団が、江戸小石川の伝通院を出立する。彼らは一番から七番までの小隊に編成され、中山道を京都に向かい、二月二十三日に京都三条大橋を渡って洛西壬生村の家々に旅装を解いた。

これが、のちに新選組を産み落とすことになる浪士組である。

彼らは三月に上洛する将軍家茂の警護を目的に募集され、京都に上ったのだが、これを幕府に献策した出羽庄内郷士の清河八郎は元来が尊王攘夷論者であり、幕府に利することは考えていなかった。清河は浪士組を攘夷の先兵とするため、幕府を利用したにすぎず、上洛するとただちに浪士組の江戸帰還を朝廷に建白したのだった。

三月三日には朝廷を通じて帰還命令が下され、浪士組は清河の策謀どおりに江戸へ戻ることとなる。しかし、これに反対して京都残留を求める浪士たちがいた。

江戸牛込甲良屋敷の試衛館を母体とした、近藤勇、土方歳三、山南敬助、沖田総司、井上源三郎、永倉新八、原田左之助、藤堂平助の、いわゆる「試衛館グループ」の八名と、水戸出身者を中心とした、芹沢鴨、新見錦、平山五郎、平間重助、野口健司の、いわゆる「水戸グループ」の五名だった。

これに呼応して残留を希望した浪士もおり、彼らは三月十日に京都守護職をつとめる会津藩へ、市中警備を承認してくれるようにとの嘆願書を連名で提出した。それが次の十七名である。

近藤　勇	土方　歳三	山南　敬助	沖田　総司
井上源三郎	永倉　新八	原田左之助	藤堂　平助
芹沢　鴨	新見　錦	平山　五郎	平間　重助
野口　健司	粕谷新五郎	阿比留鋭三郎	斎藤　一
佐伯又三郎			

その結果、彼らは十二日深夜に至って、会津藩御預かり浪士と認められた。

ただし、斎藤一と佐伯又三郎は浪士組に加入しておらず、これまでに同志として合流したものだが、その経緯は判然としていない。

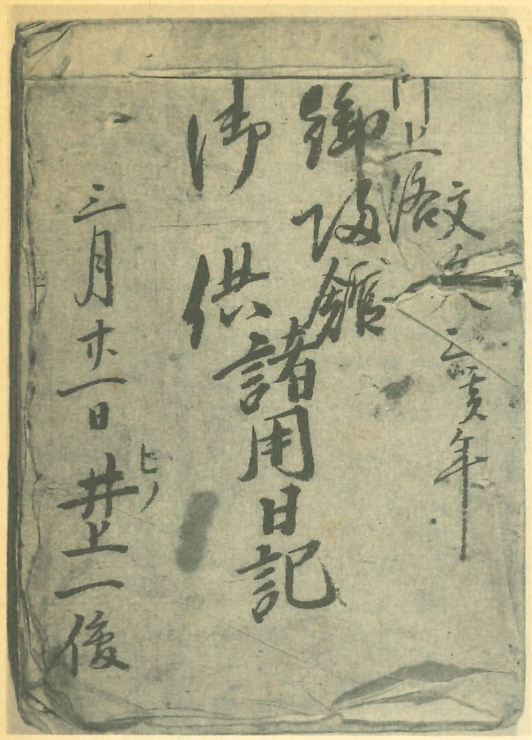
一方、幕府でも浪士組の殿内義雄と家里次郎に、その他の残留希望者を募るように命じていた。その結果、両者は合同して十五日に会津藩邸へおもむき、改めて会津藩の差配をうけることが認められた。病欠した者もあるが、総員は十三日の連名者に、殿内義雄、家里次郎、根岸友山、遠藤丈庵、清水五一、神代仁之助、鈴木長蔵の七名を加えた二十四名である。

会津藩は、彼らを京都残留という大目的のもとに一体のグループとして取り扱ったが、それに至るまでの過程が異なっており、内実は必ずしも一体化してはいなかった。

その一例を、会津藩士本多四郎の『世話集聞記』から知ることができる。彼は自藩が預かった浪士と会うため、友人と連れ立って壬生を訪れ、彼らと壬生狂言を見物しながら昼食をとっていた。そこで紹介されたメンバーは、三月十日に連名した十七名そのままだったのである。

さらに、後年の記録ではあるが、永倉新八が新選組通史上の隊士を網羅した『同志連名記』には、殿内義雄以下の七名は記録されていないのだ。試衛館と水戸のグループは「京都壬生村における新撰組首唱者、すなわち京都に残留せし十三名」と特記され、斎藤一、佐伯又三郎、阿比留鋭三郎、粕谷新五郎の名前もある。永倉自身の認識においても、殿内らは〝同志〟とみなされていなかったということになる。

これが新選組の前身である壬生浪士組の、正式メンバーだったのだ。



井上松五郎が書き留めた旅行の記録

事実、三月二十五日の夜には殿内義雄が四条大橋で斬殺され、その直後より正式メンバー以外は京を脱し、粕谷新五郎までもが脱走してしまうのだった。さらに、四月二十四日には大坂で家里次郎に詰腹を切らせて、四月二日に病死した阿比留鋭三郎をのぞく、試衛館・水戸グループの十五名が実質的な創設者となるのである。

ところで、この壬生浪士組という名称が生まれたのは、いつのことだったのだろうか。

井上源三郎の兄井上松五郎は、八王子千人同心として将軍に随従して三月四日に入京して以来、在京中の出来事を日記に書き留めていた。それによると、松五郎が初めて壬生を訪れたのは三月十三日のことで、以後の記述を見ると、三月十六日、四月二日と彼らに出会ったことが記録されるが、いずれも「浪士組」と表記している。これは「元浪士組」というような意味と思われ、まだ彼らに組織名がなかったことを思わせている。

それを裏付けるように、四月二日に大坂の平野屋五兵衛方で芹沢・近藤ら七名が金策したさいの借用証には、みずからを「京都壬生役浪士」と記しているのだった。

そして四月三日になると、松五郎は彼らを「三壬浪士」としている。もちろんこれは「壬生浪士」の誤記なのだが、どうも彼らはこの日から壬生浪士組を名乗ったようなのだ。ところが、翌日の日記には「精忠浪士」とある。これは「誠忠」の意味と思われ、以後は四月八日に「三壬浪士」、十日に「壬生村浪士」とされている。

つまり、平野屋での借用証に記す組織名がなかったことから、彼らはアイディアを出し合って、壬生浪士組という名称を案出したのだが、もう一案として誠忠浪士組なるものがあったのではないだろうか。それが、のちに三壬浪士、壬生村浪士とされていることから、ごく一時的なものであったことが理解できる。ただし、誠忠浪士組の名前は採用されなかったが、「誠忠」の二文字は八月十八日の政変で目撃され

た馬提灯に記されており、「誠」の一文字が隊旗に染め抜かれ、ともに彼らのポリシーとして生き続けていたことはいうまでもない。

平野屋での金策によって、隊服というべきダンダラ羽織を作成した彼らは、四月二十一日にはそれを着て将軍の下坂に従った。大坂滞在は五月十一日にまで及び、この間に彼らは隊士の募集を行っている。その成果を示すものが、五月二十五日に鎖港を進言して幕府に提出した上書で、そこには三十五名の連名がある。つまり、大坂あるいは京都で二十名もの新入隊士を獲得したのだった。

屯所としていた八木源之丞宅が手狭となり、前川荘司宅も屯所としたというのは、こうした隊士の増加にともなうものだった。また、浪士組上洛のさいに宿とした民家の一部も、そのまま使用されていたものと思われる。

新選組が屯所としていた八木源之丞邸

この二十名から八名の離隊者があったものの、八月十八日の政変出動時までには五十二名の総員を数えるまでになり、このとき までに局長、副長、副長助勤という体制ができあがって、創設者は全員が幹部隊士となった。

『同志連名記』で阿比留鋭三郎は副長助勤とされるが、これは存命であれば就任したはずという心情が反映されたものだろう。

▼新選組の誕生

八月十八日の政変出動によって、壬生浪士組は武家伝奏より「新選組」の名称を授けられ、彼らは存在を認知された。そのため、その後も隊士は増加し、九月には新見錦の切腹、芹沢鴨・平山五郎の暗殺、平間重助の脱走があり、また長州のスパイとして潜入していた隊士の殺害や脱走があったものの、十月の風聞では総員は約六十名で、毎月一名宛三両が会津藩より支給されたと伝えられている。

八月の政変で長州藩は京都を追われ、公武合体派は勢力を増してくるが、尊攘派の諸藩士や浪士が関西に潜伏して失地回復をはかっていた。隊士のなかにも長州に同情的で、幕府に批判的な人物もあった。そのため、元治元年五月ごろに浪士たちの京都潜入が探知され、不穏な空気が流れると集団的な脱走があり、六月五日の池田屋事変のさいには、隊士数は四十名となっていた。これが、出動隊士がわずか三十四名にすぎなかった理由である。

脱走した隊士たちは京坂で加入した者たちであり、事変後、近藤勇は「兵は東国に限り候」との考えから、禁門の変の混乱が収拾した九月には、みずから江戸に下って新たな隊士を募集するのだった。

このとき、池田屋事変で負傷した藤堂平助が江戸に先行し、北辰一刀流で同門だった伊東甲子太郎を勧誘していた。伊東は同志とともに加盟することを約束し、また近藤も自身や多摩関係者の協力を得て、二十四名の新入隊士を率いて帰京している。

同時に京坂でも隊士の新規募集が行われ、また会津藩から藩士が派遣されたこともあり、元治元年十二月には江戸からの隊士を加えた六十七名による「行軍録」という編成表が作成された。これは長州出兵を念頭に置いたもので、一番から八番までの小隊と、殿をつとめる小荷駄雑具方からなっている。

ここにおいて、壬生の屯所では隊士の収容が困難となり、新選組は

西本願寺の北集会所に移転することを計画した。西本願寺は東本願寺とは逆に、元来が勤王方で、禁門の変のさいにも長州兵を匿い、逃亡させるなどしていたため、寺を監視下に置くための措置でもあった。山南敬助は移転に反対して隊を脱したともされるが、寺側としてはあからさまな反対もできず、ついに慶応元年三月十日ごろには移転が完了している。

このときに屯所とされた北集会所は、維新後に解体されて学林の講堂として使用される予定となっていた。ところが、そのころ姫路亀山の本徳寺の本堂が焼失していたため、明治六年に同寺の本堂として移築され、現在に至っている。内陣が八十畳、外陣が二百畳という規模の建物である。余談になるが、北集会所のあった敷地は本願寺中央幼稚園となっていたが、平成九年四月には本徳寺本堂に匹敵するかのような参拝会館が建設されている。

▼隊士名簿『英名録』

元治元年の江戸と京坂での隊士募集を前例としたのか、翌慶応元年三月下旬にも土方歳三が斎藤一・伊東甲子太郎とともに江戸へ下り、隊士獲得に動いている。池田屋事変によって新選組の存在が周知されたのか、前年より江戸に残留していた藤堂平助や、近国の事情探査を近藤勇より命じられていた、のちの隊士中島登の勧誘が実を結んだのか、このとき土方は五十名を超える新入隊士を率いて京都に戻ってきた。

また京坂での募集でも二十数名が入隊しており、その結果、百五十名にも及ぼうという一大集団となるのだった。

そこで同年閏五月ごろには、局長、副長、参謀の三職と、一番から十番までの組長、各組長配下の伍長二名と、その配下に平隊士十名、さらに諸士取調役兼監察と勘定方という編成が行われたのである。

それから間もなく作成された隊士名簿が島田魁の遺品にあった『英名録』であり、そこには百三十四名が記名されている。そのなかに土方の江戸での募集に応じて上洛し、慶応元年六月二十一日に切腹したことが判明する石川三郎の名前はなく、七月二十五日に死亡した佐野牧太郎の名前があることから、必然的にその間の成立とすることができる。また九月には第二次行軍録というべき編成表が作成され、そこには総勢百九十三名もの隊士を数えることができるものの、隊士数が飛躍的に増加していることから、現実の編成というよりも机上案だった可能性が高い。

いずれにしても新選組はきたるべき長州出兵にさいして、具体的な進軍プランを立てており、それが組織の再編を行った要因と考えられる。つまり、副長助勤制を平時の見廻り体制とするならば、組長制は有事即応体制というべきものだったのである。

翌慶応二年の隊士数を知る手掛かりはほとんどなく、同年五月の一橋慶喜による『新撰組御処置之事』という内意書に「人数は百三十三人」(『新撰組史録』)とあるばかりである。『英名録』とほぼ同数だが、ここから死者や脱走や除隊などの離隊者を考えれば、この年にも隊士募集が行われていたことは確実である。

それを示すものとして、同三年六月に幕臣として取り立てられたさいの名簿には、『英名録』に記載のない二十二名の名前がある。彼らの入隊は当然『英名録』以後、同三年六月以前であり、さらに三年十月ごろには東西での隊士募集が行われている事実から、これを慶応二年の入隊者とすることもできる。

二年間というスパンがあるため、慶応二年の隊士募集の有無を特定することは難しいが、同年二月五日に大石鍬次郎の弟で清水家に仕えていた大石造酒蔵が死亡し、家督相続が問題となり、近藤勇がそれについて記した手紙に「伊東上京」、あるいは「過日、伊東氏東下の節」との表現がある。これは慶応二年前半のものと考えられ、伊東某が江戸に下り、また京に上ったという事実を伝えていることになる。伊東某が甲子太郎だとすれば、彼が江戸で隊士募集を行っていたことを示

しているのかもしれない。
慶応三年になると、三月に伊東甲子太郎ら十数名が御陵衛士として新選組から分離し、隊士数は減少した。そのため、六月に幕臣として取り立てられたさいの名簿には、仮同志十二名をふくめた百五名が記載されるにすぎない。
島田魁が明治になって語ったところによると、新選組と御陵衛士とでは、分離後に一方の隊士が他方に編入することは許されないとの約定が交わされたが、新選組より御陵衛士に入ることを希望する者が多かったという。ところが約定によって編入できず、「其者、新撰組に帰れば直ちに切腹を命ず」（『江戸会誌』）ということで、そのための死者も確認でき、またそのまま脱走した者もあったのだろう。

▼幕臣取り立て以後

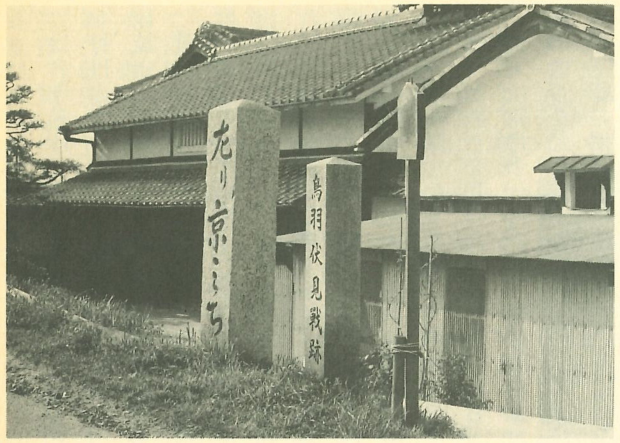
幕臣取り立てについての決定があったのは六月十日であり、二十三日に通達されているが、その間の十五日に新選組は西本願寺から不動堂村に屯所を移転している。現在の堀川通、木津屋橋通、油小路通、塩小路通に囲まれた地域であり、これは新選組を追い出したい西本願寺が、土地から建築費まで、すべてを負担したものだった。建物には表門、高塀、玄関、長屋、使者の間があり、中央に広間があって、長廊下の左右には平隊士の間と、幹部隊士の間があるというもので、さらに近藤勇と土方歳三の居間のほか、厩から物見・中間・小者の部屋も設けられていた。
このときに広間として使用されていた建物が、やはり姫路の本徳寺に移築され、本堂に隣接した大広間がそれではないかと指摘されており、本堂と違って裏付け資料はないものの、外陣が百十二畳、内陣には十五畳の上段の間と、三畳の上々段の間が確認される。
この屯所に新入隊士がやってきたのは、慶応三年十月ごろのことで、このときも東西同時に隊士の募集が行われていた。

江戸に下ったのは土方歳三で、井上源三郎が従った。九月後半に京都を出立した土方たちは、十月二十一日に入隊希望者を率いて帰京の途につき、その日の昼食を品川宿の釜屋でとっている。それが「新撰組土方歳三御家族門人共上下三十一人」（『品川町史』）と記録されているのだが、見送りの人数まで加えられているために、新入隊士の人数は判明しない。このときの入隊者であることが判明している池田七三郎をふくめて、二十名を少し超える程度だったのだろうか。
また、京坂で応募した隊士は四十名ほどだったようで、江戸での隊士をふくめた彼ら新入隊士は「局長附人数」と「両長召抱人」とに振り分けられ、幹部隊士や平隊士と区別された。
屯所に北隣した一角に近藤勇の休息所、つまり妾宅があった。十一月十八日に伊東甲子太郎はここに招かれ、幹部隊士たちを交えて酒を飲みながら国事を語り、その帰り道に襲撃されて絶命する。木津屋橋通を東に進み、油小路通にさしかかった付近でのことである。遺体は七条通まで運ばれ、引き取りにきた御陵衛士たちも襲われ、藤堂平助ら四名も殺害されるのだった。
この油小路通を花屋町通まで上がった所に、紀州藩士三浦休太郎が宿としていた天満屋があった。十一月十五日に坂本龍馬と中岡慎太郎を暗殺された土佐の海援隊と陸援隊の隊士らは、事件は三浦の指令によるものとして、十二月七日に天満屋を襲撃する。このとき斎藤一らが三浦の警護をしていたため、隊士の宮川信吉が討死、襲撃側も一名の死者を出して事件は終わっている。
島田魁の『京都ヨリ会津迄人数』という百五十七名の隊士を記名した名簿には、十一月に入京した池田七三郎の名前があり、この天満屋事件で死亡した宮川信吉の名前もある。つまり、これは池田の入隊から宮川の死亡までの間の在隊者を示すものであり、鳥羽伏見の戦いを迎える直前の総員を伝えていることになる。その後、開戦を前に脱走した隊士も数人が確認されるため、伏見奉行所に転陣した隊士総数は

約百五十名だったことも判明するのである。
なお、この名簿には斎藤一の名前はなく、代わりに「山口次郎」の名が記されている。御陵衛士に潜入していた斎藤は十一月十日に帰隊し、すでにこの時点では山口次郎と変名していたのだった。

▼鳥羽伏見の戦い

伏見奉行所に新選組が転陣したのは、十二月十六日のことだった。伏見奉行は正式には十一月二十日に廃止となっていたが、その空屋敷（あきやしき）を陣所としたのである。
移転二日後の十八日、京都から伏見に向かっていた近藤勇は、伏見街道を丹波橋筋付近にまで下ってきたところ、待ち伏せしていた御陵衛士残党に狙撃され、右肩に重傷を負った。そのため、二十日には病床にあった沖田総司とともに大坂へ下り、新選組は土方歳三の指揮下に鳥羽伏見の戦いに突入することになる。
慶応四年一月三日、鳥羽伏見の戦いが始まり、伏見奉行所は薩摩軍の砲火によって火に包まれた。六日まで続いた戦いによって、新選組は約二十名の戦死者を出し、大坂へと敗走する。
そして負傷者は富士山丸、可動隊士は順動丸に乗船して江戸へ帰還するのだが、帰還隊士を『同志連名記』が四十四名と



鳥羽・伏見の激戦地跡

したことから、長らくこの人数が事実とされていた。しかし、現実には百十六名の隊士が帰還していたことが判明している。

▼甲陽鎮撫隊

彼らは品川の釜屋に入った隊士、横浜の病院に入院した隊士、さらには神田和泉橋の医学所に入った近藤勇と沖田総司に同行した隊士の三グループに分かれ、再起の日を待つのだった。そして、一月二十三日より大名小路にある若年寄秋月右京亮の元屋敷に引き移り、甲府城接収を目的とした甲陽鎮撫隊を名乗るのである。
甲陽鎮撫隊に参加する隊士はほぼ八十名だったが、浅草の弾左衛門の配下百名ほども加わって、二月二十九日に江戸を出発した。甲州街道を日野に到着すると、寄場名主で近藤と義兄弟の契りをかわしていた佐藤彦五郎が、二十二名を率いて春日隊として参加し、一行は進軍を続けた。
そして三月六日、甲府城を新政府軍に接収されてしまった甲陽鎮撫隊は、勝沼の柏尾山に布陣して開戦する。
このとき土方歳三は援軍を求めて江戸に向かっていたが、協力を得ることはできなかった。土方が甲州街道を駆け戻り、日野宿を通過したのは八日の朝のことであり、そして八王子に差しかかったとき、勝沼から敗走する近藤と出会っている。
そのまま甲陽鎮撫隊は江戸まで逃げ帰るのだが、ここで新選組は分裂する。現有戦力のまま会津に投じようとする近藤と、新選組を再建してから会津に向かおうとする永倉新八とで、意見が対立したのである。永倉新八は同志に呼びかけ、原田左之助ら数名と靖共隊を結成して新選組を去っていった。
一方、近藤と土方は、負傷隊士二十数名を会津に先発させると、再起のために新入隊士の募集を行っている。まず十三日に四十八名の隊士が五兵衛新田の金子左内邸を訪れ、十四日には近藤も十名の隊士と

ともに金子家に入った。この間にも土方は募集を続けており、十五日には六十名ほどを送り込み、みずからも金子家を訪れている。その後も毎日のように入隊希望者が姿を現し、四月一日に五兵衛新田より下総流山に転陣するまで、屯集の隊士は二百二十七名にも上るのだった。

流山に陣した新選組は隊士の訓練を行い、その兵力をもって会津に向かおうとしていた。しかし四月三日、訓練のため隊士のほとんどが出払っているとき、陣所としていた長岡屋が新政府軍によって包囲され、近藤は切腹を決意するが、土方の説得によって断念し、ついに投降する。隊士たちに武装解除が命令され、新選組はここに解兵された。

近藤を助命するため、土方は江戸に潜入して勝海舟に嘆願し、流山に残された隊士のうち百二十名ほどは会津へと向かった。おそらくは斎藤一が彼らを率いたものと思われる。

土方は四月十一日の江戸開城前日まで市中に潜んでいたが、近藤助命の成否を知らないまま、流山から合流した島田魁ら六名の隊士とともに下総の鴻ノ台に結集した旧幕軍に身を投じている。そして、大鳥圭介を総督とする旧幕軍の参謀となって十九日に宇都宮城を攻略し、二十三日の防衛戦に負傷すると今市から会津へ後送され、七日町の清水屋での療養中に流山脱出の新選組本隊と再会するのだった。

▼会津戦争期

会津での新選組は斎藤一を隊長として、閏四月五日に白河口に出陣し、六月末まで転戦を続け、七月になって猪苗代湖南の福良村滞陣中に、負傷から復帰した土方を迎えている。そして八月十八日に猪苗代城下へ転陣すると、翌日には母成峠出陣が決定され、会津藩兵や旧幕軍とともに守備に着いた。母成峠での戦いは二十一日に勃発し、新政府軍は峠を突破して会津城下に進撃する。

ここにおいて、会津での戦いを主張する斎藤一ら十数名は新選組本隊と訣別し、九月五日に高久村の如来堂を守備中、攻撃を受けて四散してしまう。新選組隊士による記録では、全員が討死したとされているが、斎藤をはじめ五名の生存が確認されている。

旧幕軍とともに仙台に向かった新選組は、旧幕陸軍とともに榎本武揚率いる旧幕海軍と合流し、蝦夷地へと向かうことになる。しかし、会津での戦死者や脱走者、あるいは仙台で離隊者があったため、このときの隊士数はわずか二十数名にすぎなかった。

仙台には旧幕軍のほか、すでに蝦夷渡航を決意した桑名の松平定敬、唐津の小笠原長行、備中松山の板倉勝静に随従していた藩士たちがいた。しかし、随従者全員を乗船させることはできないとして、従者は二、三名にとどめ、戦士としての乗船が認められた。その受け皿となったのが、隊士が激減していた新選組だったのである。

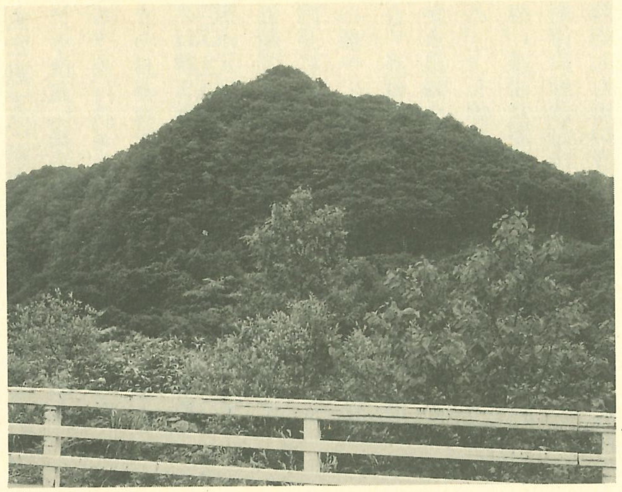
その結果、桑名から十八名、唐津から二十五名、備中松山から九名、さらに旧幕軍の伝習隊などから三十八名の加入があり、新選組は再び百二十名を超える部隊として〃復活〃したのだった。なお、加入の人数については諸説があり、入隊の時期や兵卒などを含めるかどうかの問題もあって、確定的な結論を得るには至っていない。

▼箱館戦争期

新選組は旧幕艦隊の大江丸に乗船し、蝦夷地内浦湾の鷲ノ木に到着したのは十月十九日のことだった。上陸した陸軍は、大鳥圭介の率いる内陸の本道を進む部隊と、海岸線の間道を進む部隊とに二分され、新選組は伝習隊・遊撃隊などとともに本道を行き、土方歳三は守衛新選組・額兵隊・陸軍隊などを率いて間道に向かっている。

なお、守衛新選組とは正式に設立された部隊ではなく、旧幕軍参謀として宇都宮進軍時に従った六名の隊士たちを模したもののようで、土方の行軍を助ける数人の直属部隊を意味したらしい。彼らの構成も不明だが、その後の進軍時にも散見することができる。

すでに会津戦争でも、土方は単なる新選組の隊長ではなく、旧幕軍の主要的地位にあったが、ここからは完全に新選組を離れ、全軍の幹部として行動することになる。



土方歳三が新政府軍を迎え撃った二股口

本道を進んだ大鳥軍は途中、峠下村や七重村で、守衛の松前藩兵と戦って撃退し、間道の土方軍は川汲村から峠越えで湯ノ川に入り、十月二十六日に五稜郭への入城を果たした。

そして新選組は箱館市中の取り締まりを命じられ、称名寺を屯所として活動することになる。そして土方は、彰義隊・額兵隊・陸軍隊などを率いて松前城の攻略に出陣し、十一月五日に松前を攻め落とすと、十五日には江差を占領し、松前藩は熊石から青森へと逃走して蝦夷地は旧幕軍によって平定されるのである。

土方軍が箱館に凱旋した十二月十五日には、市中では在留外国人らも招いて祝賀パーティーが開かれ、その日に士官以上の選挙によって〃箱館新政府〃の閣僚が選出された。選挙の実施日、その方法については疑問がないではないが、その結果として榎本武揚が総裁、大鳥圭介が陸軍奉行、そして土方は陸軍奉行並に就任している。また、陸軍奉行添役として相馬主計・安富才助・大野右仲、添役介として野村利三郎、総裁附として田村銀之助、ほかに土方附として数名が新選組から離れることとなる。

このように組織化が行われても、旧幕軍自体が諸隊の寄せ集めであり、そのなかでも集合離散していたらしい。新選組においても、翌明治二年一月十五日には陸軍隊の青山次郎ら二十四名と、彰義隊から八名が新選組に加入したとの記録があり、諸隊の組織も流動的だったのではないだろうか。

箱館の新選組の編成については、改役・差図役・改役下役・差図役教授・同下役という役職があった。四つの分隊に二名ずつの嚮導役と十数名の隊士、それに会計方という、四分隊制が知られているが、これは明治二年四月の新政府軍上陸前後に制定されたもののようである。同年一月ごろに新政府軍の協力者によって、市中警備の部署と人員の探索レポートが作成されているが、この時点では四分隊制が実現していた様子をうかがうことはできない。

三月二十五日の宮古湾海戦を経て、四月九日に新政府軍が乙部に上陸し、各地での戦闘が繰り広げられ、土方歳三は二次にわたる二股口の戦いに勝利したが、ついに五稜郭への撤収を余儀なくされた。そして五月十一日未明より箱館総攻撃が開始され、市中警備の新選組は箱館山に戦い、数名の戦死者を出して弁天台場に籠城した。これを救援するために土方歳三は出陣したが、一本木関門で指揮中に銃弾を浴びて死亡する。

十五日には弁天台場に籠城していた新選組も降伏し、そのさいの名簿には九十二名の隊士名が記されている。これが最後の新選組隊士である。桑名・唐津・備中松山の元藩士、ほかに諸隊から加入した者も多く、京都時代からの隊士はわずか十三名にすぎない。

しかも、そこには慶応三年十一月ごろの入隊者が七名もおり、新選組を語るさいに欠くことのできない池田屋事変を知る者は、尾関雅次郎と島田魁のふたりだけでしかなかった。

文久三年三月から明治二年五月まで足掛け七年にわたる、新選組の激動の歴史を物語る結果といえるのではないだろうか。

近藤　勇

伊東　成郎

夷狄討伐を新選組の目的とした局長

●天然理心流を継承

近藤勇は天保五年、武州多摩郡上石原村の農業、宮川久次郎の三男として出生した。

それぞれ二歳ずつ年の違う兄、音次郎（後名・音五郎）と粂蔵（後名・総兵衛）がおり、姉のリセ、妹のタカ、スメという三人の姉妹もいたが、姉妹たちはみな夭折している。

勇の幼名は勝五郎といった。幼少時より武勇を好み、嘉永元年十一月十一日、二人の兄とともに、十五歳で天然理心流剣術三代目宗家の近藤周助の門下に入った。

勝五郎の剣への天賦の素質はめきめきと開花し、入門からさほどの日を経ない翌年六月、師匠の周助から目録を授けられている。

そのころ、上石原の家で兄たちと熟睡していた勝五郎は、夜半に不審な賊の侵入に気づいた。そして家財道具を運び出そうとしていた賊を、兄たちと撃退したという。この武勇談を知った周助は、実子がなかったこともあり、勝五郎を養子に望んだ。十月十九日、道場試衛館を併設する江戸牛込甲良屋敷の近藤家に入った勝五郎は、その後、勝太と改名、さらに近藤勇と改称した。

勇は、武州一帯に広く門弟を持つ天然理心流の出張教授に各所へ出向くなど、精力的に活動している。

万延元年三月二十九日、一橋家家臣・松井八十五郎の長女ツネと結婚した勇は、翌文久元年八月に、四代目宗家として正式に天然理心流を継承した。

さらに翌二年には一粒種の長女タマ子が出生している。

試衛館道場には、理心流の沖田総司をはじめ、山南敬助、永倉新八ら、勇を師と仰ぐさまざまな流派の剣士たちが住み込み、また、武州日野を拠点に理心流の研鑽を磨いていた土方歳三や井上源三郎らも、折にふれ、道場を訪れていた。

●松平容保に拝謁

変革期の荒波が、勇の運命を変えた。

文久二年末、近く上洛する将軍家茂の先陣として京都に上り、その治安を維持するという目的で、広く江戸の浪士を募る計画が発表された。門弟たちとこの浪士隊募集に応じた勇は、翌三年二月八日、江戸を発った。

勇の出自でもある武州多摩は徳川家の天領でもあった。この地に育った勇の徳川家恩顧の情は磐石であり、浪士隊への参加もまた当然の成りゆきだったといえる。

二十三日に浪士隊一行は京都に到着した。勇は、その後、浪士隊総員を再び東下させ、攘夷活動に着手させると宣言した、浪士隊フィクサーの清川八郎に反発して、京都に残留する。そして勇は、浪士隊として上洛した当初の目的を遂行する道を志向した。そんな勇や門弟たちと同調したのが、水戸の郷士・芹沢鴨の一統だった。

そのとき、勇の前にあったのが会津藩だった。会津藩主・松平容保は京都守護職に就任し、会津藩士とともに、文久二年から京都の治安維持に邁進してきた。勇や芹沢はじめ、浪士隊からの脱退者らは、三月十五日に会津藩の配下となる。

十六日に、会津藩邸で松平容保に初めて拝謁した勇は、そのとき容保に告げられたことばを、

次のように手紙に書いている。

一同の赤心報国の段、いかにも関心あらせられ、以来の儀は会津者どもと力合わせ、救助あい頼みたしと仰せ下され候。

この絶大な信頼に勇は感動した。そして芹沢鴨とともに、会津藩旗下の、ごく特殊な傭兵集団の隊長として、治安維持のため幕末の京都を疾駆することとなる。この年の八月十八日、その集団は新選組を名乗った。

近藤　勇

●ある日の土方歳三の日記から

このほど、はからずもある古い雑誌のなかから、偶然そこに引用されていた土方歳三の日記の写本を入手した。引用されていたのはわずか一日分にすぎないが、元治元年四月に土方がみずから国許に送ったことが現在確認されている、幻の日記の一部分と思われる。内容の詳細はここでは割愛するが、日記は文久三年四月十六日のものである。

この日、勇ら会津藩旗下の浪士は総員で会津藩邸を訪れ、容保の臨席のもとで、剣術はじめ、各種の武術の上覧稽古を行っている。奇しくも土方の日記には、その全稽古試合の対決者名も細かく記されていた。新選組武術史上、きわめて特異な記録といっていい。

名剣士と伝えられる隊士たちの激しい稽古。それは初めて彼らの技量を見た容保にとって、想像を超えたものだった。容保は明らかに圧倒されたのである。

その翌日、土方や沖田はたまたま上洛中だった井上源三郎の兄、松五郎を訪ね「近藤が天狗になった」と愚痴っている。

上覧稽古の終了後、勇はその大成功を勝ち誇っていたのだった。

その日、会津藩邸で、隊を統率する勇や芹沢は竹刀をとらなかった。そして容保の面前で激しい稽古を見せたのは試衛館の門弟たちや芹沢の配下たち、それに新入隊士たちだった。にもかかわらず、ひとり慢心したかに見えた勇の姿は、土方はじめ、容保の前で汗を流したものたちにとっては、はなはだおもしろくないものだったかもしれない。そしてこうしたささやかな不協和音による、勇への身内の「反乱」は、のちのちまでも新選組の根底に薄暗く根を差すこととなる。

●将軍家茂の上洛に失望

その後、二派に分かれていた新選組の一方となる芹沢鴨一派は、近藤勇一派によって粛正され、勇は名実ともに新選組を掌握した。

芹沢の暗殺後まもなく、勇は郷里の後援者たちに、漢文による一編の論稿を送っている。約五百字からなるその作品に、勇は『項羽殺宋義論』との題を銘打っている。勇は自身と芹沢を古代中国の二人の武人に見立て、婉曲的ながらも、その粛正の正当性を郷里に伝えたのだった。

市中で粗暴行為を志向する芹沢の粛正は、新選組を旗下におく会津藩にとっても、歓迎すべき事態だった。勇もまたそうした会津藩の期待に応えるかのように、その後は幕政の中心部へも関わりはじめることとなる。

そんな勇が新選組の長として、もっとも苦境に立っていたのが元治元年五月だった。

この年、将軍家茂は前年に続いて二度目の上洛を行っている。新選組は誠実にその警備を行ったが、このとき、勇にはある期待感があった。

将軍の上洛によって公武合体が実現するのではという期待である。そして国が一丸となって攘夷の旗印を鮮明にすることを、勇は望んでいた。

ひときわ篤い攘夷の志を持つ勇は、新選組の究極の目的を夷狄討伐に定めていた。勇は、新選組が連日行っていた市中の不逞浪士狩りを、崇高な使命に到達するまでのつなぎとして、見据えていたのである。

しかし家茂は、何一つ成果を得ることなく、江戸へ戻っていった。

勇は失望した。何とか上洛の実があがるまで将軍の帰府を延期するよう、幕閣に懇願までした勇は「もし（自説が）御採用これなく候わば勝手次第（新選組を）離散仰せ付けられたく願いで候」（『官武通記』）との強行策まで視野に入れていた。

しかし、期待は裏切られたのである。勇の手紙によれば、この時期、新選組では隊中に男色が流行してもいたという。

まさにアンニュイの極みだった。だがこの直後、勇は池田屋事件という事態に直面する。

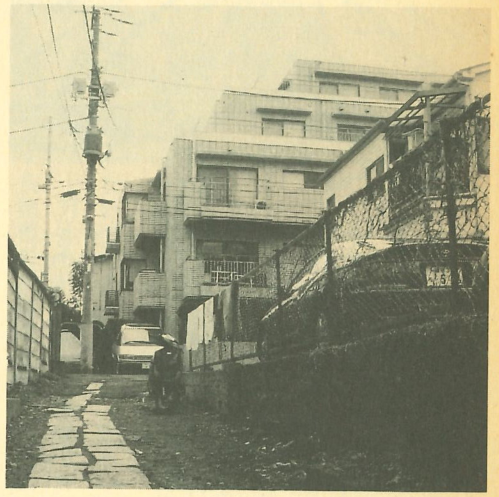
●池田屋事件

六月五日早朝、新選組は近江の志士・古高俊太郎を捕縛した。そのおりの自宅捜索で押収した書状から、七日の祇園祭の混乱に乗じて、浪士らが不審な計画を企んでいることを突き止める。一人でも多くの不審者を捕縛するため、勇は会津藩の指示に沿って、新選組隊士を「壬生勢三頭にいたし、遣わし候よう仰せ聞かされ、もっとも有り難き心得に御座候」（『藤岡屋日記』所収・近藤勇書簡）と、三分化して市中のローラー作戦を開始する。勇はその一隊を率いて捜索中に、奇しくも三条池田屋で、新選組屯所から古高の脱還を討議していた一団の浪士たちに遭遇し、その部屋に突入する。

大戦果があがった。

勇を知る松本良順の養息・棟一郎は、後年こんな談話を残している。

いざ戦いとなって刀の目釘など霑すのは芝居のことで、戦いに臨んで目釘ほど大事なものはないということを示すのだ。近藤は常住この心得があった。絶えず目釘を手脂で湿していたものだ。（『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』）


試衛館跡

池田屋での激闘に際して、こうした勇の日ごろのポリシーは、きわめて有利に作用したといってもいい。

しかし、逆に池田屋での勝利は、勇の名を、不逞浪士討伐の長として、広く世間に知らしめるという結果を生んだ。夢想していた攘夷、そして新選組の離散……。勇が直前に切ったカードのすべては、池田屋の大戦果の前に消し飛んだ。勇も新選組も、池田屋以後、はかりしれないほど威力を増した現状維持の日々を、有無をいわさず進まざるを得なくなる。

●隊規における見識

その後、威名によって新選組には隊士も日々増加して行き、慶応元年三月には、それまでの壬生から西本願寺へと屯所を移転した。

膨れ上がった隊士たちを統率するため、違反者に死を規定した四か条の隊規も設立されたが、おりにふれ、士気の弛緩を防ぐために突発的に隊規を運用する副長の土方と違って、むしろ勇は、いたっておおらかに違反者に対処した。前掲の松本棟一郎は語る。

近藤は隊長になるくらいの人で、凡人の考えとは違っていた。京都におったころ、隊士中で女を欺した者は放逐し、女に欺された者は敢えて咎めぬという態であった。女を欺すような料簡の男は役に立たぬ。女に欺される男という者は純情なところがある、と申したものだ。決して乱暴者であったり理不尽のことを行なう人間ではなかった。見識というものもちゃんと具わっていた。（『前掲書』）

近藤勇と土方歳三の墓

勇はむしろ隊士不適合者を、死よりも放逐処分に処したのである。それが勇の考える士道違反者への対処だった。松本の談話からは勇の人間味や体温までもが伝わってくる。

京都での最末期の慶応三年十二月に、勇は二条城出仕のさなか、脱退した元隊士らに狙撃されて、右鎖骨上から上斜脊椎の肩にかけて貫通銃創を負った。

この負傷により勇は鳥羽伏見戦を戦場に立つことなく、さらに翌四年一月に、隊士を率いて、江戸に帰国する。

●敗走

勇はその後、大久保剛（たけ）を名乗り、同じく内藤隼人を名乗る土方とともに、新選組隊士らによる甲陽鎮撫隊を組織して、江戸を発った。

二人の名乗った姓は、家康時代に徳川家恩顧の大名としてその名をうたわれた大久保、内藤両家をその本歌としたもので、徳川慶喜じきじきによる発案だったという。

さらに勇はその後、大久保大和を名乗ることとなる。

ちなみにそのモデルともなったらしい大久保大和守という人物は、天明七年二月、友人の旗本五名とともに神田の料亭・山藤で大騒ぎをして暴れ、幕閣宅に呼び出され、差控え処分となっている。どうも決して栄光の名前とはいえなかったようだ。

甲陽鎮撫隊はその後、甲州勝沼で新政府軍と戦闘を展開、敗北した勇は再び江戸へ戻った。

戦闘が勃発したこのとき、勇を補佐する土方は援兵活動のため戦場に不在だった。鳥羽伏見戦争で、新政府軍の威力を実見することのなかった勇の無謀な挑戦は、悲劇的な敗北を生んだのである。

敗走後、江戸で同士たちと再会した勇は、彼らをみずからの家臣と呼んだ。これに不服な永倉新八や原田左之助は、勇を見限り去って行く。文久三年四月十六日以来、勇をめぐって燻っていた新選組幹部間の不協和音は、ここに最悪の形で帰結したのである。それは新選組の事実上の解体でもあった。

しかし、土方は勇とともにあった。

かつてともに、武州の野道を出稽古に汗を流して歩いた土方は、古き良き友でもある天然理心流四代目宗家に、最後まで忠実だった。

甲陽鎮撫隊以降、勇は綾瀬の五兵衛新田でその体制を立て直し、旧幕府軍が集結していた下総流山の味噌問屋・長岡屋に布陣する。その後、新たな活動を志向するなか、四月三日に流山に進軍してきた新政府軍によって、長岡屋は包囲された。勇は新政府軍に投降し、板橋の新政府軍総督府に身柄を移された。

新選組局長への、一部新政府軍幹部の怨念は容赦のないものがあった。土佐の谷干城は、上層部にこんな嘆願書すら出している。

（勇を）京都にて市中引き回しの上、梟首せしめ、いささか天下義士の心を慰め候よう、懇願奉り候。（『復古外記』）

こうした感情論は、勇の助命論をはるかに凌駕していた。

土方による、勝海舟への勇の助命嘆願工作も密かに行われるなか、慶応四年四月二十五日、勇は板橋刑場の露と消えた。

享年三十五歳。墓は数カ所に伝わっている。

土方歳三

近代戦争の指揮官に変身した鬼副長

山村　竜也

◆丁稚奉公は一度もつとまらず

土方歳三義豊は、武州多摩郡石田村の農民土方隼人義諄の第六子として、天保六年（一八三五）五月五日に生まれた。

しかし、父の義諄は土方の誕生を待たずに没しており、母の恵津も土方が六歳のときに病死してしまう。両親の愛に恵まれない土方の生い立ちだった。

兄弟は、長男為次郎、次男喜六、三男大作、長女周、次女のぶといて、為次郎は目が不自由であったため、土方家の家督は喜六が継いでいた。母恵津の没後、土方は喜六に養育されたという。

弘化二年（一八四五）、十一歳になった土方は、江戸上野の呉服商松坂屋に丁稚奉公に出された。当時の農村では、長男以外の者は家督を継ぐことができないので、他家の養子となるか、商家の奉公をつとめあげ、のれん分けをしてもらって独立するしか一人前になる方法はなかった。

それで土方も奉公人の道に入ったわけだが、ある日、店の番頭に叱られて、拳骨で頭を殴られた。かっとなった土方は番頭に食ってかかり、そのまま店を辞めて飛び出してしまった。

また嘉永四年（一八五一）、十七歳のときには、江戸大伝馬町の呉服屋にふたたび奉公に出るが、すでに青年となっていた土方は、今度は店の女中と関係するという問題を起こしている。現存する写真でもうかがえる美男の土方を、江戸の娘たちもほうってはおかなかったのだ。

結局、奉公は一度もつとまらず、商人としてはものにならなかった土方だが、人に頭を下げながら生きていく商人の道は、やはり向いていなかったのだろう。

もともと、農民でいることも、商人になることも、土方の本意ではなかった。土方には武士になるという夢があった。

「俺は農家の生まれだが、農民は大きらいだ。このような乱世のなかでは、機会さえあれば武士になることができる。俺は将来、武士になって国のために尽くす覚悟だ」

そう周囲に豪語してはばからない土方だった。

◆新選組の鬼副長

武士になるためには、とりあえず剣術が強くなければならない。それで、姉のぶの夫である義兄佐藤彦五郎のもとへ江戸から教えに来ている天然理心流の近藤周助（周斎）に、土方は入門することになった。

そこで出会ったのが、周助の後継者として養子になっていた近藤勇だった。同年配の二人は意気投合し、すぐに無二の親友となる。近藤道場の試衛館は江戸市ケ谷にあったが、身軽な立場の土方は、そちらへも出入りして剣術修行に励んだ。

そして、土方の武士になる夢が実現するときは意外に早くやってきた。文久三年（一八六三）正月、試衛館にもたらされた情報によれば、近く上洛する将軍徳川家茂の身辺警護のため、幕府が江戸内外の浪士を募集するというのだ。この願ってもないチャンスに、土方は乗った。近藤をはじめとする試衛館一門とともに浪士組に参加し、二月二十三日に一行は京都に到着する。

しかし、浪士組の首謀者であった庄内浪士清

河八郎が裏切ったことにより、浪士組総員は到着早々に江戸へ帰らされることになる。これに反対した土方は、二十余人の同意者とともに京都に残留することを決めた。

三月十二日深夜、京都守護職をつとめる会津藩主松平容保のお預かりとなることが決まった土方らは、京都市中の治安を維持することが任務の浪士結社を組織する。これが壬生浪士組で、のちに彼らは新選組と名乗った。

会津藩に正式に仕官できたわけではないが、そのお預かりという立場を得たことで、彼らは武士として扱われるようになった。武士になるという土方の夢は、こうしてみごとに実現したのである。

洋装の土方歳三

新選組の局長には近藤と、水戸浪士芹沢鴨が就任し、土方はそれを補佐する副長の任についた。そして、新選組を最強の戦闘集団に作り上げることが土方の仕事となった。

しかし、隊士たちは諸国から集まってきた、いわば烏合の衆だ。これを統率するためには、厳格な規律がどうしても必要だった。そうしてできたのが、一般に局中法度と呼ばれる隊規である。

隊規の条項は五か条あったとされているが、正しくは次の四か条になる。

一、士道にそむくこと。

二、局を脱すること。

三、勝手に金策をいたすこと。

四、勝手に訴訟を取り扱うこと。

そして、この四か条にそむくときは切腹を申し付けられることになっていた。

これに違反して処分された隊士のなかには、葛山武八郎、桜井勇之進、河合耆三郎、小川信太郎らのように、近藤が隊を留守にしていたときに刑が執行された者も多かった。隊規を運用していたのが副長の土方であったことをうかがわせる。後世に鬼副長と呼ばれるようになった所以である。

◆戦争のつぼを心得た指揮官

鉄の結束と無敵の戦闘力を誇った新選組であったが、慶応四年（一八六八）正月に勃発した鳥羽伏見の戦いでは、近代兵備を整えた新政府軍に惨敗をとげる。新選組からは二十一人もの戦死者を出し、土方の作り上げた作品ともいうべき新選組は、壊滅的な打撃を受けた。

「これからの戦争は銃砲でなければだめだ。俺は剣と槍をとって戦ったが、まったく役に立たなかった」

江戸退却後、土方はそういって、新選組の限界を認めている。刀槍を振りまわすだけの武士の時代は終わりを告げたのだった。

しかし、土方は絶望することをしなかった。新たなる戦いに向け、羽織、袴を捨て、動きやすい洋装に着替えた。髪も、まげを落とし、ざんぎり頭となった。敵に勝つためには、古いし

きたりにこだわっていてはならないと、近代戦争の指揮官へと変身をとげたのだ。

　だから、四月三日に下総流山で盟友近藤が新政府軍に捕らえられても、その闘志はおとろえることがなかった。大島圭介らの旧幕府軍に単身合流した土方は、幕府歩兵らを率いて十九日に敵の宇都宮城を攻め落とす。

　攻城戦の最中に、自軍のある兵士が激戦の恐怖にかられて逃げ出そうとした。これを見た土方は、

土方歳三が攻略した宇都宮城跡

「退却する者は誰でもこうだ」

といって、兵士を一刀のもとに斬り捨ててしまった。この荒療治によって、他の兵士たちは奮い立ち、やがて城を陥落させたという。戦争というもののつぼを心得ている土方だった。

　もっとも、斬られた兵士をあわれんだ土方は、のちにその墓を建ててとむらうことも忘れてはいない。このときばかりは、さすがの鬼の目にも涙が浮かんでいたという。

◆北の大地へ

　会津戦争をへて奥州仙台に入った土方は、そこで旧幕府海軍副総裁の榎本武揚と出会う。そして、榎本の率いる旧幕府艦隊に陸軍兵ともども合流し、蝦夷地（北海道）の箱館まで渡航して新政府軍に徹底抗戦を挑むことになった。

　この仙台には旧知の医師松本良順も来ていたが、渡航に反対する松本に向かって、土方は、

「このたびの一挙は、三百年幕臣を養ってきた幕府が倒れるときに、命をかけて抵抗するものが一人もいなくては恥ずかしいという思いからなのだ。とうてい勝算のあるものではない」

　といって、前途のある松本を江戸に帰るように勧めた。そして、

「われらのごとき無能者は快く戦い、国家に殉ずるだけだ」

　と、自嘲気味にいい放った。勝ち目はないかもしれないが、徳川に恩を受けた者として最後まで戦い抜かなければならない。いわば、武士としての節義を貫くためだけに、土方は北の大地へとおもむくのだった。

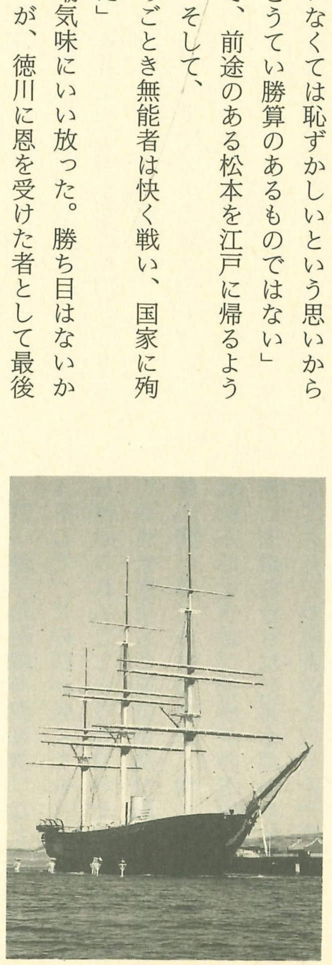
　しかし、武運はすでに彼らを見放しはじめていた。元号が改まった明治元年（一八六八）十一月五日、榎本艦隊の中心的戦力だった最新鋭艦の開陽丸が江差沖で座礁し、やがて海中に沈没してしまう。最後の頼みの綱ともいえた開陽を失うことは、旧幕府軍にとっては、はかりしれない痛手であった。

　沈みゆく開陽の姿を、江差の高台にある檜山奉行所から目撃した土方は、かたわらにあった松の木の幹をこぶしで叩き、涙を流しながら、

「釜さん、くやしいのう」

　と、釜次郎こと榎本武揚に向かってつぶやいたという。開陽の存在にわずかの逆転のチャンスを見いだしていた土方だったが、その思いもはかなくついえ去ったのだった。

　年が明けた明治二年四月、ついに新政府軍が蝦夷地に上陸した。要害の二股口にわずかの兵



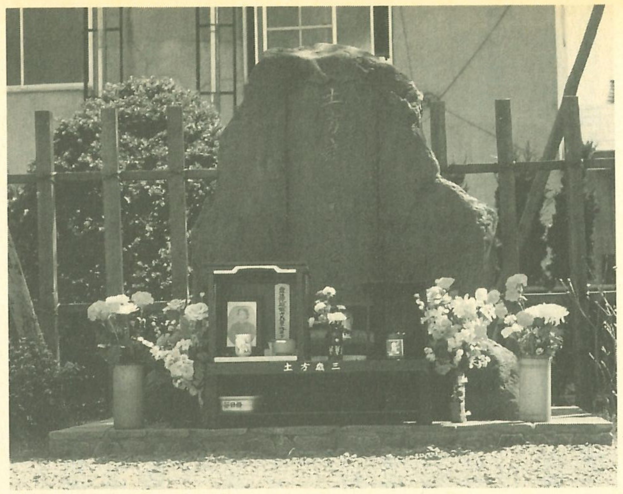
復元された開陽丸

を率いて布陣した土方は、ここで鬼神のごとき強さを発揮する。二度にわたる敵の猛攻をくいとめ、激しい銃撃戦のすえに敵の大軍を退却させたのだ。

　勝利を得た土方は、みずから酒樽を抱え、自軍兵士たちの健闘を讃えながら酒をふるまって歩いた。そして、

「ただし、酔っぱらって軍律を乱してはいかんから、みな一杯だけだ」

　と冗談めかしていうと、兵士たちはどっと笑った。隊士を規律で縛ることで動かしていた以前の土方とは違う、指揮官として成長した姿がここにあった。



土方歳三の最期の地

　京都からついてきた新選組隊士中島登は、土方の変化についてこう証言している。

「年の長ずるにしたがって性格が温和になり、人に慕われることといえば、あたかも赤ん坊が母親を慕うかのようだ」

　京都時代は新選組という組織を維持していくため、厳格さだけを表に出していた土方だったが、その重圧から解かれたいま、心に余裕ができていたのかもしれない。

◆最後の出陣

　箱館戦争も大詰めを迎え、旧幕府軍は戦況の悪化に加え、軍資金が底をつこうとしていることに悩んでいた。そこで、閣僚たちによる協議の結果、箱館市中の豪商から金品を徴発しようということになった。

　しかし、土方だけは、これに反対した。

「われらの軍状は、すでにかくのごとき頽勢となってきた。たとえ、いくばくかの軍資を得ても、ただ一時をしのぐにとどまるのみ。さもなくてさえ賊名を受けている。このうえ無謀に似たる挙に出て、なおわが軍の名を辱めることは深く慎まねばならぬ」

　と主張した。

　これには榎本以下の閣僚たちも反論できず、結局、徴発は中止されることになった。勝ち目がほぼなくなったいま、せめて引き際だけはきれいにしたいと土方は思っていたのだ。

　このころになると、榎本は降伏することを考えはじめていた。これ以上、無駄な犠牲者を出すことは避けねばならないという思いだったのだろう。

　しかし、土方だけは、降伏をよしとしなかった。

「俺が近藤とともに死ななかったのは、どうしても徳川家の無実をはらしたかったからだ。もし降伏をして許されでもしたら、地下の近藤に合わせる顔がない」

　そういって、この戦いに命を賭ける決意を固めるのだった。

　だから五月十一日、新政府軍の箱館総攻撃が始まると、土方は、真っ先に五稜郭から騎馬で出陣した。したがう兵はわずか八十人。二度と帰らぬ覚悟の出陣だった。

　町はずれの一本木関門付近が最後の戦場となった。馬上で指揮をとる土方は、白刃をふりかざして兵士たちの士気を鼓舞する。戦鬼土方の気迫に兵は奮い立った。

　しかし、そのとき一発の銃弾が土方の身体に命中した。弾は無情にも腹部を貫いていた。たまらずに落馬した土方を、周囲の者が助け起こすが、すでに返事はなかった。北の果てに散った壮烈な最期だった。年三十五。

　五稜郭はその七日後に開城し、新選組も降伏した。土方歳三の命とともに、新選組の歴史が終わりを告げたのだった。

沖田総司

古賀　茂作

青春を燃焼した総司の幻の恋人とは

顧みれば昭和四十年代——柳川市に住む一高校生だった筆者は、近隣の大牟田市にお住まいの森満喜子先生と偶然ともいえるきっかけによって知り合うことになる。当時、すでに森先生は沖田総司の研究家として全国的に有名な方で、その後、多くの沖田に関する著作を発表されている。

筆者が今日まで多くの新撰組に関する著述を手掛けるようになったのも、森先生との出会いによるものである。沖田総司が新撰組に身を投じることになったのも、近藤勇、土方歳三、井上源三郎らとの出会いがあったればこそと考えるにつれ、巡り合わせの不思議さを感じずにはいられない。

沖田は話題に事欠かない人物であるが、本稿では——彼にとっての一生に一度の劇的な出会いについて語ってみることにする。

▼幻影のなかの恋人——その条件

沖田総司は、本姓を藤原、諱(いみな)をはじめ春政のち房良と改めている。天保十三年（一八四二）に生まれ、数え年二十二歳にして近藤・土方らとともに上洛し、新撰組副長助勤の筆頭となり一番隊を率いて活躍した。沖田といえば——ふだんは冗談ばかりいって、純真な子供たちと遊んでいる——といったイメージが強烈なのだが、この明るいはずの沖田にも、気を許した人にだけ垣間みせる哀愁があった。

勇の養嗣子・近藤勇五郎の談話——

「京都で、ある医者の娘と恋仲になったのです。（中略）沖田は、よく私へこの娘の事を話していました。ふだん無駄口ばかり利いている男ですが、この娘のこととなると、涙を落として語ったものです」　（子母沢寛著『新選組遺聞』）

談話の末尾は、後に「この娘のこととなるとまじめでした」と訂正されたのだが、話を聞いた著者が「涙を落として」とまでやや過ぎた調子の表現をするほど、深刻な雰囲気を感じ取ったことを物語っている。

これまで沖田の恋人としてよく取り沙汰されてきた女性に、新撰組隊士の墓所として有名な光縁寺の過去帳に記載されている「沖田氏縁者」の存在がある。ところが彼女には医者の娘という伝承すらなく、恋人とするには根拠が希薄だという印象を受けるのである。むしろ彼女については、沖田が休息所での雑用を任せていた女性で、たまたま亡くなったことにより、気のいい沖田が手厚く葬った——と解釈した方がより現実的である。

基本事項をふまえたうえでの考察を行うとすれば、沖田の恋人に関する複数の伝承に「医者の娘」ということが出てくるので、その線からの可能性を探ってみることが最も大切なことではないだろうか。

▼医者の娘——壬生にいた美少女

京都大学教授の会田雄二先生が、ご自身の家に伝わる新撰組の話を司馬遼太郎先生にされた——ということを森満喜子先生から伺ったのは、昭和四十年代のことであった。そこで会田先生に質問のお便りをしたところ、奥様から丁重なるご返事を頂戴した記憶がある。

先生のおばあさまはオランダ医を兼ねた町人の娘さんだそうで、住まいが壬生だった関係から、同地に屯所を置く壬生浪士と顔を会わせるうちに自然と親しくなったらしい。近藤にもかわいがられ、同人からもらったという扇子などもあったという。

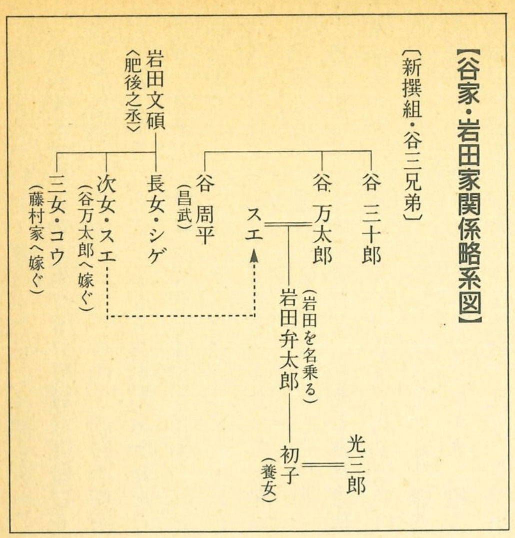
先生が「写真を見ると美人であるから、若い隊士たちに持てたことだろうと思われる」といわれるおばあさまを、出入りする隊士たちが

「大名になったら、嫁にもらいにくる」などとうそぶいて誘惑していた話などが伝わっているそうだ。

沖田の恋の相手が彼女だったと断定する根拠は何もないが、美人でもあり、新撰組との交際もあり、特に医者の娘であったという点から、沖田氏縁者よりも条件を満たしているのではないかと、当時の筆者はひそかに思いをめぐらせたのである。

▼養女の話——新たな手がかり

平成二年（一九九〇）に発刊された、『新選組余話』（小島政孝著）収録の『慎斎私言』を読んで、沖田に恋心を告白した女性の話に興味をそそられた。



これを書いた人物は、近藤勇と義兄弟の契を結んだ小島鹿之助の長男・守政であることから、信頼のおける記述のはずである。

その話とは「妻として迎えてほしい胸のうちを想いを寄せる沖田に打ち明けたものの、固辞されたために懐剣で喉を突いて自害を図った」といういかにも衝撃的な内容である。幸いに一命は取り留めたものの、恋は実らぬままに終わったとされている。

そこには女性の名前は出てこないものの、「近藤勇の養女だった」ということがはっきりと明記されているのである。果たして、近藤に養女なるものがあったのだろうか——。

同じく鹿之助の父親・角左衛門の『聴書』に、元治元年（一八六四）七月三日に知り得た話として「近藤は養女まで致し候由。十三歳位の趣也」とあることから、新撰組時代に養女がいたという形跡が確認できる。

研究者の間でも、ちょうど谷周平を養子にもらった時期と一致することから、養息のことを養女と取り違えたものではないかと、やや簡単に放置されてきた感がある。通常では見過ごされがちな養女の話に、筆者が特に関心を示したのには訳があった。

昭和四十九年（一九七四）五月、筆者は新撰組隊士で周平の兄でもある谷万太郎の遺児・岩田弁太郎の養女・初子さんを訪ね、新撰組に関する逸話を取材したことがある。その談話中に近藤の養女に関する重要な手がかりが含まれていたことに気づいたのである。

▼養女・コウ——初子さんの証言

手がかりとは——万太郎の妻スエの妹コウに関して岩田初子さんが語られた、「おばさんは周平といっしょに近藤勇の所へ養子に行くことが決まっていた」という部分である。

前述の角左衛門が養女に関する情報を得た元治元年七月という時期において、コウにまつわる話との一致がみられるのである。近藤が郷里などへあてた池田屋騒動に関する書簡に周平をすでに養子として迎えていたことが明記されており、養子縁組が同年六月五日以前に行われたことが判明する。つまり、コウが周平とともに養子となったのであれば、この時期近藤に養女が存在したことになる。

また『聴書』にある養女の「十三歳位」という年齢についても、この当時周平の方は十七歳で四歳の開きがあり、コウの年齢の方が誤差が少ないことから、養息・周平のことが誤って養女の話として小島家に伝わったとするよりも、これらの条件をほぼ満たしているコウという養女がいたと考える方がより自然なのではないだろうか——。

▼再び医者の娘——意外な展開

さらに驚くべきことには、コウの父親というのが大坂久左衛門町に住む岩田文碩という医者であり、偶然にも〝医者の娘〟へと結び付いたのである。

岩田家について、初子さんはこう語られた。

「岩田家の家紋は横木瓜です。文碩は肥後之丞（一説に肥後守）ともいって、中山大納言の侍医だったということで、かなり勢力があったそうです。それは、中山家に明治天皇を預かっておいででしたからなんです。文碩には子供が五人いたそうで、男が二人で女が三人だったと聞いております」

その三女がコウなのである。老中を務める板倉家の名門・谷家の周平を養息として迎えたように、政略家としての動きも垣間見せる近藤が、朝廷接近のための足掛かりとして中山家に連なる彼女を養女にしたと考えれば、充分にあり得る話である。

勇五郎談にあるように、沖田はこの娘のこととなるとしんみりとなったというほどだから、よほどの仲むつまじさだったことが推測できる。女遊びをしなかったと伝わる沖田だからこそ、あるいは一人の女性への一途さゆえに、この純愛が今日まで語り継がれてきたのであろう。

コウの父親・岩田文碩

▼恋の行くすえ——別離の理由

これほどまでの二人の仲を引き裂いた張本人が、近藤だったといわれている。勇五郎の談話に「あるとき沖田へしみじみと訓戒して、その娘と手を切らせた」とある。ほかの幹部隊士たちにしても、似通った娘さんたちを妻にしている例は数多い。それなのになぜ沖田に限って近藤は認めなかったのだろうか。

父親の文碩が医者だったために沖田の病気（労咳）のことを察していて、娘の行くすえを心配するあまり、近藤に依頼して別れさせたのであろうか。あるいは、初子さんが洩らされた「おばさんは周平さんの許婚だった」という気になる発言が事実であれば、周平を通して近藤と親戚関係になった谷三兄弟を絡めての複雑な隊内事情があったものと考えられ、近藤がこのような処置に踏み切らざるを得なかった背景が解るような気がする。

このようないきさつがあったと解釈すれば、養女の話に出てくる「沖田が彼女の求愛を固辞した」というくだりも、まったく別の話だと切って捨てる訳にはいかないのである。

▼周平の憂鬱——恋の鞘あて

周平の兄・谷三十郎（新撰組副長助勤）の死因について殺害説を採る『新選組物語』に、見事な突きで斃されており、犯人を傷口から左利きではないかと推理した篠原泰之進（新撰組調役）の遺談に基づいたといわれる目撃証言なるものが載っている。沖田は突きが得意で、一説に左利きだったとする伝承もあり、コウに絡んでの刃傷沙汰だったとすればおもしろい展開ではあるが、こうなるとあまりにも小説的推論の範疇に陥ることになる。

許婚とも伝わる周平は、明治になってからも岩田家に出入りをしており、機会は充分にあったもののコウと結ばれた事実はない。裏を返せば、後述する嫁ぎ先の藤村家に伝わるコウの恋愛の相手が周平ではなかったということを証明しているともいえるのではないだろうか。「周平さんも女のためにあんなことになって——」という近藤の妻ツネの語り残しなどは、周平の養子解消の一件と併せて、なんとなく意味深長なものがある。

▼優しい嘘——ひとつの疑問

医者の娘について、勇五郎の談話には「何でも、勇自身が口を利いて堅気の商人へ嫁入らせたとの事でした」とあり、コウに当てはめた場合に、ただひとつの気がかりな点である。だが、勇五郎の談話は昭和になってからのものであり、もしコウが嫁いでいたことが後年になって風の便りで耳に入ったりしたのであれば、その情報が記憶のなかに混在した可能性が無きにしもあらずである。

この談話よりも早い明治三十年（一八九七）にまとめられた『慎斎私言』には、単に「後に人に嫁ぐ」とだけしかなく、そこには近藤の口利きの話は出てこない。となると、近藤の件は勇五郎の憶測が加わったものなのか、あるいは事実であったとすれば、苦悩する沖田をみかねた近藤が早く諦めさせるためについた、思いやりからでた嘘だったという解釈もできるが、今となっては知るすべもない。

近藤の口利きで嫁いだという点を前述のように解釈しさえすれば、養女の話と京都の医者の娘についての話を結びつけた場合に、条件を満たす女性としては——今のところコウしかいないのである。

▼コウの後日譚——なおも奇妙な一致

明治九年（一八七六）になってコウは大阪の藤村家へと嫁いでいた。同家にはコウの大恋愛についての話が伝えられており、同十年生まれの長女はその人の子供であったなどというまことしやかな噂さえ存在するのである。コウは昔のことは心に秘めたままで語ろうとはしなかったという。そのため、残念ながら相手の名前については痕跡をとどめない。ところが沖田家に伝わる——後になって大阪の人に嫁いだ医師の娘との間に、総司は一女を設けたなどといった話が、藤村家に伝わる長女の話などとオーバーラップしてくるから、なおも不思議な類似がつきまとう。

写真のなかのコウが醸し出す雰囲気からは、気品とともに奥に秘めた気丈さをも感じ取ることができ、『慎斎私言』にある「気豪にして、常に刀を佩びる」と伝わる養女の気質と重なりあうものがある。今回藤村家に取材して得られた、「おばあさんは発展家で女丈夫だった」という証言からも、以上のことが裏付けられる。

そこで、懐剣で喉を突いたという養女にまつわる話から、医者の娘で近藤の養女という条件を併せ持つコウの喉に、傷の痕跡があったかどうかということを問い合わせてみたが、残念ながら判然としなかった。決定的証拠はつかみきれなかったが、「岩田文碩は新撰組隊士の治療もやったと聞きました」という証言を得られ、沖田が岩田の診察を受けていた可能性が浮かび、出逢う機会に二人が事欠かない状況にあったことだけは判明した。

二人の悲恋に思いを馳せたとき、「コウというのは〝幸〟という字を書いた」という初子さんの言葉が、妙に物悲しさを帯びたものとして思い起こされてくる——。

岩田初子さん

▼黄泉への旅立ち——沖田追憶

なんとなく愛嬌のある少年らしさを残した顔立ちからは、剣士としての凄みは感じ取れず、むしろ純情さを偲ばせる風貌の沖田が、慶応年間の出来事だったと考えられる純愛を成就させることなく逝去したことは、なおさらに哀れさを誘わずには措かない。死に直面しても、なお周囲には心配をかけまいと明るさだけは失わなかった沖田であるが、天才剣士もとうとう病には勝てなかったようだ。

死の直前まで「先生はどうされたのだろう、おたよりはきませんか」と、そればかりいっていたといわれる沖田のことである。たとえ生きながらえたにしても、近藤の流山投降後の斬首、箱館における土方の戦死と、悲しみの連続に心を打ちひしがれる日々は、沖田にとって決して望ましいものではなかったはずである。近藤や土方らの死を知らずに逝ったことからすれば、むしろ——幸せな生涯だったのかもしれない。

慶応四年五月三十日——ここに沖田は享年二十七歳の波乱に満ちた生涯をまっとうしたのである。沖田にくらべ長命を保ったコウは、昭和十五年十二月十日まで生きた。

青春という一瞬の刻を、明るく燃焼し尽くした沖田総司——だからこそ彼を知る者には、いっそう輝いてみえるに違いない。

〈ご協力いただいた方々〉
沖田家・岩田家・藤村家・森愛子さん

井上源三郎

鳥羽伏見の戦いで死んだ温厚な剣士

久住　裕子

◇八王子千人同心の家柄

井上源三郎は文政十二年（一八二九）に武蔵国日野宿北原に、井上藤左衛門（初代松五郎）の三男として生まれた。名は一重。井上家は甲州武田家の旧臣で、代々八王子千人同心の家柄である。源三郎は映画などでは役のバランスから五、六十代に描かれることもあるが、上洛したときが三十五歳、死亡したのも四十歳である。今と年齢の感覚が違うとはいえ、老人役にされてしまうのは少々気の毒である。

幼少の頃から剣に親しみ、弘化年間（一八四四〜四七）に天然理心流、近藤周助（周斎）の門人となる。次兄の松五郎とともに近くの佐藤彦五郎の道場へ通った。家の土間や庭でも剣術の稽古に励み、「剣術ばかりやっていて百姓仕事がおくれて困った」という話が井上家に伝わっているくらい熱心だった。

その甲斐あって、安政五年（一八五八）九月に日野の八坂神社に奉納された日野の天然理心流一門の献額にも、兄とともに名前を連ねている。万延元年（一八六〇）には免許皆伝となる。翌二年（一八六一、文久と改元）一月十五日には古谷道場の新年の稽古に参加した記録が残されている。また、同年八月二十七日には、近藤勇の天然理心流四代目襲名披露の野試合が、六所明神（大国魂神社）にて大々的に行われ、源三郎は近藤のいる本陣で鉦役をつとめた。

◇無口で人が好い性格

文久三年（一八六三）、清河八郎の提案した浪士隊の情報が松五郎のもとへもたらされ、源三郎が参加に応じる。出立前日の二月七日に、松五郎は近藤のところへ挨拶に行き、源三郎にも餞別を渡した。浪士隊では、天然理心流の日野の門人、馬場兵助、佐藤房次郎、中村太吉、沖田総司の義兄、林太郎とともに三番隊に属した。小頭は新見錦である。

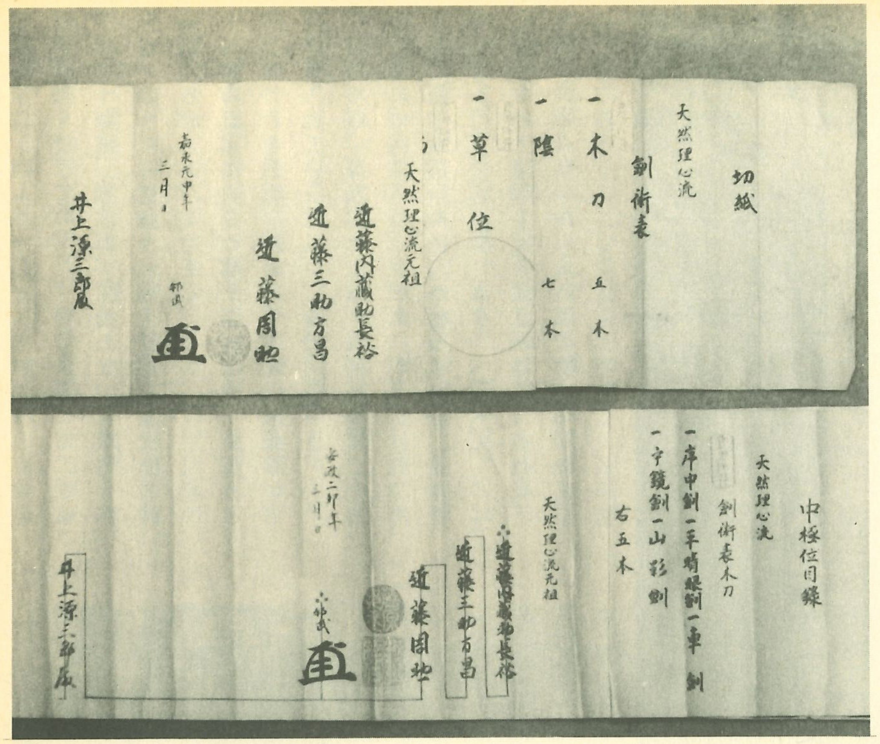
二十三日に京都に到着。その後、浪士隊は清河八郎の策で江戸へ戻ることになるが、源三郎は試衛館一派とともに残留して壬生浪士組を結成する。林太郎たちは江戸で新徴組隊士となった。永倉新八『新撰組顚末記』によると、源三郎も近藤らとともに清河八郎の暗殺をはかるが果たせなかったとある。

兄の松五郎も八王子千人同心の一員として三月四日に上洛した。六月十日に大阪で送別の酒宴をするまでの滞在中に、近藤や源三郎と何度も訪問しあった。ともに観光や酒宴をし、四月十日には芹沢鴨についての相談を受けたと松五郎の記録に残されている。兄弟だけに気安い相談相手だったのだろう。近藤たちも頼りになる同門の先輩を慕い、慣れぬ土地で先行き不安な自分たちの身の上を素直にさらけだして、助言を求めたのだろうか。一方、他の門人たちは「近藤天狗に成候」と訴えている。この頃、松五郎がいなければ、近藤一派も人間関係で分裂しかねなかったかもしれない。

この頃の残留浪士の名簿や、老中板倉勝静への建白書には源三郎の名が見られる。又、三月二十六日付の勇の手紙には、源三郎たち門人の剣術道具を送ってくれるようにと書かれている。

四月二十一日、将軍警護のために壬生浪士たちは大坂へ向かう。すでに制服のだんだら羽織を着用していて、初の公式お披露目といった感じである。だいぶ人目をひいたらしく、記録もいくつか残されている。『顚末記』には、大坂の豪商鴻池善右衛門に二百両を借りて、羽織を作り、このとき源三郎も同行したとある。だが、これは七月のことといい、実際に四月にあった平野屋五兵衛への借金には名前が見られない。

八月十八日の政変には壬生浪士も出動する。六月の編成で源三郎は副長助勤の職についた。



井上源三郎の天然理心流の免許状

この時、特に派手な戦闘があったわけではないが、彼らは功を認められ、この日に会津藩にゆかりのある名「新選組」を命名されたともいう。二十一日には正式に市中見回りの任につくように命がだされ、以後は治安維持のために精勤する。

九月十六日の芹沢鴨の暗殺には、山南とともに平山五郎を斬殺したという。九月二十六日の長州の間者事件では足の速い松永主計に追いつけず、「えいめんどうナ」とさけびながら刀を抜いて後ろから斬りつけたが逃げられてしまったと『顚末記』にある。

壬生にいた頃の源三郎の有名なエピソードが子母沢寛『新選組遺聞』の「八木為三郎老人壬生ばなし」にある。沖田総司が近所の子供たちと鬼ごっこをしたりして遊んでいると、源三郎がやって来る。沖田が「井上さん、また稽古ですか」というと、井上は「そう知っているなら黙っていてもやって来たらよかりそうなもんだ」といやな顔をした。互いのキャラクターが感じられる話である。為三郎は、「井上は、その時分もう四十位で、ひどく無口な、それで非常に人の好い人でした」と語っている。

◇長くて暑い夏
——池田屋事件、禁門の変

年が明け、二月二十日に改元して元治元年（一八六四）となった。新選組にとって年頭から落ち着かない日々が続く幕あけとなる。近藤は少し疲れがたまったのか、二月に温泉治療にでかけ、その間にやはり病身の松平容保が京都守護職を辞任する。

その少し前に、日野領蓮光寺村の名主、富沢政恕が上洛してきた。あわただしい最中であったが、四月までの滞在中に、旧知の富沢と源三郎や土方たちは何度も酒宴をした。昨年の松五郎の場合と同じように、よい相談相手となったのではないだろうか。池田屋事件までの時期、近藤は組の解散まで考えるなど、いわば「新選組」自体が、うつ状態のようであった。三月の花見の宴など良い気晴らしとなったことだろう。富沢の出立前に行われた送別の宴だけでは気持ちがおさまらなかったのか、源三郎は見送りのときに中途でも呑み、最後に伏見でも「別れの盃を巡らし」て、「互に再会を期して袂を分ちぬ」（富沢政恕『旅硯九重日記』）ことになるが、この伏見が、四年後に源三郎の最期の地となってしまうのである。

六月五日、池田屋事件が起こる。源三郎は土

方歳三隊二十四人の一員として加茂川の東側の探索活動を続けていった。場合に応じて二手に別れ、一隊は、源三郎が隊長となって隊士を率いた。のちに報奨金十七両を受ける原田佐之助、斎藤一らのメンバーである。
　永倉の証言によると源三郎は土方、原田らと池田屋の表を厳重に固めた。すでに近藤隊が宿内に突入している。しかし沖田総司がリタイアしたためか、源三郎は近藤、永倉ほか隊士十名とともに宿内に入り、長州人八名を生け捕った。また二階でも長州人一人を斬っている（永倉新八『七ケ所手負場所顕ス』より）。『顛末記』には、二階の梁の上を歩く者を突き刺した、とある。実際に長州人なのか、また誰を斬ったのかまでは不明である。

井上源三郎が活躍した池田屋跡

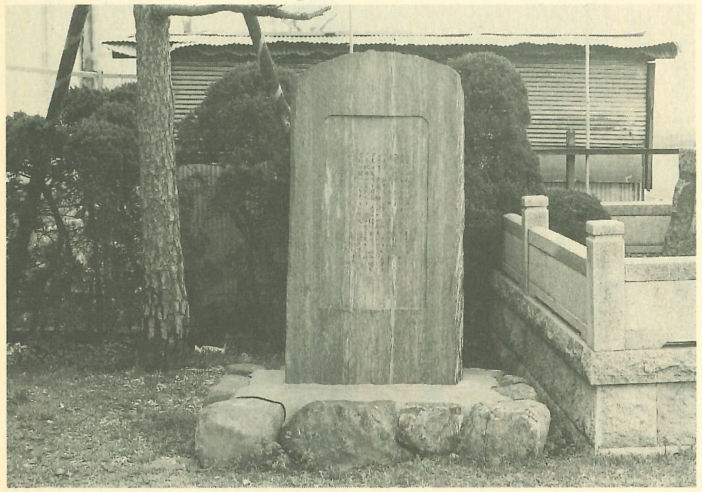
日をあけずに池田屋の残党狩りの市中巡察を続け、十日には会津藩士とともに東山の料亭明保野に出動した。十三日、誤って土佐藩士を刺した柴司の葬儀には、土方、武田観柳斎などと参列している。
　新選組にとって一番長く暑い夏である、旧暦の六月は過ぎてゆく。この年は新暦と一か月ほどしかずれていないため、暦の上では秋になっても、まだ「夏」は終わっていなかった。長州藩が長州系の浪士も含め、大挙して京都へやってくるというのである。
　六月二十四日には会津藩からの要請で、竹田街道警備のために鴨川の九条河原に出陣し、副長助勤職以上は甲冑をつけて、付近の警護に勤めた。七月十八日夜、長州軍は京都市中へ進軍を開始する。嵯峨野、天王山、伏見と三隊にわかれたうちの、伏見から北上する長州藩家老の福原越後隊と十九日に戦闘となった。撃破した後、新選組は砲声を聞いて御所へ向かった。公家の門前を固め、また日野家邸内に長州軍が隠れていると聞き、源三郎と永倉は隊士とともに出動した。邸内で半時あまり戦い続けたという。

続いて二十一日には久留米の真木和泉たちの立てこもる天王山へ、会津兵とともに向かった。源三郎は近藤率いる山上組として山道をともに攻め登り、また、すねを射られて軽傷を負ったと、永倉は『顛末記』などに記していたが、最近発見された『浪士文久報告記事』には、源三郎は土方らと山下を囲んだ組にいたとある。いずれにしても炎天下の中である。兵に囲まれた真木らは火をかけて自刃した。
　下山後は大坂へ向かい、二十三日にようやく壬生の屯所へ戻った。新暦の八月二十五日にあたる。まだ残暑がきびしかったか、それともようやく秋風がたちはじめた頃だろうか。一方、多摩にいる者たちには近藤死亡説なども聞こえてきた。正確な情報が伝わらないもどかしさと心配のあまり、小島鹿之助らは近藤、土方、山南、沖田、井上宛に手紙を送った。

◇鳥羽伏見の戦いで戦死

　この年の十一月の『行軍録』によると三番隊長となっている。翌元治二年（一八六五、四月七日に慶応と改元）六月の編成では六番隊組長、長州征討を念頭においた九月の『行軍録』には斎藤一とともに槍頭である。
　二月二十三日に山南敬助が謎の切腹死をする。その直後から、源三郎は土方らと西本願寺と屯所移転の交渉を始めた。移転は三月頃である。また、六月、将軍警護のために上洛していた兄

の松五郎は、仮の屯所にしていた大坂の万福寺に源三郎を訪ねたが、京都に戻っていて不在であった。そのため七月一日付で松五郎に手紙を書き、九月二十二日にも松五郎に手紙を送っている。
　慶応二年（一八六六）になると、源三郎の名は史料にはあまり見られない。伊東甲子太郎が派手に活動している時期である。翌三年（一八六七）には組長から再び副長助勤の役職名が復活する。鳥羽伏見の戦い前の編成でも同様である。この年六月十日に新選組隊士の幕臣取り立てが決定した。史料では、井上新太郎、新三郎と誤記されているが、助勤職は見廻組格となった。しかし、十月には将軍徳川慶喜が大政奉還をする。十一月十八日の、かつての仲間である藤堂平助ら、御陵衛士たちとの戦闘に源三郎が参加していたかは不明である。
　十二月十六日、新選組は伏見奉行所に布陣する。京都から追われるかのようであった。二十一日に巡邏中の都城兵に新選組が発砲したが、源三郎の隊と思われる。『金銀出入帳』に「一、同三両也　井上源三郎賊相手節渡」とある。すでに倒幕軍との衝突が始まっていた。
　慶応四年（一八六八）一月三日、鳥羽伏見の戦いが起こる。五日は激戦となり、源三郎は淀、千両松の戦闘にて銃弾を受けてついに戦死する。隊士で甥（松五郎次男）の井上泰助が首と刀を途中まで運ぶが、あまりの重さゆえに、とある寺の門前の田圃に埋葬したという。すぐに「さらい込まれるように船に乗せられて大坂へ引き上げた」というから、寺の名は伝わっていないが、淀近辺の川べりの寺なのであろうか。
　また、泰助は「おじさんは、ふだん無口で温和しい人だったが、一度こうと思いこんだらテコでも動かないようなところがあった。伏見の戦の時も、味方が不利になり大坂へ引き上げるため引けという命令が出たが、少しも引かず戦を続けついに弾丸に当たってたおれてしまった。弾丸に当たったおじさんは手当をするひまもなく息を引き取ってしまった（後略）」と語っている（『新選組事典』より）。
　幕府遊撃隊の堤金三郎の『徒然叢書』によると、「新選組の兵三名、堤上に大砲をすへ巨砲を発して敵をうてり。敵弾余りに激しければ堤下に避けるに、忽ち流丸来て其一名の腹部を貫き、どっと倒しければ種々介抱するも蘇生せす、由て即ち其首を斬り、傍らに穴を掘り之に収め、死骸は川中に水葬とし終んぬ」と記されている（『新選組日誌・下巻』より）。源三郎も、このような状況で戦死したのかもしれない。
　源三郎について「文武共劣等の人」、という川村三郎（近藤芳助）の酷評もあるが、剣は免許皆伝の腕であるし、残された手紙からもそうとは思えない。あまり性格があわなかったのだろうか。温厚で慕われたという源三郎の内面にある頑質さは、ときには、柔軟性や要領の良さに欠けてみえたのかもしれない。また、自分を表現したり、知識や意見を人前でとうとうと述べるというのが、にがてなタイプだったのだろうか。
　源三郎の墓は東京都日野市の日野駅前の宝泉寺にある。戒名は誠願元忠居士。
　戦死の地付近にある淀の競馬場近くの線路きわには戦死者の慰霊碑（戊辰役東軍西軍激戦之址）が建つ。
　誰がそなえるのか、誠の小旗が電車の窓から見えることがある。


井上源三郎戦死地に立つ碑

山南敬助

脱走の罪で切腹した文武両道の副長

清水　隆

●奥州仙台の人

　山南敬助は、謎多き人物である。近藤勇とは江戸・試衛館道場以来の同志であり、土方歳三と同じ新選組副長という要職にありながら、伝えられる事蹟は極めて少ない。しかし、かつて屯所が置かれた京都・壬生に「親切者は山南、松原（忠司）」という言葉が残っていたと伝えられることからも、荒武者の多かった新選組にあって、気軽に話し掛けられそうな、温厚な性格を感じさせる人でもある。

　彼の苗字は、一般に「やまなみ」と呼び習わされているが、山南が試衛館道場に住み込んでいたころ、出稽古に赴いた武州多摩地方に残る古文書には「三南」あるいは「三男」と記されており、同地方に残る言い伝えでも、「やまなみ」と言わず「さんなん」であると聞いたことがある。山南とは試衛館以来の同志で、大正四年（一九一五）まで生きた永倉新八が、『小樽新聞』の記者に語ったところでも、やはり「さんなん」であり、同じく新選組生き残りであった島田魁も「三男」と語っているし、同時代人で、新選組隊士と親交のあった『新撰組始末記』の著者西村兼文もまた「三南」と記すなど、いずれも「さんなん」と呼ぶべきことを示している。

　一方で、作家・子母澤寛は『新選組遺聞』の中で、篠原泰之進（元新選組監察）の遺談によるとして、正式の場合は「ヤマナミ」と言ったが、隊中では、隊士たちは「ヤマナミ先生」と呼び、同輩は字音をもじって「サンナン」と言っていたものである、と書いている。新選組屯所のひとつであった壬生・八木源之丞邸の次男為三郎（昭和三年・七十七歳で生存）から子母澤氏が取材した談話でも、山南の振り仮名は「やまなみ」である。

　このように、苗字の読み方からして二通りあり、名前の方にいたっては、敬介、圭介、啓助、啓輔、敬輔などと表記されたものがあり、三郎、三治郎、勇助とする記録もある。本人は「敬介」または「敬輔」を用いたようだが、ここでは、一般になじみの深い「山南敬助」（やまなみ・けいすけ）を使わせていただいた。

　山南敬助は諱を知信といい、本姓は藤原、着用した黒羽二重の紋付には「丸に立葵」の紋が付いていたと伝えられる。天保四年（一八三三）巳年の生まれで、近藤勇より一歳の年長である。山南について記した当時の記録には「奥州仙台産」、あるいは「松平陸奥守元家来」といった肩書きが付けられている。また彼と親交のあった多摩郡小野路村の漢学者・小島為政が書いた山南の略伝に、「嘗て江都に游び」という一節があるので、伊達家六十二万石の城下・仙台に生まれ、江戸に出てきた人であることがわかる。小島家の記録には「仙台人剣道師範山南某ノ二子山南啓輔」ともあり、これによれば父は剣道の師家で、敬助はその次男ということになる。

●武人にして文あり

　山南が、いつ伊達家の禄を離れたか定かではない。あるいは父が、藩から多少の俸禄を得ていたというに過ぎないかも知れないが、武士階級の子弟として育った彼は、文武両道に励み、やがて故郷を出て出府した。それが何歳のときのことであったか、伝える史料はないが、江戸で学問を修めるかたわら、剣術修行に精を出したらしい。

　当時、武芸を志す者は、各地の道場を訪ね歩き、試合を所望して自己を練磨した。ここに柳剛流の剣客・中山幾之進が、廻歴の途次、山南と立ち合い、署名を請うた英名録（『攪撃修行録』と題す）が伝わっていた。これは嘉永四年（一八五一）三月から同六年四月に至る試合相手の姓名が記されたもので、山南については、割合にほっそりとした字で、

　飯田町堀留大久保九郎兵衛門人
　　一刀流　　山南敬輔

とある。一人一人筆跡が異なることから山南の直筆と思われ、日付の記載はないが、内容を見ると、両者が立ち合ったのは、嘉永五年四月十五日ころと推定される。当時山南は数え年で二十歳。大久保に学んだ期間を考えると、江戸へ出たのは十代である。これまでは、永倉新八が六十六歳のとき、〔殉節両雄之碑〕の拓本の余白に書いた「陸奥國仙台脱藩文武研究剣術北辰一刀流千葉周作門人免許、新撰組副長山南敬輔」という一筆によって、北辰一刀流千葉周作門人説が定着していたが、英名録の記述は、これをくつがえす新事実と言える。大久保九郎兵衛は山南より三つ年上で、九百石の旗本。のちに御目付を務めたことがあるが、当時はまだ部屋住だった。流儀は小野派一刀流である。

山南敬助が訪れた試衛館跡

　ペリー提督率いるアメリカ艦隊が相州浦賀沖に来航して、鎖国日本に開国を要求するのは、実にこの翌年であった。そして安政二年（一八五五）には江戸大地震。山南が、市谷柳町の天然理心流道場試衛館を訪れたのは、そんなころであったろうか。若先生と呼ばれ、道場主である養父近藤周助を補佐していた近藤勇と立ち合い、山南は自分の未熟を悟って、近藤道場の弟子となった。やがて道場の師範代を務めるほどに熟達した彼は、近藤、沖田などとともに、多摩地方に出稽古に歩く。同地方の記録に彼の名が現われるのは万延二年（一八六一）正月からであるが、文久と改元された同年八月、府中六所明神で行なわれた近藤勇の天然理心流宗家襲名披露の野試合にも出場し、一門の指導者として人々に記憶された。

　天然理心流の後援者の一人でもあった小島為政は、山南の剣のみでなく、学問の才を高く評価していたと伝えられる。山南もまた為政の知己に感じ、上洛してからも年頭の祝詞を送ることを忘れなかった。

●志空しからず

　文久三年、攘夷論の高まる中、京都朝廷を取り巻く政治情勢は、将軍上洛を実現させ、出羽庄内の浪士・清河八郎の策動は、幕府による浪士募集となって現われた。攘夷論者の近藤勇は、その目的が、攘夷の手段を尽くすために上洛する将軍の警護にあることを知り、応募を決意、山南も賛同して同行を約した。

　一月十七日冬晴れの日、山南は上洛を告げるため、沖田総司とともに小島為政の邸を訪れて一泊。このとき左のような詩を賦して、為政に供した。

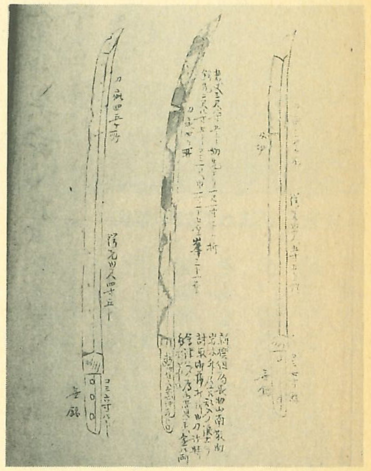
　牢落天涯志不空　　尽忠唯在一刀中

何辞萬里艱難路　早向皇州好奏功
（『両雄逸事』より）

山南は自ら「牢落の天涯」という言葉を遣っている。それは必ずしも謙遜ばかりではなく、自己の境遇に対する素直な感慨ではなかったか。しかし、志が報われるときは来た。将軍の馬前で攘夷の功を立てるのだ。報国の意気に燃える武人山南の姿が詩の中にあった。

二月八日、二百三十余名の浪士は七組に編成され、将軍に先立って上洛の途についた。近藤は先番宿割を務め、山南らは三番組小頭芹沢鴨の隊に配属されたが、十七日美濃中津川宿で芹沢が小頭を罷免されたとき、山南が一時小頭を務めた。これは、試衛館一党で、近藤に次ぐ位置に彼がいたことを示すものである。また道中目付を務める巨漢・村上俊五郎から、「貴公の組は乱暴で困る」と注意されたときも、屈せずに反論し、かえって村上に謝罪させたという逸話は、温厚な反面、筋を曲げることの嫌いな山南の性格を表わしている。

上洛した浪士たちのほとんどは、清河八郎の工作により、滞京わずか二十日で江戸へ戻るが、近藤、山南、芹沢ら二十四名が残留し、京都守護職松平容保の御預かりとなって、壬生浪士組（のちの新選組）を結成した。山南は土方歳三とともに副長となって、局長の近藤を盛り立てた。史料から彼の行動を拾ってみても、上洛した将軍の警護、大坂北新地における力士たちとの乱闘、禁門の政変にともなう御所の警備、長州藩桂小五郎ら捕縛のための三条木屋町への出動、そして筆頭局長芹沢鴨の暗殺など、つねに近藤の右腕として帷幕に参画し、活発に働いた様子が見て取れる。


岩城升屋で折れた山南の刀の押形模写
（小島資料館蔵）

⊙剣を折る

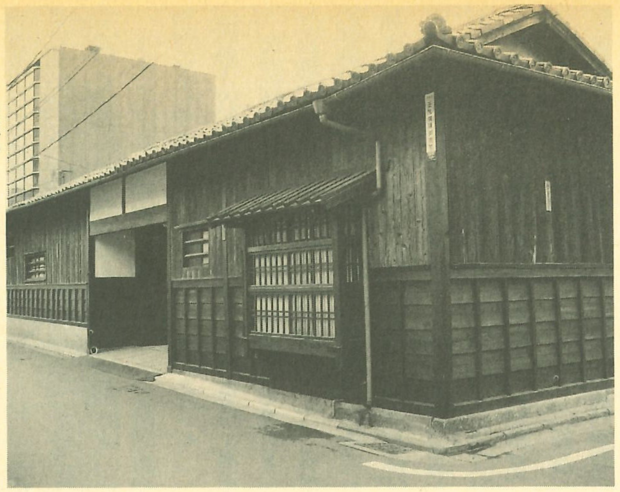
ところが、翌文久四年（元治元年）、その山南に転機が訪れた。汽船翔鶴丸に乗って二度目の上洛をする将軍を迎えるため、正月二日新選組一同は大坂に下った。八日、将軍は大坂に上陸、新選組は大坂城へ入る将軍を警護した。事件は、その後に起こったらしい。

当時、大坂船場高麗橋筋にあった岩城升屋は、寛永六年（一六二九）創業の著名な呉服店である。ここに数人の浪士が、押し借りに訪れた。店では時間の猶予を請うていったん引き取らせ、大坂滞在中の新選組に通報した。近藤はこれを受けて、山南と土方を同店に差し向けた。二人が待ち構えていたところへ浪士たちは再び現われ、斬り合いになった。必死に斬り結んだ二人は数人を倒し、残りの浪士は逃げ散ったが、このとき山南の愛刀赤心沖光が、切先から一尺一寸のところでポキリと折れてしまった。のち松平容保は、山南に対し、その奮戦を誉め、褒美として金八両を下したが、山南は以後、新選組の表舞台から、ぷっつりと姿を消してしまうのである。

従来、両替商・鴻池で起きたものと伝えられてきた事件である。新選組は十四日、上洛する将軍の先供として伏見に到着しているので、この事件があったのは、九日から十二日の間ではなかったか。山南は負傷した、それも再び剣を交えることがむずかしいほどの負傷をしたのではないだろうか。山南は体の不調を押して、小島為政に年頭の賀詞をしたためた。文中「下拙も異なく越年罷り在り候間憚りながら御安意下さるべく候」（読み下し）と書し、諱、書判まで添えているが、注目されるのは日付である。「正月廿七日」となっている。岩城升屋でともに闘った土方は、正月十日付で郷里への賀状をしたためている。山南は翌元治二年（慶応元年）の賀状は、正月二日に書いているから、この年の遅れは何かがあったと考えざるを得ない。それが岩城升屋事件での負傷だったのではないか。

二月二日、上洛中の旧知、多摩郡蓮光寺村の名主富沢政恕が、壬生の新選組屯所を訪れた。近藤は不在だったが、土方、沖田、井上（源三郎）と酒を酌み交わし歓談した。その富沢は「山南ハ病に臥し逢ハす」と日記に書いている。山南は、遠来の旧友にさえ会わなかった。不自由となった自身の体を見せるのが辛かったのかも知れない。

四月十五日、小島為政は日野宿に住む土方の義兄佐藤彦五郎から書簡を受け取った。それには在京の富沢から報告された新選組の動静が記されており、山南も「無異」、つまり「変わりなくやっている」と記されていた。四月十三日京を去るまで、ついに山南と会うことのなかった富沢が書簡にそう記したのは、恐らく、郷里の人々に心配を掛けまいとする近藤らの願いを受け入れてのことと思われる。沖田の病気さえ、慶応三年になるまで知らせなかった彼らである。


山南敬助が明里と最後の別れを惜しんだという前川邸の長屋門

⊙散りてあとなし

山南は、六月五日の池田屋事件にも、それに引き続く禁門の変にも参戦しなかった。十月には伊東甲子太郎ら新入隊士の加盟があり、十一月には、新選組が長州征伐の先陣となることを想定して『行軍録』が編成されたが、そこにも彼の名はなかった。佐藤彦五郎は、『行軍録』に永倉新八の名が載っていないことに不審を抱き、土方に問い質しているが、山南については照会した形跡がない。これ以前に、彼に関する情報を得て、真相を知ったためであろう。山南は新選組にとって、すでに戦力ではなかったと考えるほかはない。

元治二年二月二十二日、山南は隊を脱走、大津の宿で難なく沖田に発見され帰隊した。脱走の直接の原因は、西本願寺への屯所移転問題で、近藤と対立したためと伝わるが、その底には、永倉が指摘するように、尽忠報国の本旨に背き、幕府の爪牙となりつつあるかに見える近藤の変節に対する憤り、そして今一つは、剣を振えなくなった自身への絶望があり、これらが彼をして隊中に居場所を失わせ、脱走へ突き動かしたものと思われる。

二十三日夕刻、脱走の罪をもって切腹を申し渡された山南は、居並ぶ旧友たちと水盃を交わして今までの交誼を謝した。介錯を頼んだ沖田に、「声を掛けるまで刀を下ろすな」と言って肌押しくつろげ、三方から取り上げた腹切刀を左下腹に突き立て、雄々しくも真一文字に引き回した。享年三十三。

子供好きで、評判の良かった山南の死は、隊士ばかりでなく壬生界隈の人々にも惜しまれた。後年、八木為三郎は山南について「丈は余り高くなく色の白い愛嬌のある顔でした。学問もうんとあるし、剣術も達者だというて、私の父なども、殊に懇意にしていました」（『新選組遺聞』）と語っている。

山南には、明里という島原遊廓の元天神をした二十一、二歳の女があり、山南が切腹すると聞いて駆け付け、山南が監禁されている前川荘司邸の長屋門の西の出窓越しに対面し、最後の別れを惜しんだという哀話がある。山南が敬服していたと伝えられる伊東甲子太郎は、左記ほか三首を彼に手向けた。

吹風にしほまんよりも山桜
ちりてあとなき花そいさまし

沖田は三月二十一日、佐藤彦五郎に宛てた手紙の末尾で、さりげなく彼の死を報じた。墓は明里の実家と由縁ありという綾小路通大宮西入る浄土宗満月山光縁寺に、百三十余年の風雪に傷みながらも現存している。

山崎 烝

島津 隆子

密偵と医者の二足の草鞋を穿いた男

▽池田屋事件の密偵？

山崎烝が、いつ新選組に入隊したかは不明だが、元治元年（一八六四）四月頃までに隊員になったことは確かである。同月下旬には島田魁や浅野藤太郎らと、連日、情報収集に奔走する山崎の姿が、初めて浮上するからだ。

つまり、この時点で山崎はすでに新選組探索方、いわゆる密偵になっている。ここに、一躍〝密偵・山崎〟の名を高めることになる、有名なエピソードが、一つの史料に描き出される。

山崎の懸命な探索により、倒幕浪士・枡屋喜右衛門こと古高俊太郎の隠れ家が洗い出された。捕えた古高の口から、京都中を火の海にし、混乱に乗じて、天皇を長州に誘引し去ろうという、一大陰謀が発覚する。

その陰謀を企てる時は、いつ？　場所は、どこか？

元治元年六月二日、近藤勇から密命を帯びた山崎は、薬売りに変装し、池田屋の客になる。そして、昼は行商に精を出し、宿の主人や女中の信用を得る。が、夜になると乞食に身をやつして、池田屋周辺に屯する密偵の同志に一文投げ与えたあと、池田屋内部の動向を伝えるメモ用紙を、さりげなく、紙屑として落す連絡法をとった。

やがて、祇園祭りを明日に控えた六月五日夜、密議と酒宴を兼ねて集合する長州藩士らの接待準備のなか「お忙しそうでございますな、私もお手伝いを……」山崎は、気軽な調子で女中たちに混じる。そして、藩士らの手荷物と、刀まで一纏めにして、別室に運び込む。さらに、厳重に戸締りした鍵を内側から外すなど、すべての手筈を整えた。こうして、近藤勇率いる新選組隊士による奇襲を容易にしたのである。

もし、これが事実なら、山崎は新選組の存在が天下に知れ渡ることになった、池田屋事変最大の陰の功労者といえる。しかし、このことは、このエピソードの出典である『壬生浪士始末記』（西村兼文著）以外、どの史料にも記載がないのだ。あるとすれば、「事変直前に、密偵（原文は間者）三名を差し向け」云々という、事変後、近藤勇が父周斎に宛た手紙ぐらいである。密偵三人の一人が山崎かどうか確証がなく、事変後の論功行賞にも山崎の名が見出せないことは、このすばらしい逸話の価値を薄める所以である。

そこで、密偵・山崎の実績を、枚数の都合上、京都に限り、確かな史料から垣間見ることにする。

▽密偵の腕前は、平均点以下

池田屋事変から三年後、新選組が暮色におおわれはじめる、慶応三年四月十九日、山崎は一人の隊士を伴い、前大納言・中山忠能卿の邸宅に赴く。当時、味方・会津藩系、敵方・長州藩系と色分けされる公卿の中で、忠能卿は中立系とされ、敵・味方にとって重要人物であった。それは、忠能卿の娘中山慶子が皇太子・祐ノ宮の生母であったからだ。

父孝明天皇の急死で翌年明治天皇として即位する予定の祐ノ宮（十六歳）は、この時すでに事実上の天皇といえた。忠能卿は、天皇の祖父として信頼されきっていたから、長州系の公卿・岩倉具視が、しきりに忠能卿の抱き込みを企てていた。その情報を得て、山崎の中山邸訪問となったらしい。

山崎烝が面会を求めた中山忠能

ところが、忠能卿の使用人による門前払いの応接に、山崎は執拗に面談を求めて止まず、忠能卿から非常な不評を買うのだ。「将軍お目見えの者ならいざ知らず、そうした軽輩に会う必要はないと、家人に固く申しつけた」（要旨）『中山忠能日記』は、いまいましげに記している。

忠能卿ほどの朝廷の高官に会うなら、それ相応に自分を装うべきものを、山崎はバカ正直に新選組の一隊士を名乗ったのだろう。

わが身の役不足ゆえの失敗に懲りた山崎は、同年九月中旬、今度は新選組首領・山崎晋と名乗り、天皇側近の鷲尾隆聚卿の邸宅にまんまと入り込むことに成功する。

用件は、隆聚卿の臣下、本多勘解由（財務官）と山岡将曹（属官）の取調べであるが、山崎は、居丈高な態度で両名の身柄引渡しを迫った。隆聚卿はわざと大声で押問答をし、本多と山岡に逃げる機会を与える。二人はすばやく邸宅を飛出し、相国寺の薮垣を潜って薩摩藩邸に逃げ込み、無事、保護された。そうとも知らぬ山崎は、その後も鷲尾邸に押しかけては、隆聚卿と数回に及ぶ談判を繰り返している。

山崎の相次ぐ訪問で、隆聚卿が長州系になったとは思えないが、この後、忠能卿からの内命で、隆聚卿は高野山で挙兵し、戊辰の役では奥羽追討の白河口総督を務めている。

さらに、十月中旬、倒幕の密書が中山忠能邸から長州藩邸に届けられるという情報に、山崎は多数の新選組隊士と共に、数日間、中山邸の周囲を厳重に警戒していた。しかし、忠能卿が岩倉具視の子供を自邸に呼び、肌着に密書を縫い付けて送り出したことまで、気づくはずもなく、翌日には、事実上、幕府の消滅である大政奉還になってしまうのである。

以上、見ただけでも、山崎の密偵稼業は、並か、平均以下といえそうで、とても池田屋で、あの目覚しい活躍をした人物とは思えない。だが、見方を変えれば、鍼灸を生業とする山崎には、顧客を獲得する口達者なところもあったろう。しかし、それはあくまでも町民相手のことで、京の公卿では歯が立たなかったのかもしれない。

▽「我は新選組の医者なり」と高言

ここで、もう少し、山崎という特異な人物を知るため、その素性に触れることにする。生年は不詳だが、新選組入隊当時は三十歳前後といわれる。出身地も島田魁は阿波徳島とするが、一般に大坂の鍼灸医・林五郎左衛門の倅といわれ、同じ隊士の林信太郎とは従兄弟の間柄という。この林信太郎の縁で新選組に入ったとも推察されるが、どうも、それだけとは思えない。

山崎は棒術を習得したというが、暗殺剣の集団の中では、あまりに見劣りがする。密偵として行動を共にした吉村貫一郎や浅野藤太郎などは、秀れた剣の使い手である。それでも、諸士

取締役兼監察という重要な役職に就けたのも、山崎には相当の学才があったという説に、肯けるものがある。

それは、山崎が公卿探索で数々の失敗をする以前、すでに二足の草鞋を穿いていたということである。一方の草鞋が密偵なら、もう片方は医者であった。それも、れっきとした西洋医なのだ。

話は大政奉還から、再び、慶応元年（一八七五）閏五月下旬に溯る。

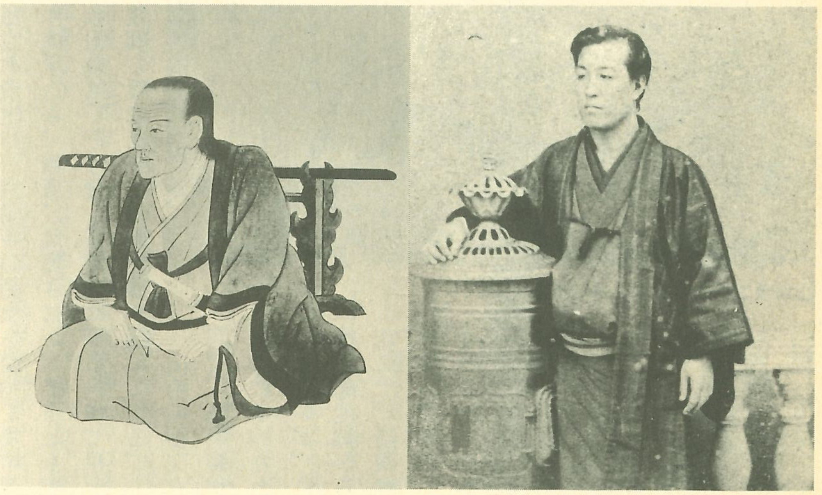
将軍の奥医師で医学所頭取の松本良順が、会津藩医の南部精一郎を伴い、新選組屯所を視察したときのことである。

松本は近藤勇や土方歳三ら幹部を前に、病室がすこぶる不潔なことや、患者隊士の目に余る醜態など、数々の欠点を指摘して、叱りつけた。その際、南部が毎朝屯所に出向いて、隊士を回診することになった。選ばれた山崎は、この南部から、西洋基礎医学のイロハから指導を受けることになる。また、毎週二回往診に当る松本からは、臨床医学の応急手当や戦傷外科の手解きを、徹底的に叩き込まれた。

「隊士の中に山崎烝という、もと漢方医の倅がいる。性質温厚にして、よく学び、黙々と事に耐える」（要旨）と、松本の自伝『蘭疇』に記すほど、その勉学ぶりを讃めている。

さらに松本は、屯所内の残飯を利用し、豚や鶏を飼い、食料にして体力を増せとか、豚の膀胱を氷嚢に使えなど、細々と伝授した。こうして、山崎は、「大いに隊士の便益をなした、その勇気は、俺の最も愛する者だ」と、松本から、西洋医としてのお墨付きを与えられた。この瞬間、大勢の隊士を前に、山崎は破顔一笑し、「我は新選組の医者なり」と、高言している。

これがあらゆる史料の中で、『蘭疇』だけに記載されている、山崎、唯一の肉声なのだ。



医学所頭取の松本良順（右）と緒方洪庵

▽西洋医学を研鑽した理由

なぜ、山崎は、これほど西洋医学に対して、忍耐し研鑽したのだろうか？

その頃、大坂では緒方洪庵の開いた蘭学塾が、門弟三千余名を抱える盛況ぶりであった。特にコレラの大流行に見舞われていた日本では、種痘法とか予防医学、公衆衛生など、漢方医学では及びもつかない事業を開始していた。松本も、江戸にあって長い伝統を誇る幕府直轄の漢方医学館を廃業に追い込むなど、奮闘の最中であった。

鍼灸医・山崎は、こうした時勢の急流に乗り遅れまいとして、新選組に入ったと思える。どんな身分や職種でも、志願さえすれば武士になれる新選組。そこを踏み台に南部精一郎のような藩医に、やがては、松本良順のような幕府医官へ、と考えるのは、当時、少しでも学才ある者なら夢みる、まともな進路ではなかったろうか。

あるいは、当時の町医者の診察料が四分の一両程度なのに比べ、藩医や幕府医が手にする治療費は、数百両から千両もあった。山崎は大坂商人らしく、これに幻惑されたかもしれない。

だが、新選組には自前の医者を抱える余裕はない。池田屋事変で負傷した隊士の治療に当ったのは、会津藩医である。ここに、山崎が密偵であると同時に医者であるという、二足の草鞋を穿かざるを得なかった理由がある。

しかし、密偵としては、その実績が平均以下であるのに対し、医者としては抜群な力量を示したことで、二足の草鞋がちぐはぐなものになってしまった。まるで、一方の足が草鞋穿きなら、一方の足は革靴を穿いたように。

山崎が、我は新選組の医者だ、と大見えをきったのは、新選組の誰彼に対しても、そのことを強調し、納得させたかったように思える。より積極的に言えば、密偵はいやだ、「俺は密偵ではない！」と宣言しているようだ。事実、このことが山崎の身に悲劇を招くことになる。

▽なぜ鳥羽・伏見戦争に向かったのか？

鳥羽・伏見戦争の起る直前の慶応三年十二月中旬。新選組から分離した元隊士の銃弾を浴びて負傷した近藤勇と、肺結核の悪化に苦しむ沖田総司を看護して、京都から大坂に下った山崎は、引き続き大坂に留まり、年を越した。

だが、翌明治元年（一八六八）一月三日、鳥羽・伏見の戦いが勃発すると、山崎は近藤・沖田の看病を会津藩医に任せ、京都へ向った。

翌四日、淀、千両松において、薩摩軍と激戦になった新選組は、多数の戦死者を出して、敗走する。負傷者の多くは船で淀川を下り、大坂に運ばれた。この中に重傷を負った山崎がいた。そして、戦傷死してしまう。

さて、ここから山崎の死について二つの意見に分れる。一つは、重傷の山崎は富士山艦に運び込まれ、一月十一日に兵庫沖を出帆する。そして、十二日には紀州・由良港に停泊し、翌十三日、江戸に向け出帆する。この十三日に山崎は船中で息を引きとり、紀州沖で近藤や土方、多くの新選組隊士の見守るなか、山崎の遺体は大砲玉の重りをつけて、水葬された。これが、今なお論議を呼ぶ『新選組遺聞』（子母澤寛著）に書かれた山崎水葬の箇所である。

新選組が敗走した淀、千両松付近

二つ目は、「山崎は負傷の後、船中において死す」という、伏見の御香宮に保管される『戊辰東軍戦死者霊名簿』に記載される水葬のくだりである。この船中とは、淀川を下る川船の中で死んだ、という見方である。それなら、大坂のどこかに埋葬し、わざわざ海に運んで水葬することもない。

あるいは、富士山艦で死んだことが確かでも、途中寄港の紀州由良で遺体が下ろされた可能性も否定できないとされる。

それとも、〝海行かばみづく屍……〟式の派手な水葬が、山崎にふさわしいという発想が、作家の心を刺激したためだろうか。

とにかく、近藤や沖田は富士山艦で、無事、江戸に着いている。もし山崎が、鳥羽・伏見の戦場に戻らず、近藤・沖田を看病したまま江戸に行ったなら、松本良順の医学所に留まり、明治の世を生き長らえることができたかもしれない。松本は生きて、初代陸軍軍医総監から貴族院議員にまでなっているのだから。

だが、現実に山崎は鳥羽・伏見の戦場に舞い戻り、「まるで納涼の流弾に当ったように死んだと聞く。実に残念至極と言わざるをえない」と、松本はあっけない山崎の死を惜しんでいる。

なぜ、山崎は危険な戦場に向ったのか？

それは、新選組の軍医であり続けたかったからである。

所詮、山崎という人間は、二足の草鞋を穿きされる器ではなかった。いや、新選組は、そんなふうに、兼業を許すほど甘い組織ではなかったというのが、当を得た見方なのかもしれない。

永倉新八

貴重な資料を残した新選組の語り部

山本 博司

◆出　自

新選組副長助勤、二番隊長、新選組発足当初からの大幹部で、近藤勇・土方歳三等の墓碑を建立して生涯を新選組に尽くした男である。

永倉新八は戸籍謄本に従えば出生は天保拾年（一八三九）九月拾貳日、長倉甚治二男と読める。しかし大正二年三月から同年六月まで小樽新聞に連載された「永倉新八」（以下自伝という）に本人は天保十年四月十一日、松前藩江戸定府取次役永倉勘次の一人息子として、下谷三味堀の屋敷で生まれたとする。

また、杉村家に残る新八翁の書き残し（以下新八翁遺稿と呼ぶ）では実父の名を蔵吉とし、戸籍謄本にもあるが、新八は長蔵甚治二男とあるように、一人息子でなく兄が存在したのである。兄の名を秀松といい天保十二年五月十七日に没している。新八が二歳の時のことで跡取りを亡くした夫婦は、新八を掌中の珠といつくしんだことに変わりはない。

いま一つの記録には、六歳も若く弘化二年（一八四五）四月生とあるのは樺戸郡月形村戸長役場と書かれた明治十六年一月の寄留戸籍簿に見える。これは関係者によれば、身分を秘しての就職のためという。

出自は本人が語るには、代々、松前藩江戸定府取次役で百五十石取りの家柄、後述の新八メモに次のように記されている。

亨和元年七月十二日／慧性院殿仙顔貞光比丘尼／長倉先祖・俗名・長倉勘子様

長倉勘子とは江戸浅草で呉服商を営む長倉屋長左衛門の娘で寶暦七年（一七五七）十二代松前藩主志摩守資廣の側室となった人で、長倉屋長左衛門は松前藩江戸藩邸の出入りを許された商人で、勘子が藩主の子を四男一女ももうけた事もあって父長左衛門は、町人から士分に取立てられた。

勘子の産んだ子のなかでも廣年は長じて、蠣崎将監廣年といわれる松前藩の家老であるばかりか、松前応挙といわれた絵師波響であり、長倉家は松前藩の名門と言える。

勘子は二十九歳で夫、資廣を失った後は松前文子と名乗り藩主道廣の継母として、また藩内の和歌の指導者として有名であった。亨和元年（一八〇一）六十六歳で没した。慈性院殿仙顔貞寿比丘尼として、松前藩主松前家墓所に葬られている。

長左衛門貞義 ─ 長兵衛
　　　　　　 ─ 栄治 ─ 甚治 ─ 秀松
　　　　　　　　　　　　　　 ─ 新八（新八、二歳の時に死亡）（杉村家へ養子）
　　　　　　 ─ 勘子

新選組時代は永倉と名乗ったが長倉が正しく、脱藩により親族に類を及ぼさないためだと言う。

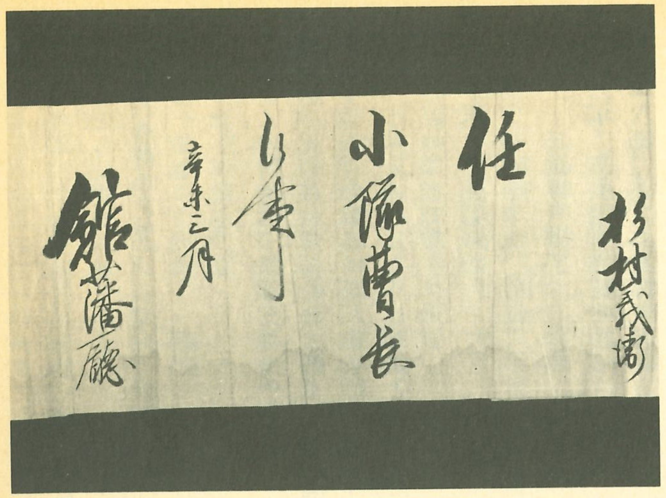
◆剣　法

神道無念流二代目岡田十松の門を叩いたのが十五歳の時と言われ十八歳で免許皆伝となり、翌年藩を脱している。

剣は同流の百合元昇三と心形刀流坪内主馬にも学んだ。島田魁とはこの坪内道場で知り合った。やがて新八は天然理心流近藤勇らと親交を結び、試衛館道場の食客となる。

文久三年（一八六三）、新八は近藤勇、土方歳三らと幕府の徴募した浪士組に参加して上洛、そのまま京都に残り近藤勇・芹澤鴨ら同志十三名は新選組の結成に参画し、副長助勤・二番隊長を務める。元治元年（一八六四）六月五日の池田屋事件では近藤、沖田総司、藤堂平助らと池田屋に斬り込み、刀は折れ、指を削がれる奮戦であった。

慶応四年（一八六八）一月三日、鳥羽伏見の戦いが勃発。この戦いに新選組は善戦、新八は二番隊を率い、決死隊として伏見奉行所より御香宮の薩摩藩本陣に斬り込んだが、薩摩藩の攻撃の前になす術もなく、やむなく引き返した。



館藩から藩兵に任命された辞令書

この戦いに敗れ、新八は幕府運送船順動丸に乗船し、一月十二日江戸へ戻る。

さらに三月、甲陽鎮撫隊に加わり甲州勝沼に出陣するが敗走、江戸に戻って、近藤、土方らと訣別し、旧友芳賀宜道を隊長として原田佐之助、矢田賢之助、林信太郎、前野五郎、中条常八郎、松本喜次郎らと請兵隊を結成したというが、陸軍奉行並、松平太郎が関連とする幕府の編成した靖共隊に編入されたのが真相らしい。

ともあれ、新八は近藤らと訣別した新選組同志と小山・宇都宮・田島と旧幕府軍として各地で戦ったが会津で隊を離れ、「入布新」の変名で米沢に潜入している。しかし米沢藩も降伏したため、苦労して江戸に戻る。

明治二年二月、松前藩の家老下国東七郎の計らいが聞きとどけられ百五十石で召しだされた。下国東七郎は明治元年十二月に青森に松前藩の増援のため江戸詰の隊士を引き連れて不在であった。復藩の時期は明治元年十一月十日前後と思われる。

「明治三年三月永倉は東京を出発して福山に着し杉村松柏の養子になった」と語っているが、松前渡航の時期は明治四年一月十六日が正しい。

杉村家の養子になったのが、明治三年三月であったかも知れない、前述した明治四年一月十六日にすでに、「杉村治備（多内、後更に義衛）」とした松前藩の記録が見える。

松前に到着した杉村義衛は明治四年三月、松前藩改め館藩から藩兵として任命された辞令書が残る。

杉村義衛
任　小隊曹長
辛未三月
館藩廳

しかし同年十一月の辞令書は軍曹に降任されている。

軍曹　杉村治備
免　本官
辛未十一月
元　館縣廳

懲罰を受ける事件があったのか、不明であるが、降任（降等）は軍人にとっては最高の屈辱であり、藩に兵制の改革があったと解釈したい。

◆新選組関係者の消息

新八の遺稿の一つに長倉家・杉村家の故人の没年と場所を書いたメモ書がある。その後半には新選組隊士の記録も見える。かつて二番隊組長の頃の同志、また近藤勇と決別し、新たに別隊を起こした請共隊の同志らの消息が書かれているが、その都度記録したものでなく、記憶に基づいて書かれているので、歿年、場所の誤りは否めないが、新選組研究には、貴重な資料である。

なお、同資料は故杉村逸男氏が個人所蔵され

ていたが、新八直系の杉村義男氏に引き継がれたのを機会に、北海道開拓記念館に他の永倉新八遺稿とともに寄贈されている。

「永倉新八遺稿のメモ」

■明治三十三年　島田　魁
三月三十日
（正しくは明治三十三年三月二十日没）
島田魁の死去には長男の義太郎を伴い葬儀に参加している。会葬帳に新八親子の記録が残っている。小常との間にもうけた娘と再会したのは、この頃のことであろう。

■年月不詳　備後国内ニテ　大月　銀　蔵
牢死
（細部不明）

■文久三年　壬生村八木源之丞宅ニテ殺害
九月十八日　木村継次改
芹沢　鴨
（文久三年九月十八日没）

■同　同　平山　五　郎
（文久三年九月十八日没）

■貫天院殿忠報国義大居士
明治四板橋宿ニテ四月十五日刑死
宮川勝太改
近藤　勇　昌之
（慶応四年四月二十五日没）

■明治五年
五月二十五日　函館戦死
土方　歳三　義豊

晩年の永倉新八（前列中央、大正２年札幌で撮影）

■慶応四年
正月五日　淀堤ニテ戦死
井上　源三郎
（明治二年五月十一日没）
（慶応四年一月五日没）

■慶応四年四月　本所猿江町ニテ戦死
原田　佐之助
（慶応四年五月十七日没）

■年月不詳　北海道千島殺害
前野　五　郎
（明治二十五年四月十九日、択捉島で銃の暴発で死亡）

■慶応四年六月　今市宿五丁手前戦死
矢田　賢之助
（慶応四年五月六日没）

■元治元年十一月
前川荘司宅ニテ切腹　山南　敬　助
（元治二年二月二十三日没）

■年月不詳　千本通リニテ断首
浅野　薫
（詳細不明）

■慶応四年　伏見奉行所ニテ断首
三月十五日　小林　圭之助
（慶応三年十二月十六日没）

■慶応四年八月　水戸街道ニテ殺害
林　信太郎
（慶応四年十月没）

■慶応三年　油小路七条通ニテ殺害
十一月十八日　伊東甲子太郎

■同　同　藤堂　平　助

■慶応四年　淀堤ニテ戦死
正月五日　伊東　鉄五郎
（伊藤。正しくは慶応四年五月一日、会津白河の戦闘で戦死）

■年月不詳　東京ニテ病死
川村　隼　人

■年月不詳　前川荘司宅ニテ切腹
葛山　武八郎
（伍長、池田屋事変に参加、永倉らの近藤批判の責任で切腹、元治元年九月六日のことであった）

■年月不詳　会津ニテ断首
松本　喜二郎
（慶応四年八月十七日、会津三代で負傷し正福寺で死亡）

■慶応四年　淀堤戦死
正月五日　田村　又三郎
（大三郎か）

■年月不詳　新撰組同志
東京ニテ病死　志村　武　蔵
（細部不明）

■年月不詳　新撰組同志
仙台ニテ病死　久米部　正親
（明治四十三年九月二十五日、猪野忠敬と名を変え仙台で没）

■年月不詳　新撰組同志
箱館ニテ戦死　蟻通　勘　吾
（箱館戦争に参加、明治二年五月一日没）

■年月不詳　新撰組同志
京都銭取橋ニテ殺害
武田　観柳斎
（慶応三年六月二十三日のこと）

■年月不詳　新撰組同志
神奈川ニテ病死　富永　政之助

■年月不詳　新撰組同志
東京ニテ病死　阿部　隆　明
（明治四十年一月六日東京下谷区で没）

■年月不詳　新撰組同志
東京ニテ死刑　大石　鍬次郎
（明治三年十月十日、小塚原で刑死）

■年月不詳　新撰組副長
助勤病死　沖田　総　司
（慶応四年五月三十日病死）

■年月不詳　新撰組副長　新見　錦
（文久三年九月祇園にて切腹）

■年月不詳　新撰組副長
助勤切腹　野口　健　司
（文久三年十二月二十七日前川邸で）
（　）中の注釈は筆者

◆晩　年

晩年は小樽に居住し、悠々自適の生活を送り新選組を回顧した資料を多く残している。

特異なものとして、大正二年（一九一三）三月十七日から六月十一日まで七十回にわたって、「永倉新八」と題して小樽新聞に連載された読物は、娯楽の少ない当時としては、読者の血を沸き立たせたと言う。

昭和二年、新八の子息義太郎によって新八翁の十三回忌に当たって「同志連名記」などを加え、「新撰組永倉新八」として山川健次郎、本山荻舟が序文を書き、自家本として知人に配布したもので、昭和四十六年十月、新人物往来社から『新選組顛末記』として復刻されて、現在も入手可能な新選組研究の貴重な教科書となって愛読されている。

平成十年一月十七日、新聞は永倉新八の幻の記録「浪士文久報国記事」が神奈川で発見されたと報道した。

新選組日誌とも言うべき記録で新八が横浜の某氏に貸したままというもので、研究者には待望の書の発見と言えよう。

晩年の新八の横顔は故栗賀大介著「新選組興亡史・永倉新八の生涯」（新人物往来社）が詳しい。大正四年一月五日、小樽市で病没した。享年七十七歳。

墓は、新八が建てた東京板橋駅前の近藤・土方ら隊士の碑の左側に長男義太郎による「新選組永倉新八墓」と、小樽市中央墓地の養父母、箱館戦争で戦死した義弟玄英らとの合葬墓（新選組研究者の一部には遺骨は空墓とする説もあるが誤りでこの墓から分骨された）、さらに直系の義男氏によって建てられた札幌市豊平区里塚霊園の「釈義潤・杉村義衛／（永倉新八改め）」と戒名・俗名が併記されている唯一の合葬墓がある。

新八の生まれた長倉家でも平成七年二月、岡山市飽浦の松光院墓地の長倉家墓所内に、「永倉新八供養碑」が建てられている。

東京板橋駅前の永倉新八の墓

原田左之助

美男で豪胆の「死損ねの」副長助勤

野田　雅子

◆怜悧且つ容貌万端

美男にして豪胆、常に勇猛果敢に戦う副長助勤の綽名は「死損ねの左之助」。

原田左之助は、脛に疵ならぬ腹に疵持つ男であった。

原田左之助（佐之助とも、諱は忠一）は、天保十一年（一八四〇）伊予松山藩の最下級の中間を勤める藩士、原田長次の子として生まれた。中間は、ほとんど人夫同様力仕事を専らとし、江戸詰もある。多少読み書きができ、怜悧な者は、目付役の使い走りをした。

安政二年（一八五五）、左之助は数えで十六歳の頃、江戸詰となる。その怜悧さから、江戸定府目付役の内藤家へ小使いとして上がる事になった。平素は一刀差しなのが、小使いの役目の時だけ二刀を帯びるのを許される。

内藤家の息子で後年俳句界の重鎮となった内藤素行（鳴雪一八四七〜一九二六）にとって、左之助は七つ年上のお気に入りの遊び相手だった。「中々怜悧な男で、且つ容貌万端子供心にも美男であったと認めて居ります」と、後年の談話（史談会速記録第二九七輯）にある。続けて中間部屋で折檻される左之助を目撃した事が語られる。土間で後手に縛られ、猿轡を箝めての水責だ。可哀想に思い調べさせると「どうもあの男は平常年の若いのに似合わず、目上の者に対して傲慢でおとなしく言う事を聞かず、万事逆らう様があって憎まれて居った。殊にあの日は他から酒に酔って帰って来て、大分挙動が荒々しかった、目上の者より之を制したが、却って反対に口返答をしたので」制裁を加えたという話だった。

安政四年（一八五七）頃であろうか、素行は再び郷里松山城下の親類の家で、その家の若党になった左之助を目撃する。左之助は素行に気付いていたのに、無視し続けたらしい。子供にまでバカらしい、何で気遣いをしなきゃならんのか、という事だろう。武士といいながら、一刀しか帯びてはならぬとされた最下級藩士の左之助である。二刀差しに対する激しい憎悪と痛烈なあこがれを綯い交ぜにした思いが胸に渦巻いていたに違いない。

奇行も伝わっている。裸で褌一つに頬冠りをして、オランダ式の銃隊に使う太鼓を革帯で肩から下げ、撥でドンドン鳴らしながら上士の住む屋敷町を歩いた。傲岸不遜な若党の奇行に驚き呆れ、蔑みの視線を投げた人々は、この男が後年世に名高い新選組の幹部に納まるとは、思いもよらなかったであろう。

◆局長近藤勇を批判

子母沢寛は『新選組物語』で、左之助が「腹切る作法も知らぬ下司下郎」と罵られたのに憤慨して、切腹に及んだと描いた。本当の理由は不明だ。ともあれ、死に損ねた左之助は脱藩した。以後江戸の天然理心流道場試衛館に現われるまでの足取りは不明である。

晴れて二刀差しの脱藩浪人となった左之助は槍を携えて、種田流槍術の腕を磨く修行と放浪の日々を四年ほど続けたものと思われる。

江戸市谷柳町の試衛館には、北辰一刀流の免許皆伝でありながら天然理心流に正式入門した山南敬助を始め、永倉新八、藤堂平助といった食客がゴロゴロしていた。行きずりの町道場であるはずが、腰を落ち着かせてしまう魅力の何かが当時の試衛館にはあったのだろう。そこには形骸化した大道場の剣法と異なる実戦に重きを置く剣法がある。そして、百姓上がりで武骨だが見所のある近藤勇、個性の強い食客らが寄り合って一種リベラルな雰囲気があった。

原田左之助の妻まさ（写真中央）

文久三年（一八六三）二月、左之助は「浪士組」として近藤以下試衛館メンバーと共に上洛、程なく浪士組は分裂。京都残留を決めたのは左之助ら試衛館と、水戸浪士芹沢鴨の一党その他合わせて二十四名だった。日を置かずして彼らは京都守護職会津藩御預りという身分を得、京都市中取締りの最前線に立つ事となった。新選組の誕生である。左之助は、幹部の副長助勤となり、やがて十番、七番隊を率いてのさまざまな活躍を見せる事となる。

九月十八日の芹沢鴨暗殺に左之助も居たとする証言もあるが、真偽は不明である。

八木為三郎老人の談話に「原田は気短かでせかせかした男でした。二た言目には斬れ斬れと怒鳴りましたが、これもいい男でした」とある。

上洛した年の九月二十六日、長州の間者として隊に入り込んだといわれる楠小十郎を、左之助が襟首をつかんで引き立てようとすると、小十郎が抗弁して聞かないので、カッとなって首を斬って落としたという話もあれば、逃げまどう小十郎を追いかけて頭に四太刀浴びせて後斬ったという話もある。八木老人の談話は続く。

「酔っ払うと、着物の前を広げて腹を出してこれをぺたぺた叩きながら、金物の味を知らねえ奴なんぞとは違うんだ、切腹の跡を見ろといって、左の方から真一文字に腹を半分ばかりも切った傷跡を出して見せました」。

一も二も無く切腹を申し渡される新選組の中では、「死に損ね」の苦い思い出にも箔が付いた事だろう。

元治元年（一八六四）六月五日の池田屋事変では、土方隊に属し鴨川東岸を探索、近藤達が斬り込んで乱闘中の池田屋へ駆け付けた。先頃発見された永倉新八の『浪士文久報国記事』に、戦闘中放っておかれた池田屋惣兵衛が「対ニ長州人ノ縄ヲ解キ長州人逃去ル、原田左之助跡ヲ追カケ対ニ鐺ニテ仕トメル」という新しい記述が見つかっている。井上源三郎らと屋内でも奮戦、討死説までが流れた。左之助は、この働きにより幕府から褒賞金十両、別段金七両を下賜された。一ヶ月後の禁門の変では左肩に負傷しながらも翌日天王山攻めへと向かっている。

新選組の知名度が上がるにつれて、局長近藤の態度が尊大になって目に余る所がある。永倉、左之助と斉藤ら幹部と調役尾関政一郎、島田魁、葛山武八郎の連名で京都守護職・松平容保へ建白書を提出。近藤の非行を挙げて公然と批判した。容保のとりなしで表面上は丸く収めたものの、幹部は謹慎で済んだが葛山武八郎は切腹している。後味の悪い成り行きは、左之助ら幹部の軽挙盲動を戒めたと同時に、後年永倉と左之助が近藤と決別する伏線となる。

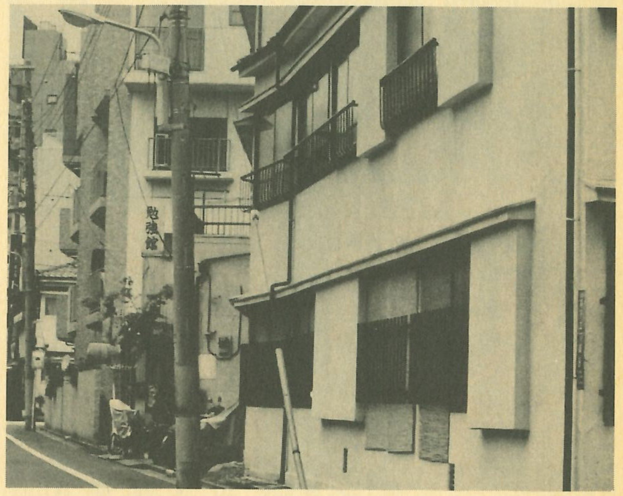
◆町娘と結婚

翌慶応元年（一八六五）二月の盟友山南の脱走と切腹を、皆どう受け止めたであろう。この直後、前年暮れの伊東甲子太郎一派他の増員で

手狭になった壬生屯所から、西本願寺への移転があった。大所帯の新選組の組織改編で、左之助は伍長二人、平隊士十人を抱える十番隊組長となる。時を同じくして、左之助は結婚した。相手は菅原まさといい、清水隆氏の御研究によると、仏光寺通堀川東入ル喜吉町の町人高嶋屋長兵衛（戸籍は清兵衛）の二女で嘉永元年十一月十五日生まれであるという。苗字帯刀御免の由緒正しい家柄で、菅原姓を旧幕時代から名乗っているそうである。この時左之助二十六歳、まさ十八歳。

　幹部隊士が休息所と称して女を囲うのは珍しくないが、町娘との正式な結婚をするのは珍しいといえる。周囲に引きずられないでマイペースに物事を考える性質、であろうか。遅れる事二年、慶応三年八月に島田魁が結婚している。島田が自身の結婚を決断したのには、仕事と家庭をちゃんと両立していた左之助の事が念頭にあったに違いない。

　左之助達は屯営の近くに小さな家を借り、まさによると、月々生活に十～十五両を渡されたという。屯営の方で三度の炊き出しを運んで来るというので生活は仲々贅沢であった。翌年、長男茂が誕生する。左之助は大いに喜んで「これは立派な武士にしてやるぞ」と言っていた。二代目に賭ける父親の意気込みであろうか。一刀差しの小使い風情が、今や京洛に鳴り響く新選組の大幹部である。左之助自身がその人生で最も充足感を味わった時期であろう。


結婚した原田左之助夫妻の住居跡付近

◆三条制札事件で負傷

　同慶応二年（一八六六）九月十二日夜、三条制札事件が起きる。三条大橋西詰に立てられた制札を損壊する者が現われ、その警戒の三日目、七番隊を率いて先斗町会所に詰めていた左之助は、土佐系浪士八名が制札を鴨川へ投げ込んだ現場に急行し、真先に斬り込んだ。その時現場から一丁半（約百六十メートル）計りの瓢屋で菊屋峯吉が、バチバチッという太刀音を聞いた。以下峯吉の回想談（大正五年十一月『土佐藩国事史料』）によると、片耳を斬られて血だらけで瓢屋へ逃げ込んで来た竹野という男は「制札を御ろした処へ伏勢が起って来て囲まれた。一人二人はやられたかも知れぬ」と言い、峯吉は怖いもの見たさで斬り合いの済んだ現場へ出かけている。

　途中見張りに立つ六、七人の新選組隊士に呼び止められている。三条大橋を東に渡り切り南下、現三条京阪駅の付近の車道から河原へ降りて行くと、そこに藤崎が斃れていた、と語っている。藤崎吉五郎は事件の首領とみられ、左之助が平隊士井木八郎と左右から立挟んで斬り伏せた。この時左之助は手に（高股とも）負傷している。まるで時代劇の一場面そのものの様な光景である。

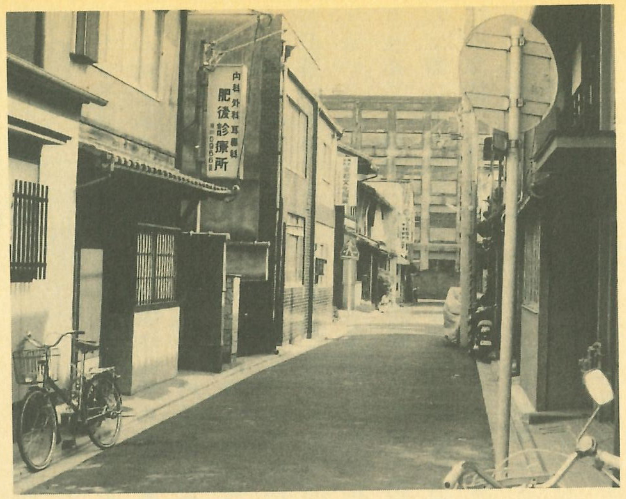
　慶応三年（一八六七）十一月十五日の坂本龍馬暗殺に関しては、現場に残された鞘を左之助の物であるとした証言があったが、近年見廻組の世良敏郎が置き忘れた物であると判明した事で、左之助犯行説は否定される。

　その三日後、七条油小路で「京洛随一」と謳われた剣豪でかつての同志服部武雄と長槍で対峙する左之助の姿があった。盟友藤堂も斬り死し、伊東甲子太郎暗殺後の残党との戦いは、文字通りの死闘であった。

◆妻子との別れ際に二百両を手渡す

　殺伐として血生臭い隊務から解放されれば、あどけなく見つめる息子の瞳があり、抱き上げ

れば、甘酸っぱい微笑が広がる。妻まさは二人目を懐妊中で、段々とせり出す腹をかばい、立ち振舞も緩慢になってきている。


原田左之助が死んだ本所猿江町の神保山城守邸跡

　自分の命を継ぐ子を持った喜びは、いつ死ぬとも知れぬ身の上であればひとしお、と思える。だが左之助は二人目の子の顔を見る事は遂になかった。十二月九日に発せられた王政復古の大号令は、左之助と妻子との絆を唐突に断ち切った。洛中の佐幕派は一掃され、新選組も伏見鎮撫を命ぜられて退去する。

　「この分では今にも戦争が始まるかもしれない。俺に万一の事があったら、伜の茂だけは俺に代わって立派な武士に仕上げてくれ。ことにお前の体はただの体ではないから気をつけるように」と、大急ぎで屯営から帰った左之助はまさに繰り返しいい、当座の生活費だとして二分金ばかりで二百両を渡した、という。

　まさは「唯一目生まれる子を見せて死にたやりたいと、腸のちぎれる様な思い」で別れたと後年述懐している。伏見奉行所で、目と鼻の先の御香宮にいる薩摩兵と睨み合い、一触即発の緊張の中に居た左之助は、別れてまもなく二人目の子が生まれ、わずか八日で早世した事を知る由もない。

◆上野総攻撃を生きのびて満州で馬賊に⁉

　明けて慶応四年（一八六八）正月三日、鳥羽伏見の戦い勃発。敗戦後、江戸へ引揚げた新選組は甲陽鎮撫隊として甲府城接収に向かうが敢えなく敗走。退却の際、兵の取りまとめを依頼された永倉と左之助らは、会津へ投じる事を決議、江戸で再会した近藤と衝突し、積年の不満も手伝って永倉と左之助は感情的に席を立ち、近藤と決別してしまう。

　二人はその後、永倉の旧友芳賀宜道と三人で靖共隊を組織し、永倉と左之助は副長に就任、江戸城和田倉門の旧会津藩邸を屯所とした。江戸城明け渡しの前日四月十日、江戸を脱した靖共隊が十四日下総山崎の宿まで進軍したところで、左之助は急に単独で江戸へ引き返してしまった。永倉は「妻子の愛着にひかされ」離脱したとしているが、どうであろう。新選組、試衛館の盟友に背を向けた今、永倉は気持ちの上では元松前藩士、に戻ってしまった事だろう。

　永倉や芳賀らは気にも止めなかったかも知れないが、左之助にとって面白くない事の一つや二つあっても不思議ではない。永倉に同調して新選組を離脱した事が、果たして良かったのだろうか。靖共隊としてよりも、土方の率いる元新選組として戦った方が左之助にはふさわしかった様に思われる。靖共隊を統轄する幕府脱走軍の総参謀に、袂を分った土方が就いているのも、またそういう状況に甘んじて平気な永倉にも、短気な左之助は我慢がならず、腹を立てたのではないだろうか。突然の離脱については、さまざまな理由が考えられようが、ともかく左之助は靖共隊と共に戦うのを潔しとしなかったのであろう。

　江戸へ引き返して彰義隊に投じた左之助は、五月十五日の上野総攻撃で銃創を負い、本所猿江町の神保山城守邸へ落ち延びたが、その二日後息を引き取った。享年二十九歳だった。自分の信義に従って道を引き返した左之助である。その死が満足のゆくものであって欲しいと思う。明治になって妻まさには、その死と「正誉円入信士」という戒名が伝えられた。だが、生き延びて満州の馬賊の頭目となり、明治四十年頃郷里松山へ現われたという伝承がある。そうすると、左之助は二度、死に損ねたのだろうか――。

斎藤 一

西南戦争まで戦い続けた警視庁警部

赤間 倭子

◎長男勉の口述筆記から浮かぶ斎藤像

新選組幹部のなかで、多摩出身の近藤勇、土方歳三、井上源三郎などと異なった匂いがする三番隊長斎藤一に、なぜかひかれてその研究調査に没頭してきた私であった。

しかし調べれば調べるほど、斎藤一に関するものは余りにも数少くて、他から入ってくる情報はガセネタばかりという有様であった。

もちろん、現在でも斎藤一は謎の人物というより他はない。謎だらけだ。断片的に子母沢寛の新選組関係の本に出てくるだけである。

幸いにも私は斎藤一直系子孫藤田實氏と知り合えて、何回かの御自宅訪問に当たり、貴重な文書を拝見できたのである。私はそれを「藤田家文書」とよんでいるがそれはノートの切れはしとか、便箋にしかも鉛筆で走りがきしてあるものだ。

昭和三十一年に、斎藤一(のちの藤田五郎)の長男勉が、死ぬ少し前に妻のみどりに口述筆記させた貴重なものだ。内容はごくあっさりした父一の足跡を示したものである。

一応それにしたがってみると、山口一が斎藤の本名で、山口家は佐々木高綱の流れをくみ、播磨明石町出身ということになる。父の祐助(祐治)は明石藩足軽出身で、いつの頃か青雲の志やみがたく、家督を妹にゆずり、ひとり漂然と江戸へ旅立った。

やがて小川町辺に住む鈴木という藩士(多分明石藩か)の家に足軽として住み込む。他のノートの切れはしの方には足軽でなくて若党となっている。足軽と若党では大変ちがうのだが――。

足軽は大名家や武家の屋敷で使役される下級の人足的な雑用人であり、若党は大部分が改易された武家の元家来とか、前から身分は武士の者である。若党は学問があり、馬にものれ、剣にもすぐれる者多く、主人の代理として他家へ訪問し、用件を告げたりする。やや秘書的な役割もできるのである。むしろこの場合は、祐助は若党だというべきではなかろうか。

さて祐助は真面目人間だったらしく、勤勉家で、後年、御家人の株を買って、足軽でなくて御家人という身分となる。

しかし、当時高価だった御家人株(数百両はしたという説がある)を、果たしていくら博打をやったり、大酒をのんで暴れたり、喧嘩して怪我したりすることなど一切しなかった祐助にしても、そうたやすく入手できたのだろうか。話はうまく出来すぎというべきだ。

その辺りがどうも納得しにくいのだが――。まあ、それはそれとしても、結果的には斎藤一は御家人の子ということになろうか。

◎間者として高台寺党に潜入

百姓の娘(川越出身)ますと祐助の間に、勝(久とのち改名)、広明(公明)、一という三人の子が生まれた。勝は医師相馬俊明に嫁ぎ、その直系子孫が相馬和夫氏である。現在も御高齢だが御健在で、私とも御交際を頂いている。

山口一は天保十五年一月二日に、山口祐助の次男として生まれた。

藤田家のいい伝えでは、本当は十二時をすぎて生まれたのだが、一日(正月)に生まれたとして、一と名づけたという。幼少の頃のはなしは一切ないが、ともかく剣の腕前は天才的だったらしい。

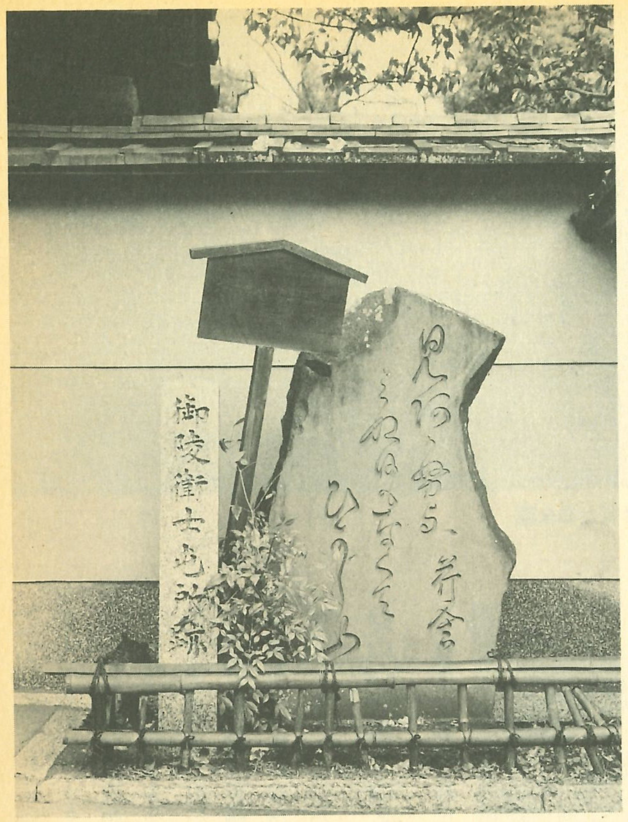
ごく若い頃、江戸の関口で旗本の武士と口論のあげく、その相手を殺害した山口一は、父の知合いで、京都に剣道場を開いている吉田某という家に逃げ込むことになった。居候とはいえ、さすがムダ飯ばかりは喰ってはいなくて、師範代となり門人にけいこをつける身分になったが、当時現地募集していた新選組(浪士組)に入隊した。

腕がよかったせいか、他になんらかの理由もあったのであろう。直ちに新選組幹部に選抜された。彼は京都においても、あらゆる修羅場をくぐり抜け、内部抗争においても、尊王派との戦いでも常に重要任務をこなしてゆく。

一躍新選組の名を天下に轟かした池田屋事件においても、彼は井上源三郎、原田左之助、笹塚峯造ら十一名同様、金十両、別段金七両を、報奨金として頂いている。

「酒をのむと人を斬りたくなる」などとかいた本もあるが、酒でも飲まなくては、別に個人的に恨みがあるわけでもない相手を、殺害するのは辛かったのではなかろうか。他人を殺すのも、裏切るのも「仕事なんだよ、これが」と割り切っても、すべて割り切れるものばかりでもないはずである。

ことに高台寺党の分離に当たって、斎藤一は近藤勇の密命で、間者として高台寺党に組し潜入した。



斎藤一が潜入した高台寺党の宿舎月真院

高台寺党とは、御陵衛士とも称し、新選組参謀伊東甲子太郎とその同志たちが、佐幕一辺倒になりつつある新選組から分離し、慶応三年六月～十一月まで、東山高台寺塔頭月真院を宿舎となし、尊王活躍をはじめた一派をさす。

伊東らの動きは、すべて斎藤一により近藤たちに知られた。ある日、斎藤は伊東の机から金子を盗みだして逐電してしまうのだ。その後、油小路において、伊東らは新選組の連中によって、無残な最期をとげた。

すべてこれは間者としての斎藤の働きによるのだが、明治になって高台寺党生き残りの阿部十郎は史談会速記録で、

「斎藤一郎という人間は、尊王のなんたるかもわきまえぬ人間で、ただ近藤勇についていた。この人間が我々の同志の中に間者として入っていたなどということはない。あの男は女にのろい(だらしない)男で、女のために盗んだ金を使ってしまったので、帰るところがない。それで近藤のところへ行って、我々の反対の密旨を告げ、おのれの命を全うしようと謀った」というような話をしている。

さらに史談会の外崎寛に「でも表面からみると矢張り内情を探ったような工合にみえるのだが」ときかれているが、阿部はあくまでも表面上そうみえても、本当は違うという。まったく斎藤一の間者行為に気づいていない。ということは、いかに斎藤がたくみだったかということだ。

己れのスパイ行為をかくすために、金を盗んで逐電するなどというのは、プロのすることである。泥棒という名のもとに、間者という本来の姿をすり替えたわけだ。

おそらく彼は本当は、プロのスパイだったの

ではなかろうか。ど素人（しろうと）のやれることではないからだ。

また新選組の初期の頃に、局長が三人いた。水戸派といわれる芹沢鴨と新見錦、試衛館派の近藤勇である。芹沢は普段は温和な人柄だが、酒乱ぐせがあり、屯所内でも乱暴で、新選組への献金をしない大商家に、大砲をうち込んで火事を起こしたりして、市民に迷惑不安をかけるので、会津藩よりの密命で近藤派が暗殺した。その時に斎藤一はその暗殺の人数に参加したと

斎藤一が布陣した如来堂

〝藤田家文書〟ではっきりいっているのだが――。

――芹沢鴨・伊東甲子太郎の殺りくは近藤の命により自ら手を下したり。

とある。

鳥羽伏見戦、甲陽鎮撫隊勝沼戦敗走後は、五兵衛新田へゆかなかったらしく、会津入りを記している。

◎山口次郎と改名して会津戦争で活躍

会津戊辰戦では山口次郎（二郎）をなのり新選組隊長として活躍、会津に協力した。

白河口の戦いをはじめとして、会津湖南町の三代に駐屯して、須賀川辺へしばしば奇襲をかけ西軍の胆をひやりとさせたり、小ぜり合いを繰り返しながら、やがて西軍が二本松に屯集、会津攻めを行うという情報から、新選組は、土方歳三及大鳥圭介ら旧幕府軍と、母成峠の山入り（地名）寄りに移った。

猿岩に防壁をきづき、西軍に備えたが、会津藩ではこの方面を重要視しなかったため、兵力も手うすだった。

雪崩れのような敏速さで、西軍は侵攻をはじめ、慶応四年八月二十一日、一気に母成峠を突破し、城下へと攻め込んだのだ。

会津藩士らと家族らは城内に入り、籠城となるが、母成峠戦以前から、仙台公（伊達）の密命で仙台藩士塩松蔵太が、旧幕軍らに仙台へくるようにとの話をもってきた。

斎藤（山口）は何だかんだと返事をしない。やれ、母成の決戦をすませぬうちは駄目といったり、ゆきたくないといって、塩松と口論をするが、一応仙台へゆくといった。

むろん土方・大鳥らは仙台行を承知した。しかし、母成敗戦後、土方と斎藤は意見を異にして離れてゆく。

新選組本隊と別に、斎藤は会津城下郊外の如来堂にわずかな部下（約二十人か）と共に布陣する。

慶応四年九月五日、突如、如来堂は新政府軍に襲われ、ほとんど全滅。生存者は、斎藤一、池田七三郎、吉田俊太郎など確認できる者は、五、六人ていどである。

これ以後、斎藤一は消息を絶つのである。

――これほど会津公に恩をうけたのに、落城寸前の会津を見すてて、今更仙台なんかには行けない。会津のために自分は死ぬんだ。たとえ新選組名を剥奪されたとしても、それでもいい。会津を見すてるのは「誠」の義にあらず――

と土方にいった彼の言葉とともに。

◎藤田五郎として西南戦争に再登場

再び斎藤一が藤田五郎と改名して、歴史の上に登場するのは、なんと西南戦争時（明治十年）である。藤田五郎はすでに警視局（庁）創立当初から入庁し、警部補としてかつて一緒に

協力した薩摩の西郷隆盛軍討伐のため、豊後口に出征した。

会津藩大目付故高木小十郎の長女トキヲ（時尾）と結婚していた彼は、すでに長男勉が生まれていた。

大手柄をたてて、当時の新聞に藤田五郎の名前はでかでかと記載されている。

彼は不死身だった。

凱旋後も警視庁で働き、非常に秘密性の濃い要職をつとめあげた。

警視庁退職後も、東京教育博物館・女子高等師範学校など、警衛防犯の彼でなければなし得ぬ役目をつづけた。一見、看守とか書記とか会計とかという何の変哲もない無難な職名が、警視庁退職後の彼の職名だが、それは名目上のことだけであって、実際は警備が主であった。常に彼の新選組三番隊長としてのかつての高名と剣の技は、一生彼から離れなかった。

さて彼が如来堂の戦い以後、警視庁に入る以前は、どこにどうしていたのだろうかというと、彼は落城後の会津藩士たちと一緒に、斗南配流となっていた。

凍りついた雪の大地、春がきても太陽さえ光り輝く明るさなどほとんどみられない斗南（下北半島を主とした青森県の北辺地方）では、食物もとぼしく、寒さと飢えで多くの会津人たちは死んでいった。あれほど朝廷と徳川家のためにつくした会津藩は、薩摩・長州・土佐などの西軍に賊として討伐された結果である。

斗南配流が一応許されたのは明治七年頃である。斎藤一は明治三年頃にすでに斗南から勝手に出て上京、各地の不平分子らと共に放浪生活をしたといっているが、不平分子側としてなのか、それを見とどける側なのか、それ辺は不思議といわざるを得ない。

また藤田五郎として、警視庁に入ったのは初代の川路利良警視総監自らのひそかなる招きによってであることを考えると、彼と川路の関係こそ不思議な謎といえよう。

如来堂の斎藤一の墓

＊

大正四年九月二十八日、どんな激戦にも不死身であった強運の持ち主、藤田五郎もついに老齢と病いには勝てなかった。

酒好きで胃をいためがちだった彼は、日頃のストレスも溜まりに溜まったせいか、胃かいようとなり、医薬の甲斐なく逝去した。

いよいよ臨終と悟ったとき、彼は家族に我が家の床の間に、座ぶとんを重ねてしかせると、その上に端座した。

ぜいぜいと痰が咽喉にからみつき苦しがる彼、その痰を割箸の先に布と綿をきつく巻きつけて、腔中へ差し入れ、静かにその痰をとりのぞくのが長男の嫁みどりであった。

懸命な家族の看病もむなしく、カッと大きく眼をみひらいた彼は、武人らしくそのままの姿で逝った。

山口一刀流＝無外流の達人、
新選組幹部、
警視庁非職警部、
の誇り高い最期だった。

藤堂平助

結喜しはや

新選組と決別した「近藤勇の四天王」

■最年少幹部

「魁先生」と渾名された若き新選組隊士がいた。本姓は藤原、諱を宜虎といい、別名を南部与七郎といった藤堂平助である。

天保十五年（一八四四・十二月、弘化に改元）に生まれ、江戸の出身とされる。また、伊勢津藩藤堂和泉守の落胤という話もある。美男であったというから、この話も噂になったようである。

神田の千葉周作の道場、玄武館で北辰一刀流を学んで、目録免許を得たという。天然理心流・試衛館道場には、いつ頃から出入りするようになったのか、分かっていない。

その試衛館の道場主であった近藤勇が、文久三年（一八六三）二月、幕府の浪士募集に応じて上洛するにあたり、藤堂平助も同じ試衛館の土方歳三、沖田総司、永倉新八らとこれに加わった。浪士組では最初三番組に所属。記録には、この時「二十才」とある。

上洛後は、近藤らと京に残留し、「新選組」の前身といえる「壬生浪士組」を結成。三月に会津藩御預かりの身となった。初期の組織編成において、藤堂は副長助勤となっている。八月十八日の禁門の政変を経て、命名された「新選組」以後も幹部として活動する。

■先駆ける白刃

新選組の、まだ初めの頃という。藤堂平助は「近藤勇の四天王」といわれた一人であった。隊中、弱冠二十歳の若者が、助勤の職にある。いくら試衛館出身者とはいえ、やはり認められるところがあったのだろう。そんな彼の激しい働きぶりを伝えるのが、元治元年（一八六四）六月五日の池田屋事件である。

この日、近藤の隊に配された藤堂は、沖田や永倉とともに、尊攘派過激浪士の捕縛に向かった。祇園の町会所を出て、鴨川の西岸を北へ、旅宿や茶屋の一軒一軒を調べて行く。三条小橋の西にある旅宿・池田屋に着いた時は、午後十時頃であった。御用改めと入った奥の二階には浪士が二十人程もいたが、近藤率いる沖田、永倉、そして藤堂のたった四人で斬り込んでいった。

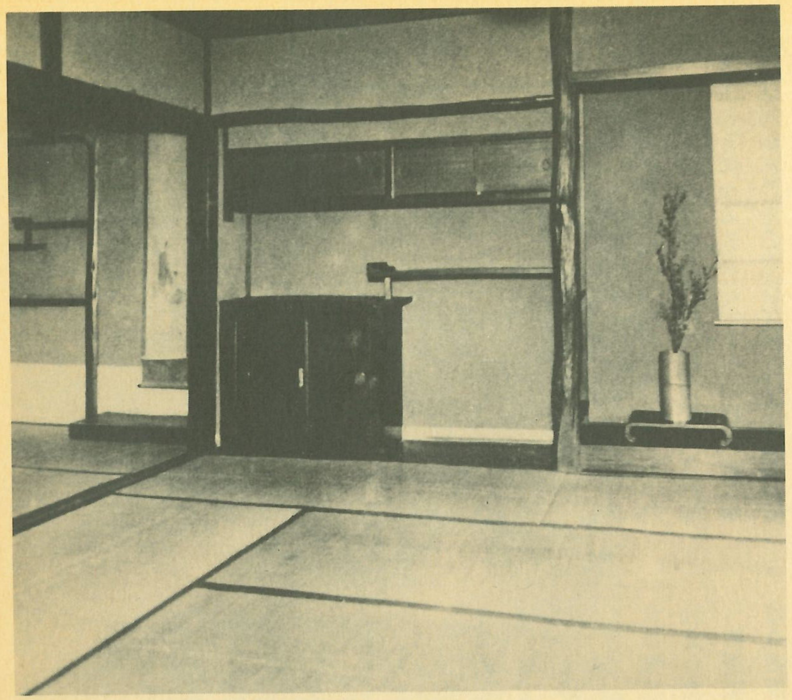
当初から戦闘は熾烈であった。そんな中、沖田が持病のため昏倒し、屋外へと出てしまう。近藤は屋内を、永倉が台所から表口を、藤堂は庭先を防いで闘った。が、その庭の垣根際から一人の浪士（長州人という）が藤堂に撃ち込んで来て、これがために彼は眉間を斬られてしまった。額を流れる血が目に入り、闘い続けることができない。というよりは、夥しい出血で、貧血状態にあっただろう。命に別条はないものの、重傷を負った彼は闘いから離れ、沖田同様、町会所へと移された。

翌六日の昼頃に新選組は帰隊となり、藤堂は釣台に乗せられて屯所へと戻った。

近藤は、六月八日付の郷里に宛てた手紙で、「藤堂の刀は刃切さゝらの如く」と書いている。無数の刃毀れができた藤堂の刀は、彼の闘いの激しさを語っている。同じ手紙に「藤堂は鉢金を打落され候より深手を受申候」とある。斬り掛かる相手の剣がいかに鋭く、浪士側の必死のほども解る。

この池田屋事件の風聞も書かれた、当時の『京師騒動見聞雑記録』に、次の様な記載が見られる。「壬生浪士之内藤堂平助と申もの、別而盛なる壮士の由。当年十七歳。此以前より度々の鎮静之砌もいつも先掛いたし候者之由。則右池田屋に真一番に切入候処、深手を負ひ、半死半生にて、しかしいまた存命の由御座候。兼て魁先生と被呼候程之者の由」。

誰よりも先に、いつも一番に相手に立ち向かって行く。「魁先生」の渾名は、すでに広く聞こえていたのだ。十七歳と年齢を誤っているのは、意気盛んにして、多少無茶に感じられることもあった故か。また「四天王」の呼称も、池田屋討ち入りの時を思えば、まさにそうといえるだろう。



藤堂平助が重傷を負った池田屋内部（古写真）

会津藩からは、この池田屋事件後、直ちに医師が派遣された。また、褒賞金として新選組に対し五百両が下され、負傷者には別に薬種料二十両が出されている。八月に入って幕府からも褒賞金が出され、藤堂は十両と別段金十両の計二十両を受けた。この褒賞額を得たのは、沖田、永倉のほか三名であるから、藤堂のこの夜の働きは、充分に評価されたといえる。

■再会、そして変遷

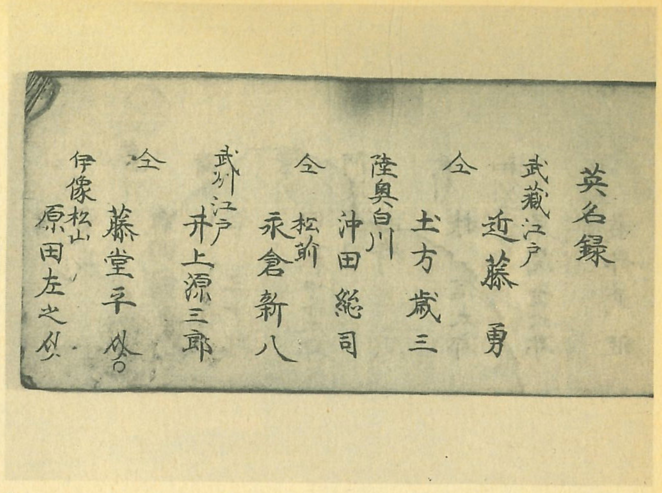
池田屋事件後の七月十九日、禁門の変が起こった。この戦いの様子を記した永倉新八の諸記録には、藤堂の名前が見える。ひと月半ほどの療養で、戦闘に加われるまでに回復していたのだろうか。二十一日、山崎・天王山に立て籠もる真木和泉らへの追討に際し、新選組ではまたも隊を二分し、近藤隊と土方隊の二隊に分かれた。藤堂は原田、井上（近藤隊ともある）とともに土方の隊に属し、天王山下に陣したという。復帰できたとしても、まだ山を攻め上るまでは無理だったのだ。魁先生としては、悔しい思いだったに違いない。

九月に入り近藤勇が、永倉新八、武田観柳斎、尾形俊太郎を伴って東下した。これより先、藤堂は隊士募集の命を受けて江戸に入っていた。が、いつ京を出立したのか、その時期は不明である。まだ完全ではなかった額の傷の療養も、兼ねていたのかもしれない。

江戸に戻った藤堂は、とある人物を訪ねて、深川佐賀町の北辰一刀流道場に足を運んだ。この頃はまだ伊東大蔵といっていた後の伊東甲子太郎である。藤堂と伊東は親しく旧知の間柄であったという。剣流派は同じ北辰一刀流。新たに入隊者を募るとなって、藤堂は先輩といっていい伊東の新選組への参加を考えた。そこで、彼に会って入隊を勧める。藤堂は伊東の「寄り弟子」であったという話もあるから、師弟関係にあったともいえる。

伊東は藤堂の勧誘に合って、試衛館道場で近藤に面会した。藤堂を介して近藤も伊東も、互いの主義思想を含めたおよその履歴を知り得ていたのだろう。伊東は新選組への加盟を承諾し、実弟の三木三郎、篠原泰之進ら同志とともに上洛することになった。

元治元年十月十五日、近藤らは伊東と彼の同志ほか、新入隊士十数名とともに再び京へと出立した。しかし藤堂は、引き続き入隊希望者を



『英名録』に見える藤堂平助

募るため一人残る。彼の江戸出張は、九カ月程にも及ぶことになるのだが、あるいはほかにも何か、任務があったのではないか。この間の彼の事績は、今のところ明らかになっていない。藤堂が京の新選組に還って来るのは、慶応元年に入ってからである。

その年四月になって、土方歳三が伊東甲子太郎、斎藤一とともに隊士募集のために東下して来た。この時の新入隊士は五十余名にもなり、これには前年よりの藤堂の働きが大きかったといえる。四月二十七日、藤堂は土方らと新入隊士を伴い、江戸を出立した。五月九日には草津本陣に宿泊。「大福帳」に藤堂平助の名前が残っている。そして翌日、京に着いた。だが、藤堂が戻った先は壬生ではなかった。

この年の春に、新選組は壬生村から、西本願寺内の北集会所などに屯所を移した。この事を、もちろん藤堂は承知していた。しかし、藤堂が京を離れている間、違ってしまったことはほかにもある。そして、これだけは納得しがたかった。新屯所に山南敬助の顔を見出せなかったことである。

山南は二月に切腹となり、亡くなっていた。藤堂にとって山南も北辰一刀流を修めた、言わば先輩であった。山南の死を彼はいつ、どこで知ったのか。江戸から京への道中で、土方が話したか。山南切腹の詳しい経緯を、どこまで藤堂は知り得ただろう。その辺りは伊東に聞かされていたのかもしれない。

新選組では新たに組織の編成が行われ、藤堂は八番組の組長となった。また、長州征討に備えて作られた『行軍録』では、七番隊組長・谷三十郎とともに、大銃頭とされている。新編成の新選組にあって、藤堂も気持ち新たに隊務と取り組んだのであろうが、慶応元年の秋頃から慶応三年の春に至るまでの期間、彼の活躍を伝えるものはない。

■新選組との決別

慶応三年（一八六七）三月に入り、伊東甲子太郎が新選組からの分離を求めた。これに従って藤堂も、伊東と篠原ら同志とともに孝明天皇の御陵衛士（ごりょうえじ）を拝命し、新選組を離脱する。この分離において、伊東は近藤に「藤堂平助はぜひともやってもらいたい」と述べたという。藤堂と伊東は同流の知己以上に師弟の関係であったろうし、何よりも伊東の説く勤王論に共鳴していたのだろう。新選組の中にあっては、主義と行動が伴わない。続く隊内粛正に、懐疑的になっていたともいえる。

新選組の屯所を出た伊東らは、二十日にまず三条の城安寺に入り、翌二十一日、五条橋東の善立寺に移った。この分離の時に藤堂は美濃へ出張していて、後日伊東らと合流したという。そして、六月になって東山にある高台寺の塔頭・月真院に、禁裏御陵衛士屯所を移した。ゆえに彼らは後に「高台寺党」と呼ばれることになった。

八月八日、藤堂は、伊東、斎藤一、三木三郎とともに、柳原前光らに建白書を提出。また、『新撰組始末記』に「美濃国ノ博徒（ばくと）水野弥太郎ニ結ビ、農兵数百人号令次第差出ス約ヲ堅メ、」とある。衛士となった藤堂の活動は、その他同書に、伊東に付いて十一月十五日、近江屋に坂本龍馬、中岡慎太郎を訪ねたとの話を見出せるのみである。

そして、十一月十八日、事件は起こった。近藤勇の妾宅へ招かれた伊東が、その夜の帰り道、七条油小路の近くで襲われた。この報を月真院で受けた藤堂は、そこに居た同志の篠原ら七人（八人とも）と駕籠（かご）を伴い、その場へ駆けつける。と、七条油小路の辻に横たわる伊東には、すでに息が無かった。伊東の遺骸を駕籠に乗せ運ぼうとするが、遺体の足がまた外へと出る。藤堂が中へ入れようと屈んだ時、声を発して闇から躍り出た者たちがあった。「藤堂平助サツシタリト一番ニ抜合テ切結ブ」（『新撰組始末記』）。斬り掛かって来たのは、新選組であった。その数、十七人とも三十五、六人とも伝わる。そして、この闘いを「油小路の変」と呼ぶ。

戒光寺の藤堂平助の墓

新選組の包囲から必死の脱出を試みる衛士らのうち、藤堂、毛内有之助、服部武雄の三名だけが、その場に踏み留まった。藤堂は四方から攻撃を受ける。永倉新八は近藤から「まだ若い有為の材であるから、できるならば助けておきたい」といわれていたのでやりすごしたが、藤堂に恩ある身の三浦常三郎という隊士が、後ろから袈裟（けさ）掛けに斬りつけた。藤堂は振り向きざまに三浦の両膝を払ったという。別の記録には、藤堂は駕籠の垂れを引き下ろしていたところ、背中を斬られ、振り向いたのを、額から鼻にかけて顔面を斬り込まれたとある。そして、これが致命傷になった。

こうして藤堂はかつての同志の剣に斃れた。続いて毛内と服部も討ち死にした。彼ら三人の遺体検分書を載せる『鳥取藩慶応丁卯筆記（とっとりはんけいおうていぼうひっき）』には「七条油小路南西手に倒居候ものは、

南部与七郎　弐拾八九才位
疵所両足　横腹二カ所　面
上鼻より口へ掛深さ二寸程、
長さ七寸斗り、刀を握り候
儘果居候」と記されている。

南部与七郎という名は、御陵衛士拝命後の藤堂の別名である。

彼ら三人の遺体は、その場に二日間も放置され、二十日の夜になって新選組が引き取り、光縁寺に埋葬された。

同寺の過去帳『往詣記（おうげいき）』に「藤堂平助宜虎」の記載がある。

翌慶応四年（一八六八）三月十三日、元御陵衛士らによって、藤堂らの遺骸は泉涌寺（せんにゅうじ）塔頭・戒光寺（かいこうじ）墓地に改葬され、明治二年（一八六九）十一月、墓碑が建立された。

『近世殉難一人一首伝』（城兼文編）には、

ことばたがはじ大君のため
益荒雄（ますらお）の七世をかけて誓ひてし

と、藤堂の和歌が載せられている。

「藤堂平助は小兵でございますけれども、中々剣術は能く使いまして又文字もございます」と、元御陵衛士の阿部隆明（十郎）は『史談会速記録』の中で評している。文字というのは、学問という意味である。小山正武も同記録で次のように語った。「藤堂平助も亦有名の智勇共に衆に秀でたる人にして、（中略）伊東の左右の手と為りたる人士也という」。

藤堂平助は、ただ剣のみの人ではなかった。その文武の師は伊東でもあり、それ故に主義も持ち、伊東も側に置いたのである。

「魁先生」は、その若き情熱を走り生きた。

戒光寺墓碑には、次のように刻まれている。

「東武之人武明没之日於同所戦死
藤堂平助藤原宜虎
年　二十四」

芹沢　鴨

結喜しはや

暗殺された豪胆粗暴な局長の熱き志

■水戸から江戸、そして京へ

常陸国水戸芹沢村。その地にかつてあった芹沢城。その城主の裔になる芹沢貞幹の三男として生まれたのが、本名を芹沢光幹という芹沢鴨である。幼名は龍寿といった。一説には龍寿は、貞幹の次男・成幹の子で早世しているので、別人とするものもある。また、本名を下村継次と記し、木村継次とするものもある。出生の年は、上洛時の記録に「水府浪人」で、年齢「三十二歳」とあるので、これによれば天保三年（一八三二）生まれとなるが、他にも三十四歳、三十八歳と記されたものがあり、定かではない。水戸藩の勤王家、武田耕雲斎に師事して、天狗党に入り、江戸に出た後には、神道無念流・戸ケ崎熊太郎の門人になり、免許皆伝を受けた。

文久三年（一八六三）に入り、芹沢鴨は幕府募集の浪士組に参加。二月八日、同志の新見錦、平山五郎、平間重助、野口健司とともに、京の地を目指して、江戸の伝通院を出立した。この上洛にあたり芹沢は三番組小頭となっている。彼の組の中には、道中先番宿割の任を得た近藤勇以外の土方歳三、沖田総司らがおり、この時が、彼ら試衛館からの参加者との出会いといえよう。

江戸を出立した芹沢鴨は、翌日二月九日の本庄宿で、大篝火を焚くという事件を起こしている。ところが、この話は永倉新八の『新撰組顚末記』にしかなく、今ひとつ判然としていない。しかしこの後、芹沢は小頭より降格。代って近藤勇が後任となり、改めて取締役附を申し渡されているところを考えれば、何かしら揉め事を起こしていたのかもしれない。

浪士組は二月二十三日、京に着き壬生村に入った。彼らは将軍家茂の上洛に伴う警護が目的であったが、浪士募集の献策をした清河八郎は、ここ入洛となって反幕を表明。慌てた幕府側は、朝廷からの形として浪士組一行に東帰を命令する。水戸出身の芹沢は、元より尊王攘夷思想の士であったが、自らの同志と、この頃、壬生村・八木源之丞家で宿を同じくしていた近藤勇らとともに京に残留することを希望し、会津藩に嘆願書を提出した。彼らの意向は聞き届けられ、三月十五日、正式の会津藩御預かりとなった。ここに壬生浪士組としての芹沢鴨が、始まるのである。

■壬生浪士組での事件と風評

壬生浪士組ができたといっても、組としての資金と呼べるものが充実しているはずもない。大坂へ下った折りには潤沢な商人のもとへ借用に行った。強引な金策でもある。平野屋に百両、加嶋屋に三十両、鴻池に二百三十両を出させた。残る借用書には近藤勇の名もあるが、押し借りまがいのやり方をしたと伝わるのは、芹沢鴨だけである。ダンダラ羽織と俗称される隊服は、平野屋からの百両で作られたと見られている。ならば芹沢の金策が、壬生浪士組の存在表明に貢献していなくはない。

組織としての形も徐々に整うと、芹沢は近藤とともに「局長」の任に就いた。一説には芹沢を「巨魁隊長」と称したものもあるので、近藤より上位にあったといえるだろう。芹沢は色白で背が高く、恰幅の良い人物で、八木家に葬儀のあった時、立派に帳場を務めたという。が、一方、何か気に食わぬ事があると、鉄扇を振りかざしての乱暴になり、大坂で力士相手の乱闘や島原の角屋を七日間の営業停止処分にしたりした。朝から酒の臭いをさせていて、酒乱であったというのは、今でいうアルコール依存症か。最近では、力士との乱闘に発展する経緯に相違が見られる史料の発見など、これまでの見方を改める必要も出てきたが、こればかりは過激すぎた。八月十二日の大和屋焼き討ちである。同じ日、壬生で相撲興行をしていた近藤らに対することとしても、芹沢の主張はあまりに極端な形であり、会津藩をして芹沢排斥を決断させた。

粗暴な芹沢の行いが、大胆という表現で伝わるのが、八月十八日の禁門の政変の時である。まだ認知度の低かった壬生浪士組は、見張番所で見咎められてしまう。芹沢の顔先へ槍を差し出し詰め寄る相手に、しかし、芹沢は、その槍の穂先を扇で煽ぎ立てた。烏帽子を被り、小具足を付け、鉄扇を持った出立ちの芹沢は、その剛胆な振る舞いで、壬生浪士組を確かに印象づけた。記録にはこの日、武家伝奏より「新選組」の隊名が下されたとある。けれど、それを後日とする説もあり、そうであれば、芹沢鴨は、壬生浪士のままで在ったことになる。

■九月の一夜に散った志

その夜は、島原の角屋で会合が開かれ、その後、宴会になった。芹沢はかなり飲んで、途中、平山五郎と平間重助を連れ、壬生の屯所に帰った。この頃は隊士も増えて屯所は八木邸だけでなく、前川荘司邸をも使い、近藤の一行はそちらへ移っていたが、芹沢たちは変わりなく八木邸にいた。そこには各々の愛妾――芹沢には、元は太物問屋菱屋の妾だったうめ、平山には桔梗屋の吉栄（一説では小栄）、平間には輪違屋の糸里が待っていた。芹沢と平山は、式台から入った奥座敷に屏風を立て、平間は式台を上がった左の部屋に、それぞれの愛妾と床についた。

芹沢鴨の墓（壬生寺）

そして、芹沢鴨はこの就寝中、何者かに襲われ、その刃に斃れた。芹沢はその時、起き上がって反撃し、縁側を隣室まで逃れたが叶わず、そこで絶命した。愛妾うめも巻き添えに合い、平山もその場で惨殺された。別室の平間と糸里、そして小用に立っていた吉栄は難を逃れる。平間はこの後、姿を消した。今もこの時の刀疵が、八木邸の鴨居や柱に残っている。

芹沢暗殺は、会津藩の密命によって近藤派が動き、土方、沖田などが行ったとされているが、実行した人物は、確定されていない。またこの日は、九月十八日で雨の激しい夜だったというが、当時、壬生の近くに住んでいた高木在中の記した日記には、この十八日は「晴天」で、夜も晴れており、雨が降ったのは、十六日のこととある。別の記録にも同様の記載が見られるので、これまで芹沢が暗殺されたのは、九月十八日とされてきたが、今では十六日と見る向きが強い。

芹沢と平山の死から二日後、二人の葬儀が行われ、遺体は壬生寺南門の筋向かいにある壬生村墓地に埋葬された。現在、壬生寺内にある墓碑は、建て替えられた二度目のものである。尚、芹沢派と見られている新見錦は、芹沢暗殺の数日前に、祇園の貸座敷山緒で詰め腹を切らされ、野口健司も十二月になって切腹させられた。芹沢鴨の同志は、誰ひとり、新選組に留まることはなかったのである。

ここに一つの和歌がある。「いざさらば　われも波間にこぎ出でて　あめりか船をうちや払はん」というものだが、これを芹沢鴨は、自分が江戸にいる時に詠んだものだといって、酒を飲むと手拍子をとって唄ったという。この和歌を土方歳三が、郷里の知人への手紙の中に書いている。おそらく、宴席では、芹沢と近藤の両派が交え、唄っていたこともあったのだろう。志熱きことは、芹沢鴨も近藤勇も同じであった。しかし、考えは当初から一致を見るに難しかったようである。尊王攘夷といっても、近藤は幕府側に立ち、芹沢は朝廷寄りであったという。先の歌は、実は水戸藩の前藩主・徳川斉昭が詠んだ和歌であった。水戸出身の芹沢は、このことを知っていたのだろう。彼の心情といっていい。

芹沢鴨もまた、志士の一人であった。

新見 錦

伊東 成郎

謎に包まれた新選組創設時の幹部！

●新選組草創期の記録をたどる

新見錦。変名らしさも漂う名前を持つ人物である。新選組の創設に関わった近藤、芹沢派の幹部隊士中、もっとも謎に包まれたひとりでもある。その墓さえも伝わらない。

新見は天保七年に出生した。生家や父親も不明で、出自は、ただ水戸浪士とのみ伝えられる。剣については、神道無念流を岡田助右衛門に学び、免許皆伝者だと子母沢寛の『新選組始末記』にあるが、根拠は未詳である。

いつの頃からか、新見は常陸国玉造出身の郷士、芹沢鴨と厚宜を結ぶようになったらしい。そして芹沢とともに、かずかずの尊皇攘夷活動に邁進したものと思われる。

文久三年二月、新見は芹沢らと浪士隊に応募した。将軍家茂の上洛に向け、京都の治安維持活動のために集められた浪士団である。

新見はここで三番隊の小頭役を拝命した。一隊十名からなる小隊の長である。組下には、のちに新選組創設者となる井上源三郎はじめ、近藤勇と関係の深い武州出身者が数名いた。

ちなみに新見の盟友芹沢の、このときの所属と地位は、六番隊小頭役だった。芹沢隊には、芹沢と同郷の玉造村出身の平間重助はじめ、平山五郎、野口健司ら、のちに芹沢派幹部となるメンバーが在籍、さらに土方歳三や沖田総司ら、近藤派のメンバーもひしめいていた。

おそらく浪士隊の組編成の際、それまで面識のなかった二つのグループは、ある種の配慮により、適宜ふたつの隊に割り振られたものと思われる。この意図的な偶然が、その後京都で、新選組の結成を招くこととなった。

浪士隊は二月二十三日に着京する。そしてその提唱者だった清川八郎が、隊を攘夷活動の手兵として、再び東帰させようとしたため、新見は芹沢や近藤らと隊を離脱する。彼らは京都守護を任務とする会津藩を頼った。

三月十五日、新見は京都残留同志たちと、会津藩邸に挨拶に赴いた。公式文書である『会津藩庁記録』に記された挨拶者名のなかで、新見は芹沢に次ぐ二番目に記載されている。また、同二十二日、彼らは老中板倉勝静に建白書を提出するが、ここで新見の名は、芹沢、近藤に次ぐ三番目にある。さらに同二十五日、壬生屯所を数名の会津藩士が訪ね、一行と面談している。その日の記録には、新見の名は近藤や芹沢らに次いで、四番目にある。

短期間に集中した同時代記録は、草創期の新選組のなかで新見錦が、明らかに首座ともいえる位置にいたことを示している。

四月二日、西下中だった井上源三郎の兄・松五郎はその日の日記に、大坂で新見ら七名の隊士と会い、ともに船で京都へ戻ったと書いている。この大坂出張は、今橋の豪商・平野屋を訪れ、隊服を作成する資金の百両を金策するものだった。平野屋を訪れた沖田総司や土方歳三ら四名の隊士は、借用証文とともに、一通の口上書を平野屋にわたしている。それは、もしお宅へ金子無心の浪士が来たときは、至急壬生屯所へ届ければ、捜索の人数を派遣するとした文書である。同工異曲の行動をとっている彼らとしては、はなはだ厚かましい口上書でもあるが、その末尾には、順に三名の名が記されている。

京都壬生役　浪士
親見（ママ）　錦
近藤　勇
芹沢　鴨
（『風窓記聞』）

彼ら三名はこのとき大坂を訪れながら、平野屋へ顔を出してはいない。自らを上位者として、直接行動を沖田らに委ねたのである。この際、新見とともに記された両名は、いずれも新選組の局長となっている。

このあと四月十六日に、新選組総員が会津藩邸で松平容保に拝謁し、その武術の稽古を上覧したということがあった。この栄えある行事の際にも、新見は、近藤、芹沢とともに、直接竹刀をとってはいない。

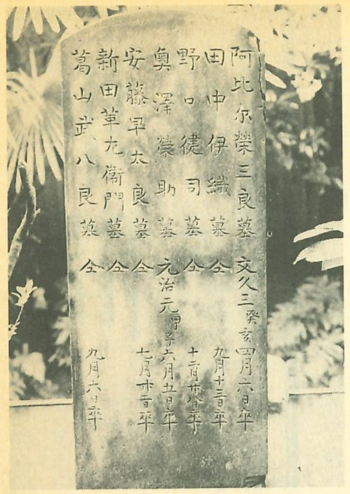
おそらく新見は新選組が組織を固める前のごく初期、局長格の位置にいたと見てもいい。しかしそれは一時のものだった。

容保上覧の直後、新選組は正式に組織を整備した。生き残り幹部の永倉新八が記憶鮮明な明治前期に残した記録を用い、史家の松村巌が明治三十六年に著わした『近藤勇』は

芹沢、近藤の二人を以て隊長となし、新見、山南、土方の三人を隊長副となし……

と明記している。

新見は副長職にいた。人数的に近藤派に劣る芹沢派にとって、それは納得せざるを得ない派閥人事でもあった。もっともその代替として、芹沢はこのとき自派腹心の平間重助を、単独で金庫番の勘定方の地位に付けている。



田中伊織の墓（壬生寺）

●平野屋事件以後の消息は不明

しかし、新見のその後の確実な消息が、今日まったく伝わらない。平野屋事件以後、新見の名を記した同時代文書が現在まで発掘されていないのである。今日残されている五月二十五日に作成された新選組名簿には、その名前すらも落ちている。

新見を芹沢が頻発した粗暴行為に同行したとする小説類も多い。だが、新選組副長としての新見の活動を確定する同時代文書が出てこない以上、憶測は避けねばならないだろう。

新見の死は、芹沢暗殺の直前に突然訪れた。前記『近藤勇』が紹介する、永倉による新見抹殺の経緯は次のようになっている。

新見また数々法を犯し、近藤、土方などついに逼て新見をして自殺せしむ。

同書は新見が犯したとする法、つまり隊規についても紹介しているが、永倉の話や記録を直接参考にしたはずの松村巌は、ここに新選組の「軍中法度」を記すというミスをおかしている。この「軍中法度」は、元治元年十一月に、長州出兵に備えての戦場訓として新選組が作成したものであり、新見の存命中には実在しない。また、いわゆる「局中法度」は慶応元年の制定と考えられており、これもまた、新見に適用される可能性は薄い。

また永倉の「同志連名記」は、新見が祇園の貸座敷・山緒（やまのお）で切腹したと伝えている。永倉の記録には疑問の残るものもあるが、新見の最期は、結局、その遺聞に頼るほかない。

あくまで推定の域はでないが、新見は芹沢鴨排斥の一環として、近藤派によって、遊興中に処断されたと考えられる。理由はささやかなものだったに違いない。

新選組本の古典に、西本願寺寺侍の西村兼文が明治二十三年に著した『新撰組始末記』がある。新選組研究に必須のこの書に、新見の名はまったく登場しない。そしてその代役でもあるかのように、著者の西村はある隊士を登場させる。その名を田中伊織という。

西村は、田中を新選組創設者の一人と明記して、さらに死因を「近藤の意に応ぜざる事のあるをにくみ、闇殺す」とのみ記述する。

田中伊織の墓は、今日も壬生に残っている。そして、その死亡日は文久三年九月十三日と刻まれている。同じ墓石には芹沢派幹部であり、のちに処断された野口健司の名もある。

近藤派と対極にいた隊創設者で、九月十六日とも十八日ともいう芹沢暗殺直前に没した田中伊織。それは新見本人だったに違いない。

唯一、田中伊織の名がある文久三年八月ごろの新選組総員名簿にも、新見の名はない。ある日から、新見錦は田中伊織を名乗ったのである。その理由はわからない。あるいはそれが新見の本名だったのかもしれない。

上洛後わずか半年で、時代の波間に痕跡も残さずに沈んだ新選組副長・新見錦。謎は深い闇のなかにある。

〈付記〉平野屋宛の口上書に、新見錦は「親見」と署名している。おそらくその名前は「にいみ・にしき」ではなく、「しんみ・にしき」と読まれたものと思われる。

平間 重助

清水 隆

遁走した副長助勤のその後の消息…

⊙筆頭局長の腹心

平間重助は、筆頭局長芹沢鴨の腹心である。郷里も芹沢と同じ水戸藩領・常陸国行方郡芹沢村（現・茨城県行方郡玉造町芹沢）であった。芹沢村は、天正十九年（一五九一）佐竹義宣に支配されるまで芹沢氏の居城が置かれたところで、旧臣平間筑前、平間小斎一の名にちなむ「筑前」「コサイ内」などの小字が今も残っている。重助の生家は平間筑前の後裔と称し、本姓は平、家紋は九曜を用いている。父は平間勘右衛門といった。

重助の年齢は、彼が後年加わった浪士組の名簿数種を見ると、いずれも「四十歳」と記されており、これから逆算すれば、文政七年（一八二四）申年の生まれである。重助について書かれた本の中に、勘右衛門の三男とか、兄に清助、久助、弟に正治がいた、とするものがあるが、平間家で所蔵する久助の戸籍には「平間勘右衛門二男・天保四年八月七日生」とある。この記載が正しいとすれば、九歳年下の久助が兄であるはずはない。清助という人の存在は確認できないが、むしろ重助を長男と考えるべきであろう。弟久助は嘉永二年十二月二十七日、十七歳で、隣家の平間幸吉・みよ夫婦の養子となり、大正元年十月十日に死亡した。平間家の墓誌、位牌いずれにも八十歳と記され、戸籍の年齢と一致している。

天保五年（一八三四）三月十七日、水戸藩主徳川斉昭が領内巡視の途次芹沢村を訪れたが、このとき重助は十一歳の少年であった。これより十年後の天保十五年三月二十二日、水戸郊外千波原で斉昭が軍事訓練を行なったとき、重助も芹沢鴨の父芹沢貞幹に従い、家老山野辺兵庫の率いる荷駄隊の一員として参加した。こうした体験に、若き重助が心理的影響を受けたであろうことは、容易に想像できる。

ところで、新選組生き残り永倉新八晩年の遺稿に、重助について「常陸國水戸脱藩、剣術神道無念流下村継次門人目録、新撰組副長助勤平間重助」と記したものがある。これによれば重助の剣術の師は、下村継次である。同じ永倉の遺稿で芹沢鴨を見ると、「下村継次改」と書かれてある。したがって下村継次と芹沢鴨は同一人物ということになる。下村継次は、安政六年（一八五九）以来、尊攘運動に身を投じ、のち下獄して斬罪梟首となるべきところを、文久三年（一八六三）正月、大赦の発令によって出獄したという人物。この下村に、重助が何処で剣術を学んだかは、わかっていない。

折しも攘夷の勅旨を奉じて上洛する将軍の先供として、幕府による尽忠報国の浪士募集が発表された。永倉の話によれば、下村は郷里芹沢村に帰り、両親・妻子に逢って勤王の事に尽くす決心を告げ、名を芹沢鴨と改め、かつての同志である新見錦、野口健司、平山五郎、平間重助などと江戸へ出発し、山岡鉄太郎を訪れたという。誘われた重助にも妻子があったが、報国の念押さえがたく、郷里をあとにしたものと思われる。あるいは心中、師と仰ぐ芹沢鴨に賭けるものがあったのかも知れない。いずれにせよ、歴史の傍観者として、このまま世を終わりたくないという重助の強い意志が働いていたことに違いはない。

⊙京洛の日々

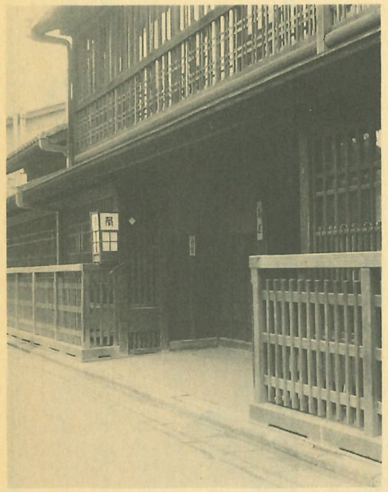
二月八日、重助は浪士組二百三十余名の一員となって、三番組の小頭となった芹沢に従い、中山道を上洛の途についた。途中芹沢が小頭を退任する事件や六番組への組替えなどがあったが、二十三日無事京都に着いた。

浪士組は、清河八郎の策動により鷹司関白の命を受けて三月十三日江戸へ戻るが、重助は芹沢や宿所を同じくする近藤勇一派とこれに反対して京に残り、京都守護職・松平容保の御預かりとなった。将軍家茂は三月四日に上洛したが、二十三日に東帰すると聞いた重助は、その前日これを諌止する建白書に名を連ね、芹沢らと在京の老中板倉周防守に提出した。四月八日には、宿所の八木邸で行なわれた当主源之丞の長女なつの葬儀に出席している。

四月二十日、将軍は五月十日をもって攘夷の期限とすることを朝廷に奏上したが、期限より十日を過ぎても攘夷は実行できなかった。尊王攘夷の先鋒となる志願で上洛した重助らは、外国との鎖港談判が延引すれば違勅のそしりを逃れず、公武離隔の姿になると心配した。二十五日重助らは芹沢を筆頭に建白書に連署し、自分たちを夷人拒絶応接の上使に仰せ付けられるよう、御所学習院、板倉周防守、松平容保へ働きかけた。八月十八日、御所に政変があり、芹沢、近藤以下浪士一同は、御所警備のため出動した。だんだら染めの隊服を着た重助の姿も、この中にあったはずである。このころ重助は、副長助勤・勘定方の役職にあった。彼が勘定方の職に就いた理由は、「自派にとって資金面で都合がよい」と考えた局長芹沢の意向というよりも、重助は剣戟より経済の方に才能があったからと考えられる。事実、彼の事蹟に剣戟の場面は見られない。

⊙雨夜の惨劇

芹沢は酒に酔っていない日はなかったと伝えられるが、一向に攘夷を断行しない幕府に対する苛立ちを、酒に紛らせていたとも受け取れる。これより先八月十二日、金談に応じなかった葭屋町一条の生糸問屋大和屋庄兵衛方の焼き討ち事件により、身を滅ぼすことになった。なお重助が、この事件に関わったとする史料はない。松平容保は密かに近藤らを招き、芹沢の処置を命じた。すでに祇園において、芹沢の右腕新見錦に詰腹を切らせた近藤一派は、島原遊廓角屋で組の大宴会が開かれた九月十六日夜、芹沢の暗殺を決行した。



大宴会が開かれた角屋

普段からあまり深酒をしない重助は、雨の降り頻る中、大酔した芹沢と平山五郎を介抱しながら、駕籠を連ねて夜十時ごろ八木邸へ戻った。帰ってきても平山は玄関で倒れたまま起き上がることもできないので、重助は八木家の下男たちに手伝わせ、寝所へ運んだ。重助には島原の輪違屋に絲里という馴染みの美妓があり、この夜も先に八木邸に来て玄関脇の小部屋で彼を待っていた。芹沢は待っていた妾お梅、平山もあとからやってきた桔梗屋の吉栄（一説に小栄）と、奥の十畳間で床に入った。

夜半、寝静まったのを確かめた刺客たちは激しい勢いで芹沢たちの寝所へ飛び込み、瞬くうちに芹沢、平山、お梅の三人を殺害して去った。重助は刺客たちが去ったあと、下帯一つの姿で抜き身を下げ「何処へ行った！」と大声で叫びながら家の中を走り回っていたが、やがて自分の荷物をまとめて遁走した。刺客が何者であるかを悟ったためである。

芹沢鴨の生家子孫芹沢雄二氏が旧制中学のころ、近所に住む小曽根豊吉翁（昭和三十二年七十七歳で物故）から聞いたとして筆者に話してくださったところによれば、重助は郷里に帰って来たという。そして「夜、小便に起きたら刀が光ったのが見えた。恐ろしくなって雨の中を飛び出して逃げたが、旦那は死んだっぺ」と語っていたそうである。芹沢のことを「旦那」と言っているのがおもしろい。

その後の重助の消息は、杳として知れない。ただ、昭和五年発行の『史外史譚・剣豪秘話』（流泉小史著）によれば、真偽不明ながらも、明治二十三年の旧暦九月四日（新暦十月十七日）、岩手県農蚕巡回教師として訪れた同県江刺郡米里村（江刺市米里）で脳溢血のため倒れ、病むこと二日で亡くなったとある。また、重助の息子は、茨城県鹿島郡秋山村（鉾田町秋山）に養子に行き、さらに那珂郡湊町（那珂湊市）に移住して生を終えたとも伝えられる。

〔付記〕拙文を編むにあたり、平間家、芹沢家、玉造町役場高埜栄治氏に、ご協力を賜りました。

平山 五郎

山村 竜也

粛清された神道無念流免許皆伝の腕

◆芹沢鴨との出会いは……

芹沢鴨の配下のうち、芹沢がもっとも頼りにしていたと思われるのが平山五郎だった。

文久三年（一八六三）二月の浪士組の上洛名簿に三十五歳とあるから、生まれたのは文政十二年（一八二九）ということになる。出身藩は、永倉新八が水戸とも姫路とも書き、西村兼文の『壬生浪士始末記』や、会津藩士本多四郎の『世話集聞記』では加賀とされているので、正確なところはわからない。可能性が高いのは加賀ということになるだろうか。

剣術は、斎藤弥九郎に神道無念流を学んだ。斎藤弥九郎の練兵館は、千葉周作の玄武館、桃井春蔵の士学館とともに、江戸三大道場と呼ばれていた。そんな江戸を代表する名門の出身だったのだ。

この練兵館で平山は剣術修行に励み、免許皆伝を受けたという。それ以外に修行時代のことは伝わっていないが、一点だけ、安政六年（一八五九）五月、三十一歳のときに、横浜戸塚の直心流萩原連之助の道場を訪れた記録が残されている。この萩原道場には、近藤勇もやってきた記録があり、各地の剣客たちとの手合わせを積極的に引き受けていたことがわかる。

その後の平山の行動については、よくわかっていない。いつのころか芹沢鴨と知り合ったようだが、あるいは、きっかけは剣術にあったのかもしれない。芹沢が学んだのは戸ヶ崎熊太郎という剣豪で、平山とは師匠こそ違うが、流派の同門は強い仲間意識で結ばれているという。平山と芹沢も、おそらくそんな関係であったのだろう。

永倉新八は、『新撰組顛末記』のなかで、新見錦、野口健司、平山五郎、平間重助の四人が芹沢の水戸天狗党における同志であったとしているが、平山以外の三人は水戸人であるので、うなずけないこともない。

しかし、他藩人であるらしい平山の場合はどうだろうか。天狗党というのは、水戸藩内の尊王攘夷派であり、そこに他藩人が入り込む余地はない。平山のみは、芹沢と江戸で知り合ったものとみるべきだろう。

◆凄みのある風貌

文久三年（一八六三）二月八日、平山の姿は、芹沢、新見、野口、平間とともに、小石川の伝通院にあった。近く上洛する将軍徳川家茂の身辺警護のためとして、幕府が募集した浪士組に参加したのだ。伝通院の境内で、彼らが鹿皮の割羽織を着けて気勢をあげているさまは、集まった浪士たちのなかでもひときわ目立っていたという。

同月二十三日に京都に到着した彼らは、清河八郎の裏切りによる江戸帰還命令に反対し、京都に残って新選組を結成する。局長（隊長）となったのは芹沢と近藤の二人で、平山は副長助勤の幹部職についた。以後、隊は芹沢派と近藤派の協調体制のなかで運営されていく。

新選組の屯所となったのは、洛西壬生村の八木源之丞方で、やがて隊士が増えるにつれて、向かい側の前川荘司方も占拠するようになった。八木家の為三郎少年は、自分の接した隊士たちのことをのちに語り残しているが、平山についても興味深い証言が残されている。

「芹沢の子分だった平山五郎は水戸藩の者ですが、まだ二十四歳だという話でした。左の方の目がつぶれていて目っかちです。なんでも、国で花火をこしらえているときに爆発して、こうなったとのことですが――」

出身地や年齢については誤っているようだが、左目が不自由であったという身体的特徴が語られていて、きわめて貴重な証言となっている。

まさか以前は花火職人であったというわけではないだろうから、素人の平山が火薬の調合に失敗して暴発させてしまったのだろうか。そのおかげで、剣客としても押しのきく、凄みのある風貌となっていたようだ。

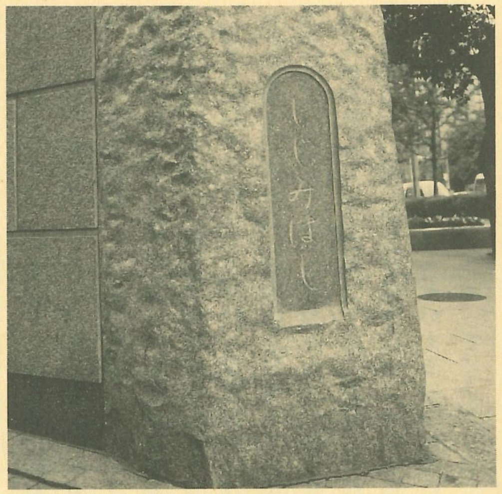
八木為三郎の談話は、こう続けられている。

「それがおかしいことに、剣術の稽古をするときに、このつぶれている左の目のほうから打ち込んでいくと、きっと、これを受け止めてものすごく切り返してくる。それが稲妻のように早いので、たいていの人はあべこべに打たれてしまうということでした。開いている右の目のほうから打ち込むと、割にすきがある、妙なものだと、隊士はよく話していました」

自分の障害を突いてくるような敵には、過剰なまでに反応したということだろう。心情的には理解できるものの、その反撃の剣の鋭さはさすがといっていい。これが神道無念流免許皆伝の実力なのか。

そもそも、片目が見えないということは、遠近感がつかめないため、剣客にとってはかなりのハンディとなるはずだ。平山が障害を負ったのが、剣術修行の前か後かははっきりしないが、故郷にいるときに負傷したというのが本当なら、江戸の練兵館での修行よりも以前のことになる。

とすれば、遠近感がつかめず、視界も狭いハンディを背負いながら、卓越した実力を身につけたということだ。才能に恵まれていたのか、人並み以上の努力をしたのか。おそらくは後者であったのだろう。



大坂力士と乱闘の場所となった蜆橋跡

ちなみに、隊士のなかに山野八十八という若者がいて、この人物だけは平山の剣技を凌駕していたという。左目のほうから攻めると、どんな名人でも打ち込めないといわれた平山を、山野は十本のうち六本はみごとに取った。平山も、これには不思議がり、

「どうもおかしい、山野は不思議な剣術だ」

と首をひねったものだった。剣にも相性のようなものがあるのだろう。

◆大坂力士との乱闘で負傷

この平山が、新選組在隊中に、実戦で剣をふるったことが一回だけあった。文久三年六月三日に起きた大坂力士との乱闘事件のときだ。

ただし、このときは自慢の剣技は冴えをみせず、逆に力士の持つ樫の八角棒で打撃されてしまった。打たれたのは頭とも胸ともいうが、油断をしていたのだろうか。この日は沖田総司も負傷しているので、力士のふるう棒は意外と鋭い武器であったのかもしれない。

このあと、数日間大坂に滞在した彼らは、六月十日、井上源三郎の兄で八王子千人同心の井上松五郎が江戸に帰るにあたっての送別会を開いている。平山ら芹沢派の者も仲良く出席しており、まだこのころは近藤派と芹沢派の対立が表立ったものではなかったことがわかる。

しかし、八月十二日深夜から行われた生糸商大和屋庄兵衛方の焼き打ち事件をきっかけに、両派の対立は決定的なものとなった。これ以上、新選組の名を汚す行為が続けば、隊の存続さえ危ぶまれる。近藤らは、ついに芹沢とその一派を粛清することを決心した。

九月十八日、隊の大宴会があった夜、酔いつぶれて帰隊した芹沢、平山、平間の三人を近藤派の刺客が襲撃した。近藤らの暗殺の標的が、芹沢だけだったのか、平山と平間も含んでいたのかははっきりしない。結果的に、芹沢と同じ部屋に屏風で仕切って寝ていた平山は殺害され、別室で寝ていた平間は助かっている。

平山の遺体は首が胴から離れていたといい、反撃した形跡もみられないことから、熟睡していたところを一撃で仕留められたようだ。鬼神のごときといわれた剣の腕を発揮できないままの、あっけない最期だった。手を下したのは山南敬助と井上源三郎の二人であったという。平山と一緒に寝ていた桔梗屋の遊女吉栄は、幸運にも無事であったと伝わっている。

野口　健司

古賀　茂作

突然の切腹の裏に秘められた罪状は

▼謎につつまれた生涯

野口健司（健次ともあり）は、天保十四年（一八四三）に生まれた。水戸出身ということ以外、詳しい前歴は今のところ不明である。江戸の本所亀沢町に道場を持つ神道無念流の百合元昇三に剣術を学んでいることから、江戸住みだった可能性もある。永倉新八は目録の腕前と記すが、なかなかの遣い手だったともいわれる。

屯所としていた八木家の次男・為三郎によれば、痩せた背丈の高い人だったらしいが、「この人について私はどうもはっきりした記憶がありませぬ」と語っているところから、どちらかといえば目立たぬおとなしい人物だったのかも知れない。

幕府が徴募した浪士組に参加し、二十一歳の若さで上洛した。壬生浪士組結成メンバーの一人であったことから副長助勤という役職に就き、巡察隊を率いて市中警備などにあたったようだが、特に目立った活躍は聞かない。

文久三年（一八六三）四月、大坂の平野屋五兵衛という商人に談じ込み、攘夷のための兵を募るという目的で百両の借金をしたときに、土方・沖田・永倉らとともに交渉に赴いた。あるいは不逞浪士の取り締まりとして大坂へ出張中、六月三日に相撲取りとの大ゲンカをやらかした乱闘に加わっている。最大の活躍はといえば、八・一八の政変ということになるのであろうが、この件についての彼に関する具体的な情報はない。

九月十六日夜に、局長・芹沢鴨と副長助勤・平山五郎が殺害され、勘定役・平間重助は逃亡し、ここに水戸派とも称される芹沢グループは壊滅するのである（筆者は十六日殺害説を問題提起中・『歴史読本』平成九年十二月号参照）。

ところが、これまで芹沢派と位置付けられてきた野口は、その後も隊内にとどまり、職務を遂行している。かつて水戸派として一からげにして片付けられてきた野口ではあるが、芹沢との関係において一定の距離を置いていたからこそ、そのまま在隊し得たといえるのではないだろうか——。

前川邸に移ってからも八木家の離れに寝泊まりすることが多かったといわれる芹沢との関係が密接であれば、当然、八木家への出入りも頻繁になったであろうし、八木老人の記憶にもっと残ってよいはずである。だが前述のように印象が希薄だということは、足が遠のいていたことを証明しているともいえる。それは彼の年齢に起因するものであった可能性が高いが、剣術の同門・永倉を通じて近藤ら試衛館一派ともそれなりの親密な関係を構築していたという推測すら成り立つのである。

——ただ安息の日々は、そう長く続くことはなかった。

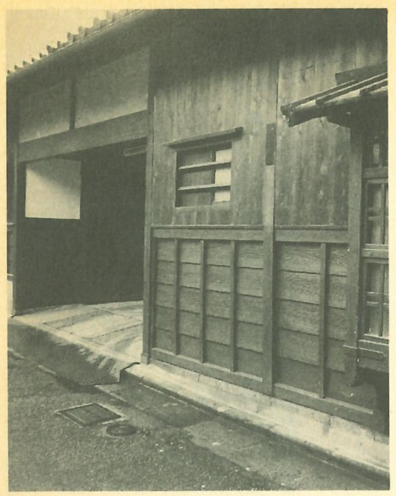
▼野口の切腹

十二月二十七日の朝、屯所とする前川荘司邸の表門に連なる右奥の部屋において、野口の切腹が執り行われた。介錯は副長助勤の安藤早太郎が担当した。

この一件に関する、安藤のエピソードが伝わる——。

八木家では、その前夜から正月の準備に取りかかり、慌ただしい雰囲気のなかでの餅つきが行われていた。そこへひょっこりとやってきた安藤が、「拙者が手伝ってやる」といいながら、羽織を脱いで袴の股立ちをとり、女中に替わって合い取りをはじめた。

次いで調役をやった林信太郎がやってきて、つい先ほど介錯をやった安藤が平気な顔をして



野口健司が切腹した前川邸

餅つきをやっているのに驚いたらしい。話を聞いて八木家の人たちも仰天したらしく、後々まで語り草になったという。

一臼つきおわって安藤が口にした、「昨日まで いっしょの釜の飯を食った同志を斬るなんて、いくら何でもいい気持ちはしませんよ」という言葉は、人の情として当然の、赤裸々な心情を吐露したものとして受けとめることができる。餅つきによって一刻も早く忘れ去りたかったというのが、安藤の本音であったようだ。

八木家の当主・源之丞は安藤や林に切腹の理由を尋ねたが、はっきりしたいきさつは遂にいわずじまいだったという。安藤や林がすでに仏となった野口の罪状を公にしなかったのも、死者に対するせめてもの思いやりだったのであろう。

そこで何か詰まらぬことをやらかしての切腹だといわれてきたが、滋賀県八日市市で発見された近藤勇書簡二通（昭和五十四年に同志社大学の仲村研先生より筆者は写真の提供を受けた）が、解明の糸口を与えてくれた。この書簡に記された内容は——近江国蒲生郡七里村において村人どおしの揉めごとが発生し、三好織江、大舛屋久左衛門、あるいは水戸殿家来なる面々が壬生浪士を偽って介入したため騒ぎが大きくなり、村に居づらくなった甚右衛門の妻が新撰組に助けを求めてきたため、近藤が管轄の庄屋代官である小沢文次郎に仲裁のとりなしを依頼した、というものである。

それまで管轄外だといって突っぱねてきたこの村方騒動の仲裁に、一転して近藤が首を突っ込んでいることや、非常に丁重なる文面から窺えることは——やはり野口に何らかの関与があったからこそ、という印象を拭えない。しかも、翌年一月十六日付の書簡でも、近藤は重ねて処置方を依頼するという念の入れようなのである。

第一便を近藤が出した日付というのが、まさに野口が切腹して果てた日なのである。この日付の一致こそが野口の関与についての大きな意味合いを持つと考えられ、近藤が内部でのけじめをつけたうえで、外部の処理にとりかかった様子が思い描かれる。

もともと、この村方騒動については以前から新撰組へと訴えが願い出られており、野口は紛争内容を充分知り得る立場にあった。しかも水戸藩士と称する人物が絡んでいるところから、野口が旧知の水戸出身者と申し合わせて何らかの狙いのもとに差し向けたという感じを強く受ける。あるいは、野口の親切心からの肩入れが仇になったのかも知れない。

新撰組に、「勝手に訴訟を取り扱うことを禁じる」法度がある。野口が切腹するはめになったのは、この条項に抵触したためだと考えられる。

▼没年月日の謎解き

「野口健司墓　仝（文久三年）十二月廿八日卒」

これは壬生寺にある野口の墓碑銘であるが、遺骸を埋葬した光縁寺の過去帳には、次のように異なった日付が記載されている。

「姓(ママ)国常州水府産

野口健司殿　十二月廿七日——」

両者の日付には一日のずれがみられ、検討が必要となる——。過去帳の方はきちんと日をおって記載されているのに対し、墓碑はといえば、新撰組隊士七名が連名になっており、元治元年（一八六四）九月六日に没した葛山武八郎までが含まれることから、この日以降の建立だということが確認できる。墓碑は死後半年以上を経た段階での建立なので、正確さには欠けるといわざるを得ず、過去帳にある二十七日説を採るのが妥当な判断であろう。

同じ壬生墓地にある芹沢鴨の墓に刻まれた日付にも誤りがみられ、副長を務めた新見錦は墓さえもない。水戸関係者の幽魂は、命日すら判然としないで彷徨っているというのが現状で、今後のすみやかなる解明が待たれる。

〈参考文献〉『新選組遺聞』（子母沢寛著）

松原忠司

島津隆子

疑問の多い〝壬生心中〟の真相を探る

▽心中に至る経緯

「生年月日が不明。出身地も島田魁は播州（兵庫県）小野といい、永倉新八は大坂浪人という。新選組での主な活動は池田屋参戦と、昇りつめた役職が四番隊隊長兼柔術師範……」

これが生前の松原忠司のプロフィルで、まことに味もそっけもない。しかし、松原が隊士の中で、一際光彩を放つのは、メロドラマ風な、その死にざまにある。

「きみに尋ねたいが、主人を斬殺しておきながら、未亡人に横恋慕し、親切面して我がものにする奴は、士道に悖るといえまいか」

強い毒気を含んで迫る土方歳三のもの言いに、激昂しやすい松原は、返答もせず、自室にとび込むや、脇腹に刀を突き立てる……。が、一瞬早く、監視していた隊士が、その刀を押えた。傷はたいしたことはなかったが、土方との仲は、日を追うごとに険悪となる。隊務を怠け、白昼から酒の匂いを漂わせ、平隊士に落される。ついに、精神の荒廃とともに腹部の傷まで悪化した松原は、その未亡人と壬生の天神横丁で心中して果てた。

〝壬生心中〟として有名なこのドラマは、実在の人物の証言もあって、きわめてリアルである。そこで、松原の死に至るまでの経過を簡略に紹介する。

慶応元年（一八六四）のある夏の夜、微酔いの松原と芸妓が連れ立って通るのを、紀州浪人にからかわれ、口論になる。挙句、血の気の多い松原が、抜打ちに斬殺する。が、すぐに後悔した松原は、浪人の遺体を壬生の自宅まで運び、応待に出た人妻に、「気の毒に。斬り合っているのを助けようとしたが、すでに遅かった」と偽る。それ以後、未亡人になった、貧しい暮しの人妻の生活を援助しながら、足しげく通う松原は、人妻と情を交す仲になった。

「年の頃二十四〜五歳の、それは別嬪で、近所の評判もよかったらしいよ」そう、新選組宿泊所の主人、八木為三郎翁が証言する。

「土方さんの詰問に、これは危いと、松原を陰で見張っていたんだ」とは、松原を切腹未遂に止めた隊士、篠原泰之進の証言である。

慶応二年五月初旬、数日来、松原の姿が見えないのが気にかかり、天神横丁の家に踏み込む。「掛布団を取り払うとね、敷布団は血の海でね。たぶん松原が人妻の首を絞めたあと、切腹したんだろうが、二人とも覚悟の死だったよ」そう、八木老人は語っている。

▽心中は極刑に処せられた

これらの証言を交えた壬生心中は、『新選組物語』（子母沢寛著）の中に綴られているが、このドラマの信憑性について、研究家の間から、数々の疑問が指摘されている。例えば『新選組物語』に言う、慶応二年五月初旬という松原の死亡年月日は、松原が埋葬された光縁寺の墓碑に刻まれる、慶応元年九月二日と、明らかに違う、というのだ。

しかし、ここでは松原が心中したと仮定して、別の角度から記述してみたい。

「男女の中、懇切入魂の睦び二つなき処を現するしを、心中といふなり」（『色道大鑑』）などと、日本ではよほど特別な自殺の方法と思われているらしい。しかし、西洋でも心中を情死と訳すが、「魂は二つだが思いは一つ。その一つとなって鼓動する二つの心臓」（ベリングハウゼン）と、似たような表現になっている。

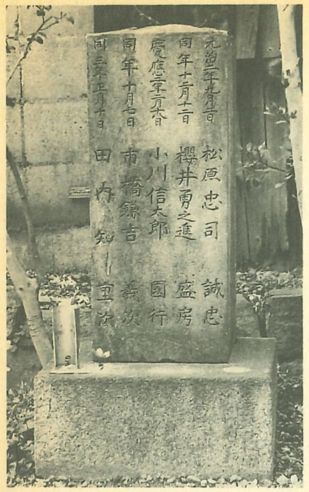
ところで、日本史上で最も心中が華やかだったのは、元禄から享保年間にかけてだが、近松門左衛門の「誰が初めしこの契り……」という心中物の作品が、いっそう拍車をかけた。

そこで、幕府は享保七年（一七二二）心中禁令を布告する。内容の要旨は、心中者の葬儀・

埋葬を禁じ、一方だけが死んだ場合、生き残った者は殺人犯として死罪。双方が生存した場合は三日間人前に晒し、乞食や貧民など非人の手下にする。また、武士の心中に対しては不義の御法度として、最も重いお家断絶の上、死罪という極刑が加えられ、場合によっては一族のほか、主従に類が及ぶこともある。幕末の頃までには、だいぶ緩和されてはいるが、心中に対する基本的な考えは、享保の頃と少しも変っていないらしい。

▽なぜ盛大な葬儀が営まれたのか

そこで考えられるのが、松原の盛大ともいえる葬儀についてである。松原の死去した慶応元年という年は、なぜか不名誉な死を遂げた隊士が多い。脱走した科で詰腹を切らされた山南敬助を皮切りに、実家に帰っているところを、新選組からの呼出しで屯所に行き、切腹したという以外、全く理由のわからない大石良輔。商家の婦女子と密通し、処刑された施山多喜人と石川三郎。その他、暗い謎を秘めて死亡した桜井勇之進などがいる。


松原忠司の墓

そして、葬式費用のことになるが、新選組副長山南敬助のそれが七千九百五十文に対し、平隊士にすぎない松原の者は、二千文から四千文と、押して知るべしだが、常識的な見方をするなら、松原だけが不名誉な死でなく、むしろ名誉な死であったと考えるのが、いちばん自然だ。

しかし、あくまで心中にこだわるなら、逆に心中という最悪の死だからこそ、盛大にする必要があった葬儀とみるのは、どうだろうか。幕府の心中禁令によれば、武士の心中は最重罪の極刑である。松原も武士であり、お家断絶が新選組に抵触するかどうかは別として、場合によっては、監督不行届きとして主従の関係にまで、類が及ぶかもしれない。

「これは、まずい！」もし、公儀や世間に知れたならと、近藤や土方が危惧し、逆に松原の葬儀を盛大にすることで、心中をもみ消す方法を考えた。と、無理を承知で、勝手な想像をさらに推し進めるなら、戦死者の三名を出した池田屋事変以後、敵と戦う事なく、内部粛清によって、三名の隊長クラスを含め、十三名の隊士を死に追いやった新選組の組織的危機感より、松原一人の心中事件の方が、はるかに大きいと感じさせたのではあるまいか。

▽際立った外貌

ちょっと横道にそれるが、私が始めて新選組隊士を、それも松原忠司の壬生心中を書いたとき、ふと、思ったことがある。

それは、他の隊士と際立って違う外貌の松原が、坊主頭だということだった。その坊主頭に白鉢巻きを締め、大薙刀を杖に、「方今の形勢累卵の如し、天下の有志之を知るや否や」と、声高らかに大通を闊歩したなど、新選組という暗殺集団では目立ちすぎて、危険を招かないだろうか、ということであった。

そして、この男は坊主、つまり僧侶出身にちがいない。だからこそ、自分が犯した罪深さに、過大な憐みと同情をかけ、挙句は死出の旅路まで一緒にしたのだ。そして、僧侶であったからこそ、光縁寺でも、新選組でも、後味の悪さを残さないため、他の隊士より葬儀費用をかけたのだろうか、などと思いめぐらせたものである。

それはとにかく、松原の心中を証言した八木老人は、それより以前にも、土方らによる芹沢鴨一派の暗殺現場を目撃している。その芹沢のもとを、織物問屋の主人の愛人・お梅が未払い代金の催促に訪れる。二十三〜四歳の器量よしのお梅に一目惚れした芹沢が、腕づくか親切心でわがものにした経緯がある。この芹沢とお梅の関係が、松原と人妻に重なり合って、厳しい土方の目に映り、詰腹を切らされたのではないだろうか。

しかし、いちばん確かなのは「松原忠司は聊失策の事ありて、切腹せんと刀を突立てたる時、側らに人あり、直ちに之を取押え、疵養生せしめ、一旦全快したれば、平士の列に下りたるが間もなく死す」という西村兼文が記す『壬生浪士始末記』の簡潔な記述のようである。

島田 魁

山本 博司

誠の一字に徹して初志を貫いた生涯

◆新選組最後の編制を書き残す

美濃国大垣の元徳川家青木孫太郎知行所、濃州厚見郡雄総村（現岐阜市雄総）郷士、近藤伊右衛門、母は川島嘉右衛門の娘の次男として文政十一年（一八二八）一月十五日出生。

一説によると、魁の父伊右衛門は代々庄屋職を務める家柄で、藩の御用材を預かっていたが、天保十二年、木曽川の氾濫で御用材が流出したため責任を負って伊右衛門夫妻は同年八月、自殺したと言われている。魁十三歳の時で、母の姉の嫁ぎ先の石田村（現各務原市神置）の永縄半左衛門に引き取られたが、半左衛門が急死したため、母の実家である川島家に引き取られる。

十九歳の時、尾張藩、遠藤家へ奉公に入り二十九歳で江戸の心形刀流坪内主馬に門人となり、のちに新選組で同志となる永倉新八と親交を結び、坪内道場と近藤勇の試衛館と交流があったらしく、新選組入隊の動機となった。

あるとき名古屋城内で剣術の御前試合が催され魁は優勝し、藩主から賞賛の言葉を頂いたのが縁で、大垣藩士、島田才の養子となり島田家を継いだ。

文久三年に脱藩、三十六歳で新選組結成当初から加わり調役並監察、二番隊伍長となる。池田屋事件では探索方と討ち入りに活躍。十七両の報奨金を受けている。三条制札事件、大坂角力事件、油小路の戦いなど、新選組の主な事件にかかわった。鳥羽・伏見の敗戦後、「東照大権現」と書かれた隊の旗印を腹に巻きつけ、江戸から甲州勝沼、流山、宇都宮、会津、箱館を転戦し、新選組最後の編成を書き残す。隊長相馬主計の次席として頭取となる。

◆箱館戦争のその後

明治二年五月十一日、土方歳三、戦死。

土方の最期は、島田魁と相馬主計の二人に担がれて近くの民家に運ばれたが、島田に「すまん」と一言いい残して瞑目したと伝わるがこの日は相馬も島田も弁天台場で奮戦した記録が「島田魁日記」に残る。歳三の最期に立ち会っていない魁は「己五月十一日　歳進院誠義豊大居士」と書いた土方歳三の戒名を終生、身に付けて離さなかったという。

五月十五日、土方歳三の戦死の四日後、新選組主力は弁天台場で降伏、称名寺に収容後、青森に護送され、蓮華寺に入ったが「寺院狭く人多ければとて臺場に籠れる人々は油川と言う處に移さる」と山内堤雲は書き残す。

明誓寺の収容生活は短く六月八日、さらに弘前に移動し薬王院で謹慎した。この時、書き綴った日記が「島田魁日記上巻・下巻」で新選組研究の好史料として貴重である。

七月十九日、津軽藩お預かり人は全員東京へ出立の命があり、同二十一日朝、弘前を出発、青森の蓮華寺に到着。ここで、予定は変更され当分の間、謹慎となり、十月二十四日軍艦「大坂艦」に乗り込み、翌日箱館港に着し十一月四日迄停泊、同日、箱館出航、八日品川に着し、二十日名護屋藩に預けられた。

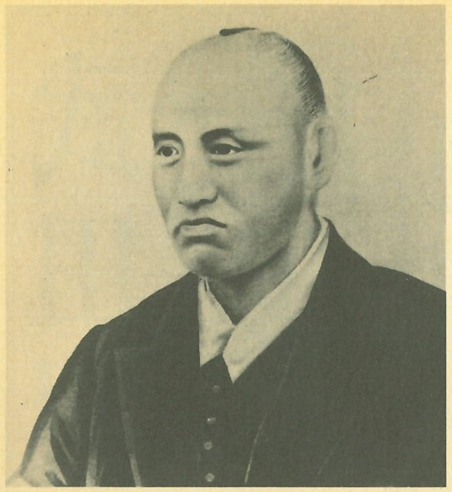
太政官日誌、明治三年第九號によれば

於名護屋藩可使役事

元徳川旗本家来
江川　七郎　※元本野内膳臣
大橋山三郎　※松平民部家来
上田安達之助　※元徳川臣
元山城壬生浪人
山崎林五郎　※元代々浪人
元京都浪人
中山　重郎　※元有栖川臣
元濃州浪人
島田　魁
元御所大工頭本多庄蔵二男
本多　岩吉　※元島田魁家来
元浪人
田村　逸郎　※元清水臣
田村　録郎　※元清水臣

下欄の※は魁が明治二年五月十五日に記した最後の新選組名簿にある元身分である。

明治三年第九號をみるに箱館関係降伏人の処遇は区々で謹慎被免・お預被免・禁固被免が大半であるが新選組関係者は引き続き拘束され明治五年六月に解放されている。



島田　魁

魁の遺品に名護屋藩（県）改め愛知県から達せられた赦免名簿に、

島田　魁
田村　義利
田村　義忠
大橋　山三郎
山崎　義範
中山　国久
江川　助之
上田安達之助
本多　岩吉

其方共元兵部省ヨリ旧名古屋縣江御預相成居候處今後暇間其旨可心得事

壬申六月　愛知県

◆同志の慰霊と手がけた人々の菩提を弔う

さて、赦免となった島田は京都に戻った。京都には新選組時代の慶応元年八月十五日、魁三十八歳の時に平民西村定七の娘と結婚した妻の「さく」と、慶応二年三月に生まれた長男の魁太郎が待っている。

二男「柳太郎」は明治四年九月二十八日と読めるので、名護屋藩にお預かり中、妻子と暮らすことが許されたのかと推測される。

明治七年六月に長女「と免」、同九年八月に三男「清次郎」、同十一年十二月四男「富三郎」同十七年に五男「末之烝」と五男一女をもうけた。

帰京後の生計は雑貨屋、仏具店の店員などを転々とし、明治九年頃、剣術道場を開き同三十三年頃まで道場持ちの剣術師範を職業としていたらしい。しかし、明治中期の十九年頃からは武芸も下火になり門人の数も減り、夜は西本願寺の守衛として雇われていたが、明治三十三年（一九〇〇）三月二十日西本願寺境内で病没。享年七十二歳。

魁の死に際し、西本願寺から葬儀料二十円慰労金一万四、満年賜金として十五円が送られている。杉村義衛こと、新選組二番隊長・永倉新八とその息、杉村義太郎の名がお悔帳（会葬者名簿）に書かれていたという。

新選組きっての大男、怪力とまでいわれた七十二年の生涯は肉親の縁に恵まれた一生であったとは言えないが、誠の一字に徹し初志を貫き通し、新選組同志の慰霊と新選組時代に手がけた人々の菩提を弔う毎日であった。

菩提寺は、京都市上京区笹屋町通り浄福寺東入ルの浄土真宗本願寺派長園寺で、当寺の過去帳には

明治三十三年三月二十日
釈　教　証　西六条本山現境内ニテ
島田　魁　七十二歳

と記載されていると、以前に新選組研究の第一人者の釣洋一先生から教示を受けたことがある。当時、墓碑は京都東山区円山町の東大谷墓地にあったらしいとのことであったが、近年同墓地で発見され「威徳院釈教證」と院号が授与されているという。

武田観柳斎

赤間 倭子

勤王思想家だった甲州流軍師の最期

◎近藤勇が軍師として信頼

武田観柳斎（?〜慶応三年六月二十二日と推定される）。竹田観柳、観柳才ともかく。本名は福田要。広。徳裕。出身地は母里。

『新選組始末記』及び『新選組物語』（子母沢寛著）における観柳斎は、決してよくは記されていない。上にはおべっかを巧みに使い、下の者には意地悪く、ねちねちと叱言をいう人物とされている。

藩の医生で甲州流軍学を修めた観柳斎は、新選組入隊（おそらく文久三年の冬か）当時から「軍師」として近藤勇に厚く信頼され、隊士らの軍事調練を任せられた。隊内でもかなり目立つ存在だった彼は、文久三年六月末の水口藩公用人とのもめごとや元治元年六月五日の池田事変では大活躍して金十両別段金十両の恩賞を得ている。

同月十日の明保野亭事件では指揮官となり出勤、事件後に切腹した柴司の葬儀に参列、「我も同じ台やとはん行末は同じ御国にあふよしもがな」と弔歌を呈している。

慶応元年の春の新編成では五番隊長（以前は六番隊長）と、文学師範を務めた。ことに元治元年の近藤勇の江戸行きや、慶応元年、近藤勇が永井主水正の供として広島に行った折にも同行している。

この頃が観柳斎の隊内での絶頂期であろう。しかし彼の独善的な言動からか、次第にうとまれたのか、第二回目の広島行きには参加していない。新選組から分離した伊東甲子太郎らの高台寺党に接近したり、また薩摩藩邸に出入りしているという馬越三郎の密告によって離隊する破目となった彼は、帰国の途中、銭取橋において、斎藤一に殺害されたという。以上が大体、子母沢寛の著書からの足跡だ。観柳斎は芹沢鴨よりも、新選組ファンから嫌われているようだが、私はなんとなくこの人物が好きなのだ。

◎郷里の母里藩では勤王志士福田要

平成四年秋「塩冶判官高貞公顕彰会」の方々の好意により、観柳斎の故里母里に調査に行った。そこで私は彼が福田要といって「郷土母里」誌により、勤王志士藤本鉄石が、要をたずねて来たこと、若い頃には陽明学を学び激しい勤王家だったことを知り、それ以来彼は「勤王の志士」として私の胸に息づいた。若い福田要は知識と行動は一致すべきものという陽明学を信奉する激越した行動ゆえ、佐幕派である母里藩（松江藩支藩一万石）により入牢させられたことも知り驚いた。

やがて彼は脱牢して江戸へ逃亡している。その彼が武田観柳斎と名のり、京で新選組に入隊したのは、むろん就職（生活のため）であろう。世相や新選組には公武合体という思想があり、朝廷と幕府は仲良く共に手をたずさえ政治を行うべきであり、それを支援する武力集団が新選組であることから、観柳斎がその考えのもとに入隊したとみてもよいのではなかろうか。

観柳斎の燃えるような勤王思想は、次第に佐幕派一辺倒になりゆく新選組に身をおいて、心の底に伏流水となってゆかざるを得なくなってゆく。そこへ伊東甲子太郎の入隊だ。

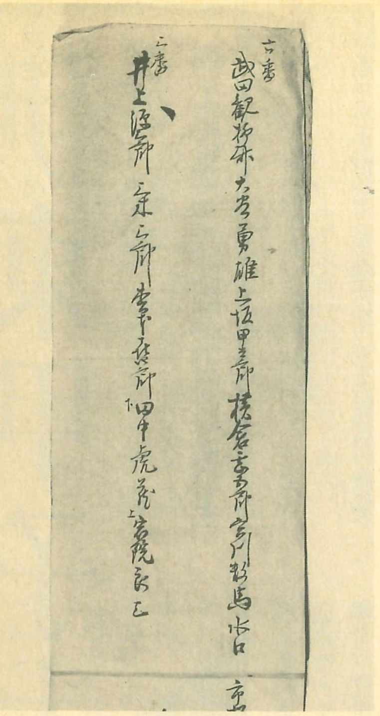
伊東の新選組参謀としての登場は、伊東の同志藤堂平助の言によれば「佐幕派の新選組を、勤王派に改革するために伊東一派が入隊した」という。当然その影響は新選組からの分離となり高台寺党（御陵衛士）が結成された。

だがその結成当初、観柳斎が自ら進んで高台寺党に入隊しようとしたという形跡は、はっきりしていない。

ただ「壬生浪士始末記」には「甲州流軍学など古来の兵法は癈れ、西洋銃隊が盛んになり、新選組も洋式になったので、武田は心中不平を抱き、自分の威信が損われるのを嫌い、伊東一派に近づいたが、入隊を断られ、ひそかに薩摩に拠らんと希んだが、隊内に武田を憎む者がいて、近藤に密告云々」とある。

密告者馬越三郎は非常な美男で、観柳斎が想いをかけていい寄ったが、馬越は拒んだが、あまりしつっこくいい寄られて困っていたという。ちょうど、観柳斎が薩摩藩邸から出てくるところを見付けた馬越は、さっそく土方らに密告した。

あとは子母沢寛の『新選組始末記』の通りとなるが、観柳斎の男色のこの話は、事実かどうか？　子母沢寛のフィクションと考えてもよいのではなかろうか。



『行軍録』に見える武田観柳斎

「隊を脱することを許さず」即切腹という局中法度は、あくまで脱走とか不平不満の背向を指しているのであり、正当な理由があれば、新選組は離隊は許している。どういう理由か判然としないが、故郷へ帰ることになった観柳斎は、公然と離隊したが、母里へ帰らず、京にあって勤王活動を始めだした。

◎「米子で斬られて死んだ」のか？

伏流水としての勤王思想は、観柳斎が若年期に、母里に滞在した物外和尚から得たものであり、伊東の勤王活動に触発されて、再び噴き出たといえる。

たとえ離隊したとはいえ、勤王活動に寄る観柳斎を、そのままに見過すほど新選組は甘くない。彼の殺害は新選組の者と考えても不自然ではない。

想像だが、彼は米子の同志らと連絡をとりつつ活動していたのではなかろうか。

現在、母里（島根県能義郡伯太町）に、三百年から続いている旧家で、彼の生家として、九〇%は確かだと思われる福田家がある。医家であって（昔）刀剣・槍など残っていて倉が二つある。菩提寺や過去帳には院号、禅定門、禅定尼などがついている戒名の仏が三、四名ほどいることは、当時裕福だったこと、当然医薬を扱う家は格式があった。

訪問した際、当主武義氏は「亀次郎おじいさん（昭和二十年没。明治八年生。享年七十一歳）からきいた話では、漢方薬を家伝として作っていたが『むねむし』、つまり肺病の薬を作っていたという。福田要については一切それの記録はない。ただ慶応の頃に米子で斬られて死んだ人物がいて、その墓がある」という。その人物が武田観柳斎だという確証はないが、崩れた墓石を丁寧におがんだ私は、改めて観柳斎の孤独と非運に胸が痛んだ。

この福田家を探し当てるには、母里郷土史家梶谷範敏氏の努力が蔭にある。再度感謝している。二つの倉はほとんど手入らずの倉なので、あとはその中から福田要についての何らかの物証があるのではないかと、すべては地元の梶谷氏に託して、私は母里を去った。その後の連絡は一切ない。

武田観柳斎はおそらく新選組の手により殺害されたと思うが、のち同志の善応という僧も殺されている。京での活動は実らなかったのだ。

＊

母里を訪ねて発見したのは、この地元から力士が多く出ていることであった。ほとんどが大阪角力に入っている。行司になった者が一人いる。その各年代について今調べているが、もしかして文久三年六月三日（七月十五日ともいう）に、起った大坂角力の力士と新選組との乱闘事件があったが、その中に母里出身の力士がいたら面白いのであるが――。

＊

母里での食事に「ポテポテ茶」があり、乾燥した番茶の花を熱い湯で茶筅で抹茶のように泡立て、それに漬物・昆布を刻んで入れ、ゆっくり頂くが、福田要（広）もこれを食していた。一度喰べてみたい。

伊東甲子太郎

野田 雅子

油小路に散った北辰一刀流の道場主

◆水戸学・国学を修め尊攘思想へ

伊東甲子太郎は、天保六年（一八三五）常陸国新治郡中志築（茨城県新治郡千代田町）の志築藩郷目付、鈴木専右衛門の長男として生まれ、名を鈴木大蔵という。伊東甲子太郎は後年の名である。二歳違いの弟が三木三郎で、兄と共に新選組へ加入、九番隊組長を勤めた。父専右衛門がある事で閉門蟄居させられ、一家は祖母の実家に寄食した。

甲子太郎は十五、六歳頃水戸へ遊学。弘道館師範で神道無念流の達人、金子建四郎に入門しその傍ら水戸学を修めた。父が高浜村で村塾を開き漢籍教授を始めると、甲子太郎も水戸から帰り支塾を手伝う様になったが、甲子太郎十八歳の時父専右衛門は亡くなる。村塾の方は弟三郎が継いで結局上手くゆかず、三郎は他家へ養子へ入るが、兄甲子太郎のその後しばらくの記録はない。しかし後年の甲子太郎の尊攘思想への思いの深さや高い教養は、この時期に水戸学や国学を修め、培ったものであろう。

文久元年（一八六一）、甲子太郎は江戸深川佐賀町にある北辰一刀流伊東誠一郎の道場で塾頭になっていた。江東で伊東道場は有数の町道場で、門弟は常に五、六十人を抱え、小身の旗本位の暮し向きであったという。やがて師匠誠一郎が亡くなると、その遺言と門弟達の推挙もあり、娘ウメの婿となり道場を継いで伊東姓を名乗る事となった。「性温和にして敏達、しかも慷慨義俠の心に富」んだ甲子太郎は、肖像画で見る通りの美男だ。教養高く和歌にも通じ、剣の腕は確かとなれば申し分のない男である。道場の経営も順調だった。

だが、甲子太郎は、一介の道場主で一生を終われるような男ではなかった。尊王のため国事に奔走したい、という願望が段々大きくなってゆく。元治元年（一八六四）三月末、藤田小四郎ら天狗党の筑波山挙兵が伝わると、この義挙を援助しようという府内の有志が、上野で会合を持った。甲子太郎も出席したが、知人の忠告を容れて賛助するのを断念した一事もその著れである。池田屋事変、禁門の変と続々京の緊迫した情勢を伝える風聞が耳に入る。甲子太郎は、道場に座して苛立ちを耐える他なかった。

◆門弟を従えて入隊

転機はすぐその後にやって来た。その年八月の下旬、旧知の藤堂平助が訪れて新選組への加入を勧めたのである。藤堂は隊士募集のため、近藤に先発して江戸に来ていた。永倉新八の『新選組顛末記』では、この時藤堂が新選組は幕府の爪牙となり勤王の目的が果たせない、新選組を勤王化して近藤を暗殺する云々過激な調子で話した、となっている。

九月に入り、試衛館に近藤を訪ねた甲子太郎は新選組加入を承諾、弟三木三郎他道場師範代だった内海二郎、中西登及び加納道之助、服部武雄、佐野七五三之助、篠原泰之進の七名を率いて新選組に加入する運びとなった。勤王活動に奔走したいはずの甲子太郎が、佐幕の先鋒新選組へ入る。尊攘思想はしかし一般的な共通認識である。舞台としての京に上りたい甲子太郎と、誰か政治的ブレーンになり得る秀れた人材を欲した近藤、双方の意向が一致したために、根本的な思想の差異を曖昧にしたまま、事は成ってしまった。

すっかり自分に敬服している近藤を見て、藤堂のいう新選組の勤王化も可能なのだと考えただろう。伊東大蔵という名をこの年の干支（甲子）にちなんで甲子太郎と改名し、十月上洛を果たした。

翌慶応元年（一八六五）二月の総長山南敬助の脱走、切腹事件は、江戸で藤堂の語った新選組の実態を如実に示していた。剣の同門で、思想的に近かった山南の脱走には、甲子太郎と何らかの黙契があったとする見方もあるが、謎である。西本願寺に屯所が移転して、組織改編があり、甲子太郎は参謀、弟は九番隊長、篠原と服部は監察にそれぞれ任じられた。

甲子太郎は、新選組の中で勤王活動を始める。薩摩藩脱藩の富山弥兵衛の入隊をとりなし、捕縛した志士井上謙三を解放、六角獄舎に繋がれていた長州藩元奇兵隊総管の赤根武人ら三人の釈放にも尽力した。十一月、幕府の長州訊問使派遣の際、この三人は間者として長州へ投入される。甲子太郎も近藤と共に訊問使の随員として広島へ出張した。志士の助命といった消極的な形での勤王活動で満足する甲子太郎ではない。

慶応二年（一八六六）一月、再度近藤に従って広島へ出張した時は、腹心篠原を連れて老中小笠原長行に会い、長州に寛大な処置を取る様進言する。近藤とは別行動を取り精力的に諸藩の志士と交わり、勤王活動を行った。すべては西国諸藩の内情を探索するという新選組の職務の一部であり、自らが本来目指す活動である。

徐々に、甲子太郎にとって新選組という足枷が重く、うとましくなっていった事が想像される。同年九月二十六日、名古屋出張から帰京した甲子太郎は篠原と共に近藤を訪ね会談し、時局論を説いて激論。両者の思想の根本が違う事で、甲子太郎も思い切った。

◆近藤暗殺を謀るが……

翌慶応三年（一八七七）正月一日から四日まで、甲子太郎は永倉や斎藤一らと島原で居続けをやった。幹部の門限破りは切腹である。隊内で人望を集める自分や永倉、斉藤といった幹部を一度に処断できるはずがないと踏んでの挑戦的な行動だった。予想通り二、三日の謹慎で済まされると、甲子太郎は九州遊説の旅に出る。

伊東甲子太郎

表向きは遊説だが、実は新選組から分離して勤王活動をする事情を説き、理解と協力を仰ぐ旅だった。『局ヲ脱スルヲ許サズ』という一条のために甲子太郎が考え出したのは「分離」である。近藤や土方に異を唱えさせぬために、先手を打って孝明天皇の御陵衛士を拝命した。この尊王行為を表向きに、実は薩長の内情を探るのであり、脱走ではない、新選組のための分離である。帰京後甲子太郎は、近藤、土方に分離を了承させる事に成功、三月二十日、屯所を去った。幹部の八番隊組長藤堂平助や、三番隊組長斉藤一までもが同調、江戸以来の同志、弟三木三郎と合わせて十二人が、甲子太郎と共に分離した。斉藤が実は近藤から送り込まれたスパイだとは、誰も気が付いていない。

六月、彼らは屯所として東山高台寺の塔頭月真院を与えられ、以後高台寺党と呼ばれる。同志新井を九州へやる。自らも太宰府に赴き、中岡慎太郎を訪ねたりと、甲子太郎は勤王活動を繰り広げる。一方で、新選組が嗅ぎ付けた薩摩の倒幕挙兵計画について会津藩に問われれば、そうだと認める。数と力で圧倒する新選組の報復を免れるためには、表面上は新選組と問題を起こせない。御陵衛士のスポンサー薩摩から見れば、どうにも胡散臭い、信用ならないと映って当然だった。ジレンマの甲子太郎は、遂に近藤の暗殺計画を口にした。決行は十一月二十二日。近藤を殺りさえすれば、真の勤王家となり晴れて本懐を遂げられる。そして、暗殺の実行を買って出た斉藤が、姿を消した。

十八日夜、甲子太郎は近藤の妾宅へ単独で出かけ、その帰り道で新選組に襲われ、油小路東側の本光寺門前で絶命、三十三歳だった。

「奸賊ばら！」と悲痛な叫びを上げて絶命する瞬間、甲子太郎の脳裏に浮かんだのは、何であろう。何故安易に近藤の誘いに乗ったのか。新選組を甘く見たとしか思えない。

策を練り、奔走して漸く晴れて勤王志士として世に立てるという瞬間に来て、伊東甲子太郎の夢は砕けたのである。

谷三十郎

久住 裕子

「千石もの」と評された槍の腕は?

◇腕前はどれくらいだったか

谷三十郎藤原供国。生年は伝わっていない。次弟の万太郎が天保六年(一八三五)生まれなので天保初年頃の出生だろうか。現在の岡山県、備中国高梁出身。藩主は板倉家である。備中松山藩士(旗奉行)で、剣術の直心一派の師範の谷三治郎の長男である。万太郎が長男と書かれたものもあるが、万太郎と昌武(周平)が弟である。三十郎は「谷の槍は千石もの」と評判をとったと伝わる。国元で種田流の槍術も学んだと思われるが、万太郎の子孫に伝わる話では、三十郎は「剣一筋」であったという。剣術は直心流で指南役をしていた。また神明流、神陰流と記されたものもある。

安政三年(一八五六)頃、御近習役をつとめていた三十郎は、何かの失策をして永の暇となり家は断絶となった。一説に万太郎が女性のことで過ちをおかしたといい、これが三十郎のこととも言う。その後大坂に出るが、万太郎、やがて昌武も後を追って来た。この頃の写真は伝わっていない。

◇池田屋事件で手にしたのは槍か、刀か?

新選組には文久三年(一八六三)に入隊したと思われる。元治元年(一八六四)の五月頃、弟の昌武が近藤勇の養子となった。この頃には三十郎も副長助勤となっている。

池田屋事件では土方歳三隊として探索活動をした。土方隊二十四名は場合に応じて二手に別れ、そのときには井上源三郎が率いた隊に属したと思われる。のちに報奨金十七両を受けるグループである。

子母沢寛の『新選組物語』には、三十郎が槍で長州の吉田稔麿を突き抜いたとあるが、この話は創作性が強いのではないだろうか。近藤隊として先に池田屋内に入ったのは万太郎で、すなわち報奨金二十両のグループである。まったくの創作でなくとも、『新選組遺聞』にある、八木為三郎の談話の形式をとる、池田屋で槍で浪士を刺したリアルな話の主は、三十郎でなく万太郎であろう。八木源之丞に語ったのは「よい話相手」であった三十郎かもしれないが。万太郎は槍が得意である。一部発表された永倉新八の『浪士文久報告記事』にも、一人の浪士を万太郎が槍で突いた、とある。三十郎が、斬った相手の名前もわからない状況の中で、その最後も諸説ある吉田稔麿という長州の大物を自分がやったのだと喧伝していたとしたら、少し話が大きいと思われるのではないだろうか。

池田屋で三十郎が手にしていたのは、はたして槍だったのか、刀だったのか。子母沢寛が三十郎と万太郎の兄弟順を取り違えているため、八木為三郎の谷兄弟についての話は、逆なものもあるかもしれない。おまけに三十郎は「槍術師範頭」とも記されているから、全く槍ができないとも思えない。

七月、禁門の変後の残党狩りで、西本願寺の道場で剣術を教えていた中田九一郎らを捕縛した。三十郎と中田とは神陰流の同門で面識があった。このとき、新選組は見かけほどに強い隊士はおらず、いつも自分が先頭に立たされてしまう、などと語ったという。

九月六日の葛山武八郎の切腹死のときに、頼越人として三十郎の名が光縁寺の記録『往詣記』に見られる。また、十一月の『行軍録』編成では八番大砲組となった。

同じく十一月には近藤が大坂の商人、加賀屋に献金を申しこんでいるが、手控え帳の中に谷三十郎の名が見られる(加賀屋文書)。『新選組遺聞』に、山崎烝のことを大坂出身で、金持ちの間の事情を知っており、大家の番頭などにも顔見知りが多いと記されているが、同様なことが谷兄弟にもあったのかもしれない。

◇ぜんざい屋事件

元治二年一月八日(一八六五、四月に慶応と改元)に、ぜんざい屋事件が起きる。三十郎、万太郎、万太郎の道場の門弟の正木直太郎、高野十郎(阿部十郎のことという)とともに、ぜんざい屋の石蔵屋を襲撃した。現在の大阪市南区瓦屋町に「贈正五位大利鼎吉遭難の碑」が立っている。万太郎はその近所の松屋町か南堀江で、種田流槍術と直心流の剣術の道場を開いていた。万太郎自身は柏原流の槍を習ったという。

事件の発端は備中倉敷出身で旧知の和栗吉次郎(谷川辰吉、のちに新選組に入隊)から、土佐の浪士たちが大坂を焼き打ちする計画があるとの情報を得たことである。このとき三十郎の家は大坂の八軒家にあったという。三十郎たちは浪士の潜伏場所である石蔵屋を襲ったが、浜田辰弥(田中光顕)らほとんどの浪士が外出中で、残っていた大利鼎吉を殺害した。このとき三十郎は足に軽傷を負う。十日付で三十郎と正木の連名で、「近藤勇先生、土方歳三様」の宛名で報告書を送っているが、「三十郎は足を少々」と記されている。『会津藩庁記録』に報告書の写しが掲載されているが、署名者は三十郎ではなく、「万太郎」の誤記、もしくは誤写の可能性もある。

この年の五月末頃、万福寺を大坂の仮頓所とし、二十六日には儒者藤井藍田を捕縛して万福寺へ連行した。三十郎と万太郎も参加していたと思われる。二十人ほどの隊士とともに寺の本堂で起居していたと伝わる。この話が載っている『百年の大阪』には、寺の住職の談話として隊士の乱暴ぶりが記されているが、寺では、新選組がよほど迷惑だったらしく、その分を差し引いてもよさそうだ。万福寺は火災にあっているが、最近の話によると、全焼ではなかったため、床などは新選組が起居していた頃の遺構のようである。

ぜんざい屋事件の跡

◇死の原因は不明

三十郎は慶応元年六月の編成で七番隊隊長と槍術師範頭となった。また、九月頃の長州征討を見込んだ『行軍録』には藤堂平助とともに大銃頭の役につく。槍術師範が万太郎ではないのは、なぜなのだろう。西村兼文の『新選組始末記』には「槍術ハ谷ト、各師範ヲ定メ」とあり、名前まで記していない。三十郎と万太郎の記述の混乱が多いとはいえ、うまく槍の稽古をつけていたのは果たして三十郎だったろうか。腕のいい人が教え上手とは限らないし、その逆の場合もある。人格も考慮されるだろう。三十郎は「剣一筋」だけでなく、剣も槍も達人だったということなのだろうか。

『新選組物語』の「隊士絶命記」には三十郎が田内知の介錯で失態を見せて信用を失ったとある。田内の切腹は三十郎の死後の慶応三年のことであるし、達人のイメージとはほど遠いので創作と思われる。『物語』での三十郎のイメージはあまり良くない。子母沢寛が創作上の悪役として扱ったためであるならば、気の毒なことである。

三十郎の死は慶応二年(一八六六)四月一日。死因はあきらかになっていない。永倉新八の『同志連盟記』には病死、『新撰組始末記』には「谷三十郎は故ナクシテ頓死ス。何か故アルヨシ」とある。『新選組始末記』で病死、『新選組遺聞』では為三郎の談話として病死説と脱走説。祇園石段下での斬殺説は『新選組物語』中、田内の話に続き、篠原泰之進の遺談の形で、斎藤一を疑いながらも、「案外詰まらない浪人に酒の上ででもやられたのかもしれない」と記されている。『物語』を、そのまま史実とは受け取れないが、実際に、このような噂が流れていたとしたら、幹部である三十郎にとって名誉あることではない。

遺体は光縁寺に埋葬された。『往詣記』に記載はあるが墓碑はない。墓は大阪市北区兎我野の本伝寺にある。

篠原泰之進

近藤勇を銃撃した隊士

神子畑邦彦

▼伏見街道で何が起きたか?

筑後国生葉郡高見村（現福岡県浮羽郡）の出身。石工篠原元輔の長男として文政十一年（一八二八）十月十日に誕生。篠原泰輔、篠塚友平、秦河内、秦泰之進などと名乗り、のちに改名して秦林親。要心流剣法、良移心倒流柔術を習得し、安政五年（一八五八）に江戸に出府。以来、各地を遊歴し多くの志士と交流を結び、尊攘活動を約す。懇意だった伊東甲子太郎の新選組入隊に賛同し共に入隊を志す。後年、自身の記録を綴った『秦林親日記』を著す。

篠原泰之進と妻マチ、孫の基親

泰之進と伊東の出会いは文久三年（一八六三）頃で、同僚の加納鷲雄の紹介による。伊東道場の至近に住み伊東と懇意だった加納とは、神奈川奉行所の委託で横浜の外国人取締の任についていたときの同僚だった。

元治元年（一八六四）十月、江戸での隊士募集に応じた泰之進は、その月の十五日、近藤勇らと京都へ向けて出立するが、上洛後はしばらく所用で大坂に留まり、翌慶応元年五月、西本願寺の一角にあった屯所に出向き入隊した。夏頃に組まれた組織新編成では、諸士取調役兼監察および柔術師範となる。ちなみに、伊東は参謀となり、近藤、土方に次ぐ席順であった。

ここで入隊してからの泰之進の主だった行動を、『秦林親日記』を紐解きながら見ていこう。

慶応元年七月某日、伊東、富山弥兵衛、茨木司、久米部正親らと潜伏浪士の調査のため奈良に出張する。

慶応二年一月二十七日、京都を出立して、近藤、伊東、尾形俊太郎らと、幕府の長州征討後の処分を通達する老中小笠原長行らに随行、広島へ向かう。二月三日広島へ到着する。

二月十一日、伊東と共に老中小笠原長行および諸藩の周旋方と面談し、ふたりはこの後、近藤、尾形とは別行動をとって、五十日余もこの地に滞在し、勤王活動を展開し、三月二十七日帰京する。帰京後、七条醒ケ井通にある近藤の妾宅へ伊東と赴き、新選組分離を上申し、近藤、土方と激論する。

慶応三年三月二十日、孝明天皇の御陵衛士となって新選組を脱隊、六月には東山の高台寺塔頭の月真院を御陵衛士の屯所とする。衛士を拝命した顔ぶれは、隊長の伊東、泰之進、鈴木三樹三郎、加納鷲雄、新井忠雄、阿部十郎、内海次郎、橋本皆助、毛内有之助、服部武雄、藤堂平助、富山弥兵衛、斎藤一の十三名か。

十一月十八日、七条油小路にて隊長の伊東が新選組に暗殺され、その遺体を回収するために同志と出動するが、御陵衛士を一気に殲滅させようとする新選組に要撃されて逃走する。

十二月十八日、阿部十郎ら同志と伏見街道丹波橋筋付近で近藤勇を銃撃するも、右肩を負傷させたにとどまる。

慶応四年一月三日勃発の鳥羽伏見の戦いでは薩摩軍に属して戦い、のち三樹三郎らと共に赤報隊を結成する。そして維新後は、弾正台出仕等を経て、実業界へ進み、晩年は敬虔なクリスチャンとして過ごしたという。明治四十四年（一九一一）六月十三日、八十四歳の生涯を閉じる。墓は東京都港区の青山霊園。

谷　万太郎

隊士を勧誘した道場主

神子畑邦彦

▼一般隊士とは違う行動

備中高梁（現岡山県）の出身。谷三治郎の次男として天保六年（一八三五）に誕生。万吉とも記す。種田流槍術、直心流剣術の習得者。新選組七番隊組長を歴任した谷三十郎は実兄で、近藤勇の養子になった谷周平こと昌武は実弟。

家が断絶したため、大坂に出て、医師の岩田文硯の食客になる。そしてのちに、岩田の次女スエを妻に迎え、二男二女をもうけたが末子の弁太郎以外は早世したという。

大坂での万太郎は、槍術・剣術の特技を活かし、南堀江に槍剣術道場を開設する。そしてここで新選組の原田左之助に槍を教えたことが縁で万太郎が新選組に入隊するとされているが、真偽は不明である。万太郎の新選組入隊の時期については、一般に文久三年（一八六三）中とされるが、その後も引き続き道場を経営しており、どうも一般隊士とは違ったようだ。元治元年六月五日の池田屋事件の恩賞金下賜者のリストに谷の名が見られる。

谷　万太郎

ここに一つのおもしろい証言がある。それは明治三十二年九月の『史談会速記録』に、阿部十郎が新選組入隊の事情を語ったものである。

其時分に私が二十六の歳でしたか、数へて見なければ確に覚ゑませぬが、大阪に参りまして、心斎橋を渡りますると下手に入りました、其処へ備中松山の藩で谷万太郎と云ふ者がございます、それが撃剣の師範をして居りました。それへ便つて参りました。それで其塾へ這入りまして居りましたが、其時分に聴及びまするに、京都には新撰組が出来ました。是は勤王家で攘夷家であると言ふことを私は聴及びまして、谷万太郎と云ふのが是は私の師匠でございますから――（中略）辰巳あたり彼処等の金満家の番頭や何か、大分弟子がございまして、それへ出ましたり何かして居りました。其中に新撰組の噂がございまするもので、それから師匠も勧めまして、私も共に上京をいたしました――

（『史談会速記録』八三輯）

万太郎は道場をやりながら隊士の勧誘でもしていたのではあるまいか。「行軍録」（元治元年十一月に作成）には伊東甲子太郎の二番組に配属されている。

慶応元年（一八六五）一月八日、門弟で倉敷人の谷川辰吉から、土佐の志士らが長州と通じて反幕活動を行なうために大坂市中の放火計画を意図しているとの情報を得る。そこで万太郎は、兄三十郎、門弟の高野（阿部の変名）十郎、正木直太郎と共に志士らの潜伏場所である松屋町のぜんざい店石蔵屋を襲撃、土佐の大利鼎吉を斬殺する。

ところがその後、万太郎の名はこの年の七月作成の名簿「英名録」に記載されたのを最後に見ることがなくなる。これは、兄三十郎の死亡（慶応二年四月）後に万太郎が新選組を離隊したからだともいわれている。

維新後、大坂で道場を開いたりするが、明治十九年（一八八六）六月三十日他界する。享年五十一。墓は大阪市北区の本伝寺で兄三十郎と弟昌武と一緒に眠る。

中島 登

戦友たちの勇姿を描く

神子畑邦彦

▼炮戦三十一度、接戦七度を戦い抜く

武蔵国多摩郡西寺方村（現東京都）の出身。中島又吉の長男として天保九年（一八三八）二月二日誕生。初名を峯吉という。天然理心流の習得者。八王子千人同心の一員であったが離脱し、のちに新選組に入る。明治二年（一八六九）九月の実父に宛てた手紙に、「拙者儀五ケ年前より徳川氏に志を連ね、京地新選組に同意して、我長より武相甲三ケ国の地理並びに人気を計る事を仰せ付けられ、親子兄弟とも知らせず、天下の一大事を計るに身を隠して居る事あり」と入隊の時期といきさつを記している。

中島　登

五年前とは、元治元年（一八六四）九月であるが、翌慶応元年の六月末から七月初め頃に作られた名簿「英名録」に登の名前はない。登の名前が登場するのは、慶応三年十二月頃に作成された名簿「京都ヨリ会津迄人数」からである。慶応三年というのは、冬に土方歳三によって江戸で隊士募集が行なわれた年であり、おそらく登が正式に新選組隊士になったのは慶応三年の冬以後であろう。

また、近藤勇の内命を受け、身分を秘匿して諜報活動のようなことを行なっていたようで、実父への手紙には「遊人などと近づき心苦をつくしける」と潜伏期間中の事情を記しているが、残念ながら活躍をしめす探索記録のようなものは一切残されていない。

以後、「東京脱走より炮戦三十一度、接戦七度いたし候けれども、一度も少しも疵所これなく不（無）事にて罷り居り候」と実父への手紙にもあるように、登は会津戦争時には隊長附小頭助役、仙台では諸士差図役、そして箱館戦争では二分隊嚮導役を務めて、明治二年五月十五日、箱館弁天台場で降伏するまで、戦い抜く。

明治二年六月以後、幽囚生活の中で執筆された覚書（『中島登覚書』）にも、この間の戦争の過程を詳細に伝えている。

五稜郭の降伏（五月十八日）後、弁天台場に収容されていた登ら隊士たちは青森に送られ、二十二日から弘前笹森の薬王院、さらに七月二十一日より青森本町の蓮華寺に収容された。十月二十七日には再び弁天台場に収容され、幽囚生活を送り、翌明治三年五月静岡藩に引き渡される。

五月三日静岡に到着した登は、のちに浜松に住居し、洋蘭の栽培を行なったり、鉄砲火薬売買の免許を取得して営業したと伝わるが、明治二十年（一八八七）四月二日病没する。享年五十であった。墓は静岡県浜松市の天林寺。

最後に、『中島登覚書』について触れておこう。この覚書は、半紙判の大きさの和紙に筆で書写されているもので、戦友の消息、甲陽鎮撫隊、流山から会津への経過、会津戦争、北海道上陸、箱館での本格的攻防戦、降伏に伴う身辺の事情や私信・述懐などといった具合で綴られている。また登は、「時世に押し流され虜囚となった鬱屈と、戦死した同志への追慕と慰霊の気持ち」から、近藤勇・土方歳三以下二十七人の戦友の勇姿（『中島登の戦友姿絵』）を弁天台場の生活の中で描いている。

相馬 主計

敗戦処理の新選組隊長

神子畑邦彦

▼大久保、勝、土方の近藤助命嘆願書を持参

常陸笠間藩士船橋平八郎の子として天保十四年（一八四三）に誕生。名は、肇、主殿などとも、諱は胤貫。新選組には慶応三年（一八六七）六月以降に入隊し、はじめ局長附人数であったが、のちに平隊士に昇格する。

主計は慶応三年十二月七日の天満屋事件に参戦した。これは、陸奥源二郎ら海陸援隊の残党十六名が天満屋に紀州藩士三浦休太郎を襲撃、警護の新選組と乱闘になり隊士宮川信吉が討死した事件である。主計の活躍を西村兼文の『壬生浪始末記』は「相馬ハ勝ニ乗シ切立ル」と記している。

相馬主計

慶応四年、鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還後、新選組は甲州鎮撫を命じられ、三月一日出陣する。五日、勝沼に布陣、翌六日新政府軍と勝沼宿で戦闘、援軍なく江戸に敗走する。

四月五日、主計は本隊を離れ、流山で新政府軍に捕縛された新選組隊長近藤勇の助命嘆願の手紙を板橋の新政府軍本営に持参したところを捕縛される。手紙の内容は不明だが、大久保一翁、勝海舟、それに土方歳三のものという。

近藤の斬首後、すでに捕らえられていた新選組隊士の野村利三郎と共に釈放された主計は、旧幕臣春日左衛門の陸軍隊に属し幹部として働く。六月二十六日海路で江戸を脱走後、奥州平潟で活躍する。この頃の主計の評価は高く、八月三日の『覚王院義観戊辰日記』（義観は、輪王寺宮公現法親王の執当）には「左衛門組下之内、相馬主計、設楽半助ハ殊ニ器量ノ者也ト云」と記載されており、翌々五日には輪王寺宮より金子が下されている。

箱館へ向かった主計は陸軍奉行添役・軍監として土方歳三の指揮下に属し、箱館市中取締の任をつとめる。

明治二年三月二十三日、宮古湾に向けて回天・蟠竜・高雄の三艦が甲鉄艦を奪取するため に箱館を出港した。そのときの様子を『函館戦史』は次のように述べている。

水師提督荒井郁之助、陸軍副都督土方歳三及仏人「ニコル」、軍監相馬主計、大島寅雄、神木隊酒井良祐（頭取改役）等四十人、彰義隊笹間金八郎（差図役）等十人（襲入ノ用ニス）回天ニ乗セリ。蟠龍ニ仏人「クラート」、彰義隊木下福次郎（差図役頭取）等十五人、遊撃隊五人、高雄ニ仏人「コルラシュー」、神木隊井上玫次（頭取改役）等二十三人乗ス（中略）。時ニ（夜十時）榎本釜次郎、松平太郎来ツテ衆ト訣飲シテ去ル。

運悪く三艦は暴風に翻弄され、回天だけで甲鉄艦奪取作戦を敢行し、箱館に敗走する。

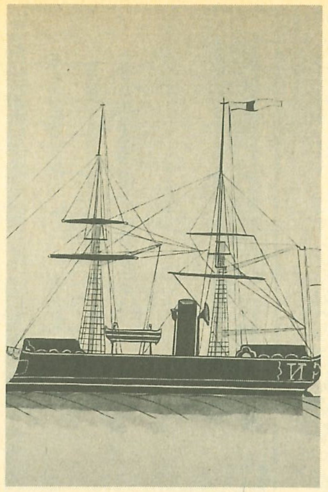
五月十一日の新政府軍箱館総攻撃では、弁天台場に籠城して抗戦したが、遂に十五日降伏する。すでに土方が戦死していたので、敗戦処理のため京都以来の新選組を代表して箱館奉行永井玄蕃から新選組隊長に任命される。

降伏後、主計は榎本武揚らと旧幕府軍幹部として東京に送られ、翌明治三年十月新島に流罪となる。二年後の明治五年十月に赦免され、在島中に結婚した植村マツと共に東京に移り住むが、突然の切腹死を遂げたという。

野村利三郎

宮古湾海戦で突撃戦死

神子畑邦彦



野村が戦死した甲鉄艦

▼甲鉄艦奪取作戦

美濃大垣（現岐阜県）の出身。弘化元年（一八四四）誕生。理三郎とも記される。新選組には、慶応三年（一八六七）六月以降に局長附人数として入隊する。土方歳三の遺品を日野の佐藤彦五郎宅に届けた市村鉄之助とは同郷で、鉄之助の兄辰之助も同時期に入隊していることから、利三郎と市村兄弟は顔見知りで、しかも仲良しと推察される。利三郎と鉄之助とは十歳近く離れていたので、利三郎と辰之助がいつも行動を共にし、そのふたりのあとを鉄之助が追っていたのであろう。また、辰之助は江戸帰還後に新選組を脱走していることから、利三郎が消極的な辰之助を誘って新選組に入隊したものとも考えられないか。辰之助は脱走を利三郎に相談したのか、利三郎は止めなかったのか、等々思いは尽きないが、本題に戻ることにしよう。

慶応四年一月三日の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還した新選組は、三月六日勝沼宿での敗走後、四月一日、下総流山に転陣するが、三日新政府軍に包囲される。そのとき近藤は「己ニ割腹ノ決心ヲ以テ暫時時間ノ猶予ヲ乞ヒ、弐階ニ昇リ三四名会合ス。土方ノ曰、此所ニ割腹スルハ犬死ナリ、運ヲ天ニ任セ、板橋総督府江出頭シ、飽ク迄鎮撫隊ヲ主張シ説破スルコソ得策ナラン、ト云フ。此議ヲ諾シ、若徒壱人、口取頭壱人、馬上ニテ板橋ニ出頭スル事ニ決スル」（『新撰組往事実戦譚書』）と、新政府軍に投降し越谷に連行される。

このときの若徒が利三郎で、「近藤某ト附添野村利三郎、村上三郎、右有馬（督府斥候有馬藤太）ト同道ニテ板橋駅官軍本営ニ至ル。村上三郎、途中ヨリ流山ニ帰ル」（『島田魁日記』）とあるように、近藤勇の従者として官軍本営に行き、近藤と共に捕縛されている。なお、流山に戻った村上は、本隊と共に会津へ向かい、大砲役として奮闘、のち仙台で降伏している。

近藤の死後、助命嘆願の手紙を持参して捕縛されていた相馬主計と共に釈放された利三郎は、一歳年上の主計と一緒に行動する。旧幕臣春日左衛門の陸軍隊に属した利三郎たちは、海路で江戸を脱走後、奥州平潟方面の戦争で活躍。箱館渡航後は、利三郎は陸軍奉行添役介として土方歳三の指揮下に復帰する。五稜郭入城のとき、行軍順をめぐって土方軍の利三郎と陸軍隊の春日が斬り合いにならんばかりの口論となったと『星恂太郎日記』が伝えている。

翌明治二年三月二十五日、「最も怖るべき」といわれる甲鉄艦の奪取・奇襲作戦である宮古湾海戦に主計と参加した利三郎は、回天に乗船し、勇敢にも甲鉄に乗り移って突撃し討死する享年二十六。

（前略）相馬氏、鉄艦ニ入リ傷ク。故ニ新選組野村氏、直ニ是ヲ我艦ニ抛ケ上ケ、自ラ数人ヲ斬リ、将ニ退カントスルヤ敵其背ヲ衝ク。水中ニ没ス。

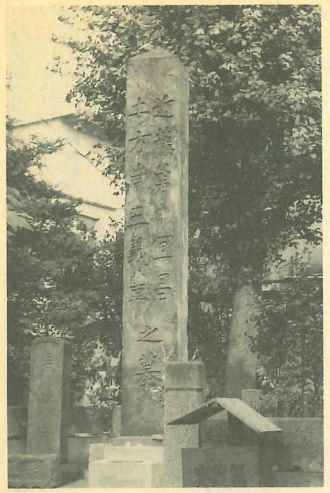
（『戊辰戦争見聞略記』）

「性質剛直ニシテ酒ヲ好ミ、事ニ臨ンデ撓マズ一己ノ英雄ナリ」といわれた利三郎の最期を惜しみ、新選組は屯所にしていた称名寺（函館市船見町）に墓碑を建立したといわれ、現在は同寺に供養碑が建てられている。

楠木小十郎

桂小五郎の放った間者

神子畑邦彦



楠木の寿徳寺境外墓地

▼美男五人衆の一人

子母沢寛の『新選組物語』によると、壬生浪士には「美男五人衆」と呼ばれる美男隊士がいたという。そのひとりに数えられた楠木小十郎（楠小十郎、楠太紋とも記す。生年不明）は文久三年（一八六三）の六月頃に新選組に入隊している。小十郎は五人衆のなかでもとりわけ目の美しい美男であったようだ。

「美男五人衆」というのは、昭和三年に子母沢寛が取材した八木為三郎翁の談話が根拠になっているもので、五人とも二十歳前後の若者でそれぞれ際立った美しさを持っていたようだ。

小十郎のほかは、脱隊した馬越三郎（大太郎）、甲陽鎮撫隊そして箱館戦争と転戦するも晩年は楽隠居を送った山野八十八、芹沢鴨の横恋慕に間を取り持とうとした佐伯又三郎の罠にはまって恋人あぐりと駆け落ちし、佐伯、芹沢配下に斬殺された佐々木愛次郎、父神威斎と共に入隊したが気弱な性格で隊に馴染めず親子で脱走した馬詰信十郎（柳太郎）の四人である。

楠木小十郎は長州の桂小五郎の指示によって新選組に入隊したとされている。永倉新八の『新撰組顛末記』文久三年八月二十五日の項に、

「桂小五郎は同志の御倉伊勢武、荒木田左馬之助、越後三郎、松井竜三郎の四名をえらんで決死の刺客となし方略をさずけてしのびしのび京都につかわした。

右の四名ははるばるの道中を離ればなれに京都に着いて八月二十五日壬生村の新撰組屯所におもむき隊長近藤勇に面会をもうしこんだ。（中略）

二、三日して新入の四人をまねき隊長近藤からあらためて国事探偵の職をさずけ、当座の手当として金百両をあたえ、隊には制服もござればさっそく調えられるようにいたされよともうしわたした」

とあるように、桂小五郎の指示によって新選組に入隊した者がかなりいたようである。小十郎本人の名は見つけ出せないが、在京中だった真木和泉の日記の文久三年七月十七日付に、「楠十来る」と小十郎が真木和泉と接触していたと思われる記述があり、小十郎も長州の間者のひとりだったにちがいない。「楠十」とは、桂小五郎が楠木小十郎につけた変名ともいう。

いずれにしても、人に知られず間者として隊士のままでいることに限界があったようだ。遂に、近藤は永倉新八らに命じた。

「かれらをこのままにはすておけぬ。そくざに殺してしまえ」

と。その結果、小十郎、御倉伊勢武、荒木田左馬之助の三人が殺害され、松永主計、越後三郎、松井竜三郎の三人が逃走したという。

『新撰組顛末記』文久三年九月二十六日の項に、「小十郎をひったて隊長近藤勇の面前へつれていこうとするとかれこれと抗弁してきかぬ。癇癪強い原田左之助がそれとみて眉をキリリとつりあげたとみるまに、腰をひねって水もたまらず小十郎の首を斬って落とした」

と、小十郎の最期が記載される。享年十七歳と伝わる。東京都北区の寿徳寺の境外墓地に慰霊碑がある。

稗田利八

九十歳まで生きた隊士

神子畑邦彦

▼数度の負傷を生き延びるが、万策尽きて降伏

もと池田七三郎を本姓とするが、維新後、稗田利八と改名する。上総国山辺郡田間村（現千葉県東金市）の出身。商人佐五七の三男として嘉永二年（一八四九）十一月十三日に誕生。

慶応元年、十六歳で「武士になりたい」と言って江戸に出た利八は、牛込飯田町仲町下にある一刀流の天野静一郎道場に入門する。その後、師である天野の推挙により、旗本永見貞之丞の家来となる。その永見家に、奥州津軽出身ののちに伊東甲子太郎らと御陵衛士として分離脱隊した毛内有之助（監物とも）がいて、利八の新選組入隊に影響を与えたと伝わる。

稗田利八

慶応三年（一八六七）十一月三日、上京して新選組に入隊する。同年十二月初旬頃の隊士名簿「京都ヨリ会津迄人数」によると、局長附人数に属している。

新選組の新入隊士募集に応募した利八はこのとき初めて土方歳三に対面し、次のように土方の印象を語っている。

黒い紋付を着て仙台平の袴をはいた土方先生が出て来て挨拶しました。いい男ですから、一万石や二万石の小大名とよりは見えませんでした。髪は総髪を束ねて、「いや、御苦労でした、わたしが土方です」というようなことを第一番にいいました。（『新選組聞書』）

利八が入隊した十五日後、御陵衛士として分離脱隊していた毛内は新選組と戦闘となり討死している。尊敬をし、影響を受けた毛内の死を利八はどのように受け止めたのであろうか。

慶応四年一月三日の鳥羽伏見の戦いに参戦した利八は、右腋下に銃弾を受け負傷し、十四日富士山丸で横浜に移送され幕府の設けたフランス語伝習所（横浜市中区）を使用した仮の病院に収容される。

「これは外国語学校と言うのを臨時に病院にしたもので、われわれはここで半月程手当を受けた」（『新選組聞書』）と語っている。

同年三月六日、甲州勝沼宿での戦闘で利八はまたも銃弾が右耳から鼻へ貫通する重傷を受けるが、命には別状なく、戸板で会津へ運ばれる。

甲陽鎮撫隊として勝沼宿に出陣したときの様子を利八は、「洋服の上着のような恰好の木綿の綿入れを着て、これへ撃剣の胴をつけて、ズボンをはいて、草鞋ばき、刀は白木綿の帯をしめて、これへさしている。白い木綿の鉢巻をしてあったと覚えている」（『新選組聞書』）と語っている。

傷が癒え会津若松城下で戦列に復帰した利八は、九月五日の如来堂での戦いで戦死したとされるが（『島田魁日記』『中島登覚え書』『立川主税戦争日記』『谷口四郎兵衛日記』などが全員戦死と伝える）、幸運にも生き延び、水戸諸生軍と水戸へ逃走するも万策尽き、船で利根川を下り、十月四日高崎領銚子で降伏する。新選組の名を隠したまま蔵牢に収容され、翌年の三月に江戸へ送られると、会津屋敷で一年間謹慎したのちに放免された。

昭和十三年一月十六日、享年九十でこの世を去った利八は、東京の港区麻布台にある真浄寺に静かに眠っている。

田村銀之助

五稜郭脱出勧告を拒否

神子畑邦彦

▼十三歳で近藤と土方に仕える

陸奥磐城平（現福島県）の出身。田村半右衛門の五男として安政三年（一八五六）八月一日に誕生。銀次郎とも記される。兄一郎（市郎）、録五郎（緑五郎、録四郎、銀五良）も共に新選組隊士。慶応三年（一八六七）秋に江戸で入隊した銀之助は最年少の十三歳で、両長召抱人として近藤勇と土方歳三に仕えていたようだ。

慶応四年の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還した新選組は、勝沼・流山・会津へと転戦していく。銀之助は少年隊士であったので実戦参加はなかったが、流山から会津への逃走について、大正九年（一九二〇）に次のように語っている。

田村銀之助

（前略）布佐という所で小舟数隻に分乗しました。官軍はそれと知って直ぐ追っかけて来ましたから、矢張り危険であったが、皆舟に乗込んで仕舞った後ちでしたから幸でした。それから銚子に着きまして、観音の前の大きな宿屋に一同宿陣致しました。やがて夫々寝に就きました深夜に、又々官軍に取囲まれました。（中略）翌朝大きな二艘の船を雇い、之に分乗して水戸の霞ケ浦脇を経て、板子という所に着船した。そうして陸路を水戸の港を経て浜街道を平方まで行きました。平方から奥州に入る目的で行きましたけれども、奥州は其当時、総て官軍でありまして、通行が出来ませぬから、平方から又引返しまして、間道を棚倉の方に出ました。（中略）翌朝約十四里もある人跡絶えた間道を経て、矢吹という所に出まして、矢吹から長沼という所に出で、長沼から「セイシ堂」という所に着きました。是は会津の堅固な要害の地でございます。漸く会津に入りました。会津の方では大に歓迎されました。暫く美代という所に居りまして、後、若松の方に行きました。（後略）

（『史談会速記録』三〇九輯）

銀之助の逃走は、会津から仙台、仙台から箱館へと続き、その様子が克明に語られている。

箱館に渡航後は総裁付として榎本武揚に仕えた銀之助は、五稜郭へ向けて進行中に初めて戦闘前線に立ち、実戦参加を経験している。

明治二年五月、五稜郭の陥落も時間の問題となったときに榎本や大鳥圭介から五稜郭脱出を進言された銀之助は、「十五の年で命が惜しければ、五十でも惜しい、五十で惜しければ七、八十でも惜しいのです。私も武士の家に生まれたものであって、皆さんと一緒に此城に立籠もった以上は死する覚悟である。死花を咲かせる積りである」と答えて拒否したという。

開城後、銀之助は津軽の弘前で謹慎させられていたが、謹慎が解けると上京して黒田清隆や田島圭蔵らの世話になる。そして、黒田の北海道開拓にも同行している。どうやら榎本が黒田や田島に銀之助のことを託したものらしい。

その後の銀之助は、陸軍に属したり警察署に奉職したり、再び黒田に従って北海道開拓に同行したりと波乱に富んだ後半生を送り、大正三年（一九一四）八月二十日、六十五歳の生涯を終える。向こう意気が強く喧嘩っ早いが情に厚い人であったと伝えられている。墓は東京都文京区の智香寺。

市村鉄之助

託された歳三の遺髪！

神子畑邦彦

▼土方歳三の寵遇を受ける

明治二年五月十一日、義豊箱館ニ於テ戦死ニ先ツ数日、事成ラスシテ命ノ旦夕ニ蹙ルヲ察シ、京師以来随従シテ尤モ寵遇セシ旧濃州大垣藩市村鉄之助ト云ル十六歳ノ少年ノ、共ニ必死ヲ期シヲ憫ミ懇々後事ヲ遺嘱シ、我写影及鬢髪数根并絶命ノ和歌一首ヲ齎シ、窃ニ仝港停舶ノ某外国船長ニ託シテ古郷ニ護送セシム。船長其義ヲ感シテ快ク之ヲ諾ス。鉄之助、少年ト雖モ頗ル勝気アリ、性亦怜悧、百難ヲ凌テ遂ニ義豊ノ郷里ニ帰。其遺物ヲ伝テ遺命ヲ全ス。

（『両雄士伝補遺』）

激戦の勇者土方歳三も遂に最期を悟り、戦死する数日前に京以来随従し最も寵遇していた美濃大垣出身の市村鉄之助（当時、十六歳）に髪と辞世の和歌を託し、箱館港に停船していた外国船に頼み脱出させたというのである。

十六歳の少年にもかかわらず勝気で戦死をも覚悟し、歳三に不憫に思わせた鉄之助は、兄辰之助と共に慶応三年（一八六七）秋頃に新選組に入隊している。

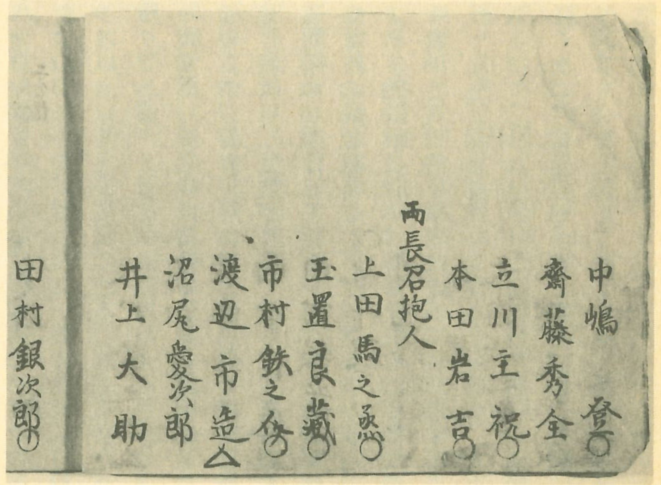
慶応三年十二月初旬頃の隊士名簿「京都ヨリ会津迄人数」のなかに、両長召抱人として鉄之助の名前を見ることができる。ちなみに兄辰之助の名は局長附人数に見ることができる。すでに幕臣に取り立てられている者を正式の隊士として扱い、それ以降の入隊者を局長附人数、両長召抱人として区別していたようである。名簿「仙台ヨリ脱走後」に、土方家来として、沢忠助、松沢乙造、田村銀之助、そして鉄之助の名が記されていることから、土方歳三の召抱人として入隊したのであろう。

明治二年七月初旬、鉄之助は日野在住の土方の義兄佐藤彦五郎のもとを訪れ、土方の写真、遺髪、そして辞世の和歌を記した紙片を届けている。身を隠し、姿を変えて、やっとたどり着いたというのである。そして、佐藤家では鉄之助の身柄を預かり、読み書きや手習いのほかに剣術まで身につけさせ、明治四年三月に郷里の大垣に帰らせたという。

（佐藤昱『聞きがき新選組』）。

「明治四年九月五日付島田魁宛大東屋河衛書簡」によると、鉄之助が箱館を脱出したのは明治二年四月十五日のことであったらしい。そうだとすると、土方は一カ月前にはすでに覚悟を決めていたことになる。また同書簡によると、鉄之助の旅費や食費などの出費を配慮して、土方は遺品のほかに刀二本を鉄之助に持たせたというが、その刀の行方については不明である。

大垣に帰った鉄之助のその後については、明治十年の西南戦争で西郷軍に身を投じ、戦死したと伝えられるのみである。



市村の名が見える「京都ヨリ会津迄人数」

森常吉

抗戦の責を負って切腹

神子畑邦彦

▼箱館戦で入隊した桑名藩士

伊勢桑名藩士小河内殷秋の長男として文政九年（一八二六）六月十二日、江戸北八丁堀の藩邸で誕生する。幼名は七郎。伯父の森陳功の家を継ぐ。元服して彌一左衛門。字は子明。諱は陳明。慶応四年（一八六八）九月十七日の新選組加入時に常吉と変名した。

桑名藩士として藩の御横目（目付）・大目付などの役職を務めた森は、藩主の松平定敬が元治元年（一八六四）四月に淀藩主稲葉正邦のあとをうけて京都所司代に就任すると、その公用人となる。定敬の所司代就任時はまさに幕末の動乱期であり、京師を中心に尊攘派と幕権派の抗争が著しく、京都守護職である実兄の会津藩主松平容保と共に京師の守衛・朝幕間の周旋に努力をする。

慶応三年十二月九日、王政復古の大号令が発せられ、幕府をはじめ京都守護職・京都所司代などが廃止されたが、桑名・会津などの藩士のなかにこれに反抗する者が多くあり、薩長藩兵と衝突する形勢であったため、定敬は容保と共に徳川慶喜に従って大坂に下った。このとき森は、留守役となって残務処理に当たり、新選組の屯所を訪ね、土方歳三と今後の事態の処理について協議をしている。

翌慶応四年一月三日の鳥羽伏見の戦いのあと、定敬は容保と慶喜に従って江戸へ向かったので森は他の公用方と共に大坂から江戸へ直行する。

五月十五日の彰義隊上野戦争に、森は五十名の桑名藩兵と共に参加するが、新政府軍の前にもろくも敗走、新政府軍の追及を逃れ、隠れ家に身を潜めるが、八月外国船に便乗して仙台に逃れる。そして、松島で半年ぶりに主君定敬と再会する。定敬は江戸から越後柏崎へ行き、ついで加茂、そして会津から仙台に逃れ、箱館に渡るために来ていたのだ。すでに東北諸藩は新政府軍に降伏恭順しており、森は定敬に随行して榎本武揚の軍艦に乗船し箱館に向かうことになる。そしてこのとき森は、新選組に加入するのである。というのは、旧幕陸軍の諸隊は箱館渡航にあたって隊士たちの自由裁量とし、希望者のみを乗船させることになり、特に桑名、備中松山、唐津の藩士たちは随行人数を制限され各藩とも二、三人ないしは数人と限定され、その選に漏れた藩士たちは人数の激減した新選組に加入して箱館に渡ることになったからである。

十月二十日、主君定敬と共に箱館に上陸した森は、その後、新選組頭取改役として部隊を率い、弁天台場を本営として箱館市中取締に努める。一方、定敬は箱館山上神社にて謹慎していたが、翌年四月、迎えにきた家老酒井孫八郎らと箱館をあとにする。そして降伏後、定敬は永預けに処せられたが、明治五年に許されている。

明治二年（一八六九）五月十一日早朝、海陸より新政府軍の総攻撃が開始され、十五日遂に弁天台場も降伏する。

そして森は、投獄後の明治二年十一月十三日、主君と藩の罪を一身に負い、桑名藩の抗戦責任者として東京深川の旧藩邸で切腹する。遺骸は東京都江東区の長専寺に葬られ、三重県桑名市の十念寺に分骨された。

森常吉の墓（十念寺）

赤誠一途の道をゆく

土方歳三の足跡完全踏破記録

釣 洋一

□歴史紀行の新しい試み

歴史の考察は、複数の古文書を照合することで明らかにできる。しかし、その基本史料として絶対視される古文書の記述が、事実に反していないかどうかを知る科学的検証法はないものか——と、いつしか思いつめるようになっていた。そんな折も折、岩手県宮古市の女遊戸というところに一カ月ほど逗留して、土方歳三や甲賀源吾、さらに荒井郁之助らが参戦した「宮古湾の海戦」を考察したとき、船の速度と潮流の関わりに突き当った。

回天艦に搭乗した海軍奉行荒井郁之助は、山田湾大沢港から宮古湾鍬ヶ崎港まで五里といい、同じ船に乗った安藤太郎は十里といった。二人のいう五里の差は何であるのか——そんな疑問で始まった。

地図を展げて測ってみれば、荒井のいう五里は陸路で、安藤のいう十里は海路であった。

回天艦の搭乗員にとって陸路を記載する意味がわからず調べてみれば、何と土方歳三と野村利三郎が大沢へ上陸して鍬ヶ崎の敵情斥候を行ったという話が地元に残っていた。

疑問はさらにつづく。

荒井郁之助の手記では、宮古湾奇襲の山田湾出帆を「午後三時」と記す。そして、安藤太郎は「回天の航走を以て算するに、此夜四時に官艦に達すべし」とあり、さらに、新選組の島田魁の『官軍海軍日記』によれば、「廿五日朝六頃、敵舟回天艦アメリカフラフヲ上ケ来リ」と認めている。

ということは、安藤太郎の「此夜四時に官艦に達すべし」というのは、二十五日の午後四時とはいい難い。荒井の「午後三時を以て山田港を抜錨と定めたり」ということを考え合せても、二十四日のことと解釈せざるを得ない。

しかし、荒井説の午後三時に山田湾を抜錨して、十里を一時間で走航できるのか——といえば、それは絶対に不可能ということがすぐにわかる。回天艦の速力は、十二ノット（一ノットは時速一八五二メートル）であるから、一時間に二万二二二四メートルの走航でしかない。一里は三九二七・三メートルで、十里は三万九二七三メートルになる。回天艦の十里に要する時間を算じるには、一時間の走航距離の二万二二二四メートルを六十分で除算して、一分間の走航距離三七〇・四メートルを算出。十里の三万九二七三メートルを一分の三七〇・四メートルで除算して、一〇六・〇二八六分となるが端数を切り捨てて、一〇六分。つまり一時間四十分で、十里を走航するということになる。しかし、抜錨直後や官艦到達直前には全速力で走れるはずがない。そこで二十分ほど加算して、二時間かかると算段した。

それにしても、午後三時に抜錨という荒井の言から、安藤のいう午後四時では計算が合わない。往時の一日は、明け六ッに始まるから、現在の午前二時や三時は夜だった。そんなことから午後三時といったのではないだろうか。安藤の言も同じように考えれば、荒井の山田湾抜錨時間は、二十五日の午前三時と断定せざるを得ない。安藤太郎の「此夜四時」とは、午後四時ではなく、午前四時をさしていると解釈した。

しかも、子供の頃の海水浴での干満の差による泳ぐ速度の相違を思い出した。船の速度にしたところで、追潮と遡流ではおのずと違ってくることに気づいた。仮に四ノットの遡流に向って、四ノットの速度で突きすすむ舟は、その場に停止した状態になる。

海戦の舞台となった宮古湾

実際問題として、一六七八トンの回天艦がどれほどの潮流影響を受けるか定かでないが、潮流変化の時間を知る必要がある。そのためには、旧暦と呼ばれる太陰太陽暦を現行のグレゴリオ暦に換算して、海戦のあった明治二年三月二十五日が西暦1869年5月6日になることを確かめ、新旧暦の合致した日、すなわち現代の5月6日と旧暦の三月二十五日が合致する日の時間計算と干満の時間をさぐる。

近年なら昭和五十年（一九七五）が合致する。日ノ出が四時三十五分で、日ノ入りが十八時三十七分。月ノ出が一時三十九分で、月ノ入りが十三時四十三分。満潮時は午前〇時一分と午後十二時二分。干潮時は午前六時二十分と午後六時一分と『岩手日報』の「あすの暦」に出ている。

明け六ッは、日ノ出の三十六分前。日ノ入りは、逆に日ノ入りの三十六分後。つまり、明け六ッは三時五十九分で、日ノ入りが十九時十三分となり、昼間の長さが十五時間十四分。それを十二等分した一時間十六分十秒が、往時の半刻で現在の一時間に当る。夜の長さは八時間四十六分になって、半刻が四十三分五十秒になる。

干満の最高速度は知り得ないが、この日は月齢をみても一番弱いときである。憩流（潮の動きが完全に停まる時）は午前三時十分（干潮に転換）、午前九時十分（満潮に転換）、さらに午後三時（干潮に転換）、午後九時（満潮に転換）となるので、回天艦が憩流時刻の三時に抜錨、弱い干潮の後押しで速度を早めて出帆。戦闘後は強くなりつつある追潮に乗って逃走したということがわかった。

これらの計算で、荒井、安藤の出帆ならびに海戦時間の誤りを指摘できた。だからといって、これらの考察に対しての検証は不可能である。それは彼らが闘った剣戟の実践ということでも同様で、現代のわれわれに体験することは叶わない。そこで思いついたのが、旧道を歩くことだった。彼らが歩いた道をたどれば、路傍の道祖神や常夜灯、さらには馬頭観音とか地蔵などに、往時の息吹きを感じ取れると思った。

昭和四十九年十月二十五日、宮古の女遊戸から浄土ヶ浜を経て、竜ヶ崎、鍬ヶ崎、宮古駅まで、朝の八時から十六時二十分まで、断崖を登り、海岸沿いのけもの道を歩いたことがきっかけだが、その後、日光駅から鬼怒川温泉まで、土方歳三の足跡を追って歩いたことがある。そして、平成八年三月二十六日、東京の伝通院を出立、四月十日までの十六日間、彼らの日程通りに歩くことを決意した。

彼らが中山道上洛の道を歩き出した文久三年二月八日は、西暦1863年3月26日で、平成八年の暦が奇しくも百三十三年前の暦と新旧の日付が合致した。

それは、日ノ出入りや、月の出入りに月の満

ち欠けも同じであるから、旅の風情も汲み取れると思った。かくして、それまでの現地を歩くというイメージを一変して、歳三の歩いた道を歩くという大冒険が始まった。

それは、次のような十二回の旅となった。

① 平成8年3月26日～4月10日（16日間）東京～京都（旧中山道）五七五キロ。

② 平成8年10月7日～10月8日（2日間）宮城県渡波駅～風越峠～折浜～小竹浜～渡波駅。野蒜駅～東名浜。寒風沢島。およそ三〇キロ。

③ 平成8年10月31日（1日のみ）松島から船で大高森に渡り、里浜～大高森～野蒜駅まで八・五キロ。

④ 平成8年12月5日～12月6日（2日間）北海道鷲ノ木～川汲峠～五稜郭（茅部歳三街道）八二キロ。

⑤ 平成9年2月23日～3月26日（4日間）東京丸の内～山梨県勝沼大善寺（旧甲州道中）一二五キロ。

⑥ 平成9年4月3日（1日のみ）千葉流山～東京赤坂の勝海舟邸跡まで。三七キロ。

⑦ 平成9年5月9日～5月10日（2日間）東京上野駅～日野石田寺まで（旧甲州道の夜道）三七キロ。

⑧ 平成9年6月16日～6月20日（5日間）北海道江差～館城跡～大野～五稜郭～鷲ノ木霊鷲院。駒ケ岳登頂。一二三キロ。

⑨ 平成9年9月30日～10月3日（4日間）函館・歳三最後の地～松前～江差。一六四キロ。

⑩ 平成9年11月16日～11月29日（14日間）東京牛込柳町～草津～追分～伏見～大阪天保山。（旧東海道）五四〇キロ。

⑪ 平成10年3月15日（1日のみ）東京牛込柳町～渋谷～鶴川駅～小野路の小島資館。三六キロ。

⑫ 平成10年4月3日～4月18日（16日間）東京丸の内～日光～会津若松～勢至堂峠。母成峠～土湯温泉～福島～仙台～石巻～折戸浜（旧会津西街道ほか）五八八・六キロ。

以上、六十八日間、二三〇九・一キロ徒歩の旅を終えた。一日平均三三・九五キロ強になるが、道に迷って歩いた余分な歩行距離は計算されていない。地図で測定した目的地へのストレートな距離計算である。

それでは、十二回の旅の中で、印象深い話をいくつか拾ってみよう。

□旧中山道ひとり旅

平成八年三月二十六日の旧暦は二月八日だった。それは文久三年二月八日、土方歳三や沖田総司らが清河八郎の献策によって中山道を京都に上った日で、西暦1863年3月26日であるから、新旧暦の一致した珍しい日だった。

さらに、上洛隊士の名簿を漁っていて、諏訪山熊次郎と谷右京の二人が最長の六十三歳であることがわかった。この年、私も彼らと同じく、数え年六十三歳であったことから、彼らへの挑戦を思いつつ、三日と続けて歩いたことのない私は、無謀な十六日間徒歩の旅に挑む決心をした。

友人たちには反対された。その声が高くなればなる程に、挑戦の気持は、より一層たかまっていった。

出立日、文京区伝通院の山門を午前九時に出た。出立前の不安は、それぞれの宿場に、現在も泊れる宿があるか否かの問題であった。また宿があったとしても、旧道から離れていれば、旧道へ戻る距離が無駄になる。行き当りバッタリの宿さがしで、一切予約なしで歩き出した。

昔の例に倣って板橋まで見送って下さったのが、武蔵野の幕末史研究会の岡野茂さん。途中の水道橋駅まで一緒したのが、同研究会会長の小美濃清明さん。そして、もう一人。本誌編集長の牧野洋さんは巣鴨駅前まで送って下さった。

家を出る時、背に担ぎあげた荷物は、それほど重いとは思わなかったのに、浦和に入った頃には、腰がふらついて、真っすぐに歩けなかった。初めての徒歩の旅であるから十六日間のペース配分などわかるはずもなかった。また一時間四キロのノルマを課したのも五日目になってからのことで、正に暗中模索、ただただ歩く機

械になっていた。

往き交う車のヘッドライトがやけに眩しい。左側の骨盤に、胴がめり込んでいくような沈殿感覚に陥った。やっとの思いで大宮に着いた後、宿さがしに一時間以上放浪。カプセル・ホテルに潜り込んで初日を終えた。

二日目は鴻巣泊り。わずか一八・七キロ強。彼らは、前日の大宮入りが遅くなっての皺寄せと判断した。私自身は十五時に宿に入り、新選組隊士関川代二郎の後裔郡義武さんから頂戴した寝袋や着替え、それにカメラなど三分の一ほどの荷物を自宅に送り返した。

三日目は本庄泊りである。

雪に埋もれた和田峠

先発宿係の近藤勇が、三番芹沢鴨組の宿舎を取るのを忘れたために、芹沢がごねり出し、宿場の道路いっぱいに篝火を焚いたといわれる。芹沢の行為は、単なる嫌がらせとばかりはいえないと思った。

それまでかいていた汗も引いて、夜のとばりに包まれた本庄の町に入った頃には、ぶるっと身震いするほどの寒さに、早く宿に入って風呂に浸りたいと思った。しかし、三軒の宿に断られて、それこそ「プッツン」寸前だった。爪先から頭のてっぺんまで、舐めずるような女将の視線にたじろぎ、一夜の宿を求めて哀願すべきところなのに、思わず視線を外した。ヒッチ・ハイクの貧乏学生でも見るような目つきで、「今夜は満室で――」と、通り一遍の挨拶だった。

三軒目のホテルに断わられて外に出ると、いささか頭に来ていた。四軒目のサウナ・ホテルに宿が取れ、風呂で手足を伸した時、芹沢の心境が手に取るようにわかった――と思った。

この一件は、芹沢一人を悪者にした永倉新八の記述が、事実を歪めているような気がした。永倉新八の『新撰組顚末記』では、彼自身が傍観者的存在になっているが、土方、沖田、山南、藤堂、原田、平山、野口、平間と一緒に篝火を焚いたはずである。そうでなければ、後日、近藤が芹沢に替って組長になる時、石坂宗順が土方たちが近藤のいうことをきかないようだから組替えをしようなどとはいわないと思った。

篝火の一件は、土方や永倉も同調したとしか考えられないほど、寒さと宿の定らぬ腹立たしさが、われながらご都合主義で貧しい精神の持ち主で情けない男と反省し、芹沢への思いを馳せた一夜でもあった。

四日目の三月二十九日は、鶴屋南北の『東海道四谷怪談』で知られる、お岩さんの三百六十年目の命日だが、そのことをすっかり忘れていた。高崎に入る手前で、左足首が鋭い刃物で刳られたような痛みと衝撃が走った。三十分ほど身動きができず、その場にへたり込んでしまった。思わず「お岩さん助けてヨ！」とつぶやいた。

この日、幕末研究会の小美濃さんたちが高崎でサポートして下さるということがなければ、もしかして徒歩上洛の旅に終止符を打っていたかも知れない。幸いにも、足の痛みは片方ずつで、両足同時に疼くことがなかった。その翌日、嶮しい碓氷峠を越えた。

中軽井沢の沓掛で泊った「桝屋」と長久保の「よねや」の両宿は、休業と廃業ということであったが、「京都まで歩いて行くのだが、蒲団部屋にでも泊めていただけませんか――」と哀願して泊めていただいた。

膝まで雪に埋った和田峠。下諏訪側は雪で越えられずに国道を歩き、後日、再挑戦したことも思い出深い。宿場の光景は奈良井が一番美し

かった。この旅で一番関心を寄せたのは「一里塚」である。妻籠宿に入る直前の上久保の一里塚では桜は咲いていなかったが、御代田の枝垂桜の一里塚はことの外、印象深かった。

中津川を四時半に出て、予定の伏見に宿がなく、可児のホテルに入ったのが二十三時。休憩時間の一時間を引いても十七時間半も歩いたことになる。トラックが往き交う夜の国道を夢遊病者のように歩いた。今にして思えば、ゾッとする光景である。

雨の加納を五時に出立した十三日目の四月七日は、宿泊予定の柏原に宿がなく、二十二時に入った「マドンナ」というホテルはモーテルで、隣りのホテルが米原市。私の泊ったホテルは山東町だった。このホテルでは、薄汚れたバスに湯を張って手と足を伸すと、何やら小さな白い異物が浮揚していた。不快な思いで、そうっと拾いあげてみて驚いた。それはなんと自分の足の爪だった。その後、両足六本の指の爪が剝がれた。

そして忘れられないのは、高宮宿を過ぎた豊郷で出会った加藤ひささんが、いったん別れた後、二キロの道を自転車で追いかけて来て、おにぎりを届けて下さったことである。人情の機微に胸を熱くして、ただただ頭を下げるばかりだった。

四月十日の正午、予定通り三条大橋を渡り、光縁寺、新選組屯所の田野さん、近藤、芹沢らの宿舎になった八木家、それに新徳寺、壬生寺に挨拶して、土方らの足跡を追った中山道の旅は終了した。その後、宮川町の歌舞練場脇に宿を取り、壬生寺から四条通りを宿まで歩いた。

翌朝、宿から伏見街道を寺田屋まで歩いたが、この歩行距離は計算の外である。その日大阪に泊り、翌日、京都の石田孝喜氏と島原の輪違屋で、花琴太夫さんを囲んで祝杯をあげた。

□旧東海道上洛の道

慶応三年十月二十一日（1867・11・16）池田七三郎こと稗田利八ら新入隊士を引率した土方歳三が、大政奉還の急報に慌てて上洛した足跡を追って、牛込柳町から同じ日の明け六ッ（5時41分）にスタート。森井寿栄、馬場秀一両氏がサポーターとして随伴。

この日の土方たちは、品川の釜屋で昼食をとり、神奈川の大米屋に泊ったというが、当方は委細かまわず戸塚まで足を伸した。途中、横浜駅を越した勧行寺で、天然理心流の始創者近藤内蔵助長裕の墓に詣でた。二日目の小田原では、新選組の後裔村田美佳子氏宅に世話になった。

村田家の長男佑介君の話が面白い。

昨年のことだが、幼稚園でのこと、キリン組の佑介君に、園長先生が質問した。

「あなたは何組ですか？」と聞かれ、

「ハイ！　新選組です」と即座に答え、驚く園長先生を尻目に、

「だって僕、新選組の子孫だもん」といい、最近では、

「釣先生の集りなら、新選組の子孫として、ぜったいに出る」といってきかないというから頼もしい。

ところで、歌の文句ではないが、「箱根の山は天下の険」と謳われる通り、箱根の旧道はきつかった。沼津宿泊の予定が三島でダウンした。しかも、朝起きてびっくり。服を着たまま、ベッドの上で「大」の字だった。風呂に入らず、ビールも手つかずのままだった。とんでもない初体験である。

沼津の長谷寺で、新選組隊士岩崎一郎の墓に詣でた。途中、登校中の片浜小学校二年の女児童と同行、楽しいひとときを味わった。

道端で立ち話をしているお母さん方が、異様な出で立ちの私に、疑惑の視線を投げている。

「おじさんは人さらいじゃないよ」といったところ、

「人さらいって？」と聞き返す。

「誘拐犯！」といったら、すぐにわかった。現代っ子は、難しいことばの方を知っていると感心させられた。東海道は富士山が見守ってくれるので心が和む。唯一、富士山を見損ったのが薩埵峠。暗いうちに通ったので、ここだけはもう一度、撮影に来たいと思い、心を残した場所である。

土方たちは、昼、富士の絶景を満喫したに相

違ない——そう願って、峠を降りた。

御油の松並木は素敵だった。

赤坂を抜けると本宿で、近藤勇の胸像が建立されている法蔵寺。近藤の首級を埋めた場所と喧伝されているが、その実は、土方歳三ほか戊辰戦争で散った伝習士官隊の英霊を祀ったものと思う。

九日目の二十四日、岡崎の矢矧橋を渡ったところで、新選組研究の同志柳敏之氏とドッキング、知立、鳴海、宮の渡しまで三十キロ程随行。この日は彼の家に泊めていただいた。

宮から桑名までの海上七里の渡しは、名四国道23号線を歩いた。考えてみれば、土方たちが舟に乗った場所も、すべて歩き通しているということを改めて確認した。

岡崎・本蔵寺の近藤勇の胸像

鈴鹿峠は土砂降りだった。この東海道の旅は十四日中六日も降雨に見舞われて難儀した。

土方らは十日目に四日市に泊り、十三日目の十一月三日、現在の十一月二十八日雪の京都に入ったが、今回の旅は逢坂の関を過ぎた追分から伏見へ抜けて大阪の天保山まで足を伸した。

六地蔵駅で京都の結喜しはやさんと合流、京阪八幡駅まで同行した。

サポーターで思い出したが、甲州道を勝沼まで歩いた時は、名古屋の柳敏之氏が全行程を踏破した。高尾から鳥沢まで丸一日、馬場秀一氏と井上武夫氏が同行。この旅で、大砲二門と弾薬を運ぶ彼らを偲んだ時、日野で遊びこけたために甲府城の入城を果せなかった——という机上の想像はぶっ飛んだ。笹子峠を歩いた同行者全員、こんなところを歩いたのかと目を見合せて驚いた。

戦いに敗れた者が、大砲を置き去りにするのは理の当然。それを引いて逃げるなど愚なことだし、ぜったいにあり得ない——と思った。

勝沼の敗戦で印象に残るのは、猿橋を焼き落そうとする隊士らを叱責した佐藤彦五郎の美談だった。

□歳三散華の道

平成八年十二月五日の六時十二分、鷲ノ木の霊鷲院から、茅部歳三街道を南下、川汲峠から五稜郭の道に挑んだ。一泊二日の旅である。

この日は朝から雨だった。二日目の川汲峠越えは、百二十八年前の歳三らの進軍風景を再現するように雪が舞った。彼らの上陸時は積雪三十センチというからもっと厳しかったのだろう。川汲峠にさしかかる手前、一台のパトカーに呼び止められた。

「こんな吹雪の中、どこさ行くの——」

「五稜郭まで歩いて行きます」

黄色のビニール・ポンチョの襟元を冷たそうにつまんだ私の姿に、巡回中の警官がいった。

「そんなら送ってあげるから乗んなさい」

親切はありがたいのだが、車に乗っては歩く意味がなくなる。

「昨日、鷲ノ木から歩き出したのですが、土方歳三の足跡を追っての実体験をしているものですから、車に乗るわけにはいかないのです」

「おお、榎本武揚のことですネ。わかりました。道中気をつけて。何かあったら電話下さい。すぐ助けに行きますから——」

といって走り去った。

吹雪のために川汲峠の旧道は歩けず、隧道を抜けると別のパトカーにまた出会った。

「昨日、鹿部を歩いていたでしょう。この雨の中、黄色の合羽を着た男性が、朝からずうっと歩いているけど、何かあるのかなァと署で話題になっていましたョ」

「まさか、オウム真理教の逃亡者と間違えられたわけではないでしょうネェ」

そんなやりとりの後、函館の宗原美沙子さんと出会い、五稜郭まで同行した。雪の降るなかを同行することを家の方たちがよく許可して下さったものと感心した。

この旅は、東京歴史研究会の副会長をつとめる湯原節子さんの紹介で、弟の磯部吉隆氏の親切な案内に始まり、森町役場の「町おこし研究会」の若松幸弘会長をはじめ、木村哲二、岩田真知、中西清といった諸氏との親交を深めた。

三回に分けて踏査した北海道の旅は、二度目の江差～函館～鷲ノ木ルートの時は、全行程の完全サポートをして下さったし、最終日の六月二十日には、私の六十三回目の誕生日を祝って、駒ケ岳への登頂案内もして下さった。

十月の第七回「戊辰役東軍殉難者慰霊祭」が江差で行われるのを記念して、函館～松前～江差の踏査を考え、新選組ツアーでは通れない旧道を完全踏破した。この時も、矢不来や吉岡峠の下見にも同行案内をつとめてくれ、さらに大会終了後、鹿部の飛行場からセスナをチャーターし、函館五稜郭や四稜郭、川汲峠に上陸地の鷲ノ木浜や大沼駒ケ岳などを上空から案内もして下さった。

上空から見た土方歳三の道は、余りにも小さな箱庭で、苦労して歩いたことがバカバカしいほど小さな旅に思えてならなかった。大自然を相手にした人間の力の限界を知らされたような気がする。しかも、彼らの戦いの意味が何であったのか、維新後の開国という変貌ぶりを考えれば、幕府の指針に誤りはなかったと思う。

幕府の支柱として、誠一途に戦った「新選組」の壮士たちは決して徒花ではない。戦後の生き残り隊士たちに、新選組の何たるか——を語らせるほど明治の世相は甘くはないから仕方のないことだが、現代のわれわれは、彼らの赤誠を代弁するべき秋と思うし、そのための実践踏破と心に決め、歳三散華の道に挑んだつもりである。

函館上空での思いは、鷲ノ木浜の沖に舟を浮べて、彼らの蝦夷上陸の心境に迫ってみたいということであった。そして秀麗な駒ケ岳と鷲ノ木の上陸地を撮影したいと思いつめていた——。

□道は文化だ！

土方歳三が都落ちをする最後の挑戦である。

平成十年四月三日、丸の内の東京三菱銀行本店の新選組屯所跡を巳ノ正刻（十時十二分）にスタートした。

コースとしては、日本橋から新選組ゆかりの医学所を経て、今戸の称福寺、隅田川を渡って法恩寺から市川に泊り、水海道から宗道、下館、宇都宮、日光、五十里、山王峠（旧道）を越え、大内峠を越えて会津若松へ入る予定だった。

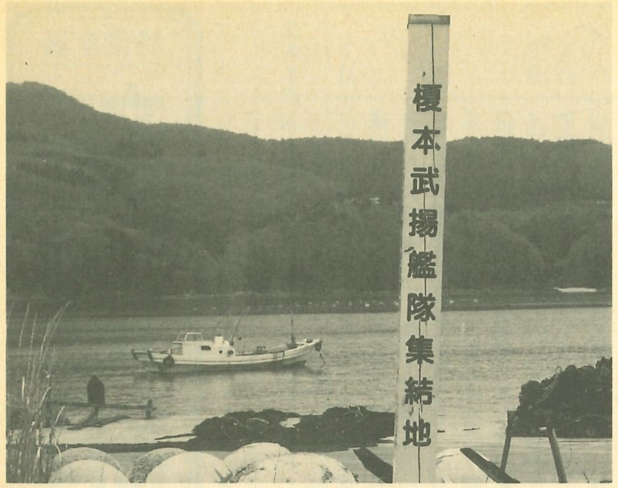
雨にたたられながらも日光までは順調だった。

宇都宮では「明保野」という名に惹れ、小さな商人宿に泊った。池田屋騒動直後、東山産寧坂の明保亭で起った会津藩士柴司の土佐藩士麻田時太郎の誤認襲撃事件を思い浮かべ、そのことを宿の女将に話した。

このコースで一番気にかけていたのが、今市から田島への行程と大内峠越えだった。

慶応四年四月二十四日（1868・5・16）宇都宮の戦いで足を負傷した歳三は、島田魁や中島登らを従えて、馬で今市から会津に向った。翌二十五日、五十里か中三依かは定かでないが、歳三がその辺を通過している頃、近藤勇が板橋で斬に処されている。その時間的通過場所を肌で感じたい——と思っていた。そのような思いで十七、八年前のことだが日光駅から鬼怒川温泉まで一度歩いたことがあった。途中、雨に降られて、パチンコ店で四十分ほど雨やどりをしたことを思い出しながら歩いた。

宿泊予定は五十里湖と考えていたが、民宿は休館中とのことで、前へすすまなければならなかった。行程表には、藤原の星光ホテルの名を入れてあるが、これは宿泊ではなく、撮影のためのメモであった。この日、中三依の民宿に泊ったのだが、これまで毎晩到着の連絡をしていた「ニフティ・歴史フォーラム日本史館—新選組会議室」の小野寺千春さんに連絡が取れなかったために、大パニックが起きようとは夢想だにしなかった。中三依の民宿は、テレホン・カードが使えないピンク電話だった。十円玉を二枚しか持ち合わせず、宿の人たちはすでに就寝していた。これまで一度も欠かすことなく電話連絡していたから、遭難——と思ったらしい。翌朝、山王峠にさしかかるところの公衆電話で連絡した。中山道からこれまで、リアル・タイムで報じられてきた彼女の土方歳三の旅の報告は、この日、初めて途切れて混乱を起こしたというわけである。



折浜に浮ぶ小さな舟

大内峠は一応越えた——と思っている。

雪が深く大変だった。氷玉峠というより、工事中の氷玉トンネルに達したのだが、そこから前に道がなかった。小さな丘の木に赤ペンキが塗られていたので、それを目印にひざまで覆った笹藪をすすみ、雪に足を取られてすすんだ。気すると目の前に人の歩いた足跡を見つけた。しかし、目の前の光景に愕然とした。それはなんと氷玉トンネルではないか——。雪に残された足跡は、自分の歩いた足跡で、小さな丘を一周した証しであった。

大内宿を出たのが十四時。すでに十七時を廻っていた。ここで前に進むことを断念して大内宿に戻った。これまで後退するのはたとえ百歩でも嫌だっただけに、この後退は勇気ある撤退と戒しめ、自ら慰めなければならないほど口惜しい出来事だった。このことは中山道で十七時間歩いた時以上の衝撃的出来事と思った。

会津入りは国道118号線を辿り、旧会津西街道は挫折の止むなきに至った分、行程表から一日遅れてしまった。その分、勢至堂峠越えをしての帰り道を「白虎隊史学伝承館」の鈴木滋雄館長に車で迎えに来てもらい、時間的な遅れを取り戻した。その後、十六橋から母成峠、土湯峠を経て福島、仙台、塩釜から松島を抜け、石巻で泊り、土方ら新選組の隊士たちが大江丸に乗って箱館へ旅立った折浜へ最後の一日を待つだけになった。

平成十年四月十八日、これまで何度もサポートしてくれた森井寿栄さんが、石巻から折浜まで同行してくれた。渡波から風越峠への道は桜が咲き誇っていた。

折浜へ下る風越峠は、以前に歩いた正面の道ではなく、京都の結喜しはやさんが歩いたという右折の道をゆくことにした。途中、倒れた巨木で道を覆がれ、道とは呼べないような獣道、さらには沢を抜けて、眼前に展がる海浜に胸をなでおろすと同時に、完全踏破の歓びをかみしめた。折浜に浮ぶ小さな舟に、歳三らの勇姿を偲びながら、箱館への旅立ちを見送って、この旅は終った。

歴史紀行の新しい試みを果したつもりだが、それは筆を執ってこそ為し得たということになる。年末には『赤誠一途の道をゆく』と題し、「戦鬼歳三の道」と「歳三散華の道」の二冊にまとめ、新人物往来社から刊行される。

最後に、歩くことは文化であるということを痛感したが、現代の日本には「道」はない——ことも痛感させられた。

すべてが車のための道路であって、人間の歩く道は除外されている。それは、文明における車道であっても、文化における人道ではない。

明治維新後、文明に押し流されている日本は、文化果てる処——と断じても、決して過言ではないと思う。

人間の歩く道、それは文化である。

しかも、精神的支柱となる人の道を道徳とするなら、文明における車道に、段差のある人道を設備することこそが、せめてもの人の道と考えるのだが——。

特集年表

新選組詳細活躍年表

菊地　明

（太字は「大の月」で月末は三十日、細字月は「小の月」で月末は二十九日となる）

文久3年（1863・2・18～1864・2・7）

1月

7日　松平主税助、幕府より浪士募集の命を受ける。10日頃　土方歳三、小野路の小島鹿之助に年賀状を送り、浪士募集の情報を伝える。15日　土方、小島鹿之助より刀一振を借用する。16日　近藤勇、小島鹿之助より鎖帷子を借用する。17日　山南敬助・沖田総司、小島家を訪れる。19日　近藤、浪士取締役の山岡鉄太郎に呼び出され面談。26日　中条金之助、浪士取扱に就任する。

2月

4日　小石川伝通院に上洛希望の浪士集合する。松平主税助、浪士取扱を辞任する。5日　小島鹿之助、送別に試衛館を訪れ宿泊する。6日　浪士一同、伝通院に集合し、道中心得を申し渡され、組織編成が行われる。近藤は道中先番宿割となり、土方・山南・沖田・永倉新八・原田左之助・藤堂平助は、芹沢派の平山五郎・平間重助・野口健司とともに六番組小頭芹沢鴨の配下となって、井上源三郎は三番組小頭新見錦の配下となる。7日　井上松五郎、試衛館へ挨拶におもむく。8日　浪士組二百三十四名、伝通院を出立して中山道を京都へ向かい、蕨宿に宿泊。9日　鴻巣泊。10日　近藤、本庄宿で芹沢の宿の手配を誤り、芹沢一派は路上で大篝火を焚くという。11日　松井田泊。12日　追分泊。13日　長久保泊。14日　下諏訪泊。15日　奈良井泊。この日、火の用心の通達が出される。本庄宿での大篝火事件はこのときのことか。16日　須原泊。17日　中津川泊。この日、近藤は芹沢の後任として小頭となるが、隊士は三番組小頭石坂宗順の配下に移動する。18日　伏見泊。19日　加納泊。この日、芹沢が取締役となり、石坂配下の隊士は元に復して新小頭西恭助の配下となり、近藤は先番宿割に復帰する。20日　柏原泊。21日　佐武泊。22日　大津泊。23日　浪士組入京する。壬生村に分宿する。24日夜、清河八郎、新徳寺に浪士を集め、尊王倒幕の意志表明を行う。24日　清河、学習院に上書を提出し受理される。28日　近藤、六番組小頭を拝命する。29日　午前中に六番組、午後からは三番組が御所を拝観する。30日清河、浪士組東下希望の上書を学習院に提出する。

3月

3日　浪士組東下の達しが下る。4日　将軍家茂が入京。6日　家茂に同道の八王子千人同心井上松五郎、壬生に近藤らを訪ねる。同日　浪士組の江戸帰還が翌日に順延される。9日　浪士組の帰還が再順延される。10日　京都守護職松平容保へ残留浪士差配の命が下り、浪士組の芹沢・近藤・新見・平山・平間・野口・土方・山南・沖田・井上・永倉・原田・藤堂・粕谷新五郎・阿比留鋭三郎のほか、斎藤一・佐伯又三郎の十七名が連名で会津藩へ嘆願書を提出する。同日頃　殿内義雄・家里次郎に鵜殿鳩翁より京都残留希望者募集の指示が下る。12日　夜、近藤ら会津藩預かりとなる。13日　浪士組江戸へ帰還する。同日　近藤・土方・井上、井上松五郎を訪ねて酒宴を開く。14日　松五郎、寺町通りでのちの新選組隊士大谷勇雄と出会う。15日　芹沢・近藤・新見・平山・平間・野口・土方・山南・沖田・井上・永倉・原田・藤堂・粕谷・斎藤・佐伯らのほか、殿内義雄・家里次郎・根岸友山・遠藤丈庵・清水吾一の二十名、守護職邸を訪れるが、容保不在のため拝謁できず。同じく残留希望の粕谷・阿比留・神代仁之助・鈴木長蔵は病気のため欠席。16日　松五郎、壬生に近藤らを訪ねる。同日　近藤ら守護邸で容保に拝謁。22日　芹沢・近藤・新見・平山・平間・野口・土方・山南・沖田・井上・永倉・原田・藤堂・斎藤・佐伯・根岸・遠藤・清水の十八名、連名で将軍東帰に反対する嘆願書を板倉勝静へ提出する。25日　会津藩士本多四郎らが壬生浪士組を訪ね、壬生狂言を見物し昼食をともにする。同日　夜、殿内義雄、内部抗争により四条橋上にて斬殺される。同日頃　粕屋・根岸ら離隊。26日　近藤、故郷へ「志大略相認書」と題した大部の書簡を送り、あわせて剣術道具の送付を依頼し、土方は鎖帷子の送付を佐藤彦五郎に依頼する。同日　のちに新選組に加わる会津藩士加藤民弥、兄の小野権之丞を訪ねて殿内斬殺の模様を語る。27日　近藤・井上ら、松五郎を訪ねる。

4月

2日　芹沢・近藤・新見・土方・沖田・永倉・野口、大坂の平野屋五兵衛方で百両を借用し、だんだら羽織作成等の資金とする。松五郎、大坂で近藤・芹沢・新見・土方・沖田・渡辺某、ほか一名と出会う。同夜、近藤ら帰京。6日　阿比留鋭三郎、病死。8日　近藤・沖田・永倉・平間・斎藤・佐伯、八木源之丞宅の葬儀に参列。10日　土方・井上、松五郎を訪ね芹沢について相談する。13日　清河八郎、江戸麻布一ノ橋付近で佐々木只三郎らに暗殺される。17日朝、松五郎、八木邸を訪問。田中茶屋で土方・沖田・山南・井上・斎藤と面談し、近藤「天狗」の評を聞く。20日　土方・井上、松五郎を訪ね相談事をもちかける。21日　将軍家茂の下坂に同道し、壬生浪士組は京屋忠兵衛方に宿泊。22日　松五郎、京屋訪問。昼ごろより土方・沖田・井上と九軒町の吉田屋で遊興する。24日　大坂の常安橋会所にて家里次郎切腹。

5月

11日　壬生浪士、将軍家茂に従って帰京。22日　沖田・井上、宿舎に松五郎を訪ねる。25日　壬生浪士総員三十五人、連名で鎖港についての上書を幕府に提出する。

6月

1日　土方、松五郎を訪ねる。同日　夜、不穏の風説により隊士十名が下坂。3日　早朝、下坂の隊士、浪士高沢民部・柴田玄蕃を捕縛。夕方、芹沢・山南・沖田・永倉・平山・野口・斎藤・島田魁、舟遊びののち大坂力士と乱闘。夜、近藤・芹沢の連名で乱闘の顛末書を東町奉行所に提出。同日　壬生浪士三名、松五郎を訪ねる。4日　前日の乱闘により、力士熊川熊次郎死亡。10日　近藤・芹沢、将軍家茂の東帰に同道する松五郎に酒を贈り、夕方より近藤・土方・井上・永倉・野口・平山・佐伯、ほか五名で松五郎送別の酒宴を開く。26日　夜、横田長兵衛こと植村長兵衛を、壬生浪士の名を騙った金策により斬殺する。この頃　永倉・原田・井上、壬生浪士批判の水口藩公用人より謝罪文を取り付ける。翌日　謝罪文返却を求め公用人の友人戸田栄之助、屯所を訪れる。翌日和解のため角屋にて酒宴。席上、芹沢乱暴の末、角屋に営業停止七日間を申し付ける。29日　浪士石塚巌、大坂今橋筋の富家へ壬生浪士の名を騙り押借りを働く。同月中　芹沢、大内真蔵と石沢千吉の名をもって、大坂大川町の加嶋屋作兵衛方より三十両を借用する。同月中　京相撲勇川力蔵、隊士二十余名を桂川に招待する。川遊び中に与力草間烈五郎と衝突し、翌日、相手が壬生浪士と知った草間は、芹沢を訪ねて詫びる。

7月

1日　佐々木某の通報により、旅宿を襲い石塚を捕縛。夜、難波橋畔に首を晒す。4日　鴻池善右衛門方より芹沢・近藤、ほか四名が三十両、武器料として二百両の金策をする。

8月

2日　夜、佐々木愛次郎・あぐり、朱雀千本通りにて斬殺される。7日　祇園北林で相撲興行があり、壬生浪士が会場警備し、隊士多数が観戦。9日　京力士揚ケ霞が斬殺され、壬生浪士の犯行かとの風聞が流れる。10日　佐伯亦三郎、芹沢一派によって朱雀千本通りで斬殺される。12日　壬生寺で壬生浪士組への礼相撲が開かれる。同日　夜、芹沢ら大和屋を襲撃する。13日　昼ごろ、芹沢ら帰営。18日　禁門の政変に隊士五十二名出動。その功により市中取締りを下命され、同日付で「新選組」の名を拝命する。21日　三条木屋町へ桂小五郎の捕縛に向かうが不在、従者二名を捕らえる。22日　早朝、平野国臣捕縛のため山中成太郎方に隊士数十名出動。24日　三条縄手へ平野捕縛に出動。平野は逃走したが古東領左衛門を捕縛。

9月

13日　新見錦の別名と考えられる田中伊織、近藤の意に反するとして斬殺される。16日　芹沢鴨・平山五郎、八木邸にて暗殺。平間重助逃走。18日　芹沢・平山の葬儀が執り行われる。23日　会津藩、近藤の養父周斎の病気にも、近藤帰郷不能の旨を宮川音五郎らに通告する。25日　市中取締りの働きに対し、各隊士に朝廷より一両ずつ下賜される。26日　長州の間者として御倉伊勢武・荒木田左馬之介を屯所にて斬殺、楠小十郎を邸外にて斬殺、越後三郎・松井竜三郎・松永主計は逃走する。

10月

10日　近藤、一力楼での公武合体派会合に出席し時勢論を述べる。このころの隊士数、約六十名。15日　近藤、会津藩へ禄位辞退の上書を提出。

11月

9日　西条幸太郎、隊士岩崎一郎の名を騙り金策を謀る。11日　西条を捕縛する。16日　一橋慶喜の大坂入城に従い下坂する。19日近藤、御所施薬院にて町奉行永井尚志と面談する。21日　日野の松本捨助、屯所を訪れて入隊を乞うが許されずに帰郷する。

12月

19日　松本捨助、帰郷して佐藤家で京都の模様を報告する。27日　野口健司、切腹。光縁寺埋葬は二十八日か。

文久4年（1864・2・8～1864・3・26）
元治元年（1864・3・27～1865・1・26）

1月

2日　将軍家茂上洛につき、下坂する。8日　新選組、安治川河口

付近で家茂の大坂到着を出迎える。14日　家茂の入京を前に伏見城裏手を警備する。15日　家茂の入京に従い警護、帰営。27日　山南敬助、小島鹿之助宛に年賀状を記す。

2月

1日　早朝、会津藩と新選組誹謗の高札が四条橋東橋詰南側に立つ。2日　日野蓮光寺村名主富沢忠右衛門、壬生を訪れて土方・井上・沖田らと歓談する。3日　近藤、富沢の宿を訪ねる。4日　松平容保、近藤・土方に前年の政変時の働きを賞し、銀を下賜する。6日夜、五条大橋付近で酒に酔って乱暴を働く武州人二名を捕縛。8日富沢、新選組に出向いて武州人を引き取り、京都から放逐する。9日　土方・井上・沖田、富沢を訪問するが不在。上旬　近藤、松平容保の勧めにより八日間の湯治におもむく。11日　長州討伐のため、松平容保が陸軍総裁職に着任する。12日　夜、妻籠宿にて新選組入隊希望の新徴組脱士塩沢能太郎・手塚佐兵衛、通行手形不所持のため捕縛される。13日　松平容保、改称によって軍事総裁職となる。15日　松平春嶽、京都守護職となる。20日　元治と改元。25日　講武所奥詰戸田祐之丞、隊士佐藤安次郎を屯所に訪ねるが、そのさいの言動に問題があり、奉行所に引き渡される。26日　新選組隊士七・八名、大坂屋で遊興中の武士一名、左官職人二名を捕縛し屯所へ連行する。

3月

3日　京都所司代稲葉長門守、新選組を従来どおり支配することの内定があったことを松平容保に報告する。同日　土方・井上、富沢忠右衛門と清水寺に参拝し、祇園の茶屋で遊ぶ。5日　近藤・土方・井上・沖田・藤堂ら、富沢と島原の木津屋で桃花の宴を開く。11日　近藤・土方・井上・沖田・藤堂・武田観柳斎ら、島原の千紅万紫楼で花見の宴を催し、富沢を招いて木津屋に遊ぶ。19日　会津藩の御用状に、新選組が松平春嶽暗殺を計画との風説が記される。同月中　新選組、長州人医師の伜を捕縛。

4月

6日　佐田介石ら五人を隊名を騙り金策をしたために捕縛する。7日　松平容保、京都守護職に復職する。11日　新選組、千紅万紫楼で富沢の送別会を催す。12日　土方、富沢に佐藤家へ送る鉢鉄と日記等を託す。13日　土方・井上、富沢を伏見まで見送る。22日　松原通り木屋町で出火。新選組が出動し、現場で不審な長州人ふたりを捕縛。長州人の多数京都潜入を知る。24日　京都見廻組、江戸で結成される。下旬　潜伏の長州人探索のため島田魁・浅野藤太郎・山崎烝・川島勝司の監察方が動き始める。

5月

3日　近藤、幕府に新選組の進退をうかがう書面を会津藩に託す。6日　四条通りにて会津藩士と浪士の戦いがあり、駆け付けた新選組は浪士二名を捕縛。7日　新選組、江戸に帰還する将軍家茂の下坂に従う。14日　会津藩江戸詰上田一学、見廻組より新選組隊士召抱えの申し入れを京都に送る。16日　新選組、安治川河口で家茂の出港を見送る。20日　夜、大坂西町奉行所与力内山彦次郎暗殺事件が発生。新選組の仕業とされる。同月中　近藤、谷周平を養子に迎える。

6月

1日頃　新選組、鴨川東岸で中間体の者ふたりを捕縛し、拷問のすえ長州人四十名の京都潜入を知る。5日　早朝、武田観柳斎ら升屋喜右衛門こと古高俊太郎を捕縛。同夜、池田屋事変勃発。奥沢栄助戦死。6日　新選組、残党狩りを行う。池田屋惣兵衛を捕縛する。武田、土佐の大秋鼎（大利鼎吉か）を捕縛する。7日　会津藩、見廻組の召抱えに謝絶の返書を送る。8日　近藤、池田屋事変を報ずる書簡を郷里にあてて記す。10日　残党狩りが続くなか、奉行所よりの通報で東山の明保野亭へ出動。同行の会津藩士柴司、武田の指示で土佐藩士麻田時太郎を刺す。11日　新選組、土佐藩士の襲撃の噂に一時屯所移転の札を出す。同日　麻田自刃。12日　柴自刃。13日　柴の葬儀に土方・井上・武田・浅野藤太郎・河合耆三郎、参列して武田と浅野が弔歌を詠む。20日　土方、佐藤家にあて近藤に両番頭次席の格が与えられる旨の書簡を記す。21日　新選組、六条辺に浪士潜伏の報に出動し、西本願寺で一泊する。同日　久坂玄瑞・真木和泉らの率いる長州軍、大坂着。23日　深夜、新選組、東本願寺にて休息。24日　長州軍、山崎着。新選組、竹田街道に出陣。25日　長州軍、山崎天王山に布陣。28日　会津藩出動にともない、新選組は九条河原へ転陣する。

7月

2日　川島勝司、嵯峨天竜寺方面を探索し報告書を記す。7日　岡山藩偵察に出張の隊士松山幾之介、城下で捕らえられ殺害される。8日　長州の密偵渡辺九八郎を四条御土居付近で捕らえるが、同行の井上辰之助は逃走。13日　池田屋惣兵衛、六角牢で獄死。17日　新選組、長州藩への態度が優柔不断な一橋慶喜の宿舎に乱入しようとして、会津藩士に諭されて事なきをえる。18日　長州の入江九一・浜中太郎、新選組誹謗の高札を立てる。19日　禁門の変が勃発。九条河原の新選組、堺町御門まで出動。この戦いで永倉・原田が負傷する。20日　古高俊太郎ら、六角獄舎収容の囚人多数が殺害される。同日　新選組、天王山集結の長州兵追討のため、会津藩兵と出

動し伏見に泊まる。21日　新選組、天王山に真木和泉ら十七名を攻めるが、自刃。夜、大坂御堂に着く。22日　安藤早太郎、池田屋事変での受傷が悪化して死亡。同日頃　新田革左衛門、池田屋事変の受傷悪化のため死亡。23日　高槻昆陽宿の残党狩りで長州兵の銃、弾薬を押収して壬生に帰陣する。

8月

3日　松本喜二郎・河合耆三郎、長州兵による摂津高浜村の被害を調査する。4日　高浜村より被害なしとの報告が届く。同日　幕府より池田屋事変の恩賞金が下される。15日　老中より会津藩と新選組に対し、禁門の変の賞状が下される。18日　禁門の変のさいに西本願寺侍臣らと長州兵に合流しようとしていた、剣客斎藤弥九郎の義弟ら五名を捕縛する。下旬　近藤の増長に反発する永倉・原田・斎藤・島田・尾関雅次郎・葛山武八郎ら、会津藩に罪状書を提出する。

9月

5日　近藤、永倉・武田・尾形俊太郎をともない、将軍の上洛要請と隊士募集のため江戸へ出立する。これに先立ち、藤堂が先行して伊東甲子太郎に新選組加盟を説く。6日　葛山武八郎、近藤批判の罪によって切腹。7日　長州同調者による投げ文等の犯人を探索し、鷹司家家臣水口貢と商人東一郎を捕縛する。9日　夕方、近藤一行は江戸に到着する。10日　近藤一行、会津藩邸におもむく。15日　小島鹿之助、近藤と面談する。16日　土方、勝海舟にあて佐久間象山の遺児三浦敬之助の入隊報告状を記す。30日　近藤、日野の佐藤家におもむく。

10月

10月　5日　隊士篠塚峰三、元主人よりの申し入れにより離隊。7日　日野の松木元太郎・小林重太郎、入隊を求めて屯所を訪れるが、入隊不許可。11日　近藤、和泉橋の医学所に松本良順を訪ねる。14日　近藤、松本良順を再訪し胃薬を調合される。15日　近藤、伊東甲子太郎ら新入隊士をともない、江戸を出立。藤堂は江戸に残留する。27日　近藤一行、着京。

11月

16日　近藤、大坂の三橋楼に加賀屋を呼び付け、問屋筋三十六軒より十五万両の献金を申し付ける。17日　近藤・小原銀蔵、会津藩邸を訪問する。27日　加賀屋問屋筋、谷三十郎に献金の日延べを願い出る。同月中　長州出兵を念頭にした『行軍録』が作成される。

12月

2日　隊士五十名、勢多へ出張。同月中　新選組、大坂商人二十二人より銀六千六百貫を借用する。同月中　五条坂に潜伏中の浪士十一名を捕縛。

元治2年（1865・1・27～1865・4・30）
慶応元年（1865・5・1～1866・2・14）

1月

8日　夕方、谷万太郎・谷三十郎・正木直太郎・高野十郎（阿部十郎）、大坂松屋町のぜんざい店石蔵屋を襲撃し、土佐の大利鼎吉を斬殺する。10日　谷万太郎・正木、ぜんざい屋事件の報告書を近藤・土方に送る。11日　新選組、大坂天神橋に檄文を張り出す。19日　津藩士中村左馬、新選組屯所を訪れて大坂の情勢を聴取する。25日　見廻組、兵庫で佐々木六角源氏太夫ら十四名を翌日にわたって捕縛。26日　残党、大坂へ逃亡。27日　隊士約三十名、大坂で源氏太夫の残党を襲いひとり斬殺、二十三名を捕縛。同月中　朝廷より禁門の変の感状が下される。

2月

9日　土方、佐藤彦五郎にあてた書簡で、昨年末編成の『行軍録』に永倉不在の釈明を記す。22日　山南が脱走し、沖田が大津に追うという。23日　山南、屯所で切腹する。24日　山南の葬儀が執り行われる。28日　西本願寺門跡使田中主鈴、新選組の屯所移転を了承する口上書を朝廷に提出する。

3月

3日　大谷良輔、切腹。6日　三条通りの甲冑屋で押借りを働く六名を捕縛。10日頃　新選組、西本願寺北集会所に屯所を移転する。20日　福田内蔵之助、新選組より三百五十両の借用依頼のうち、二百両の貸し渡しを了承する。21日　沖田、山南死去の手紙を佐藤家に記す。同日頃　土方・斎藤・伊東、隊士募集のため江戸に下る。26日　新選組、祇園一帯での出火に出動する。

4月

1日頃　久世家の家臣某、新選組に通行を妨げられたことに対し、松原忠司を詰問する。7日　慶応に改元される。12日　土方、日野の佐藤家を訪れ逗留。14日　尾関弥四郎の手下で大坂弓場町の易者村井北山こと善三郎、茶筅金作に新選組入隊の紹介状を記す。後日、金作は屯所で面接を受けるが入隊せず。15日　土方、日野を去る。27日　土方・斎藤・伊東、藤堂とともに新入隊士五十二名を引き連れて江戸を出立する。同月中　西本願寺家来西村芳三郎（西村兼文）、京都脱走人と偽って潜入した防長両国での探索書を一橋家に送る。

5月

9日　土方一行、草津宿着。同月中　新選組、大坂警備を命じられ数名が下坂。26日　大坂で藤井藍田を捕らえ、万福寺に収容する。

閏5月

5日　大坂の新選組、京橋で不審人物の検問を行う。11日　京都松ケ崎に潜伏の長州人を捕縛する。12日　幕府より新選組その他の警

備陣に、持ち場の割付けが行われる。同日　新選組、巣内式部・矢野玄道ら五名を捕縛する。13日　上洛中の将軍家茂を、膳所において妨害する計画が発覚。14日　佐野七五三之助ら四・五名の隊士が膳所に出張し、河瀬太宰宅を捜索中に留守を守る妻の幸が自刃をはかる。15日　河瀬太宰ら三名捕縛。18日　河内狭山藩士山本時次郎を捕縛。21日　家茂、膳所事件のため大津泊まりとなる。22日　家茂の入京により、三条蹴上に迎え二条城まで警護する。家茂に同行の松本良順、木屋町の南部精一宅に旅宿。近藤、松本を訪ね、松本も屯所を訪れる。このとき隊士の衛生状態を憂う。23日　南部精一、以後一カ月ほど屯所への往診を行う。24日　家茂の下坂に藤ノ森まで警護する。同月中　井上謙三を捕縛するが、伊東の口添えによって放免する。同月中　中西登・小路平三郎、石津茂一郎を醒ケ井魚棚の旅宿で捕縛。

6月　1日　米価釣り上げの風聞により、米問屋主人らを捕らえ、万福寺に連行する。6日　西四条家家来二名を屯所に連行するが、放免。15日　大坂の新選組、五神社に対し目付方宿舎に集合の回状を届ける。16日　朝、天満宮総代の大道吉儀、宿舎にて三木三郎と面談。21日　施山多喜人・石川三郎、町家の婦女と密通した罪により切腹。

7月　1日頃　隊士百三十四名を列記した『英名録』が作成される。4日　大坂某橋警備中の隊士、某藩士三人と口論のうえ刃傷におよぶ。18日　脱走した植田末次ら三名、名古屋辺にて朝名を騙り金策を行うとの通報が寄せられ、伊東らは東海道、島田らは中山道を探索。25日　佐野牧太、金策露見により斬罪。同月中　伊東・富山弥兵衛・茨木司・久米部正親・篠原泰之進ら大和へ出張し、出張先で浪士と衝突し、久米部が足を負傷する。

8月　1日　平藩士佐藤久左衛門・石川弥右衛門、新選組に詫状を入れる。5日　隊士某、島原住吉社前にて一橋家臣某と口論のうえ斬殺する。8日　武田以下六・七名の隊士、蹴上奴茶屋にて金策の薩摩藩士橋口四郎・隈本荘助を捕縛に出動し、橋口を斬殺、隈本を捕縛する。

9月　1日　松原忠司、切腹傷の悪化により死亡。9日　夜、堀川松原通りにて巡察隊士、肥後藩士四人と口論のうえ屯所へ連行するが、同藩士多数が押寄せたために引き渡す。同月中　新選組、壬生寺境内を調練場として借用を依頼する。同月頃　第二次『行軍録』が作成される。

10月　3日　将軍家茂、江戸帰還のために下坂中、松平容保は帰還阻止のため枚方で諫言し帰京させる。近藤も枚方におもむき、家茂を警護して京都に戻る。

11月　4日　近藤・伊東・武田・山崎烝・吉村貫一郎・芦屋登・新井忠雄・尾形俊太郎・服部武雄、長州訊問使に従い広島へ出立。このとき、近藤は佐藤・小島・粕谷家にあてて覚悟のほどを書き記し、あわせて沖田に剣流名を継がせたい旨を伝える。7日　近藤ら、大坂を出立。16日　近藤ら、広島に到着。20日　長州訊問使、近藤らの長州入国を求めるが拒絶される。21日　伊東の口添えによって出牢していた赤根武人ら三名、間者として広島より長州に派遣される。23日　長州藩士大津四郎右衛門、近藤らを訪れ、夕刻に近藤が広沢藤右衛門を訪れて面談する。

12月　11日　近藤・武田、広島滞在中の長州藩士松沢音三を訪ね、帰藩時の同行を依頼するが謝絶される。12日　桜井勇之進、死亡。14日　近藤・伊東・武田、岩国入国をはかり広島を出立する。15日　近藤ら、岩国の役人に長州入国を求める。16日　近藤ら、長州入国を断念して岩国を去る。17日　近藤ら、広島を出立して帰京する。22日　帰京した近藤ら、報告のため会津藩を訪れる。

慶応2年（1866・2・15～1867・2・4）

1月　24日　近藤、松平容保より再度の広島出張を下命される。27日　近藤・伊東・篠原・尾形、広島へ出立。

2月　3日　近藤一行、広島到着。5日　大石鍬次郎、松原通り東洞院にて芸藩士某を斬殺。同日　大石の実弟大石造酒蔵、祇園にて今井祐三郎に斬殺されるというが、後日の土方の書簡には病死とある。11日　伊東・篠原、老中小笠原長行および諸藩士と面会して勤王を説く。12日　河合耆三郎、隊費の会計不算の責によって切腹する。18日　小川信太郎、死亡。同月中　新選組隊士、奈良に出張する。

3月　7日　伊東・篠原、諸藩士と面談する。12日　近藤ら、別行動をとる伊東・篠原を残し、京都に到着する。15日　佐藤安次郎、広島に入る。18日　伊東・篠原、広島を出立する。27日　伊東・篠原、帰京。30日　夜、浪士捕縛に向かうが逃走される。

4月　1日　谷三十郎、死亡。2日　朝彦親王、二月の奈良出張に対し晒三十枚を下す。3日　五条浄教寺に不穏隊士一名が潜伏する。4日　浄教寺の隊士のもとへ、和尚斬殺を唱えて同志が乱入し、翌日になって引き払う。18日　伊勢方面に出張の隊士、商人より借金をする。

5月　12日　鈴木直人、魚棚烏丸西にて山井三位家来森某を斬殺し、みずからも軽傷を負う。同月中　隊士数、百三十三名を数える。

6月　10日頃　柴田彦三郎、一橋家家臣原口某と金策し脱走。15日　広島残留の山崎烝・吉村貫一郎、芸州口戦況の報告書を同志に託す。同日　夜、柴田の脱走にともない、内海次郎・松本喜二郎・三井丑之助・近藤芳助、追跡のため出石へ向かう。17日頃　一条家家来入江某・高松家家来某を捕縛。19日　朝、出石藩役人が柴田を捕え、内海らに引き渡す。23日　内海らに護送された柴田に切腹が命じられる。

7月　16日　幕臣志賀又四郎、新選組を市中警備から除外することを建言する。20日　将軍家茂、大坂城に没す。25日　幕府より新選組・見廻組等に警備地域割付けの達しが下る。

8月　28日　夜、中井庄五郎ら三条制札場に掲げられた制札を川に投げ捨てる。

9月　2日　三条制札場に再び制札が立てられる。3日　山崎・吉村の広島での活動が伝えられる。5日　夜、再び制札が捨てられる。7日　岩倉具視、新選組脱走隊士の高橋良之助を召し抱える。10日　再び制札が立てられ、新選組に警備が命じられる。12日　夜、土佐藩士八名が制札に手をかけ、見張りの新選組が出動。藤崎吉五郎を斬殺し、宮川助五郎を捕縛。このときに、斥候役だった浅野藤太郎が臆したため、のちに隊を追放されるという。13日　早朝、出動の隊士ら帰隊。同日　負傷した土佐の安藤謙次、藩邸で自刃する。19日　土佐藩、祇園に近藤・土方・伊東・吉村貫一郎を招き、制札事件を落着させる。26日　夜、伊東・篠原、近藤・土方と醒ケ井妾宅にて時局論を戦わせる。27日　篠原、近藤・土方と妾宅で激論するとされるが、両日の論戦は他日の可能性もある。

10月　7日　市橋鎌吉、死亡。同月中　新選組、島田の名で富永村の元右衛門より五百両を借用する。上旬　土方ら隊士数名、元見廻組の大沢源次郎を捕らえる。

12月　5日　一橋慶喜、十五代将軍に正式就任。15日　中川宮、中村左馬を使いに立て、新選組へ銀二十枚を下す。20日　三条制札事件の恩賞金が隊士二十七名に下される。27日　孝明天皇没。

慶応3年（1867・2・5～1868・1・24）

1月　1日　伊東、永倉・斎藤とともに角屋で酒宴を開き、三日まで流連する。4日　近藤の使いにともなわれて伊東ら帰隊し、謹慎を申し渡される。同日　新選組隊士某、大隅守広光に刀を発注する。7日　沖田・永倉・斎藤、四条橋畔にて十津川郷士中井庄五郎・土佐藩士那須盛馬と斬り結ぶ。10日　田内知、士道不覚悟により切腹。18日　伊東・新井只雄、寺田某とともに九州へ出立する。28日　新選組、孝明天皇の埋葬に幕府歩兵・会津・桑名藩兵とともに御車の警備にあたる。

2月　2日　伊東ら太宰府に到着し、中岡慎太郎・土方久元・真木外記・水野渓雲斎らと面談する。4日　伊東、真木外記と面談し、分離について語る。5日　伊東、太宰府を出立して久留米城下に泊まる。6日　伊東、別行動の新井・寺田某と合流する。17日　伊東、新井らと別れ、日田郡代の窪田治部右衛門に面会を求める。19日　島田魁、大隅守広光に脇差を注文する。20日　新井、真木・水野と面談する。22日　伊東、佐賀で新井と合流する。25日　伊東ら長崎に入り逗留する。

3月　4日　伊東ら長崎を出立。10日　篠原の働きによって、伊東一派が孝明天皇の御陵衛士を拝命する。11日　伊東ら大坂に到着する。12日　伊東ら帰京し、同志と面談。13日　夜、伊東、壬生某所で近藤・土方に分離策を語り了承される。14日　伊東、三条付近に分離後の宿舎を求める。15日　伊東、大久保主膳・野村左兵衛に面会し、分離について語る。16日　伊東、近藤・土方と酒宴。17日　伊東、三条の宿舎を断念する。20日　伊東、新選組より分離して、三木三郎・篠原泰之進・新井只雄・加納鷲雄・阿部十郎・内海次郎・橋本皆助・毛内有之助・服部武雄・藤堂平助・富山弥兵衛・斎藤一とともに三条城安寺に移る。21日　伊東ら五条善立寺に移る。

4月　9日　膳所藩士上坂三郎衛門、新選組の御用状を紛失したため処分を受ける。14日　夜、田中寅蔵、脱走する。15日　寺町の本満寺に潜伏中の田中を発見し、屯所に連行して切腹を命じる。19日　山崎・田中一、中山忠能を訪ねるが不在のため面会を果たせず。26日　沖田氏縁者没。29日　矢口健一郎、死亡。同月中　島田、堀川弾正大忠より十両を借用する。

5月　11日　新井忠雄、太宰府に到着して東久世通禧・三条西季知・真木外記・土方久元に分離の報告をし、同夜、帰京のため出立する。25日　富山弥兵衛、曲直瀬道策を殺害する。

6月　10日　新選組総員、幕臣取り立てが決定する。12日　佐野七五三之助・茨木司・富川十郎・中村五郎・岡田克己・中井三弥・木幡勝之進・松本俊蔵・高野良右衛門・松本主税、脱局して伊東を訪ね合流をはかるが拒絶される。13日　佐野ら、会津公用方に脱隊請願書を提出する。これを受けて近藤・土方・山崎・吉村・尾形俊太郎が説得のため守護職邸におもむく。14日　佐野・茨木・富川・中村、守

護職邸にて切腹。その他は新選組より放逐される。15日　朝、佐野らの葬儀が執り行われる。同日　新選組、西本願寺より不動堂村に屯所を移転する。17日　近藤、幕府親藩会議で激論する。22日　新選組除隊の武田観柳斎を竹田街道で斬殺する。武田の同志一名、枚方方面へ逃走。23日　逃走の同志、枚方で切腹。同日　加藤羆死亡。加藤は武田襲撃時の犠牲者か、枚方で切腹した武田の同志と思われる。同日　新選組総員、正式に幕臣取り立ての通達が行われる。24日　土方・山崎・尾形・吉村、近藤の建白書を持参し、柳原・正親町卿を訪れる。27日　夜、武田の同調者僧善応を醍ケ井通り松原において殺害。同月後半　御陵衛士、屯所を月真院に移す。同月中　近藤、関白二条斎敬に建白書を提出。同月中　島田、福島屋慶左衛門に七両を貸与する。

7月

2日　夜、幕府歩兵隊と大手組、島原で衝突し一名死亡、一名負傷。3日　大手組四百人、東寺の歩兵隊に押し寄せて発砲。新選組、仲裁に入る。18日　対州人多田荘蔵を捕縛し、奉行所へ引き渡す。27日　伊東、中岡慎太郎を訪れる。

8月

8日　伊東・斎藤・藤堂・三木、連名で老中板倉勝静へ建白書を提出。同日　伊東・新井、九州へ出立する。14日　幕府目付原市之進、暗殺される。21日　伊東・新井、太宰府に到着し真木外記に面会する。

9月

2日　薩摩藩、元隊士の池田庄司を召し抱える。13日　中川宮、会津藩士秋月悌次郎を招き、原市之進の後跡に近藤の登用を提案する。14日　山崎、隊士を率いて本多勘解由・山岡将曹の捕縛に向かうが、すでに逃走後。15日　伊東・篠原、京都を出立して名古屋におもむく。19日　伊東・篠原、名古屋に到着する。20日　近藤、永井尚志邸にて土佐の後藤象二郎を紹介される。22日　近藤、後藤へ再会を願う手紙を送り、二十六日訪問の返事を受ける。同日　伊東・篠原、名古屋を出立。25日　伊東・篠原、京都到着。同日　後藤、近藤へ風邪のため日を改めて訪問するとの書状を送る。26日　近藤、後藤へ書状と見舞い品を贈る。27日　後藤、返礼の品とともに十月一日に来訪の旨の書状が届き、近藤は再会を願う返書を送る。同日　近藤、岡山藩家老日置帯刀と面談する。同月中　土方、隊士募集のため井上源三郎とともに江戸へ下る。

10月

5日　近藤、後藤へ大政奉還建白書写しの一覧を望む書簡を送る。7日　新選組、村山謙吉を陸援隊に潜入させる。8日　土方、日野の佐藤家を訪れる。同日　松平容保、二条城において板倉勝静・永井尚志らの登城往復に新選組の警護を提案する。9日　容保、近藤を招き、板倉・永井の身辺警護と薩摩・土佐両藩の探索を指示する。近藤は陸援隊潜入の村山よりの報告で、薩摩・十津川に討幕挙兵計画のあることを報告する。13日　徳川慶喜、在京諸藩士を二条城に召集し、大政奉還の決意を告げる。同日　討幕の密勅が薩摩藩に下され、長州藩には官位復旧の沙汰が下される。同日　隊士数名、中山忠能邸を監視するが成果なし。同日　小島鹿之助、土方より沖田の発病を知り、近藤にあて見舞い状を記す。14日　慶喜、大政奉還を朝廷に奏上する。同日　長州藩に討幕の密勅が下る。15日　大政奉還が勅許される。19日　近藤、正親町三条実愛を訪ねる。21日　土方、新入隊士二十数名をともない江戸を出立し、品川の釜屋で昼食。28日　近藤周斎、死亡。30日　土方一行、四日市に到着する。

11月

3日　土方一行、着京。9日　後藤大助ら四・五名、伏見奉行所与力横田内蔵之允を殺害する。10日　斎藤一、月真院より帰隊。以後、山口次郎と変名して紀州藩士三浦休太郎のもとに潜伏する。11日　近藤、松本良順にあて上洛を促す書簡を記す。14日　新選組、隊士に十一月分の給与を支給する。15日　坂本龍馬・中岡慎太郎、近江屋で見廻組に暗殺されるが、新選組に容疑が向けられる。16日　村山謙吉、白川の陸援隊屯所で捕縛され入牢。17日　村山、取り調べを受ける。18日　近藤、三浦のもとにいた斎藤を帰隊させる。同日夜、近藤の妾宅に伊東甲子太郎を招き、帰宅中を油小路において斬殺。遺骸引き取りの藤堂平助・服部武雄・毛内有之進を斬殺する。同日
19日　会津藩より伊東ら四名の葬儀料として二十両が下され、新選組は出動隊士に手当を支給する。同日　油小路脱出の三木三郎・加納鷲雄・富山弥兵衛、薩摩藩邸に入り、篠原泰之進は知人宅に潜む。事件を知った阿部十郎・内海次郎は土佐藩邸に庇護を求めるが謝絶される。20日　篠原・阿部・内海、薩摩藩邸に入る。21日　篠原ら、伏見の薩摩藩邸に引き移る。26日　土佐藩の申し入れによって、坂本龍馬暗殺について永井尚志の聴取を受ける。下旬頃　隊士百五十七名を網羅した名簿が作成される。

12月

2日　土方、剣術の小手を購入。7日　坂本龍馬・中岡慎太郎暗殺の報復として、海援隊士・陸援隊士ら十六名、天満屋に紀州の三浦休太郎を襲撃。警護の新選組と乱闘になり、隊士宮川信吉が死亡。襲撃の中井庄五郎を斬殺する。8日　新選組、大坂の鴻池・加嶋屋ら十軒より四千両を借用する。9日　王政復古。同日　新選組、新遊撃隊御雇とされる。11日　新選組、十二月分の給与を支給する。

同日　鴻池ら十軒へ三千両を返済する。12日　徳川慶喜、二条城を退き下坂し、新選組は城の留守を任される。同日　新選組、新遊撃隊御雇を返上して新選組を唱える。13日　近藤、二条城の警備をめぐって水戸藩と対立する。同日　紀州藩より宮川信吉の香典四十二両が贈られる。14日　新選組、永井尚志とともに下坂。天満宮に宿陣。15日　山崎・吉村、伏見偵察に出立。16日　新選組、伏見奉行所に布陣する。同日　小林啓之助を御陵衛士残党の間者として殺害する。17日　沖田、醒ケ井の近藤妾宅に宿泊。18日　早朝、阿部十郎ら、妾宅に沖田を襲うが伏見出立後のため果たせず。同日　伏見の動揺を鎮静するため、新選組在陣の触書が出される。同日　夕方、京都より帰陣中の近藤、丹波橋筋付近で阿部らに狙撃され右肩に重傷を負い、警護の井上新左衛門と馬丁の久吉が討死する。20日　近藤の負傷に会津藩より見舞い金二十両が下される。同日　近藤、沖田とともに下坂する。21日　夜、新選組、巡邏中の都城兵に発砲し、翌日まで薩摩兵と対峙する。25日頃　尾張藩士荒川甚作・中村修之進、土方に新選組の伏見退陣を求める。29日　隊士小幡三郎を薩摩藩邸に潜入させる。

慶応4年（1868・1・25〜1868・10・22）明治元年（1868・10・23〜1869・2・10）

1月

3日　肥後藩士池部悰右衛門・桜田惣四郎、新選組等に伏見退陣を勧告する。同日　鳥羽・伏見の戦が勃発し、新選組は伏見市中に戦い、幕軍が敗れて淀方面に退却する。同日　小幡三郎、潜入中の薩摩藩邸を脱し、会津砲兵隊に合流する。4日　新選組、淀城下に着陣。5日　千両松付近の戦いで井上源三郎ら十数名が戦死し、橋本まで退却する。6日　橋本の戦いに敗れ大坂に退却し、新選組は八軒屋の京屋忠兵衛方に宿陣する。7日　新選組、大坂城に入るが、火災のため京屋に戻る。8日　新選組、木津川口に碇泊の船中に宿泊する。これは負傷隊士の一行と思われる。9日　永倉ら可動隊士は順動丸に乗船して天保山沖を出航する。10日　近藤・土方および負傷隊士乗船の富士山丸が出航し、兵庫沖に碇泊する。11日　富士山丸、兵庫沖を出航し、紀州由良港に碇泊する。同日　隊士小田数馬、大坂天満橋下にて斬殺され橋上に梟首される。12日富士山丸、由良を出港する。同日　順動丸、品川入港。下船の隊士は釜屋に宿陣する。13日　近藤に登城命令が出される。14日　富士山丸、横浜に入港し、負傷者は病院に収容される。15日　富士山丸、品川に到着。近藤・沖田は和泉橋医学所に向かう。土方も同道。同日　横浜入院の費用として介抱世話役の島田魁、百両を受領する。16日　近藤・土方、江戸城に登城。城中で佐倉藩士依田学海より鳥羽・伏見の戦いについて尋ねられ、土方はもはや刀槍の時代ではないことを語る。18日　佐藤彦五郎・粕谷良順、近藤と面談して新選組の動向を聞く。同日　土方、会津藩より二千両を受け取る。同日　釜屋宿陣の隊士に手当が支給される。19日　斎藤、医学所で治療を受ける。20日　鍛冶橋門外の秋月右京亮の元役宅が、新選組の屯所として用意される。22日　会津藩兵と新選組の負傷者に対し、幕府より慰問品が贈られる。23日　釜屋の隊士、秋月邸に移る。26日　負傷隊士二十七名、医学所に入る。27日　大町綱太郎ら負傷者二十八名、医学館に引き移る。同日　横浜の隊士に手当が支給される。28日　入院隊士以外の秋月邸移転が終了する。同日　近藤、横浜病院におもむく。同日　長州藩兵、東本願寺に置き去りの新選組の武器を接収する。

2月

1日　岸島芳太郎・尾関雅次郎、横浜を訪れ、負傷隊士に和泉橋医学所への移送を伝える。2日　負傷隊士、横浜を出港し品川に泊まる。3日　負傷隊士、医学所に入る。同日　新選組、幕府より三百両を受領する。同日　新選組、元込め銃五挺を購入。7日　近藤、加療のために横浜へおもむく。10日　近藤、尾関の迎えにより横浜を出立する。12日　近藤、登城。徳川慶喜の警護を下命される。13日　慶喜、上野寛永寺で謹慎生活を始める。同日　京都光縁寺に埋葬の伊東らの遺骸、同志により戒光寺墓地に改葬される。15日　新選組、慶喜の警護を開始。同日　医学所入院の負傷隊士に手当が支給される。17日　隊士三名、甲州へ出立する。25日　慶喜の警護終了。同日　近藤、金地院におもむき義父周斎の墓参を行う。27日　大石鍬次郎、甲府へ出立する。同日　幕府より甲州出陣の軍資金二千四百両余を受領。同日　松本良順に負傷隊士の治療費として百両を支払う。28日　新選組、甲州鎮撫を命じられ、隊士に出陣手当を支給する。29日　会津藩と松本良順より軍資金四千二百両を受け取る。

3月

1日　新選組、浅草の弾左衛門の配下を加え、甲陽鎮撫隊として江戸を出立する。近藤は大久保剛、土方は内藤隼人を名乗る。内藤新宿に宿陣。2日　日野の佐藤家にて休息し、ここで佐藤彦五郎の率いる春日隊が合流。八王子に宿陣。3日　与瀬に宿陣。4日　駒飼に宿陣し、新政府軍の動向を探る。先発の大石鍬次郎、甲州方面よ

り戻って合流する。同日　新政府東山道軍、甲府入り。5日　勝沼に布陣し、地理嚮導役の結城有無之助、近藤の命により村々の名主に回状を出す。土方、援軍を求めて江戸に向かう。6日　早朝、土方、早駕籠二挺で日野宿を通過。同日　柏尾にて戦闘開始。甲陽鎮撫隊、新選組隊士加賀爪勝之進と上原栄作が戦死し、江戸へ向けて敗走する。7日　隊士桑原某、小島家を訪れる。同日　甲陽鎮撫隊、八王子まで敗走し、同所にて近藤、人見勝太郎と出会い、土方も合流する。8日　朝、土方、早駕籠二挺で江戸より日野宿を通過する。9日　夜、甲陽鎮撫隊、日野を通過。10日　甲陽鎮撫隊、江戸に戻る。11日頃　永倉新八・原田左之助ら、新選組と決別して靖共隊を結成する。12日頃　負傷隊士等二十数名、粂部正親を長として会津へ先発する。13日　夜、新選組隊士四十八名、五兵衛新田の金子健十郎宅を訪れ宿泊する。14日　近藤、隊士十名とともに金子家に来着。15日　土方、隊士四名とともに金子家に到着する。16日　隊士三名、金子家着。以後、二十五日まで連日のように隊士が訪れ、総員百六十九名を数える。同日　勝海舟配下の軍事方松浪権之丞、金子家を訪問。17日　同じく吉沢大助、金子家を訪問。18日　隊士、屋形舟で今戸へ出張する。19日　会津藩士兼川直記、金子家を訪れる。24日　松本良順、関東郡代佐々井半十郎の五兵衛新田潜伏を要請する書簡を携えて金子家を訪問。27日　会津藩士数名、金子家を訪問する。29日　近藤、佐々井半十郎に流山移転を通告する書簡を送り、佐々井は五兵衛新田潜伏継続を重ねて要請する返書を送る。

4月

2日　新選組、流山に転陣する。総員二百二十七名。3日　流山の陣屋を新政府軍に取り囲まれ、近藤は投降を決意する。近藤、野村利三郎・村上三郎の同道を許されて越谷に連行される。同日　土方、相馬主計ら二名と江戸に潜入する。4日　近藤、板橋の新政府軍本営に連行される。同日　流山の新選組、武装解除して会津に向かう。同日　土方、勝海舟と面談して近藤の助命をはかる。同日　島田魁、夜半に江戸潜入。今戸で土方と合流する。以後、江戸市中に潜伏を続ける。5日　相馬主計、勝の書簡を板橋総督府へ持参するが、没収のうえ捕縛される。10日　土方以下、今戸に移る。11日　江戸城、新政府軍に引き渡される。同日　土方、島田魁・漢一郎・中島登・畠山芳次郎・沢忠助・松沢乙三とともに鴻ノ台の旧幕脱走軍に合流し、前軍参謀に選出される。12日　土方、会津藩士秋月登之助とともに前軍を率いて進軍し、小金に宿陣する。13日　前軍、布施に宿陣。同日　天然理心流門人福田平馬、勝海舟を訪ねて近藤の助命を依頼する。14日　大鳥圭介の率いる後軍、山崎に宿陣する。原田左之助、同地で靖共隊を離れ江戸に向かう。15日　前軍、水海道に宿陣。16日　前軍、宗道に宿陣し、下妻藩に島田魁ら四名を合兵の使者として派遣し、十名の藩士を従軍させる。17日　土方、下館藩に出陣して兵糧を供出させる。18日　前軍、蓼沼に宿陣。19日　前軍、宇都宮城を攻撃し攻略に成功する。この戦いに土方、脅えて逃亡しようとした従者を斬る。20日　後軍、鹿沼方面より宇都宮に転進して前軍と合流を果たし、宇都宮城に入城する。21日　旧幕軍、壬生城攻撃の軍議を開く。22日　旧幕軍、壬生城攻撃に出陣して安塚で戦うが敗走する。土方の参戦は不明。23日　土方、新政府軍の宇都宮城奪還戦に足指に負傷し、やはり受傷した秋月登之助とともに護送されて今市に下る。夕方、旧幕軍、敗北して宇都宮城を放棄する。24日　土方、中島登に命じて日光在勤の土方勇太郎を呼び寄せ、斬殺した従者の墓碑建立を依頼する。正午ごろ、土方・秋月の一行、会津へ向けて出立する。25日　近藤、板橋で斬首され、三日晒となる。同日　流山脱出の新選組本隊、赤津に宿陣。26日　土方一行、田島陣屋に至る。28日　板橋で晒された近藤の首級が京都へ送られ、宮川勇五郎ら首なし遺体を発掘するという。29日　宮川勇五郎ら、近藤の遺体を菩提寺の龍源寺に埋葬するという。同日　田島陣屋で秋月と別れた土方一行、会津城下七日町の清水屋に投宿し、流山脱出の新選組本隊と合流する。

閏4月

5日　山口次郎こと斎藤一を隊長とする新選組、白河方面出張にさいして容保に拝謁する。6日　新選組、若松を出陣して赤津に宿陣。7日　新選組、三代に転陣する。同日　近藤の首級、京都着。8日　近藤の首級、三条河原にて十日朝まで晒される。21日　新選組、白河城に出陣する。22日　城下に宿陣する。23日　新選組、白坂関門を守備する。25日　新政府軍の白河攻撃に菊地央が戦死する。御陵衛士から薩摩軍斥候となっていた竹川直枝こと清原清も戦死。29日　新選組、白坂関門の守備を仙台兵と代わり、白河の本陣柳屋に休陣する。

5月

1日　新政府軍の白河攻撃に新選組は黒川で応戦する。伊藤鉄五郎が戦死し、勢至堂まで敗走する。2日　勢至堂より三代に転陣する。6日　元隊士矢田賢之助、靖共隊士として今市の戦いに戦死。15日　上野戦争勃発。靖共隊を離れた原田左之助、彰義隊に加わって受傷する。17日　原田、神保山城守邸にて死亡。26日　新選組、白河奪還戦に敗れて上小屋まで敗走する。27日　新選組、会津遊撃隊と合

して大谷地から白河口に進撃するが敗北し、巻ノ内まで敗走する。同所にて数日休陣。島田、受傷のため福良病院に入る。30日　沖田総司、療養先の千駄ケ谷にて病死する。

6月

6日　新選組、福良より太平口に出陣し、羽太に休陣する。12日　新選組、白河奪還のため大熊川に出撃するが、羽太まで敗走する。15日　土方、若松城で覚王院義観に面会する。

7月

1日　新選組、羽太より出陣し天神山まで攻め込むが羽鳥に敗走し、やがて福良に移動する。6日　土方、福良へ出張して近藤芳助のもとを訪れ、町守屋への出陣を命じる。7日　新選組、長沼で休陣。29日　新選組、会津軍・旧幕伝習隊と合して、郡山移転のための人馬の手配を行う。

8月

1日　二本松藩の恭順により、土方は秋月登之助とともに新選組・伝習第一大隊・回天隊を率い、三代・中地・舟津に引き揚げて休陣する。5日　新政府軍に捕縛されていた相馬主計、陸軍隊に合流して輪王寺宮より金子を下される。17日　靖共隊加盟と伝わる松本喜次郎、三代にて死亡し新選組隊士として葬られる。18日　新選組、二本松方面出陣のため、湖南より猪苗代城下に移動して宿陣する。19日　新選組、会津軍・旧幕諸隊とともに母成峠に出陣する。同日　榎本艦隊、品川沖を出帆。21日　母成峠の戦いに敗れ、加藤定吉・漢一郎・木下巌・小堀誠一郎・鈴木練三郎・千田兵衛が戦死し、猪苗代に敗走する。同日　夜、土方は湖南方面の会津軍に猪苗代進撃を乞う書簡を送る。22日　土方、滝沢本陣に踏みとどまり新政府軍を迎撃する。また新選組は天寧寺に敗走して宿陣。23日　土方、援軍を求め大塩に至り、大鳥圭介に新選組を託して米沢へ向かう。同日　新選組、塩川に宿陣する。25日　土方、米沢に達する。27日　旧幕海軍の旗艦開陽丸、仙台湾東名浜に到着する。旧幕海軍の六艦は二十四日より翌月五日にかけて仙台湾に結集した。

9月

1日　元御陵衛士の佐原太郎、京都下寺町で死亡する。3日　土方、榎本武揚とともに仙台城での奥羽列藩同盟の軍議に出席し、榎本より総督就任を推挙される。5日　会津に残留した斎藤一らの新選組二十名余、高久村の如来堂守備中を攻撃され壊滅状態となる。全滅とされるが、斎藤のほか志村武蔵らの生存が確認されている。8日　明治と改元される。9日　新選組および旧幕陸軍、小田付を出立して白石に向かい土湯に宿陣する。11日　新選組および旧幕陸軍、土湯より鳥渡に進み宿陣。12日　福島を経由して桑折に宿陣する。同日　榎本・土方、登城し仙台藩の主導権を握った恭順派と面談するが決裂。13日　新選組および旧幕陸軍、旧幕海軍の到着を知り仙台行を決する。14日　新選組および旧幕陸軍、白石城下に宿陣する。17日　桑名藩隊の十七名、松平定敬の蝦夷渡海に同行するため新選組に入隊する。19日　旧幕陸海軍、仙台より木舟に移動する。20日　旧幕軍、松島に移る。同日頃　松山・唐津の両藩士、板倉勝静・小笠原長行の渡海に同行するため新選組に加入する。同日　土方、便面亭で旧幕臣の杉浦清介と面談。22日　会津藩降伏。

10月

4日　会津如来堂脱出の久米部正親・吉田俊太郎・池田七三郎・河合鉄五郎ら、銚子で高崎藩兵に捕らえられる。9日　旧幕軍、折ノ浜に移動し、土方は物資輸送の指揮をとる。10日　新選組、伝習士官隊などとともに大江丸に乗船する。11日　新選組、大江丸艦内に宿泊。12日　旧幕艦隊七艦、蝦夷に向け出帆する。13日　旧幕艦隊、南部宮古湾に入港して兵糧・薪水を補給する。17日　宮古湾出航。19日　旧幕艦隊、順次鷲ノ木沖に集結する。20日　旧幕軍先陣、鷲ノ木浜に上陸。21日　本隊、上陸を開始する。22日　新選組、大鳥圭介の指揮下となり、峠下経由で本道を五稜郭に向かう。土方は額兵隊・陸軍隊を率いて川汲峠より間道を五稜郭に向かう。23日　旧幕軍先陣、峠下で新政府軍の攻撃を受けるが、大鳥軍の加勢により撃ち破る。同日　土方軍、鹿部に宿陣。24日　七重村の戦いにより、三好胖・小久保清吉らが戦死する。同日　土方軍、川汲温泉場にて小戦。25日　新選組、大野に移り休陣する。同日　土方軍、湯ノ川に到着。26日　大鳥・土方両軍、五稜郭に入城する。28日　土方を総督とした松前攻略軍が出陣する。30日　新選組、市中取締りを下命され、箱館市中の称名寺を本陣とする。

11月

1日　新選組、市中巡察を開始。同日　土方軍、尻内で小戦して宿陣する。5日　土方軍、松前城を攻略し城下に宿陣。6日　土方軍、松前城内と城下に滞陣する。11日　土方軍、江差に向けて出陣。13日　土方軍、大滝の敵を撃退する。14日　開陽丸、福山に入港。15日　開陽丸、海上より江差を攻撃し、土方軍先鋒、江差に入る。夜、開陽丸座礁。救援の神速丸も座礁する。16日　土方、江差に着陣。17日　二股口経由の一聯隊、熊石に進攻する。18日　土方軍、守備兵を残して松前に帰陣する。29日　新選組に松前出陣の命令が下されるが中止となる。

12月

5日　新選組、五稜郭に詰める。15日　土方軍、松前より箱館に凱旋、蝦夷地平定を祝して、各国領事を招いて祝宴を催す。この日、士官以上の投票により箱館政府閣僚を選出し、総督に榎本、陸軍奉

行並に土方が就任するが、選挙実施日については二十二日、二十八日とする記録もある。29日　土方、青森より渡航の桑名藩家老酒井孫八郎と面談する。

明治2年（1869・2・11〜1870・1・31）

1月　1日　土方、小芝長之助と大津屋に酒井を訪れ面談。2日　新選組、市中大巡邏を行う。6日　酒井、土方を訪れ面談。14日　酒井、榎本・土方を訪れて面談する。15日　陸軍隊より二十四名、彰義隊より八名が新選組に加入する。19日　酒井、土方を訪れて面談。25日　酒井、土方を訪問。28日　酒井、土方を訪問。

2月　28日　土方、新選組の市中取締りをねぎらい金千疋を与える。

3月　4日　酒井、土方を訪ねて面談する。同日　箱館病院掛頭取の小野権之丞、土方を訪れるが不在。20日　新政府艦隊の宮古湾寄港を知り、甲鉄艦奪取作戦が計画される。中旬とも。21日　甲鉄艦奪取のため回天・蟠龍・高雄の三艦が箱館を出航。24日　暴風のため蟠龍が脱落し、回天と高雄が集結地の山田湾に入港する。25日　高雄の機関故障のため、回天が単独で甲鉄艦奪取を決行するが、失敗して箱館に敗走する。この戦いに艦長の甲賀源吾・野村利三郎らが戦死、相馬主計ら多数が負傷。機関故障の高雄は羅賀海岸に座礁、自焼して乗員は南部藩に投降する。26日　回天・蟠龍、箱館に帰港。同月中　玉置良三、病死。

4月　6日　新政府軍が二十四時間以内に蝦夷進攻を決行するとの情報がイギリス商船よりもたらされ、市民の避難所が設けられる。市中取締りの新選組に厳重警戒が命じられる。7日　新選組は弁天台場を本営とし、箱館山上・寒川・山背泊・沖ノ口等の警戒にあたる。9日　新政府軍第一陣、乙部に上陸を開始し、江差警備の一聯隊と交戦。同日　土方、奉行添役の大野右仲・大島寅雄・守衛新選組・伝習歩兵隊・衝鋒隊などを率いて大野市渡に出陣する。10日　土方軍、二股口におもむき、台場山を本陣として天狗岳等に陣地を構築する。13日　午後三時ごろより第一次二股口攻防戦が勃発し、市渡在陣の土方、台場山に急行する。14日　二股での戦闘が前日より十六時間にわたって継続され、ついに新政府軍を撤退させる。同日　仙台の見国隊四百名と、桑名藩士五名が砂原に到着する。後日、桑名藩士のうち四名が新選組に加入する。15日　のちに土方の遺影を日野の佐藤家に届ける市村鉄之助、箱館を脱出する。23日　第二次二股口攻防戦が始まり、二十五日朝まで戦闘が継続される。この戦いにおいて、土方軍は発砲で熱した銃身を水で冷やしながら応戦したとされる。24日　新政府軍艦隊、箱館湾に襲来して砲撃を行う。26日　箱館湾と二股口で小戦が行われる。29日　矢不来の守備陣が新政府軍に突破され、土方軍の退路遮断の危機に二股口退却命令が下される。午後八時ごろより台場を放棄して市渡に退き、赤川・神山などに散兵する。同日　新選組に出撃命令が下され、有川の敵陣を夜襲して引き揚げる。

5月　1日　土方、五稜郭にて榎本らと会談ののち、弁天台場に向かい新選組隊士と再会し、有川出陣を命じる。この日より土方は大町の佐野専左衛門方に逗留する。同日　夜、新選組、大鳥圭介の指揮で七重浜川に夜襲を行い、歩卒の惣六が戦死する。2日　津田丑五郎、前夜の出撃で負傷し箱館病院を訪れる。同日　新選組、彰義隊とともに七重浜を夜襲し、有川まで追撃して帰陣する。同日　旧幕軍を指導したフランス軍人ブリュネら、自国船で箱館を脱して横浜に向かう。3日　新選組、彰義隊・遊撃隊とともに七重浜を夜襲する。4日　佐野家に逗留の土方、五稜郭へ帰陣する。6日　新選組等、大鳥の指揮下に夜襲を決行しようとするが、躊躇して彰義隊に先鋒を譲る。7日　箱館山警備の新選組、山上に地雷火を仕掛けようとした不審人物を捕縛する。8日　新選組、神山へ出張ののち、彰義隊・遊撃隊とともに七重浜を夜襲する。9日　土方、箱館病院に小野権之丞を訪れる。10日　翌日の新政府軍による箱館総攻撃をひかえ、榎本ら旧幕軍幹部は築島の武蔵野楼で別杯を交わす。11日　未明より新政府軍の総攻撃が開始され、箱館山において粕屋十郎・蟻通勘吾、弁天台場において栗原仙之助・津田丑五郎・武部銀次郎、また長島五郎作も討死し、新選組は箱館奉行の永井尚志の兵とともに弁天台場に籠城する。同日　土方、安富才助・立川主税・沢忠助らとともに、千代ヶ岡陣屋より額兵隊二小隊を率いて一本木関門に出撃し、馬上で指揮中を腹部に被弾して討死する。12日　新政府軍の攻撃が継続される。同日　安富才助、五稜郭で土方の実家に戦死を伝える書簡を記し、立川主税に託す。13日　新政府軍、弁天台場に降伏の使者を送る。14日　弁天台場の籠城兵、降伏を決する。15日　相馬主計、最後の新選組隊長となる。同日　弁天台場、降伏。籠城の新選組隊士九十二名、歩卒十一名。17日　榎本武揚、降伏を決意する。18日　五稜郭籠城兵、降伏。武装解除ののち市中寺院に収容される。

特集事典

新選組隊士事典

本項をまとめるにあたっては、『新選組大事典』で隊士項目を執筆された伊東成郎・菊地明・古賀茂作・清水隆・山村竜也氏等の研究をはじめ、釣洋一氏作成の各種「新選組隊士人名事典」、および万代修氏の「新選組隊士補伝」（『新選組研究最前線（上）』所収）を参考とさせていただいた。これら先駆者の研究成果に敬意を表するとともに、厚く御礼を申し上げたい。

なお、文中で壬生寺・光縁寺・新選組慰霊碑の所在地については、頻出するために省略しているが、壬生寺は京都市中京区梛ノ宮町、光縁寺は京都市下京区四条大宮町、新選組慰霊碑は東京都北区滝野川七丁目の寿徳寺境外墓地にある。

文久三年 壬生浪士組創設者たち

阿比留鋭三郎（あびるえいざぶろう）

阿比原、阿比類、栄三良、栄之介とも。元対馬藩士。天保十三年に生まれ、江戸で北辰一刀流を玄武館道場に剣を学ぶ。文久三年二月、浪士組に加わって上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤勇・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となるが、病のため十五日の会津藩邸訪問に欠席している。二十五日に壬生を訪れた会津藩士本多四郎は、阿比留について「大病に付き」として、近々に江戸へ戻ることになっていると記しているところから、上洛中より体調を崩していた可能性がある。

翌四月六日、二十二歳で病死する。永倉新八は『同志連名記』で副長助勤とするが、このころに副長助勤職が制定されていた様子はうかがえない。壬生寺に連刻の墓碑があり、新選組慰霊碑にも名前がある。

家里次郎（いえさとつぐお）

伊勢松坂出身で、天保十年に小林清右衛門の次男として生まれ、母あきの弟である家里悠然に養われる。同年五月二十日に京都で暗殺される儒者家里新太郎の、義弟であり従弟でもあった。安政四年には新太郎の家で暮らしていたが、やがて江戸に出て、文久三年二月に浪士組へ加盟して上洛する。浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、浪士取扱の鵜殿鳩翁より殿内義雄とともに京都残留希望者のとりまとめを命じられ、数人の同志を得た。

三月十五日の会津藩邸訪問には同行したが、芹沢鴨・近藤勇らのグループとは方向性が異なり、互いに同志としての認識はなかった。主導権をめぐって芹沢・近藤らと対立した結果、殿内は二十五日に暗殺され、根岸らの同志も京都を去る。この間、同志を求めて近国を遊説していたものと思われ、四月下旬に大坂へ姿を現したところ、将軍警護のために下坂中の芹沢らに詰め寄られ、四月二十四日に彼らの宿舎であった常安橋会所で切腹させられた。井上源三郎の兄で、千人同心として上洛中だった井上松五郎の日記に「家里次郎殿、少々切腹いたし、浅きず」とある。二十五歳。

井上源三郎（いのうえげんざぶろう）

一重。武州多摩郡日野宿の出身で、八王子千人同心井上藤左衛門の三男として文政十二年に生まれる。天然理心流近藤周助の門人となり、日野の佐藤彦五郎の道場に通い、万延元年に免許を授けられた。文久元年八月には近藤勇の天然理心流四代目襲名披露の野試合に参加し、文久三年二月、浪士組に加わって上洛する。浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤勇・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日提出の板倉勝静への建白書にも連名した。

副長助勤をつとめ、元治元年の池田屋事変では土方歳三に属し、池田屋到着後は屋内で戦い、金十両、別段金七両の恩賞金を受けている。十二月の編成では三番組長をつとめ、翌慶応元年夏の編成では六番組長となった。同三年六月の幕臣取立てでは助勤として見廻組格となり、十月には土方歳三と江戸で隊士を募集し、十一月に帰営している。翌年一月の鳥羽伏見の戦いにおいて、五日に千本松で討死し、甥の井上泰助が首を運び去ろうとしたが果たせず、途中の寺の門前に埋めたという。四十歳。墓は東京都日野市日野本町の宝泉寺にある。

遠藤丈庵（えんどうじょうあん）

武州忍の出身で、天保七年に生まれる。文久三年二月に浪士組へ加盟して上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、京都残留を希望し、三月十五日に会津藩邸を訪問し、二十二日提出の板倉勝静への建白書にも連名。同月下旬、根岸友山らと京都を脱して江戸に戻り、浪士組の後身である新徴組に入隊したが、九月に脱隊した。

大久保剛（おおくぼたけし）→近藤勇

大久保大和（おおくぼやまと）→近藤勇

沖田総司（おきたそうじ）

総二、惣次郎、宗次郎とも。藤原房良。沖田勝次郎の長男として、天保十三年に江戸麻布の白河藩邸で生まれたという。十歳前後から天然理心流試衛館道場の内弟子となり、文久元年八月には近藤勇の四代目襲名披露の野試合に参加し、のちに塾頭となって日野や小野路村へ出稽古に出ているが、文久二年七月には麻疹にかかって小野路村から送り返されている。

文久三年二月、浪士組に加わって上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤勇・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日には会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日提出の板倉勝静への建白書にも連名している。四月には近藤らと屯所の八木家関係者の葬儀に参列し、大坂の平野屋五兵衛方での金策にも同行しており、六月の大坂力士との乱闘にも参加して負傷した。同志が増加した六月ごろに副長助勤となり、元治元年の池田屋事変では近藤勇とともに屋内で戦闘し、金十両、別段金十両を受けたが、戦いの途中で病気のために屋外に出されている。十二月の編成では一番組長となり、慶応元年夏の編成でも一番組長で、剣術師範を兼任した。慶応年間中には脱走した酒井兵庫、浅野藤太郎を斬殺し、三年六月の幕臣取立てでは助勤として見廻組格を受けるが、そのころより病気が悪化し、十二月に近藤が御陵衛士残党に狙撃されたさいには、病床にあって出動することができなかった。

翌年一月の鳥羽伏見の戦いを前に近藤と大坂に下り、江戸帰還後も負傷した近藤とともに療養している。三月の甲陽鎮撫隊の出陣には、日野の佐藤家まで同行したものの、そこから江戸に引き返して今戸で静養していたが、のちに千駄ケ谷に移って五月三十日に病死した。二十七歳。墓は東京都港区元麻布の専称寺にある。

粕谷新五郎（かすやしんごろう）

宗伯。水戸藩士で、粕谷忠兵衛の子として文政三年八月十六日に生まれる。戊午の密勅の返納に反対し、また香川敬三らと薩摩藩に攘夷を訴えたため幽閉されたが、文久二年暮れに放免となり、翌年二月の浪士組上洛に参加した。取締役並出役となって上洛したが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると京都残留を希望し、三月十日、近藤勇・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日の会津藩邸訪問には病欠している。二十五日までは壬生に滞在していたことが確認されるが、その直後に京都を脱して江戸に戻った。翌年には筑波山の挙兵に加わったが、追討されて下野小山の持宝寺で自刃したという。四十五歳。

上城順之助（かみしろじゅんのすけ）→神代仁之助

神代仁之助（かみしろじんのすけ）

上城順之助。水戸出身の浪士で、天保十年に生まれる。文久三年二月に浪士組へ加盟して上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、京都残留を希望し、三月十五日の会津藩邸訪問には病気のため欠席している。同月下旬、京都を脱して江戸に戻り、浪士組の後身である新徴組に入隊して逸見米三郎の組に所属したが、同年六月に脱隊した。

近藤勇（こんどういさみ）

大久保剛、猛、大和とも。初め勝五郎、次いで勝太。島崎。武州多摩郡上石原村の出身で、豪農宮川久次郎の三男として天保五年に生まれる。嘉永元年十月に天然理心流近藤周助の門人となり、同二年に周助の養子となる。安政五年九月、日野八坂神社に島崎勇の名前で天然理心流の日野一門とともに献額し、万延元年に清水家臣松井八十五郎の長女ツネと結婚、文久元年八月に天然理心流四代目襲名披露の野試合を行い、同二年に長女タマが誕生した。

翌三年二月、浪士組に加わって上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日提出の板倉勝静への建白書にも連名している。芹沢とともに隊長となり、四月には大坂の平野屋五兵衛方で金策し、屯所の八木家関係者の葬儀に参列するなどして、六月には大坂力士との乱闘事件を東町奉行所に届け出た。七月には鴻池より芹沢と金策しているが、八月に芹沢らが大和屋焼き討ち事件を起こし、十八日の政変にはともに出動したものの、九月前半には新見錦に詰腹を切らせ、十六日には土方歳三らに芹沢と平山五郎を殺害させる。十月に祇園一力での公武合体派の会合に出席して時勢論を述べ、また会津藩に禄位の辞退を申し入れている。

元治元年六月の池田屋事変では隊士九名を率いて屋内で戦闘し、金十両、別段金二十両の恩賞金を受け、翌月の禁門の変に出動した。十月には将軍上洛を説くために江戸へ下り、同時に伊東甲子太郎らの新入隊士を得て帰京する。翌慶応元年十一月には長州訊問使に随行して伊東らとともに広島へ向かい、二年一月にも広島へ出張した。三年六月の幕臣取立てでは御目見得以上の身分となり、十一月十八日には、御陵衛士として分離した伊東を妾宅に招き、帰り道に殺害させ、伊東の同志をおびき出して襲撃を命じている。翌十二月に伏見奉行所へ転陣するが、

十八日には京都からの帰途を御陵衛士残党に狙撃され、沖田総司とともに大坂へ下った。

翌年一月の鳥羽伏見の戦いには参戦できず、江戸帰還後の三月に甲陽鎮撫隊を組織し、大久保剛の名前で甲府城の接収に向かうが、六日の勝沼の戦いに敗れて江戸に逃走する。その後、大久保大和を名乗って再起のため五兵衛新田に隊士を募ったが、四月三日に転陣先の流山の陣屋を包囲され、土方の助言もあって大久保大和の名で新政府軍に投降した。しかし、板橋の本営で正体が露見し、土方の助命運動も実を結ばず、四月二十五日に斬首された。三十五歳。首級は京都で晒され、胴体は甥の宮川勇五郎らが菩提寺である東京都三鷹市大沢の龍源寺に埋葬したという。福島県会津若松市東山町の天寧寺の墓碑は土方が建立したと伝わる。

斎藤一（さいとうはじめ）

山口一、次郎、二郎とも。一戸伝八、藤田五郎。幕府御家人山口祐助の次男として、弘化元年一月二日に江戸で生まれる。文久二年に誤って人を殺害し、京都に逃れて太子流剣術の吉田某の道場に身を寄せていたという。同三年二月に浪士組が上洛し、三月には近藤勇・芹沢鴨らの京都残留を知って同志となり、三月十日には同調して京都滞留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となる。十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日提出の板倉勝静への建白書にも連名した。四月には近藤らと屯所の八木家関係者の葬儀に参列し、六月の大坂力士との乱闘事件では、舟遊び中に腹痛を起こしてその発端となった。このころ副長助勤となる。

元治元年の池田屋事変では土方歳三に属し、池田屋到着後は屋内で戦い、金十両、別段金七両を受け、十二月の編成では四番組長となり、慶応元年には土方歳三とともに江戸へ下り、隊士を募集して五月に帰京した。同年夏の編成では三番組長とともに剣術師範となる。同三年三月には、御陵衛士として新選組から分離する伊東甲子太郎にスパイとして同行し、彼らと建白書に連名するなどして正体を隠し続け、十一月十日に脱走するまで同志を装っていた。その後、山口二郎と変名して紀州の三浦休太郎のもとに身を潜ませ、十八日に帰隊するが、伊東殺害の油小路事件に関してのことだったのだろう。翌慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、三月の甲陽鎮撫隊出陣ののち、五兵衛新田に駐屯するが、転陣先の流山で四月三日に近藤勇が投降したため、隊長として隊士を引き連れて会津に向かう。会津では隊長として白河の攻防戦などに出陣し、同年六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿でも隊長役とある。その後、別行動をとっていた土方歳三と合流するが、八月の母成峠の戦いに敗れ、土方と対立して十数名の同志と会津に残留した。九月五日、如来堂を守備中に襲撃されるが、脱出に成功する。会津戦争終結後は会津藩士とともに斗南に配流され、一戸伝八を名乗ったという。東京に戻ってのち、会津藩大目付だった高木小十郎の娘の時尾と結婚して藤田五郎を名乗り、明治十年に警察官となって、西南戦争にも出陣した。時尾との間に三人の子供をもうけ、大正四年九月二十八日に七十一歳で東京本郷の自宅に死亡する。墓は福島県会津若松市七日町の阿弥陀寺にある。

佐伯又三郎（さえきまたさぶろう）

斉木とも。亦三郎とも。長州出身とされるが、江戸とも。文久三年三月、芹沢鴨・近藤勇らの京都残留を知って同志となり、十日には同調して京都滞留を希望し、十二日には会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日に会津藩邸を訪問し、二十二日提出の板倉勝静への建白書にも連名した。四月には近藤らと屯所の八木家関係者の葬儀に参列し、同志が増加した六月ごろに副長助勤となる。佐々木愛次郎の恋人あぐりに横恋慕した芹沢の意を汲んで、佐々木を斬殺したが、同月十日には朱雀千本で殺害された。スパイとして潜入させた長州の久坂玄瑞の指令ともされるが、芹沢愛用の根付けを盗んだための報復だったらしい。新選組慰霊碑に名前が刻まれている。

清水五一（しみずごいち）

吾一とも。誓盛。酒造業清水弥右衛門の五男として、天保七年に武州埼玉郡羽生村で生まれる。母が根岸友山の妹で、甥にあたる。文久三年二月に浪士組へ加盟し、根岸とともに上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると京都残留を希望し、三月十五日に会津藩邸を訪問し、二十二日提出の板倉勝静への建白書にも連名している。同月下旬、根岸とともに京都を脱して江戸に戻り、浪士組の後身である新徴組に入隊して隊務に励む。慶応四年三月、新徴組預かりの庄内藩の帰国にともなって、妻子とともに庄内に入り、戊辰戦争を戦う。明治五年五月二十七日に三十七歳で病死し、墓は山形県鶴岡市陽

光町の総穏寺にある。

杉村義衛（すぎむらよしえ）→永倉新八

鈴木長蔵（すずきちょうぞう）

奥州仙台の出身で、天保五年に生まれる。文久三年二月に浪士組へ加盟し上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると京都残留を希望し、三月十五日の会津藩邸訪問には病気のため欠席した。同月下旬、京都を脱して江戸に戻り、浪士組の後身である新徴組に入隊して山本仙之助の組に所属したが、同年六月に謹慎処分を受け、まもなくして脱隊している。

芹沢鴨（せりざわかも）

下村継次、木村継次。光幹。水戸の出身で、芹沢貞幹の三男として文政十年に生まれる。天保元年、三年とも。文久三年二月、新見錦・平山五郎・平間重助・野口健司らと浪士組に加盟し、三番組小頭から取締役附となる。上洛後、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤勇らと京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日の嘆願書にも連名した。近藤とともに隊長となったが、巨魁隊長として近藤の上位にあったともいう。

その後、四月には平野屋、六月には加嶋屋、七月には鴻池という大坂の豪商で金策を行い、その間にも六月に大坂力士との乱闘事件、島原の角屋への営業停止処分などがあり、ついに八月には大和屋襲撃事件を起こし、これによって会津藩より近藤らに芹沢の排斥が命じられたという。八月十八日の政変には、隊士五十名余を率いて出動したが、九月十六日夜、屯所の八木邸で妾のお梅と同衾中を襲われ、平山五郎とともに斬殺された。三十七歳。三十二、三十四歳とも。墓は壬生寺にあり、墓碑に死亡日は十八日とあるが、これは葬儀の執行日と思われる。

藤堂平助（とうどうへいすけ）

藤原宜虎。変名に南部与八郎。弘化元年の生まれで、津藩藤堂和泉守の落胤を自称した。千葉周作の玄武館道場で北辰一刀流を学び、目録を得たという。のちに試衛館に出入りするようになり、文久三年二月、浪士組に加わって上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤勇・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日の嘆願書にも連名した。

副長助勤となって、元治元年の池田屋事変では近藤勇とともに屋内で戦闘し、眉間に負傷して屋外に出されたが、金十両、別段金十両の恩賞金を受けている。その後、江戸に下って同門だった伊東甲子太郎に接触し、新選組入隊の内諾を得て、伊東らの上洛を見送って江戸に残り、翌慶応元年四月に土方歳三が募集した隊士とともに京都へ戻り、同年夏の編成で八番組長となる。伊東に傾倒し、同三年三月に御陵衛士として伊東らが新選組から分離するさいに同行するが、十一月十八日の油小路事件で伊東が殺害され、同志とともに現場へ急行したところ、待ち受けていた新選組に襲われて絶命した。二十四歳。いつも真っ先に突撃したので「魁先生」とよばれていたという。遺体は光縁寺に埋葬されたが、翌年三月に同志によって京都市東山区泉涌寺山内町の戒光寺墓地に改葬された。

殿内義雄（とのうちよしお）

大二郎。上総武射郡森村の出身で、天保元年に生まれる。結城藩に仕え、安政三年と文久二年には昌平黌に学び、文久三年二月に浪士組へ加盟し、目付役として江戸を出立したが、途中で罷免されて根岸友山の組に配属された。上洛後、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、取扱の鵜殿鳩翁より京都残留希望者のとりまとめを命じられ、数人の同志を得た。三月十五日の会津藩邸訪問には同行したが、芹沢鴨・近藤勇らのグループとは方向性が異なり、互いに同志としての認識はなかった。主導権をめぐって芹沢・近藤らと対立した結果、三月二十五日夜、四条大橋の上で暗殺される。三十四歳。

内藤隼人（ないとうはやと）→土方歳三

永倉新八（ながくらしんぱち）

杉村義衛。幼名を栄吉。載之。松前藩士長倉勘次の子として、天保十年に江戸下谷の松前藩邸の長屋に生まれる。神道無念流を岡田十松と百合元昇三、心形刀流を坪内主馬に学び、道場で島田魁と知己を得たものと思われる。いつのころから試衛館にも出入りするようになり、文久三年二月、浪士組に加わって上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤勇・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日の嘆願書にも連名した。四月に大坂の平

野屋五兵衛方で金策を働き、同月には近藤らと屯所の八木家関係者の葬儀に参列し、六月には大坂力士との乱闘にも参加している。
副長助勤となって、元治元年の池田屋事変では近藤勇とともに屋内で戦闘し、金十両、別段金十両の恩賞金を受ける。その後、増長した近藤糾弾の建白書を会津藩に提出するなどしたが、九月には将軍の上洛要請と隊士募集のために江戸へ下る近藤に同行し、十月に帰京した。十二月の編成表には名前がないが、翌慶応元年夏の編成では二番組長と剣術師範を兼任した。同三年六月の幕臣取立てでは助勤として見廻組格となり、十二月に近藤が御陵衛士残党に狙撃されると、隊士を率いて現場に急行している。
四年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、三月の甲陽鎮撫隊出陣では勝沼の戦いに敗れ、江戸に敗走すると原田左之助らと靖共隊を結成して副長となり、新選組と袂を分かった。四月の江戸開城にさいして鴻ノ台に脱走し、旧幕軍の七聯隊に合流して日光を目指す。今市の戦いに苦戦し、援兵を求めて会津に走るが、新政府軍の進攻のため米沢へ回り、苦心の末に江戸へ戻った。
維新後、松前に帰藩して藩医杉村松柏の婿養子となって杉村義衛を名乗り、明治九年には松本良順の協力を得て新選組慰霊碑を建立し、十五年には北海道樺戸集治監の剣術師範となり、退職後は北海道小樽に住み、大正四年一月五日に七十七歳で死亡した。墓は新選組慰霊碑のある寿徳寺境外墓地のほか、合葬墓が札幌市豊平区里塚の里塚霊園にある。『文久浪士報国記事』『同志連名記』などを残す。

新見錦（にいみにしき）

錦山とも。水戸の出身で、天保七年に生まれる。神道無念流剣術の免許皆伝。文久三年二月、浪士組に加わり三番組小頭となって上洛したが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤勇・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日の嘆願書にも連名している。同年四月には大坂の平野屋五兵衛方での金策に名を連ね、芹沢・近藤とともに隊長格にあったが、以後は副長に降格となった形跡がうかがわれる。
九月某日、芹沢らの暗殺に先立って、祇園の貸座敷山緒で近藤らに切腹させられたというが、山緒の所在も、日時も不明。二十八歳。九月十三日に、近藤の意に反するところから殺害されたという、田中伊織と同一人物ではないかと考えられる。

根岸友山（ねぎしゆうざん）

伴七。信輔。武州大里郡甲山の出身で、豪農根岸信保の長男として文化六年十一月二十七日に生まれる。学問を芳川波山、剣を北辰一刀流千葉周作に学んだ。自宅に剣道場降武所と私塾三余堂を開き、長州その他の尊攘家と交わり、来客が絶えなかったという。文久三年一月に浪士募集を知り、門人らを率いて浪士組に加盟、一番組小頭となって上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると京都残留を希望し、三月十五日には会津藩邸を訪れている。同月下旬、遠藤丈庵・清水五一とともに京都を脱して江戸に戻り、浪士組の後身である新徴組に入隊して取締付から世話役となったが、九月ごろに脱隊して帰郷した。以後、討幕への意志を固め、慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いに幕府が敗北すると、祝宴を張ったという。維新後は政治活動から離れ、明治二十三年十二月三日に八十八歳で死亡し、墓は埼玉県大里郡大里村の青山墓地。

野口健司（のぐちけんじ）

健二、健治、健次、憲司とも。水戸の出身で、天保十四年に生まれる。神道無念流剣術を使う。文久三年二月、浪士組に加わって上洛したが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日の嘆願書にも連名している。同年四月には大坂の平野屋五兵衛方での金策に名を連ね、六月の大坂力士との乱闘にも加わり、同志が増加して副長助勤となる。九月の芹沢暗殺事件によって、芹沢グループ唯一の残存隊士となったが、十二月二十七日に屯所の前川邸で、安藤早太郎の介錯によって切腹した。二十一歳。墓は壬生寺にあるが、埋葬は光縁寺にされている。

原田左之助（はらださのすけ）

佐之助、左之介とも。忠一。伊予松山の出身で、原田長次の長男として天保十一年に生まれる。種田流槍術を使う。安政三年ごろ江戸に出て、三田の松山藩邸で中間をしていたが、まもなく郷里に帰って若党となる。この間に事情があって切腹を試み、その傷痕が残ったため丸に

一文字を定紋にしたという。その後、出奔して近藤勇と出会い、文久三年二月に浪士組に加わって上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日の嘆願書にも連名した。同年四月には大坂の平野屋五兵衛方での金策に名を連ね、六月には大坂力士との乱闘に加わり、九月には長州のスパイとして楠木小十郎を殺害。副長助勤となって、翌元治元年六月の池田屋事変では土方歳三に属し、池田屋到着後は屋内で戦い、金十両、別段金七両の恩賞金を受け、翌月の禁門の変では左肩を負傷した。その後、増長した近藤を糾弾する建白書を会津藩に提出するなどしたが和解し、十二月の編成では小荷駄雑具方を率い、慶応元年夏の編成では十番組長となるが、同二年九月の三条制札事件では七番組長として出動し、土佐の藤崎吉五郎を斬り付け、二十両の恩賞金を授けられている。三年十一月の伊東甲子太郎を殺害した油小路事件にも出動し、御陵衛士を待ち受けて服部武雄を殺害したという。慶応元年三月ごろに妻マサを迎え、翌年に長男茂が生まれ、翌々年には次男も誕生したが早世した。三年十二月の伏見転陣のさいに、二分金ばかりで二百両を妻に届けたと伝わる。
慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、三月には甲陽鎮撫隊として出陣したが、勝沼の戦いに敗れ、江戸で新選組を脱して永倉新八らと靖共隊を結成し、副長となる。四月には江戸を脱走して鴻ノ台の旧幕軍に合流し、日光を目指すが、途中の山崎宿で離脱して江戸に戻った。五月十五日の彰義隊の戦いに参戦して重傷を負い、十七日に本所猿江町の神保山城守邸で死亡した。二十九歳。岸島芳太郎が京都のまさに、正誉円入居士との戒名を伝えたという。新選組慰霊碑に名前が刻まれている。

土方歳三（ひじかたとしぞう）

内藤隼人、隼之助とも。武州多摩郡石田村の豪農土方隼人義諄の四男として、天保六年に生まれる。誕生時に父は死亡しており、母親の恵津も天保十一年に死去したため、次男の喜六夫婦に養育された。十一歳で江戸上野の松坂屋、十七歳で大伝馬町の呉服屋へ奉公に出されたが長続きせず、以後は家伝薬の行商をしていたという。
天然理心流入門は嘉永四年のことで、このころに近藤勇と出会ったものと思われる。
文久三年二月、浪士組に加わって上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤勇・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日の嘆願書にも連名した。四月に大坂の平野屋五兵衛方で金策を行い、六月には大坂力士との乱闘にも参加している。副長として八月十八日の政変にも出動し、九月の芹沢暗殺にも加わり、元治元年の池田屋事変では隊士二十三名を率いて、金十両、別段金十三両を受けた。慶応元年には斎藤一らと江戸で隊士の募集を行って五月に帰京し、同二年には渋沢栄一とともに、元見廻組の大沢源次郎の捕縛に向かい、同三年十月にも井上源三郎と江戸で隊士の募集をしている。十二月十八日に近藤が御陵衛士残党に狙撃されて大坂に下り、翌年一月の鳥羽伏見の戦いの指揮をとった。
江戸に帰還すると、三月に内藤隼人の名で甲陽鎮撫隊として出陣し、勝沼での開戦前に援兵を求めて江戸へ走り、敗戦後は隊士を集めて五兵衛新田に送って再起をはかった。しかし、四月三日に転陣先の流山の陣屋を新政府に包囲され、切腹しようとする近藤を説得して投降させると、江戸に潜入して勝海舟に助命を嘆願するが果たせず、島田魁ら六名の隊士とともに、鴻ノ台結集の旧幕軍に合流する。そして参謀に選任されると、四月十九日には宇都宮城を攻略するが、二十三日の防衛戦に負傷して今市から会津へ向かい、七日町の清水屋に療養した。
七月に戦線に復帰し、新選組と合流するが、八月の母成峠の戦いに敗れ、米沢から仙台に出て榎本武揚と出会い、新選組を再編成して十月に蝦夷地へ渡った。五稜郭を占領すると、松前から江差へと転戦して蝦夷を平定し、十二月には陸軍奉行並に就任する。
翌明治二年三月には宮古湾で新政府軍の甲鉄艦奪取作戦を敢行するが失敗し、四月に新政府軍が上陸を開始すると、二股口で防衛戦を行う。二次にわたって撃退したが、退路を断たれる危機が生じたために撤退し、五月十一日の箱館総攻撃に孤立した弁天台場救援のために出陣。一本木関門で指揮中に敵弾を浴びて死亡し、遺体は五稜郭に運ばれて埋葬された。三十五歳。墓は東京都日野市石田の石田寺にあり、新選組慰霊碑にも名前が刻まれる。

平間重助（ひらまじゅうすけ）

重介、重輔とも。水戸の出身で、平間勘右衛門の三男として文政七年に生まれる。神道無念流剣術を芹沢鴨に学び、目録を得た。天保十五年三月に行われた、徳川斉昭臨席の千波原の訓練に参加している。文久三年二月、浪士組に加わって上洛したが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日の嘆願書にも連名している。四月には近藤らと屯所の八木家関係者の葬儀に参列し、六月の大坂力士との乱闘にも加わり、同志が増加して副長助勤となる。九月十六日夜、八木邸で芹沢と平山五郎が殺害されたさいには別室にいたため無事だったが、直後に脱走した。その後の消息は不明。

平山五郎（ひらやまごろう）

播州姫路の出身で、文政十二年に生まれ、花火の暴発によって左目を失明していたという。神道無念流を使い、安政六年五月に横浜戸塚の直心流萩原連之助の道場を訪れ、その「剣客簿」に名前を残している。いつのころから芹沢鴨と交流し、文久三年二月、浪士組に加わり上洛したが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤勇・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日の嘆願書にも連名した。六月の大坂力士との乱闘にも加わり、同志が増加して副長助勤となる。九月十六日夜、八木邸で島原の小栄と同衾中を襲われ、芹沢とともに殺害された。首が落とされていたという。三十五歳。墓は壬生寺にある。墓碑に死亡日は十八日と刻まれるが、これは葬儀の執行日と思われる。

山口二郎（やまぐちじろう）→斎藤一

藤田五郎（ふじたごろう）→斎藤一

山南敬助（やまなみけいすけ）

正しくは「さんなん」と読む。敬介、啓輔、三南啓助、三郎、三治郎、三男啓介、勇助とも。藤原知信。奥州仙台の出身で、剣術師範山南某の次男として天保四年に生まれる。北辰一刀流、あるいは小野派一刀流を学んだが、近藤勇と立ち合って敗れたため近藤の弟子となったという。文久元年八月には近藤の天然理心流四代目襲名披露の野試合に参加し、翌年一月には沖田総司とともに小野路村などへ出稽古におもむく。三年二月、浪士組に加わって上洛するが、浪士組本隊の江戸帰還が決定すると、三月十日には近藤・芹沢鴨らに同調して京都残留を希望し、十二日に会津藩預かり壬生浪士組の一員となり、十五日には会津藩邸を訪問し、二十二日の嘆願書にも連名した。副長となって、六月には大坂力士との乱闘に参加し、七月ごろには料亭岩木升屋に押し入った浪士を斬って、会津藩より報奨金を与えられている。また八月十八日の政変にも出動し、九月の芹沢暗殺事件にも加わっていたという。その後、体調を崩し、翌元治元年二月には多摩からの知人の来訪にも、数度にわたって病気のため面会できず、六月の池田屋事変にも屯所に残留していたようで、十二月の編成にも名前がない。そして翌慶応元年二月二十日ごろに脱走し、大津で沖田総司に発見されて屯所へ連行されると、二十三日に前川邸の一室で沖田の介錯によって切腹した。三十三歳。その直前、島原の遊女の明里と出窓越しに別れを告げたという。墓は光縁寺にある。

元治元年 池田屋事変までの入隊者

浅野藤太郎（あさのとうたろう）

薫。忠雄。備前出身の医師だったという。文久三年七月以降に入隊し、元治元年の池田屋事変では山崎烝らと事前の探索にあたり、当日は近藤勇とともに屋内で戦闘し、金十両、別段金十両の恩賞金を受ける。六月十二日には明保野亭事件で切腹した柴司の葬儀に参列し、「しばしまておなじ浮世の人ならば共に三ツ瀬の川や渡らん」との弔歌を詠む。同年十二月の編成に名前はないが、探索のため京都を離れていた可能性もあり、阿部十郎は同年秋に大坂で浅野と会ったことを述べている。永倉新八は副長助勤と記録するが、事実であればこのころの就任かと思われる。

慶応二年九月の三条制札事件で斥候をつとめ、敵前を通ることを臆したため除隊処分となったとされるが、同元年七月の隊士名簿にも名前がないことから、それまで在隊していたものかどうか疑問が持たれる。除隊後の同三年に伊東甲子太郎ら御陵衛士の屯所を訪れたが、新選組と御陵衛士との間には隊士の編入を禁じる約定があったため、伊東らはしばらく山科へ潜伏させたのちに土佐へ逃走させるよう計画した。しかし浅野は、新選組を勤王化させるために近藤勇を説得しようと屯所へ出向き、葛野郡川勝寺村で沖田総司に斬殺されたという。新選組慰霊碑に刻名されている。

なお島田魁の『英名録』の別項には芹沢鴨以下、長州のスパイや幕臣取立てに反発して切腹したメンバーが列記されており、そのなかに「田内藤太郎」とされた隊士がいる。これが田内知の別称ともされているが、項目上の意味からは浅野藤太郎を誤認したものと考えられる。

阿部十郎（あべじゅうろう）

慎蔵、信二郎、高野十郎とも。隆明。出羽由利郡羽広村出身で、阿部多郎兵衛の次男として天保八年八月二十二日に生まれる。文久三年六月以降に阿部慎蔵の名で入隊し、八月十八日の政変にも出動したものと思われるが、元治元年の池田屋事変以前に脱隊した。その後、高野十郎と名乗って大坂の谷万太郎道場に寄宿中、慶応元年一月八日のぜんざい屋事件に遭遇し、谷らと大利鼎吉を討ち取る。その後、浅野藤太郎の手引きによって阿部信二郎の名で新選組に再入隊し、伍長、砲術師範をつとめた。

同三年三月、伊東甲子太郎らとともに新選組から分離し御陵衛士となり、同年十一月の油小路事件のさいには山狩りに出ていたため難を免れた。翌十二月には京都から伏見に向かう近藤勇を富山弥兵衛らと襲撃し、右肩に重傷を負わせる。翌年一月に鳥羽伏見の戦いがはじまると、御陵衛士の残党と綾小路俊愛に従って挙兵し、相楽総三らと赤報隊を結成する。その後、独走する相楽たちと別れて帰京し、投獄されたのちに奥州を転戦した。箱館戦争終結後、東京で安富才助を殺害したという。明治五年に北海道へおもむきリンゴ園などを経営し、明治四十年一月六日、七十一歳で東京市下谷区で病死。墓所は不明だが、戒名は常照院釈隆明居士。

阿部信二郎（あべしんじろう）→阿部十郎

阿部慎蔵（あべしんぞう）→阿部十郎

荒木田左馬之介（あらきださまのすけ）

左馬之允とも。文久三年六月ごろに入隊して国事探偵方をつとめ、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。同年九月二十五日に御倉伊勢武らとはかり、永倉新八・中村金吾を暗殺しようとするが失敗し、翌二十六日に屯所で結髪中を長州のスパイとして林信太郎に斬殺された。二十四・五歳といい、新選組慰霊碑に刻名されている。

蟻通勘吾（ありどおしかんご）

天保十年生まれ、讃岐高松の出身。文久三年六月ごろに入隊した。元治元年の池田屋事変では土方歳三に属し、池田屋到着後は屋内で戦い、金十両、別段金七両の恩賞金を受け、同年十二月の編成では沖田総司の一番組に所属する。慶応二年の三条制札事件では三番組に属して戦い、千疋の報奨金を受け、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇となった。慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いを経て、会津では什長をつとめ、五月一日の白河口黒川の戦いで重傷を負い、戦死と記録されるものの蝦夷地に渡る。箱館での所属は不明だが、明治二年五月十一日、箱館山の攻防戦に討死した。三十一歳。間宮魁の『箱館脱走人名』では弁天台場での死とされている。

蟻通七五三之進（ありどおしめのしん）

文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せる。八月十八日の政変にも出動したものと思われるが、元治元年の池田屋事変以前に離隊した。

蟻通甚五郎（ありどおしじんごろう）

文久三年六月から七月にかけての在隊者五十名を列記した隊士名簿に名前を残し、八月十八日の政変にも出動したものと思われるが、その後の事跡は不明。ただし、名前の類似から蟻通勘吾のことと推定される。

安藤早太郎（あんどうはやたろう）

藤原貴果。三河挙母藩の出身で紀州日置流竹林派射術を使い、天保十三年には奈良東大寺の通し矢で名を馳せたが嘉永三年に脱藩し、知恩院の一心寺に入ったという。文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に新選組が幕府に提出した上書に連名し、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。副長助勤をつとめ、元治元年の池田屋事変では近藤勇に属して屋内で戦闘し、受傷して七月二十二日に死亡したが、金十両、別段金十両の恩賞金が下された。墓は壬生寺にある。文久三年十二月の野口健司の切腹にさいして介錯をつとめたが、そのとき二十五・六歳だったと伝えられ、事実とすれば別人

ということになる。

家木将監

文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せるが、同年七月以前に離隊。

伊木八郎

一郎とも。文久三年秋以降に入隊し、元治元年の池田屋事変では土方歳三に属して屋外の守備につき、金十両、別段金五両の恩賞金を受ける。同年十二月の編成では松原忠司の七番大炮組に所属し、慶応二年九月の三条制札事件では五番組に属して、原田左之助とともに土佐の藤崎吉五郎を斬り十五両の恩賞金を受けた。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、十二月までに離隊。

石川武雄→竹内元太郎

伊藤与八郎

文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われるが、池田屋事変以前に離隊する。

上田金吾

文久三年六月ごろに入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われるが、元治元年の池田屋事変以前に離隊している。上田清蔵と同一人物か。

越後三郎

文久三年六月ごろに入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われ、国事探偵方をつとめる。同年九月二十五日に荒木田左馬之介らとはかり、永倉新八・中村金吾を暗殺しようとするが失敗し、翌二十六日には長州のスパイとして沖田総司・藤堂平助に襲われるが、松井竜三郎・松永主計とともに逃走した。

一説に、越後糸魚川出身で天保十年五月五日に松山恵治良の子として生まれ、松山良造、三郎、一郎などと称したといい、新選組脱走後、元治元年の池田屋事変では列席していたが脱出し、禁門の変にも参戦したという。維新後は海軍に出仕して明治八年に退職後、郷里で私塾を開き、のちに京都に移住して同二十五年二月二十八日、五十四歳で没した。

尾形俊太郎

小形、緒方とも。肥後熊本の出身で、文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変にも出動したものと思われ、諸士取調役兼監察、文学師範、副長助勤を歴任した。池田屋事変には不参加だったが、元治元年九月には近藤勇に従って永倉新八らとともに江戸へ下り、将軍の上洛要請とともに隊士の募集を行う。同年十二月の編成では五番組長をつとめ、翌慶応元年十一月には長州訊問使に随行する近藤の徒士として、伊東甲子太郎・竹田観柳斎らと広島に出張する。同三年六月の幕臣取立てでは副長助勤として見廻組格を受け、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て転戦するが、八月の会津母成峠の戦い敗走後に離隊した。松本喜次郎の墓がある三代の正福寺に尾形姓の墓碑があったとも伝わるが、俊太郎のものであったかは不明。

奥沢栄助

文久三年六月ごろに入隊し、八月十八日の政変にも出動したものと思われ、伍長をつとめる。元治元年六月五日の池田屋事変では近藤勇に属して屋内で戦って即死。金十両、別段金十両の恩賞金が下され、墓は壬生寺にある。

尾関泉→尾関雅次郎

尾関雅次郎

政一郎とも。大和高取藩士尾関文左衛門の次男で、尾関弥四郎の弟。文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われるが、元治元年の池田屋事変には不参加だった。諸士取調役兼監察をつとめ、同年十二月の編成では旗役として、中村金吾とともに行軍の先頭を任された。慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組御雇の格を受け、泉と改名する。翌年一月の鳥羽伏見の戦いから江戸に帰還し、会津では差図役をつとめ、同年閏四月二十七日に会津大谷地村で負傷した。六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では歩兵差図役をつとめている。蝦夷渡航後の編成では差図役となり、明治二年五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容された。明治二十五年二月二十八日に郷里で死亡したという。

尾関弥四郎

弥兵衛とも。天保二年、大和高取藩士尾関文左衛門の長男、尾関雅次郎の兄として誕生。弟に遅れて新選組に入隊して勘定方をつとめ、元治元年の池田屋事変では土方歳三に属して屋外の守備につき、金十両、別段金五両の恩賞金を受け、同年十二月の編成では原田左之助の小荷駄雑具の組に所属した。病弱だったようで、慶応元年四月には京坂での隊士募集の任にあたり、配下の易者が入隊希望者に与えた紹介状が伝わる。その後、除隊となって同年十一月七日に三十五歳で死亡したという。同年閏五月に西本願寺の屯所を訪れた幕府典医の松本良順は、隊士の健康状態を調べた結果を自伝で「難病は心臓病と肺結核との二人のみ」としているが、このどちらかが弥四郎のことだったと思われる。

なお、永倉新八は「和州植村脱走」としているが、これが大和高取藩主植村家保の脱藩人を意味していることはいうまでもない。

葛山武八郎

桂山とも。橘憲章。会津出身で、京都一月寺脱走ともいう。文久三年秋以降に入隊し、伍長をつとめた。元治元年の池田屋事変では土方歳三に属し、池田屋到着後は屋内で戦って金十両、別段金七両の恩賞金を受ける。同年八月ごろ、近藤勇の専横を憂慮して永倉新八・原田左之助ら五名と会津藩に建白書を提出し、近藤との和解はなったものの、その責を負わされて九月六日、近藤が江戸に下った翌日に切腹。遺体は谷三十郎・宿院良蔵を頼越人として光縁寺に埋葬されたが、墓碑は壬生寺にある。

亀井造酒之助

文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せる。以後、事跡は伝わらず、同年七月までに離隊した。

河合耆三郎

儀三郎とも。源義輝、吉輝とも。天保九年、播州高砂の米問屋河合儀平の長男として生まれる。文久三年六月ごろに入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われ、勘定方をつとめる。元治元年の池田屋事変では土方歳三に属して屋外の守備につき、金十両、別段金五両の恩賞金を受け、同年七月の禁門の変後には松本喜次郎とともに摂津高浜村を探索し、同村より長州藩と無縁である旨の誓約書を提出させ、昆陽宿では山崎烝とともに長州軍が残置した兵器類を大坂に移送している。

同年十二月の編成では原田左之助の小荷駄雑具の組に所属したが、慶応二年二月十二日、隊費不算の罪によって切腹した。斬首ともされる。原因は近藤勇が御幸太夫を身請けする五百両のうち五十両が不足していたためともいうが、身請け費用を隊費から捻出するとは考えられない。不算額の送金を郷里に依頼し、到着を待ち侘びながらの処刑だったという。墓は光縁寺と壬生寺にあるが、壬生寺の墓碑は父親と妹が建立したものである。

なお、一般に「きさぶろう」とされるが、「耆」は漢音では「き」だが、呉音では「ぎ」であり、父親の名前と、儀三郎ともされる表記から、「ぎさぶろう」と読むべきかもしれない。

川島勝次

山城国川島村出身。文久三年五月までに入隊し、同二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せ、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。元治元年の池田屋事変では島田魁らとともに事前の探索活動を行い、当日は土方歳三に属して池田屋到着後は屋内で戦い、金十両、別段金七両の恩賞金を受けた。

翌月の禁門の変では嵯峨天龍寺方面を偵察して報告書を記し、同年十二月の編成では馬験として近藤勇に従う。伍長をつとめていたが、翌慶応元年以降に臆病であることを理由に除隊されたものの、隊名を利用して金策したことが露見し、捕らえられて坊主頭にされたうえ、富山弥兵衛によって二条河原で斬首された。新選組慰霊碑に名前が刻まれている。

木内峰太

峯太、岸太とも。近江出身で、文久三年七月以降に入隊し、元治元年の池田屋事変では土方歳三に属して屋外の守備につき、金十両、別段金五両の恩賞金が与えられた。同年十二月の編成では伊東甲子太郎の二番組に所属し、慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、十二月までに離隊した。明治八年には京都で警察官に採用されたという。

楠木小十郎

太紋とも。文久三年六月ごろに入隊し、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。山野八十八らとともに「隊中美男五人衆」のひとりに数えられた。桂小五郎の指示によって入隊したとされるが露見し、同年九月二十六日、御倉伊勢武らが長州のスパイとして殺害されたさ

いに、原田左之助によって斬殺された。十七歳だったという。在京中だった真木和泉の日記に、七月十七日の来訪者として「楠十」との記述があり、同一人物と思われる。新選組慰霊碑に名前が刻まれている。

近藤周平

谷周平。昌武。備中松山藩剣術師範だった谷三治郎の三男として、嘉永元年五月二十日に生まれる。谷三十郎、万太郎の弟。文久三年七月以降に兄とともに入隊したものと思われ、元治元年の池田屋事変に出動して金十両、別段金五両の恩賞金を受ける。この直前に近藤勇の養子となったようで、事変を郷里に報告した六月八日付の近藤の手紙では「倅周平」とされ、「先日、板倉周防守殿家来より養子貰い受け申し候」と説明されている。この手紙では、周平は近藤と行動をともにして池田屋に斬り込んだようにされているが、実際には土方歳三に属して屋外の守備についていたことが、恩奨金の支給額から判明する。

同年十二月の編成では三浦啓之助とともに近藤に従い、慶応三年六月の幕臣取立てでは調役として見廻組並の格を受けているが、名前は谷周平とあって、この間に養子が解消されていたことがわかる。

翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還するが、ほどなく脱走した。明治五年に大阪府の巡査となり、その後は播田ツル方へ婿入りしたが二十年に離婚し、三陽鉄道に奉職して三十四年十二月二日に死亡する。墓は大阪市北区兎我野町の本伝寺にある。

酒井兵庫

坂井とも。摂津住吉の出身で、文久三年秋以降に入隊し、元治元年の池田屋事変では土方歳三に属して屋外の守備につき、金十両、別段金五両の恩賞金を受けた。同年十二月の編成では原田左之助の小荷駄雑具の組に所属し、翌慶応元年夏の編成で勘定方となる。同年三月には死亡した大谷良輔の頼越人として光縁寺を訪れ、六月にも切腹した石川三郎と瀬山滝人の頼越人となっている。その後、ほどなくして脱走したものと思われるが、薩摩の海江田武治に内通したとして、住吉に潜伏中を沖田総司らに襲われた。傷は致命傷とはならなかったが失心し、蘇生後に傷口を見て驚いて死亡したという。

佐々木愛次郎

大坂出身で、文久三年五月までに入隊して、楠木小十郎らとともに「隊中美男五人衆」のひとりに数えられる。同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せるが、恋人のあぐりを芹沢鴨に横恋慕されたため、佐伯又三郎にそそのかされて、八月二日にふたりで脱走をはかるが、待ち受けていた佐伯らに朱雀千本で殺害された。愛次郎が十九歳、あぐりは十七歳だったという。あぐりと知り合ったのは因幡薬師での虎の見世物がきっかけとされるが、興行が打たれたのは九月一日からのことであり、その点に疑問が残る。

佐々木蔵之介

蔵之允とも。文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せ、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。元治元年の池田屋事変では土方歳三に属して屋外の守備につき、金十両、別段金五両の恩賞金を受けたが、慶応元年七月以前に離隊した。

篠塚岸蔵→笹塚峰蔵

笹塚峰蔵

篠塚とも。峯三、岸三とも。文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。元治元年の池田屋事変では土方歳三に属し、池田屋到着後は屋内で戦い、金十両、別段金七両の恩賞金を受けた。近藤勇が東下中の同年十月五日、留守を預かる土方歳三が松平容保を通じて入隊前の主に乞われ、江戸の近藤に「篠塚峯三儀、松平肥後守殿へ古主よりたっての御願いに付き、余儀なき次第にて先主人にあい渡し候——」と、離隊を許した旨の手紙を書いている。「篠」は丹波篠山の「ささ」と読み、「岸」は峯の誤読である。

島田魁

文政十一年一月十五日、美濃厚見郡雄綱村の近藤伊右衛門の次男として生まれ、両親を失ったのち、母方の親戚である永縄家や川島家に寄宿し、二十九歳のときに江戸へ出て飯田町の坪内主馬道場で心形刀流剣術を学ぶが、この間に道場へ出入りしていた永倉新八と出会ったものと思われる。その後、上洛して丹波屋定七方の入り婿となったが、大垣藩島田才に望まれて養子となる。

新選組に入隊したのは文久三年五月までのことで、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せ、六月には大坂での力士との乱闘事件にも加わり、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。諸士取調役兼監察をつとめ、元治元年の池田屋事変では浅野藤太郎らと事前に探索活動を行い、当日は土方歳三に属し、池田屋到着後は屋内で戦い、金十両、別段金七両の恩賞金を受けた。同年十二月の編成では旗役と行軍世話役を兼務して土方歳三の脇を固めている。慶応元年夏の編成では永倉新八の二番組伍長となるが、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。

慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いから江戸に敗走するさいには、介護及世話役を命じられて横浜病院に傷病兵を入院させている。その後、甲陽鎮撫隊の出陣、五兵衛新田、流山での屯集にも参加し、近藤勇が新政府軍に投降すると、隊士五名とともに助命嘆願のため江戸に潜入した土方歳三に合流し、市川に集結した旧幕軍に加わる。ここで軍監となって宇都宮攻防戦から会津に入り、新選組本隊と合流した。同年六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿でも軍目をつとめ、蝦夷渡航後は土方に従う守衛新選組を率いて松前などに戦い、明治二年四月ごろの編成では改役となる。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち名古屋藩預けとなり、同六年に釈放されたのちは京都で西村さとと結婚、五男一女をもうけた。剣術道場の経営などを経て、西本願寺の守衛として働くなどしていたが、三十三年三月二十日に持病の喘息の発作により死亡した。墓は京都市東山区の東大谷墓地にあり、上京区の長円寺に「西六条本山現境内ニテ島田魁七十二歳」と記された過去帳がある。

なお、魁を「さきがけ」と読ませたのは、維新後のことである。

宿院良蔵

良三とも。丹波亀山の出身で、文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われる。元治元年の池田屋事変では土方歳三に属して屋外の守備につき、金十両、別段金五両の恩賞金を受け、九月の葛山武八郎の切腹にさいしては、谷三十郎とともに頼越人となって光縁寺を訪れている。同年十二月の編成では井上源三郎の三番組に所属し、慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、鳥羽伏見の戦いで六日に橋本で戦死。あるいは三日に伏見での戦死ともされる。四十七・八歳とされ、新選組慰霊碑に名前がある。

菅野六郎

文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われるが、池田屋事変以前に離隊する。

杉山腰司

文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せる。以後、事跡は伝わらず、同年七月以前に離隊している。

大松系斎

文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せる。以後、事跡は伝わらず、同年七月以前に離隊している。

竹内元太郎

石川武雄。備中松山出身で、文久三年七月以降に入隊し、元治元年の池田屋事変では土方歳三に属して屋外の守備につき、金十両、別段金五両を受けた。同年十二月の編成では伊東甲子太郎の二番組に所属し、慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いで江戸に敗走ののち脱走し、その後、明治二年十一月十二日には岩崎一郎・結城有無之助と日野に佐藤彦五郎を訪ね、近藤勇と土方歳三の名跡について相談し、三年一月二十二日には勝海舟のもとを訪れて無心したことが『海舟日記』に記されている。

武田観柳斎

竹田とも。観柳、観柳才、観格斎、観柳軒とも。徳裕。福田広。出雲母里の出身で、医生だったという。江戸の福島伝之介塾などに学び、甲州流軍学を習得していた。文久三年秋以降に入隊し、十二月には切腹した野口健司の頼越人として馬詰大太郎とともに光縁寺を訪れ、副長助勤をつとめる。元治元年の池田屋事変では、当日早朝に古高俊太郎を捕縛し、池田屋では近藤勇とともに屋内で戦闘して金十両、別段金十両を受けた。五日後の明保野亭事件に出動し、

応援に駆けつけていた会津藩士柴司に不審人物への攻撃を命令したが、土佐藩士だったため柴が士道にのっとって切腹すると、その葬儀に土方歳三らとともに参列し、「我も同じ台やとはん行末は同じ御国にあふよしもがな」との弔歌を詠んでいる。

新選組は貴殿のものであり、隊士は臣下としてつかえる、と平素から近藤勇に取り入っていたとされるが、永倉新八らが近藤の専横を会津藩に批判した同年九月の事件では、命を賭して両者の和解をはかろうとしたと伝わる。十二月の編成では六番組長をつとめ、翌慶応元年夏の編成では五番組長となって文学師範も兼任し、壬生寺などで隊士たちに甲州流軍学の調練を行った。同年閏五月には伊予大洲藩の矢野玄道を捕らえ、八月には蹴上の奴茶屋で金策を行う薩摩藩士ひとりを斬殺、ひとりを捕縛している。また、九月には将軍上洛要請と隊士募集のため江戸に下る近藤に同行し、慶応元年十一月にも長州訊問使に随行する近藤に、伊東甲子太郎らと従うなど重用される。

しかし同二年の広島出張では、観柳斎の役は篠原泰之進に取って代わられ、幕府の長州再征が長州藩の洋式装備に敗北したためか、その存在価値が下落したかのように映り、そのため新選組から薩摩藩に寝返ったとされる。しかし、観柳斎は伊東との接触をはかっており、拒絶されると同年後半には新選組から除隊となって討幕運動を行う。その結果、同三年六月二十二日に油小路竹田街道で、同志となっていた僧侶の善応とともに斬殺された。慶応二年九月二十九日に鴨川銭取橋で斎藤一に殺害されたということも、観柳斎に男色を迫られた馬越大太郎が薩摩内通を密告したとのエピソードも、ともにフィクションである。三十六・七歳で、在隊中も頭を坊主にしていたという。

田所弘人

文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せる。以後、事跡は伝わらず、同年七月以前に離隊している。

田中伊織

文久三年六月から七月にかけての在隊者五十名を列記した隊士名簿に名前を残し、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。西村兼文の『新撰組始末記』は、同年九月二十三日に近藤勇の意に反するところから殺害されたと伝えるが、壬生寺にある墓碑から、十三日の死亡であったことが確認される。死亡の時期と状況から、新見錦の別名であった可能性が高い。

谷三十郎

藤原供国。備中高梁の出身で、谷三治郎の長男として誕生し、谷万太郎、谷昌武の長兄。松山藩士で直心流、神陰流剣術を使ったが、失策によって安政三年ごろに家が断絶となり、大坂に出る。入隊は文久三年秋以降のことで、元治元年の池田屋事変では土方歳三に属し、池田屋到着後は屋内で戦い、金十両、別段金七両の恩賞金を受ける。同年七月の禁門の変の残党狩りでは、西六条で剣術道場を開く中田九一郎らを捕縛し、九月の葛山武八郎の切腹にさいしては宿院良蔵とともに、頼越人となって光縁寺を訪れた。同年十二月の編成では八番大炮組長をつとめ、翌慶応元年一月のぜんざい屋事件では、弟の万太郎らと踏み込んで足に負傷している。副長助勤をつとめ、同年夏の編成では七番組長となったが、翌年四月一日に死亡した。祇園石段下で何者かに殺害されたともいうが、永倉新八は「病死」とし、『新撰組始末記』も「故ナクシテ頓死ス。何カ故アルヨシ」と死因に疑問を投げかけるものの、斬殺の立場はとっていない。墓は大阪市北区兎我野町の本伝寺にある。なお、切腹する田内知の介錯に失敗したというが、田内の死は翌年のことであってフィクションであることはいうまでもない。

谷周平→近藤周平

谷万太郎

万吉とも。備中高梁の出身で、谷三治郎の次男として天保六年に誕生し、谷三十郎は兄、谷昌武は弟。種田流槍術、直心流剣術を使ったが、安政三年ごろに家が断絶となり、大坂に出て医師の岩田文硯の食客となったという。その後、南堀江二丁目に剣術と槍術の道場を開き、前後に岩田の次女スエと結婚して二男二女が誕生したが、末子の弁太郎をのぞいて早世し、弁太郎を引き取ってスエと離婚した。

入隊は文久三年秋以降で、元治元年の池田屋事変では近藤勇とともに屋内で戦闘し、金十両、別段金十両を受けているが、その後も引き続き道場を経営しており、正式な隊士とは認めがたい。同年十二月の編成では伊東甲子太郎の二番組に所属してはいるが、翌慶応元年一月のぜん

ざい屋事件は、道場に身を寄せていた谷川辰吉のもたらした情報によって、三十郎とふたりの門弟だけで踏み込んだもので、三十郎をふくめて一般隊士とは別行動をとっていた様子がうかがえる。同年七月ごろには在隊が確認されるが、その後の記録に名前がないことから、翌年四月に三十郎が死亡したことと関連して離隊したものと思われる。維新後、大阪の釣鐘町で道場を開くが失敗し、明治十八年に弁太郎をスエに託し、十九年六月三十日に五十一歳で病死した。墓は大阪市北区兎我野町の本伝寺にある。

中村久馬

文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われるが、池田屋事変以前に離隊した。

中村金吾

備中出身。文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せ、八月十八日の政変に出動したものと思われる。同年九月二十五日、御倉伊勢武らが永倉新八とともに暗殺をはかるが未然に逃れた。元治元年の池田屋事変では土方歳三に属して池田屋屋外の守備につき、金十両、別段金五両を受ける。同年十二月の編成では、尾関雅次郎とともに旗役として行軍の先頭をつとめたが、慶応三年六月以前に離隊した。

新田革左衛門

新井田仁左衛門、新田角右衛門とも。文久三年秋以降に入隊し、元治元年の池田屋事変では近藤勇に属して屋内での戦闘に負傷する。死後、金十両、別段金十両の恩賞金が下され、墓は壬生寺にあるものの、死亡日は刻まれておらず、おそらく七月二十二日に死亡した安藤早太郎と前後して絶命したものと考えられる。

浜口飛一

鬼一とも。文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せる。八月十八日の政変にも出動したものと思われるが、元治元年の池田屋事変以前に離隊している。

林信太郎

信吉郎とも。武州出身で、永倉新八が大坂とするのは入隊地のことか。文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せ、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。元治元年の池田屋事変では土方歳三に属し、池田屋到着後は屋内で戦い、金十両、別段金七両の恩賞金を受け、同年十二月の編成では旗役として土方歳三の脇を固めている。慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格となり、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還した。甲陽鎮撫隊の敗走後、永倉・原田左之助らの靖共隊に参加して新選組を去り、北関東から会津まで転戦するが、同四年八月ごろ、水戸街道での久留米藩兵との戦いで討死する。新選組慰霊碑に名前が刻まれている。

山崎烝の従兄弟で、明治後期に八木家を訪ねて彼の水葬を語ったというエピソードが伝えられるが、死亡時期から成立しない。しかし、山崎の本姓が「林」であったことが判明したため、信太郎と従兄弟だった可能性は残る。

土方対馬

文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われるが、池田屋事変以前に離隊した。

福田広→武田観柳斎

藤本彦之助

文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われるが、池田屋事変以前に離隊している。

細川内匠

文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せる。以後、事跡は伝わらず、同年七月以前に離隊している。

馬越三郎→馬越大太郎

馬越大太郎

大太良、三郎とも。文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。馬詰柳太郎らとともに「隊中美男五人衆」のひとりに数えられ、当時十六歳だったという。同年十二月の野口健司の切腹にさいして、頼越人として武田観柳斎とともに光縁寺を訪れた。武田の殺害に関与したとのエピソードもあるが、池田屋事変以前に離隊しており、いうまでもなく、フィクションである。明治二十年ご

ろに壬生の八木家を訪れたが、二十代後半に見え、横浜でガラス商を営んでいたという。

松井竜三郎

竜次郎とも。宇都宮の出身で、文久三年六月ごろに入隊して国事探偵方をつとめ、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。同年九月二十五日に越後三郎らとはかり、永倉新八・中村金吾を暗殺しようとするが失敗し、翌二十六日に長州のスパイとして沖田総司と藤堂平助に襲われたが、窓を破って逃走した。

松崎静馬

野馬とも。文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われるが、池田屋事変以前に離隊した。

松永主計

主膳とも。文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われるが、同年九月二十五日に越後三郎らとはかり、永倉新八・中村金吾を暗殺しようとするが失敗し、翌二十六日に長州のスパイとして井上源三郎に襲われ、沖田総司と藤堂平助に追われたが、背中に一太刀を浅く浴びただけで逃走した。

松原忠司

忠次とも。藤原誠忠。播州小野藩士の子に生まれ、安政年間に藩を追われて大坂で柔術道場を開いたという。入隊は文久三年五月までのことで、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せ、八月十八日の政変にも出動した。そのさいに、坊主頭に鉄入りの白鉢巻を結び、大薙刀を手にした姿は武蔵坊弁慶を彷彿とさせたといわれる。元治元年の池田屋事変では土方歳三に属して屋外の守備につき、金十両、別段金五両の恩賞金を受け、同年十二月の編成では七番大炮組長、慶応元年夏の編成では柔術師範をつとめる。その後、ある失策から切腹をはかり、回復して平隊士として隊務に復帰したが、傷痕が悪化して同年九月一日に死亡した。墓は光縁寺にある。

馬詰信十郎

柳元斎。馬詰柳太郎の父親で、息子とともに文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せ、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。池田屋事変当日、あるいはそれ以前に脱走したと伝えられ、このとき四十六・七歳だったという。

馬詰柳太郎

勘介とも。神威斎。馬詰信十郎の子で、父親とともに文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せ、八月十八日の政変にも出動したものと思われる。佐々木愛次郎らとともに「隊中美男五人衆」のひとりに数えられたが、池田屋事変当日、あるいはそれ以前に脱走と伝えられ、このとき二十一歳だったという。

松本喜次郎

喜治郎、喜三郎、喜四郎とも。和泉岸和田の出身で、弘化三年に生まれた。文久三年秋以降に入隊し、元治元年の池田屋事変では土方歳三に属して屋外の守備につき、金十両、別段金五両の恩賞金を受け、同年十二月の編成では井上源三郎の三番組に所属する。慶応二年六月には、脱走した柴田彦三郎を近藤芳助らと追い、屯所に連行した。同三年の幕臣取立てでは、平士として見廻組並御雇の格を受ける。

慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いを経て、甲陽鎮撫隊敗走後は永倉新八・原田左之助らの靖共隊に加わり、歩兵取締役となる。その後、北関東から会津まで転戦したものと思われるが、いつしか新選組に復帰した。慶応四年八月十七日に死亡し、福島県郡山市湖南町三代の正福寺にある墓碑には「新選組士松本喜次郎」と刻まれている。同地で戦死ともされる。

三浦繁太郎

文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せる。以後、事跡は伝わらず、同年七月以前に離隊した。

御倉伊勢武

美倉伊勢太とも。文久三年六月以降に入隊して国事探偵方をつとめ、八月十八日の政変に出動したものと思われる。同年九月二十五日に荒木田左馬之介らとはかり、永倉新八・中村金吾を暗殺しようとするが失敗し、翌二十六日に長州のスパイとして結髪中を斎藤一に斬殺される。二十七・八歳と伝わり、新選組慰霊碑に名前がある。

三品仲司

仲治とも。文久三年秋以降に入隊し、元治元年の池田屋事変では土方歳三に属し、池田屋到着後は屋内で戦い、金十両、別段金七両の恩賞金を受ける。同年十二月の編成では松原忠司の七番大炮組に所属したが、それ以後の消息は不明。明治二年五月十五日、勝海舟を訪れて五両を無心した人物として「元新選組品川次郎、三品仲司」と記録される。

森六郎

文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われるが、池田屋事変以前に離隊している。

柳田三次郎

阿波の出身で、文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われる。池田屋事変には不参加で、同年十二月の編成にも名前はないが、慶応元年七月までの在隊が確認される。慶応元年夏の編成で柔術師範をつとめる梁田佐太郎と同一人物と思われる。

山崎烝

丞、蒸、進、晋とも。父は林五郎左衛門といい、のちの箱館新選組の山崎林五郎こと、林新次郎の兄。大坂あるいは阿波の出身ともされるが、山崎林五郎の兄であれば、林五郎が壬生村住居の浪人であることから、やはり壬生村の出身ということになる。大坂の針医師の倅ともされることから、入隊時は大坂に居住していたのかもしれない。すでに妻帯していたものと思われ、その名を琴尾といい、明治四十三年まで存命だったという。

入隊は文久三年秋以降で、諸士取調役兼監察をつとめ、元治元年の池田屋事変では島田魁らと事前の探索にあたったが、薬屋に変装して池田屋に潜入していたという事実はなく、当日は屯所に残っていた。同年十二月の編成では原田左之助の小荷駄雑具の組に所属し、慶応元年二月の山南敬助の切腹にさいしては神崎一二三とともに、頼越人として光縁寺に出向いている。同年閏五月には、屯所を訪れた幕府典医松本良順より救急治療法を授けられ、「我は新選組の医者なり」と笑って語ったという。

同年十一月の長州訊問使の広島行に近藤勇が同行するさいには、吉村貫一郎らと随行し、近藤らの帰京後も長州探索のために残留して、翌年六月には佐藤安二郎に報告書を託しているが、帰京時期は不明。慶応三年六月の幕臣取立てでは副長助勤として見廻組の格を受け、同月二十四日には土方歳三らと柳原前光と正親町三条実愛のもとを訪れて公武合体を請願し、九月十四日には鷲尾隆聚邸へ不審人物の捜査におもむいている。

慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いで重傷を負い、大坂の京屋忠兵衛方まで運ばれて死亡したとも、五日に淀、六日に橋本で戦死したともされる。また、江戸敗走中の富士山丸のなかで死亡したとの記録もあり、実家である林家でも船中死亡が伝えられ、顕光院貫月義実居士の戒名が授けられている。三十五・六歳だったといい、新選組慰霊碑に刻名されている。

山田春隆

文久三年五月までに入隊し、同月二十五日に壬生浪士組三十四名が連名で幕府に提出した上書に名前を見せる。以後、事跡は伝わらず、同年七月以前に離隊した。

山野八十八

加賀大聖寺の出身で、文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われる。当時二十一・二歳で、楠木小十郎らと「隊中美男五人衆」のひとりに数えられ、壬生寺裏の水茶屋の娘に見初められ、一女をもうけたという。元治元年の池田屋事変では屯所に残っていたが、同年十二月の編成では沖田総司の一番組に所属し、慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。翌年一月の鳥羽伏見の戦いに敗走し、その後も各地を転戦して蝦夷に渡る。箱館においての所属等は不明であり、降伏前に離隊したものと思われ、降伏人名簿に名前を見ることはできない。

やがて京都に戻って菊浜小学校の小使をつとめていたところ娘と巡り会い、引き取られて安穏な生活を送ったという。明治二十二年には日野の佐藤彦五郎の訪問を受け、近藤勇の首級の行方について尋ねられている。二十九年に菊浜小学校を退職し、以後は不明。

和田隼人

文久三年六月以降に入隊し、八月十八日の政変に出動したものと思われるが、池田屋事変以前に離隊した。

池田屋事変以後の入隊者

安藤雅次郎（あんどうまさじろう）→安藤勇次郎（あんどうゆうじろう）

勇二郎、勇三郎、勇太郎、主計、雅次郎とも。上総、あるいは京都の出身とも。元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では、安藤雅次郎の名で谷三十郎の八番大炮組に所属する。慶応二年九月の三条制札事件では原田左之助の七番組伍長として出動し、十五両の恩賞金を与えられ、同三年六月の幕臣取立てでは調役として見廻組並の格を受ける。

翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還するが、ほどなくして病死した。新選組慰霊碑に名前が刻まれる。

池田小三郎（いけだこさぶろう）

小太郎とも。江戸の出身で、一刀流剣術を使った。元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では尾形俊太郎の五番組に所属する。翌慶応元年夏の編成では剣術師範となり、のちに伍長をつとめた。慶応二年九月の三条制札事件では千疋の恩賞金を与えられ、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受ける。翌年一月の鳥羽伏見の戦いで三日に伏見、五日に淀あるいは千両松での戦死とされる。横倉甚五郎は「甲州ニテ手負、野州板戸ニテ死」と、江戸帰還者に加えているが疑問がある。

伊東甲子太郎（いとうかしたろう）

前名を鈴木大蔵。変名に宇田兵衛。摂津とも。常陸志筑の出身で、鈴木専右衛門忠明の長男として天保六年に生まれる。三木三郎の兄。神道無念流、北辰一刀流を使い、父親の閉門蟄居により母方の里で弟と過ごし、のちに水戸に出て剣術とともに水戸学を学び、武田耕雲斎らと出会う。江戸深川佐賀町の北辰一刀流伊東誠一郎道場に入門し、師が没した文久元年ごろに娘ウメの婿となって道場を継いだ。

元治元年秋、東下中の藤堂平助の勧誘で新選組入隊を決意し、同年十月には弟や同志とともに近藤勇と上洛する。これを機に甲子太郎と改名するが、加入の目的は新選組の勤王化にあったという。同年十二月の編成では二番組長をつとめ、翌慶応元年二月の山南敬助の切腹には弔歌を詠んで、その死を悼んでいる。同年夏の編成では参謀となり、七月には奈良潜伏の浪士捕縛のため篠原泰之進らと出張し、十一月および翌年一月の長州訊問使に近藤らと随行したおりには、持論の尊王攘夷を説いて諸藩士と交わった。同年秋には江戸に下った節もあるが、確定的ではない。

慶応三年一月には新井忠雄らと九州遊説に出て、宇田兵衛の名前で時局論とともに、新選組からの分離策を説いた。帰京後の三月十三日、孝明天皇の御陵衛士となって薩摩藩などの内情を探るとして新選組からの分離を了承され、二十日には三木三郎・藤堂平助ら十数名と三条城安寺に移り、翌日は五条善立寺に移転し、六月に高台寺塔頭の月真院を屯所とする。同月の新選組の幕臣取立てでは、隊に残した佐野七五三之助らが反対して離隊しようとしたが、分離時に互いに隊士の編入を認めないことを定めていたため、受け入れることはできなかった。八月には同志と長州寛典の建言書を柳原光愛と板倉勝静に提出し、新井忠雄とともに再び九州におもむく。九月には篠原泰之進とともに、徳川慶勝の上洛要請のため名古屋へ出張した。

同年十一月十八日、近藤の妾宅に招かれた帰途、七条油小路南で待ち伏せた大石鍬次郎らによって殺害される。三十三歳だった。遺体は同志のおびきだしに利用され、収容にやってきた藤堂ら七名のうち四名が殺害された。彼らの遺体は三日後に光縁寺に埋葬されたが、翌年二月十三日に生き残りの同志によって京都市東山区泉涌寺山内町の戒光寺墓地に改葬され、明治二年十一月二十五日に墓碑が建立された。

伊藤鉄五郎（いとうてつごろう）

京都出身で、天保十一年に生まれる。元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では松原忠司の七番大炮組に所属し、慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。その後、伍長となり、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津では差図役をつとめ、五月一日の白河城攻撃において戦死する。二十九歳。新選組慰霊碑に刻名される。

内海次郎（うつみじろう）

二郎とも。正忠、忠利とも。武州川越出身で、天保六年に生まれる。北辰一刀流剣術を使い、同郷の中西登と江戸深川の伊東甲子太郎道場の師範代をつとめていたが、元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて伊東らとともに上洛し、十二月の編成では谷三十郎の八番大炮組に所属した。慶応二年六月に柴田彦三郎が脱走すると、松本喜次郎らと出石まで追って屯所に連行し、九月の三条制札事件では原田左之助の七番組として戦い、恩賞金二十両を受ける。翌年三月に伊東らと新選組から分離して御陵衛士となり、十一月の油小路事件では、阿部十郎と御蔵ケ池で狩猟中で難を免れた。事件を知って阿部とともに京都土佐藩邸に庇護を求めるが謝絶され、東山の戒光寺に潜伏したのち、伏見の薩摩藩邸に保護される。十二月十八日には阿部らと近藤の妾宅で療養中の沖田総司を襲撃するが、すでに伏見奉行所に出立していたため果たせなかったものの、市内で近藤を発見すると伏見の薩摩藩邸にとって返し、富山弥兵衛らと待ち伏せて銃撃した。翌年一月の鳥羽伏見の戦いでは御陵衛士の残党と薩摩軍に加わって戦ったと思われるが、以後の消息は不明。

大石鍬次郎（おおいしくわじろう）

鍬二郎、桑次郎、鉄次郎とも。守親。一橋家臣大石捨二郎の長男で、小野派一刀流を使う。元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では沖田総司の一番組に所属する。慶応二年二月、実弟で一橋家臣の大石造酒蔵が死亡し、相続問題で東下した。造酒蔵は今井祐次郎による殺害ともされるが、土方歳三の手紙には病死である旨が記される。

同年九月の三条制札事件では目付役として出動して千疋の恩賞金を与えられ、三年六月の幕臣取立てでは調役として見廻組並の格を受けた。この取立てに反対した佐野七五三之助らが、会津藩に脱隊を申し入れ、容れられずに切腹した事件では、遺体の検死中に蘇生した佐野の一刀を浴びて負傷したという。十一月の油小路事件に出動し、御陵衛士との乱闘にも加わって傷を負い、十二月には斎藤一らと警護中の紀州藩士三浦休太郎が、宿舎の天満屋に襲撃された事件でも防戦につとめている。

慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、二月には甲陽鎮撫隊の先遣役として甲州に先発した。勝沼の戦いに敗れたのち、五兵衛新田での再起にも加わっているが、のちに脱走している。おそらくは流山で近藤勇が投降し、本体が会津へ向かうさいの混乱のなかでのことと思われる。脱走後、薩摩軍探索方をつとめていた三井丑之助を頼ったが捕縛され、明治三年二月には刑部省に送られて坂本龍馬殺害事件の取り調べを受け、いったんは自白したが、拷問によるものであると撤回している。同年十月十日、小塚原の刑場で処刑された。三十二歳。新選組慰霊碑に名前が刻まれている。

大谷勇雄（おおたにいさお）

相模出身で、天保四年に生まれる。天然理心流を使い、元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では武田観柳斎の六番組に所属する。慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受け、のちに伍長となった。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還したさいには小荷駄方をつとめるが、三月一日に在隊の記録を残したまま、江戸で死亡する。戦死ともされるので、負傷悪化による死とも考えられる。三十六歳。新選組慰霊碑に名前がある。

大村安宅（おおむらあたか）

陸奥相馬の出身で、天保十二年に生まれる。横浜の外人居留地警備の任にあり、篠原泰之進や加納鷲雄らと攘夷を誓い、元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じたが、上洛途上で捕縛され、横浜で処刑された。二十四歳。

小川一作（おがわいっさく）

尾張出身で、天保十四年に生まれる。天然理心流を使い、元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では斎藤一の四番組に所属するが、以後の消息は不明。

小原銀蔵（おはらぎんぞう）

元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊する。同年十一月、近藤勇に従って会津藩邸を訪れた人物として「銀蔵」の名前が記録され、小原のことと思われる。あるいは大槻銀蔵のことだろうか。十二月の編成では馬験役と使番を兼務して近藤勇に従うが、慶応元年七月以前に離隊する。

小原険太郎（おはらけんたろう）

武州出身で、天保十年に生まれる。元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛する。十二月の編成では名前を見ないが、小原孔三と改名したためと思われる。

小原孔三

幸造とも。小原険太郎のことと思われ、元治元年十二月の編成では谷三十郎の八番大炮組に所属し、慶応三年の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受け、のちに伍長となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還後、ほどなく脱走した。

加藤民弥

文政二年生まれ。会津藩士であったが、藩命によって元治元年十二月までに新選組に合流し、同月の編成では原田左之助の小荷駄雑具の組に所属している。慶応元年七月までに藩に戻り、同四年一月の鳥羽伏見の戦いを経て会津に帰還するが、八月二十九日に負傷し、鶴ケ城に収容中の九月五日に五十歳で死亡した。

金子次郎作

江戸出身で、元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では松原忠司の七番大炮組に所属した。慶応三年の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還したのち脱走する。

加納鷲雄

鷲尾、雕雄とも。別称に道之助、伊豆太郎。通広。伊豆賀茂郡加納村の加納伴平の長男として、天保十年十一月九日に生まれた。大島流槍術を使った。江戸深川に住居して伊東甲子太郎と交流し、また篠原泰之進とも交流があり、ともに横浜の外人居留地警備の任についた。伊東の隊士募集にはそろって応募することになった。同年十二月の編成では谷三十郎の八番大炮組に所属するが、慶応三年三月には伊東らとともに御陵衛士として新選組から分離し、十一月の油小路事件では同志と現場に急行するが、襲撃されて薩摩藩邸に逃走した。十二月には阿部十郎らと伏見肥後橋筋で近藤を銃撃し、翌年一月の鳥羽伏見の戦いが始まると綾小路俊実に従って挙兵し、相楽総三らと赤報隊を結成する。やがて独走する相楽らと別れて帰京し、投獄されたのち薩摩軍に属して戦い、慶応四年四月には大久保大和を名乗る人物に立ち会い、その正体を見破る。維新後は開拓使などを経て、明治三十五年十月二十五日、六十四歳で東京麻布の自宅で死亡。墓は東京都港区南青山の青山霊園。

上坂甲太郎

早太郎とも。近江彦根の出身で、元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では武田観柳斎の六番組に所属する。慶応三年の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還したのち離隊した。

川村三郎→近藤芳助

神崎一二三

阿波徳島出身で、文政六年に生まれる。神陰流剣術、日置流雪管派弓術を使った。元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では原田左之助の小荷駄雑具の組に所属した。勘定方もつとめ、慶応元年二月の山南敬助の埋葬にさいして山崎烝と、三月の大谷良助の埋葬にさいして酒井兵庫と、頼越人として光縁寺を訪れている。慶応三年の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還したのち離隊、明治二年五月に京都で不審人物として捕縛された。以後の消息は不明。

岸島芳太郎

丹後宮津の出身で、元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊した。伍長、諸士取調役兼監察、勘定方、小荷駄方などを歴任するが、同年十二月の編成では谷三十郎の八番大炮組に所属し、慶応三年の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受ける。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、二月に脇差購入の記録を残したのちに離隊した。彰義隊にかかわっていたようで、明治後期に京都の原田マサを訪ねて、原田左之助の最期と戒名を伝えたという。

木下弥三郎

元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では尾形俊太郎の五番組に所属するが、以後の記録はない。その後、慶応元年七月までに木下巌と変名したものと思われる。

近藤芳助

芳祐、芳輔、堪助とも。川村三郎。近江国友村の出身で、天保十四年に生まれる。近藤隼雄の弟。試衛館近傍の江戸二十騎町に住居し、元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では斎藤一の四番組に所属した。慶応二年六月には脱走した柴田彦三郎の追っ手として、内海次郎らとともに出石に出張して屯所まで連行し、同三年の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。

慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いでは、五日の千両松での戦いに銃創を負ったが富士山丸で帰還し、甲陽鎮撫隊として出陣後、流山で近藤の投降現場に立ち会う。その後は会津で什長となり、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では歩兵差図役什長とある。会津母成峠の戦いに敗走中を本隊とはぐれ、山中で永倉新八・米沢藩士の雲井龍雄と出会い、十一月末まで米沢で謹慎生活を送るが、旧幕軍が蝦夷に渡航したことを知って仙台に向かったものの同地で捕縛され、江戸へ送られ、次いで静岡から京都へ送られて取り調べを受け、再び静岡に戻されてから横浜に移り住んだ。

その後、市会議員、県会議員を歴任し、明治三十九年には新選組について問い合わせた高橋正意の書簡に返書して、それが現在も『新撰組往事実戦譚書』として京都府立総合資料館に所蔵され、貴重な資料となっている。大正十一年七月五日、八十歳で横浜の自宅に死亡し、墓は横浜市西区赤門の東福寺にある。

佐久間恪二郎→三浦敬之助

佐野七五三之助

七五三之進とも。藤原重之、源忠正とも。名古屋出身で、天保七年に生まれる。北辰一刀流剣術を使い、文久三年ごろより横浜の外人居留地警備の任につき、篠原泰之進らと交流し、伊東甲子太郎とも知り合う。元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では斎藤一の四番組に所属する。慶応元年閏五月には膳所藩での将軍暗殺計画発覚のため大津に出張し、慶応三年三月に伊東らが御陵衛士として新選組から分離するさいに、密命を受けて隊に残留した。

同年六月の幕臣取立てにさいしては、茨木司らと反対して御陵衛士との合流をはかったものの、新選組との編入禁止の約定によって容れられず、会津藩に脱隊を申し入れ、守護職邸で近藤らと話し合うが、脱隊不能のため茨木ら三名とともに自刃する。大石鍬次郎が検死にやってきたときに蘇生し、脇差で一刀を浴びせたという。三十四歳。四名の遺体は光縁寺に埋葬されたが、のちに同志らによって京都市東山区泉涌寺山内町の戒光寺に改葬された。

篠原泰之進

泰助とも。秦泰之進、秦河内、秦林親とも。筑後生葉郡高見村の出身で、文政十一年十月二十日、篠原元輔の長男として生まれた。安政五年に江戸へ出て、各地を遊歴するなかで加納鷲雄と出会い、また文久三年ごろより横浜の外人居留地警備の任につき、佐野七五三之助らと交流し、伊東甲子太郎とも知り合う。

元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛したが、翌年五月まで大坂に逗留していたため元治元年十二月の編成には名前がない。慶応元年夏の編成では諸士取調役兼監察となり、柔術師範を兼務。七月には奈良潜伏の浪士捕縛のため伊東らと出張し、十一月および翌年一月の長州訊問使に近藤らと随行したおりには、尊攘論を説いて諸藩士と交わった。

慶応三年一月に伊東らが九州遊説に出ている間に御陵衛士拝命を獲得し、新選組からの分離の下地作りに成功した。三月十三日、孝明天皇の御陵衛士となって薩摩藩などの内情を探るとして分離を了承され、二十日には伊東・三木三郎ら十数名と三条城安寺に移り、翌日は五条善立寺に移転し、六月に高台寺塔頭の月真院を屯所とする。九月には伊東とともに徳川慶勝の上洛要請のため名古屋へ出張し、同年十一月の油小路事件では藤堂平助ら六名と現場に急行したが、待ち伏せた新選組に襲われて、伏見の薩摩藩邸の庇護下に入る。十二月には阿部十郎らと近藤を銃撃し、翌年一月に鳥羽伏見の戦いがはじまると綾小路俊実に従って挙兵し、相楽総三らと赤報隊を結成したが、独走する相楽らと別れて帰京して投獄された。放免されて北越・東北の戦場を転戦したが、維新後は弾正台などに出仕し、晩年はクリスチャンとなって明治四十四年六月十三日、七十五歳で東京青山に死亡した。墓は東京都港区南青山の青山霊園にある。『秦林親日記』を残している。

柴田彦三郎

喜三郎、勝三郎とも。忠興。江戸の出身で、天保十年に生まれる。甲源一刀流剣術を使い、元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では尾形俊太郎の五番組に所属した。慶応二年六月に一橋家臣原口

某と市中で金策を行って脱走したが、人相書を用意した近藤芳助らに追われ、出石の宿で郡役人に捕らえられて身柄を引き渡された。そのまま屯所に連行され、同月二十三日に切腹となる。二十八歳。墓は光縁寺にある。

島田弥一郎（しまだやいちろう）

加賀出身で、天保八年に生まれる。小野派一刀流剣術を使い、元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛したが、十二月の編成には名前がなく、入隊直後に離隊したものと思われる。

鈴木三樹三郎（すずきみきさぶろう）→三木三郎

田中寅三（たなかとらぞう）

虎蔵とも。正久。加賀金沢の出身で、天保十二年に生まれる。元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では井上源三郎の三番組に所属する。慶応元年夏の編成では剣術師範に任じられ、同三年三月に伊東甲子太郎らが新選組から分離すると、四月十四日に脱走して合流を求めるが、隊士の編入を禁じた約定のため容れられなかった。やむなく寺町の本満寺に潜伏したが、翌朝には発見されて屯所へ連行のうえ切腹となる。二十七歳。墓は光縁寺にある。

塚本善之助（つかもとぜんのすけ）

元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では沖田総司の一番組に所属したが、慶応元年七月以前に離隊している。

富山弥兵衛（とみやまやへえ）

四郎とも。源豊国。薩摩出身で、天保十四年に生まれる。元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では松原忠司の七番大炮組に所属した。薩摩藩が新選組の内情偵察のために入隊させようとしたが、疑惑を持たれて拒絶されるところを伊東甲子太郎の口添えによって入隊が許されたという。慶応元年七月には伊東らと浪士捕縛のため奈良に出張し、年次不詳ながら川島勝司を斬殺した。同三年三月に伊東らが御陵衛士として新選組から分離したさいには、随従同志の身分で同行する。

同年五月には大坂で曲直瀬道策を殺害し、十一月の油小路事件では現場に急行したが、待ち伏せの新選組に襲撃されて逃走した。十二月には阿部十郎らと待ち伏せて、近藤勇に発砲して右肩を射貫き、翌年一月の鳥羽伏見の戦いでは薩摩軍に属して戦い負傷する。治癒後に出陣した越後出雲崎では水戸諸生党に捕らえられ、脱走したものの追っ手によって殺害、梟首された。二十六歳。墓は京都市東山区泉涌寺山内町の戒光寺ほか。

中西小六（なかにしころく）

元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じたが、上洛後の記録に名前を見ることはできない。脱走の可能性とともに、伊東甲子太郎らとともに入隊したと思われる服部武雄の名前が上洛名簿にないことから、服部の変名であった可能性もある。

中西登（なかにしのぼる）

昇とも。武州川越の出身で、天保十三年に生まれる。北辰一刀流剣術を使い、内海次郎と江戸深川の伊東甲子太郎道場で師範代をつとめていたが、元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では斎藤一の四番組に所属。慶応元年七月には小路平三郎とともに、京都潜入の長州藩士石津茂一郎を捕らえ、翌年九月の三条制札事件には原田左之助の七番組に属し、二十両の恩賞金を受けた。

同三年三月に伊東らが御陵衛士として新選組から分離したさいに同行するが、脱隊することが目的だったようで、御陵衛士としての記録はなく、阿部十郎は同志ではなかったと明言している。また阿部は、慶応四年九月に彼が京都で佐原太郎を殺害したとも語っているが、篠原泰之進は七月五日に京都五条橋近くで田口次郎という人物が殺害したとしている。

沼尻小文吾（ぬまじりこぶんご）

武州出身で、天保六年に生まれる。奥山念流剣術を使い、元治元年十月に近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では尾形俊太郎の五番組に所属する。慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受け、のちに伍長となるが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸帰還後に脱走した。

秦林親（はたしげちか）→篠原泰之進

服部武雄（はっとりたけお）

三郎兵衛とも。源良章。播州赤穂の出身で、天保三年に生まれる。元治元年十二月の編成で尾形俊太郎の五番組に所属しており、元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応募したものと考えられるが、江戸での募集に中西小六の変名で応じた可能性もあり、入隊場所は判然としない。慶応元年夏の編成では諸士取調役兼監察となり、同二年九月の三条制札事件に出動して千疋の恩賞金を受けた。三年三月に伊東甲子太郎らが御陵衛士として新選組から分離するさいに同行し、十一月の油小路事件では現場へ急行し、待ち伏せしていた新選組と闘って斬殺された。三十六歳。遺体は光縁寺に埋葬されるが、のちに京都市東山区泉涌寺山内町の戒光寺墓地に改葬され、明治二年十一月二十五日に墓碑が建立された。

前田蔵人（まえだくらんど）

元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では原田左之助の小荷駄雑具の組に所属するが、慶応元年七月以前に離隊している。

牧野源七郎（まきのげんしちろう）

越前出身。元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では伊東甲子太郎の二番組に所属するが、慶応三年六月以前に離隊している。

三浦敬之助（みうらけいのすけ）

辰之助とも。佐久間恪二郎。信州松代出身で、洋学者佐久間象山の次男として弘化五年十一月十一日に生まれる。元治元年七月十一日に在京中の象山が木屋町で暗殺され、仇討ちを果たすために会津藩士山本覚馬の紹介によって、同月中に新選組の客員となる。同年十二月の編成では馬験として近藤勇に従う。やがて隊士たちの粗暴な振る舞いに染まり、口論となった隊士に斬り付け、沖田総司に取り押さえられたというものや、自分から突き当たった肉売りの女を無礼打ちにしたというエピソードが伝わる。

慶応二年ごろに芦屋昇とともに脱走し、戊辰戦争では薩摩軍に属して東北地方を転戦し、明治二年に帰藩。八年に伊予松山裁判所判事となるが、十年二月二十六日に赴任先近くの料亭で急死。二十九歳。

三木三郎（みきさぶろう）

多門、荒次郎、和泉とも。鈴木三樹三郎と改名。忠良。常陸志筑の出身で、鈴木専右衛門忠明の次男として天保八年七月十二日に生まれる。伊東甲子太郎の弟。神道無念流を使い、父親の閉門蟄居により母方の里で兄と過ごし、のちに寺内増右衛門の養子となるが酒による失策で離縁され、鈴木姓を名乗ることが許されず三木荒次郎と称した。

その後、江戸に出て甲子太郎の道場で修行していたともされ、元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では井上源三郎の三番組に所属する。慶応元年夏の編成では九番組長となり、ほどなく諸士取調役兼監察となった模様で、同年六月に将軍警護のため大坂へ下ったさいの記録には目付とされている。同三年三月に御陵衛士として甲子太郎らとともに新選組から分離し、十一月の油小路事件では同志六名とともに現場へ急行したが、新選組の待ち伏せを受けて逃走し、伏見の薩摩藩邸で保護された。十二月に阿部十郎らが近藤勇を銃撃した事件では、記録によって参加とも不参加ともされており判然としない。

慶応四年一月に鳥羽伏見の戦いが始まると、御陵衛士残党と綾小路俊実に従って挙兵し、相楽総三らと赤報隊を結成して三番隊長となって、鈴木三樹三郎を名乗る。まもなく独走する相楽らと別れて帰京して投獄され、放免後は軍曹となって会津に出陣したが、終戦のため帰京した。以後、司法、警察畑を歩んで酒田警察署長などを歴任し、十七年に退職して茨城県石岡市に居住して、大正八年七月十一日に八十二歳で死亡。墓は石岡市若宮の東耀寺。

水口市松（みずぐちいちまつ）

忠輝。本姓は藤田。若狭藩側用人藤田兵助忠善の子で、津藩藤堂家に仕えていたが脱藩し、京都の医師水口家の養子となる。元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では武田観柳斎の六番組に所属する。慶応二年九月の三条制札事件では原田左之助の七番組に属して出動し、十五両の恩賞金を受け、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。翌年一月の鳥羽伏見の戦いに参戦し、三日の伏見、あるいは五日の淀の戦いで討死した。四十四・五歳だったという。新選組慰霊碑に名前がある。

宮川数馬（みやがわかずま）

転とも。近江膳所出身で、天保十二年に生まれ

れる。元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では武田観柳斎の六番組に所属する。慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受け、翌年一月の鳥羽伏見の戦いで三日、伏見において戦死した。五日の千両松での戦死ともいう。二十七歳。新選組慰霊碑に名前が刻まれる。

室宅之助（むろたくのすけ）

備中出身で、元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では沖田総司の一番組に所属する。慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、十二月までに離隊している。

毛内有之助（もうないありのすけ）

有之祐、有之進、監物とも。良胤。天保六年二月二十八日、津軽藩士毛内有右衛門祐胤の次男として生まれ、文久元年三月に脱藩する。江戸で学問教授を行ううちに伊東甲子太郎と出会い、元治元年十月の近藤勇による隊士募集に応じて伊東らと上洛するが、同年十二月の編成に名前はない。慶応元年夏の編成では文学師範となり、同三年三月に御陵衛士として甲子太郎らとともに新選組から分離した。十一月の油小路事件では同志六名とともに現場へ急行したが、新選組の待ち伏せを受けて藤堂平助らとともに殺害される。三十三歳。彼らの遺体は三日後に光縁寺に埋葬されたが、翌年二月十三日に生き残りの同志によって京都市東山区泉涌寺山内町の戒光寺墓地に改葬され、明治二年十一月二十五日に墓碑が建立された。覚知院剣冷良胤居士の戒名が授与されており、友人の沢保躬による『毛内良胤青雲録』がある。

元井和一郎（もといわいちろう）

文久三年ごろより横浜の外人居留地警備の任につき、同僚の篠原泰之進や加納鷲雄と尊王攘夷を約す。元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じたが、入隊の形跡はない。箱館戦争では衝鉾隊差図役のひとりとして記録されていることから、上洛後は京都見廻組に加わった可能性がある。箱館戦争では五稜郭を脱したことが記録されるが、その後については不明。

安富才輔（やすとみさいすけ）

才助、才介とも。正儀。備中足守の出身で、天保十年に生まれる。大坪流馬術を使い、元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では斎藤一の四番組に所属した。慶応元年夏の編成では馬術師範となり、同三年六月の幕臣取立てでは調役として見廻組並の格を受ける。のちに伍長となり、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、流山で近藤が投降すると本隊とともに会津へ入り、隊長役助役となり、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿でも副長役とある。

蝦夷渡航後は陸軍奉行添役となって新選組本隊とは離れるが、土方歳三が戦死した翌日には、日野の土方家にあてて「早き瀬に力足らぬや下り鮎」との追悼句を添えた手紙を記し、立川主税に託した。降伏後は弘前の耕春院などに収容され、放免後まもなく江戸で阿部十郎によって殺害されたとも伝わる。

矢田健之介（やだけんのすけ）

賢之助とも。紀州の出身で、元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では原田左之助の小荷駄雑具の組に所属する。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受け、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還した。甲陽鎮撫隊として出陣後、永倉新八や原田左之助の靖共隊に加わり北関東を転戦し、慶応四年五月六日、今市を探索中に被弾して死亡する。永倉は首級を高徳宿の高徳寺に葬ったとするが、確認されていない。新選組慰霊碑に刻名されている。

横倉甚五郎（よこくらじんごろう）

藤原邦頼。天保五年、武州八王子堀ノ内村の横倉良助の次男として生まれる。天然理心流剣術を使い、元治元年十月、近藤勇の江戸での隊士募集に応じて上洛し、十二月の編成では武田観柳斎の六番組に所属した。慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受け、のちに伍長となる。十一月の油小路事件に出動し、十二月に近藤が御陵衛士残党に銃撃されたさいには島田魁らと警護にあたっていたが、難を逃れて帰隊した。慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、甲陽鎮撫隊として出陣したさいに勝沼の戦いに負傷している。会津では伍長となり、慶応四年六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では歩兵差図役仕長と記録されている。蝦夷渡航後の新選組四分隊編成では第三分隊嚮導役となり、明治二年五月十五日に弁天台場で降伏した。その後、青森の蓮華寺、油川の明誓寺、弘前の薬王院などに収容され、十一月には坂本龍馬殺害の容疑者として東京に送られ、翌年二月の刑部省の取り調べに新選組の不関与を申し立てたが、八月十五日に獄死した。墓は東京都八王子市鑓水の大法寺にある。『横倉甚五郎日記扣』を残している。

和田重郎（わだじゅうろう）

十郎とも。若狭の出身で、元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では伊東甲子太郎の二番組に所属した。慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いで四日に伏見で戦死する。新選組慰霊碑に名前がある。

輪堂貞三（わどうていぞう）

伊予西条の出身で、元治元年十二月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同月の編成では原田左之助の小荷駄雑具の組に所属しているが、慶応元年七月までに離隊した。

慶応元年七月までの入隊者

相場薫三郎（あいばくんざぶろう）

天保十三年生まれ。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同年七月以前に離隊する。

青柳牧太夫（あおやぎまきだゆう）

武州出身で、天保九年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。勘定方、伍長、小荷駄方を歴任し、翌年一月の鳥羽伏見の戦いでは六日に橋本で戦死とも、江戸帰還船のなかで死亡とも。三十一歳。新選組慰霊碑に名前が刻まれている。

芦谷昇（あしやのぼる）

登とも。肥後出身で、慶応元年閏五月までに京坂での隊士募集に応じて入隊し、同年夏の編成で諸士取調役兼監察となったが、慶応二・三年に三浦敬之助とともに脱走した。

甘地一撰（あまぢいっせん）

稔。常陸土浦出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還して脱走するが、一月五日に淀の戦いで死亡したともされる。

新井忠雄（あらいただお）

荒井只雄、俊蔵、陸之助、成尾退蔵とも。平一業。奥州岩城平藩士山崎角兵衛一善の次男として、天保六年に生まれる。嘉永五年に江戸へ出て、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同年夏の編成で諸士取調役兼監察となり、剣術師範を兼務した。十一月に近藤勇が長州訊問使に随従して広島に出張したさいには、伊東甲子太郎らと同行し、翌年九月の三条制札事件では目付として出動して二十両の恩賞金を受けている。同三年一月から伊東とともに俊蔵の名で九州遊説を行い、三月には御陵衛士として新選組から分離し、五月には単独で、八月には伊東と九州へおもむいた。十一月の油小路事件、十二月の近藤狙撃事件には、江戸での同志募集のため不在だった。翌年一月に鳥羽伏見の戦いが始まると綾小路俊実に従って挙兵し、相楽総三らと赤報隊を結成するが、相楽の独走に帰京し、投獄されるものの放免後は越後に出兵する。維新後は司法省に出仕し、明治十九年に退官。東京下谷の仲御徒町に住み、五十七歳で病死した。墓は東京都台東区谷中の谷中霊園。

井汲恭平（いくみきょうへい）→**谷川辰吉**

石川三郎（いしかわさぶろう）

源義元。弘化二年に生まれ、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、瀬山多喜人と町家の婦人と密通した罪によって同年六月二十二日、瀬山とともに切腹する。二十一歳。墓は光縁寺にある。上洛後に改名したのだろうか、真田次郎の名前も伝わる。

市橋鎌吉（いちはしかまきち）

鎌太とも。藤原義次。尾張出身。江戸とも。慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、翌年十月七日に死亡するが、死因は不明。墓は光縁寺にある。

逸見勝三郎（いつみかつさぶろう）

甲州甲府の出身で、文政十三年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に

応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いにおいて五日に淀で戦死した。三十九歳。

伊藤主計（いとうかずえ）

備前岡山の出身で、天保十二年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛したが、同三年六月以前に離隊している。

伊東浪之介（いとうなみのすけ）

浪之助とも。京都四条大宮の菱屋宗太郎の子として弘化三年に生まれ、薩摩藩足軽の伊藤清兵衛の養子となったという。そのため薩摩出身とされた。慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同二年九月の三条制札事件に原田左之助の七番組として出動し、二十両の恩賞金を受けた。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、十二月の伏見奉行所移転前に脱走し、島原遊郭に潜伏していた。明治三年十一月に仲間と常住院に押し入り、住職を殺害して百両を強奪するが、翌日には捕縛され、翌年二月七日に獄死したという。二十六歳。

伊東隼之助（いとうはやのすけ）

天保十四年に生まれ、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同年七月以前に離隊している。慶応四年四月、靖共隊のうち江戸脱走に遅れた同姓同名の人物が、捕縛されて小伝馬町の牢に入れられているが、同一人だろうか。

稲吉雄三郎（いなよしゆうざぶろう）

下総佐倉の出身で、弘化二年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同三年六月以前に離隊した。稲吉竜馬と同一人物と思われる。

茨木司（いばらきつかさ）

藤原信忠、平昌業。奥州中村の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊した。同年七月には伊東甲子太郎らとともに浪士探索のため奈良に出張し、同二年九月の三条制札事件にも出動した。同三年三月に伊東らが御陵衛士として新選組から分離するさいに、密命を受けて隊に残留した。

同年六月の幕臣取立てにさいしては、佐野七五三之助らと反対して御陵衛士との合流をはかったものの、新選組との編入禁止の約定によって容れられず、会津藩に脱隊を申し入れ、守護職邸で近藤らと話し合うが、脱隊不能のため中村五郎ら三名とともに自刃する。四名の遺体は光縁寺に埋葬され墓碑もあるが、のちに同志らによって京都市東山区泉涌寺山内町の戒光寺に改葬された。

今井祐次郎（いまいゆうじろう）

信州出身で、天保十五年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、翌年二月に大石鍬次郎の弟大石造酒蔵を、そうとは知らずに殺害したというが、土方歳三の手紙によると造酒蔵は病死とされている。

九月の三条制札事件に出動し、土佐の宮川助五郎に手傷を負わせた。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いで五日の淀において戦死、あるいは帰還船のなかで死亡したとも。二十五歳。新選組慰霊碑に名前がある。

植田末次（うえだまつじ）

弘化三年の生まれで、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛したが、七月以前に脱走し、仲間ふたりと名古屋付近で金策をしたため、島田魁・伊東甲子太郎らが捕縛に向かうが逃亡、以後の消息は不明。

江田小太郎（えだこたろう）↓江畠小太郎

江畠小太郎（えばたこたろう）

江畑、江田小太郎、江田三郎とも。摂津出身で慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊した。慶応三年三月、伊東甲子太郎らが御陵衛士として新選組から分離するさいに同行した、江田小太郎のことである。同年十一月の油小路事件のさいには、清原清・佐原太郎とともに伊勢出張中だった。近江蒲生郡近江八幡町の苗村順平の子として、天保三年の生まれたともされる。

大谷良輔（おおたによしすけ）

良助とも。有知、藤原義則とも。河内大県郡法善寺村の出身で、天保七年に郷士大谷十助の長男として生まれる。慶応元年に入隊するが、直後の三月四日に切腹したという。遺体は光縁寺に葬られ、頼越人として酒井兵庫と神崎一二

三が訪れているが、施主に実弟の大谷郁三郎が郁之助と誤記されているものの、弟が葬儀に立ち会っていることから、切腹ではなく事故死などの可能性も考えられる。あるいは兄弟で入隊しようとしていたのかもしれない。明治三十八年に郁三郎が、大阪府八尾市神宮寺の恩地墓地に改葬した。

大橋半三郎（おおはしはんざぶろう）

英金。美濃出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同三年六月の幕臣取立てでは仮同志ながら見廻組並御雇の格を受け、のちに平同志に昇格している。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、甲陽鎮撫隊として出陣して勝沼の戦いで負傷するが、会津では什長下役をつとめ、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では歩兵差図役下役とある。会津戦争において戦死ともされるが、仙台で離隊し、翌明治二年十一月十四日に岡田五郎とともに勝海舟を訪れ、三両を無心している。

その後は郷里に帰ったようで、十四年には教育関係の職についていた。

岡戸万次郎（おかどまんじろう）

筑後久留米の出身で、弘化三年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同三年六月までに死亡している。新選組慰霊碑に刻名されている。

小川佐太郎（おがわさたろう）

弘化二年に生まれ、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、以後の記録はない。小川信太郎と同一人物と考えられ、「信」が「佐」に誤記もしくは誤読されたのではないだろうか。

小川信太郎（おがわしんたろう）

信次郎とも。平国行。美濃出身で、慶応元年に入隊し、同二年二月十八日に死亡する。木村良之助と矢倉繁三が頼越人として光縁寺を訪れ、同寺に墓碑がある。小川佐太郎のことであれば、二十二歳での死亡となる。

沖田承之進（おきたしょうのしん）

弘化四年に生まれ、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同年七月以前に離隊する。慶応三年に死亡したことが光縁寺で記録される「沖田氏縁者」を、承之進の関係者とするには、時間の隔たりが大きすぎて現実味に乏しい。

嘉村権太郎（かむらごんたろう）↓吉村貫一郎

辛島昇司（からしましょうじ）

大坂の出身で、天保五年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛した。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いに敗走し、大坂で脱走する。

川津平三（かわづへいぞう）

常陸の出身で、天保八年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同三年六月以前に離隊した。

川村林次郎（かわむらりんじろう）

天保十二年生まれ。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同年七月以前に離隊する。

木下巌（きのしたいわお）

阿波徳島の出身で、弘化三年に生まれる。慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同二年九月の三条制札事件に出動して千疋の恩賞金を受けた。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受け、のちに伍長となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津では什長をつとめ、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿でも歩兵差図役什長とあり、八月二十一日の会津母成峠の戦いにおいて戦死した。二十三歳。元治元年十月に江戸で入隊した木下弥三郎が、上洛後に改名したものと考えられる。新選組慰霊碑に名前がある。

木村広太（きむらひろた）

筑前久留米の出身で、弘化三年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、十二月以前に離隊する。

木村良之助（きむらよしのすけ）

紀州の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同二年二月の小川信太郎の埋葬に矢倉繁三と頼越人として光縁

寺を訪れるが、同三年六月以前に死亡した。新選組慰霊碑に刻名される。

清原　清

竹川直枝。源重春。肥後熊本の出身で、脱藩を機に本名の西村弥左衛門を改名した。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛、同年夏の編成では砲術師範となる。伊東甲子太郎に同志していたが、慶応三年三月に彼らが御陵衛士として分離するさいには同行せず、六月以前に離隊してから合流を果たし、竹川直枝と改名した。十一月の油小路事件のさいには伊勢に遊説中で、帰京して加納鷲雄と江戸へ出張中に鳥羽伏見の戦いが始まり、薩摩軍に属して北関東から会津へと転戦。慶応四年閏四月二十五日、白河口の戦いに戦死した。三十七歳。墓は京都市東山区泉涌寺山内町の戒光寺。

日下部四郎

摂津の出身。日下部遠江とは親子または兄弟と思われる。慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊、同三年六月以前に離隊。

日下部遠江

摂津の出身。日下部四郎とは親子または兄弟と思われる。慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊、同三年六月以前に離隊。

久米部正親

条部とも。沖見とも。猪野豊之助、猪野忠敬と改名。大坂天満与力の子として、天保十二年四月十七日に生まれる。慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同年七月には伊東甲子太郎らとともに奈良潜伏の浪士捕縛に向かい、戦闘となって足を負傷した。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受け、のちに伍長。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、甲陽鎮撫隊として出陣して勝沼の戦いに敗れ、江戸今戸から負傷者を会津に移送するため、本隊に先発した。

会津では軍目をつとめ、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿でも同職にある。八月の母成峠敗走後は斎藤一らと仙台に向かう本隊と決別して会津に残留し、如来堂守備中を襲われて死亡したとされるものの、会津を脱して明治元年十月、銚子において同行の池田七三郎らとともに捕らえられた。このときに猪野豊之助を名乗り、のちに猪野忠敬と改名する。東京に護送され、謹慎ののち陸軍に出仕して、十二年には中尉となり、十九年に退官。四十三年九月二十五日、仙台市の自宅において七十歳で死亡し、墓は宮城県白石市中町の専念寺墓地。

後藤大介

奥州岩城平の出身で、嘉永二年に生まれる。無念流剣術を使い、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛する。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、十一月に伏見奉行所管理の狩場を不法使用していることを、与力の横田内蔵之允に咎められたのを恨み、隊士数人と横田を殺害した。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、脱走して薩摩軍に加わるが、強盗を働いたため斬首のうえ梟首される。

小林桂之介

出羽秋田の出身で、弘化四年に生まれる。小野派一刀流を使い、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同二年九月の三条制札事件に出動して千疋の恩賞金を受ける。同三年三月の御陵衛士の分離には、伊東甲子太郎の命によって新選組に残り、六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、篠原泰之進への密書が発覚し、十二月十六日に伏見奉行所において島田魁に絞殺された。二十一歳。新選組慰霊碑に名前がある。

小林峰太郎

峰三郎とも。出身は出羽秋田とも、上総ともされ、天保十四年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いで淀において五日に戦死とも、六日に八幡で戦死ともされる。二十六歳。新選組慰霊碑に名前がある。

斎藤清一郎

武州忍出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸帰還後に脱走した。

佐久間荘太郎

甲州甲府の出身で、文政十二年に生まれる。

一刀流剣術、神当流馬術を使った。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同三年六月までに離隊した。

佐久間登人

登介とも。江戸の出身で、嘉永元年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同三年六月までに離隊している。

桜井勇之進

平盛房。出身は江戸、下総佐倉とも。天保十一年に生まれ、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛した。同年十二月十二日に死亡し、光縁寺に埋葬されるが、葬儀料のなかで「穴掘代」が異例に安価であるため、首級や髷などのみが埋められたものと推定される。二十六歳。

真田四目之進

江戸の出身で、天保十五年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けるが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いで五日に淀で戦死。三日に伏見とも。二十五歳。新選組慰霊碑に刻名される。

真田次郎→石川三郎

佐野牧太

牧太郎とも。紀州の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊するが、入隊直後に商人からの金策が露見し、七月二十五日に斬首された。埋葬の記録がないことから、除隊後のことかと思われる。

佐原太郎→篠崎信八郎

塩沢麟次郎

甲州甲府の出身で、天保十二年に生まれる。小野派一刀流剣術、荒木流手裏剣術、杠秤棒術を使った。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同三年六月以前に離隊している。

篠崎信八郎

信八とも。佐原太郎。平利秀。常陸松川の出身で、弘化二年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛した。同三年三月に伊東甲子太郎らが御陵衛士として新選組から分離したさいには同行せず、六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けたのち、脱走して伊東らに合流し、佐原太郎を名乗る。十一月の油小路事件のさいは伊勢に遊説中で、十二月には阿部十郎らと近藤勇の妾宅に沖田総司を襲ったが留守であり、その日、京都から伏見に向かう近藤勇を富山弥兵衛らと襲撃して重傷を負わせる。翌年一月に鳥羽伏見の戦いがはじまると、御陵衛士の残党と綾小路俊実に従って挙兵し、相楽総三らと赤報隊を結成。その後、独走する相楽たちと別れて帰京し、投獄されたのち奥州を転戦した。

慶応四年九月一日に死亡し、墓は京都市東山区泉涌寺山内町の戒光寺にあって、墓碑には「傷於下寺町於牢死」とされているものの、篠原泰之進は七月五日に五条橋付近で田口次郎が刺殺したとし、阿部十郎は中西登が殺害したとしている。二十四歳。

司馬雄蔵→司馬良作

司馬良作

奥州仙台の出身で、天保十二年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛した。西村兼文の『新撰組始末記』には、慶応元年夏の編成で「斯波」という隊士が文学師範になったとしているが、その直前の入隊者に「斯波雄蔵」がいたとしていることから、文学師範となったのは斯波雄蔵だったと考えられる。ところが、そのころの入隊者には斯波緑之介と司馬良作がいるだけで、斯波雄蔵の在隊は確認できない。したがって、緑之介か良作が雄蔵ということになるのだが、緑之介は慶応三年六月の幕臣取立てのさいにも同名で記録されており、良作が雄蔵であったことになる。良作もしくは雄蔵の名前は、幕臣取立ての名簿に記録されておらず、それまでに離隊していたことになるが、『新撰組始末記』には「斯波良蔵ハ洋行ニ志ザス所アリテ、修行スル暇ヲ乞ヒテ退去ス」と、斯波良蔵という隊士の離隊を記録している。これが良作のことと思われ、良作、良蔵、雄蔵の順に名前を並べると、彼らが同一人物であった可能性が理解される。

司馬良蔵→司馬良作

斯波緑之介

新波とも。紀州和歌山の出身で、天保十一年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛した。元僧侶で文武劣

等とされるが、慶応三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けている。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て、江戸に帰還後に脱走した。一月四日の淀の戦いで戦死したともされる。

島田幸之介（しまだこうのすけ）

越後の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、十二月以前に離隊した。

清水休左衛門（しみずきゅうざえもん）

天保九年生まれ。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、七月以前に離隊する。

志村武蔵（しむらたけぞう）

志邑、武三とも。天保四年生まれで、出身は美作津山、相模ともされる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受け、伍長をつとめた。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津では大炮差図役となる。八月の母成峠の戦いののち、斎藤一らと会津に残留し、九月五日に如来堂守備中を襲撃されて死亡とされるものの、脱出して東京で病死した。

小路平三郎（しょうじへいざぶろう）

若狭小浜の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同年七月には中西登らと京都潜入の長州藩士石津茂一郎を捕らえる。同三年六月以前に病気のため離隊し、故郷へ帰る。その後、罪を犯して獄中で病死。

白井鷹之進（しらいたかのしん）

奥州津軽出身で、天保十年に生まれる。留田流剣術、源家古伝馬術を使う。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同三年六月以前に離隊した。

鈴木直人（すずきなおと）

真人、元とも。上総鶴牧の出身で、天保十五年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同二年五月に市中で山井三位の家来森某を斬殺している。剣術教授心得をつとめ、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いで五日に淀で戦死した。三日に伏見ともされる。二十五歳。新選組慰霊碑に名前が刻まれる。

瀬山多喜人（せやまたきと）

施山、滝人、布施多喜人とも。源泰朝。上総館林の出身で、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同時期に入隊した石川三郎とともに商家の婦人と密通した罪により、六月二十一日に切腹した。墓は光縁寺にある。

田内知（たうちとも）

源重次。武州羽生の出身で、天保十年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛したが、入隊が遅れたのか直後の在隊記録はなく、同三年一月十日に切腹したことのみが伝わる。隊規を破って妾を京都郊外の八条村に住まわせていたところ、近隣の水戸藩士と密通されるが、それを知らずに妾宅を訪れ、酒肴が用意されていたことに不審を覚えて妾を詰問中、押し入れに潜んでいた男に斬り付けられ、肩先と両足を負傷した。男と妾は逃走し、近所の者が新選組に事件を通報したところ、屯所へ連れ帰られ切腹を命じられたという。二十九歳。墓は光縁寺にある。

なお島田魁の『英名録』の別項には芹沢鴨以下、長州のスパイや幕臣取立てに反発して切腹したメンバーが列記されており、そのなかに「田内藤太郎」とされた隊士がいる。これが田内知の別称ともされているが、項目上の意味から浅野藤太郎を誤認したものと考えられる。

武城九良太（たけしろくらた）

蔵太とも。紀州出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還後、脱走した。

田中梅太郎（たなかうめたろう）

天保十一年の生まれで、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、七月以前に離隊した。

谷川辰吉（たにがわたつきち）

辰造とも。備中倉敷の出身で、文政五年に生

まれる。元治元年に国許で事件を起こして大坂に出奔し、土佐人と交わるようになるが、南堀江で道場を開く同国人の谷三十郎・万太郎と出会い、土佐人らによる大坂焼き討ちの謀議を密告した。これによって慶応元年一月のぜんざい屋事件が起こり、その縁で新選組に入隊する。慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じたものか。入隊後は本名の和栗吉次郎を名乗り、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、十二月に大坂で脱走し、井汲恭平と改名して新政府軍に加わり、奥州を転戦した。帰郷後、再び京都に移って七十二歳で死亡する。墓は京都市左京区黒谷の顕岑院墓地にある。

田村一郎（たむらいちろう）

市郎とも。義利。奥州岩城平の出身で、田村半右衛門の子として天保十四年に生まれる。録四郎、銀之助の長兄。清水家の家臣板橋徳蔵のもとに身を置いていたが慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、甲陽鎮撫隊として出陣して勝沼で負傷したため、久米部正親を隊長格とした二十数名のグループに加わって会津へ先発する。会津では什長となり、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では歩兵差図役をつとめている。蝦夷地への渡航をためらい、弟の録四郎とともに新選組を離脱するが、二カ月後に渡航し、箱館の四分隊編成では第三分隊に所属した。明治二年五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち、弁天台場から静岡に送られ、五年六月に島田魁らとともに解放された。

田村金七郎（たむらきんしちろう）

相州浦賀の出身で、弘化二年に生まれた。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛した。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、脱走する。

富川十郎（とみがわじゅうろう）

藤原政行、政之、良利とも。天保十五年に生まれ、甲州の出身とも、常陸ともされる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、慶応三年三月に伊東甲子太郎らが御陵衛士として新選組から分離するさいに、密命を受けて隊に残留した。同年六月の幕臣取立てにさいしては、茨木司らと反対して御陵衛士との合流をはかったものの、新選組との編入禁止の約定によって容れられず、会津藩に脱隊を申し入れ、守護職邸で近藤らと話し合うが、約定により脱隊不能のため茨木ら三名とともに自刃する。二十四歳。遺体は光縁寺に埋葬され墓碑もあるが、のちに同志らによって京都市東山区泉涌寺山内町の戒光寺に改葬された。

中条常八郎（なかじょうつねはちろう）

恒八郎、常八とも。播州の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊する。同二年九月の三条制札事件に五番組として出動して十五両の恩賞金を与えられ、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。十二月の天満屋事件では斎藤一らと三浦休太郎を護衛し、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還するが、甲陽鎮撫隊として出兵したのちに永倉新八・原田左之助らの靖共隊に加わり歩兵取締となった。

中村玄道（なかむらげんどう）

下野宇都宮の出身で、文政三年に生まれる。人見流馬術を使った。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。勘定方、伍長をつとめ、鳥羽伏見の戦いから江戸に帰還するさいには小荷駄方となり、数点の記録を『金銀出入帳』に残しているが、帰還後に江戸で脱走した。

中村五郎（なかむらごろう）

藤原政常。下野宇都宮の出身で、嘉永二年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛する。慶応三年三月に伊東甲子太郎らが御陵衛士として新選組から分離するさいに、密命を受けて隊に残留した。同年六月の幕臣取立てにさいしては、佐野七五三之助らと反対して御陵衛士との合流をはかるが、新選組との編入禁止の約定によって容れられず、会津藩に脱隊を申し入れ、守護職邸で近藤らと話し合うが、容れられず富川十郎ら三名とともに自刃する。四名の遺体は光縁寺に埋葬され墓碑もあるが、のちに同志らによって京都市東山区泉涌寺山内町の戒光寺に改葬された。

中山重蔵

重三、重郎とも。京都の出身で、有栖川宮に仕える中村喜二郎衛門の次男として弘化三年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津戦争では従軍の記録が見当たらないものの、蝦夷に渡航して、明治二年四月ごろの編成では第三分隊に所属し、それ以前には東組二番の一員として市中警備の任についていたことが記録される。

五月十五日に弁天台場で降伏しているが、弘前での収容者名簿に名前がなく、降伏後の消息は不明。

明治五年六月に島田魁らが名古屋で解放されたさいに、中山重久の名前もあるが、重蔵のことなのだろうか。

新田寅之介

豊後臼杵の出身で、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、同三年六月以前に離隊している。

林小五郎

江戸の出身で、天保十五年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いにおいて五日に淀で戦死した。二十五歳。新選組慰霊碑に名前が刻まれる。

林正吉

尾張名古屋の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊した。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還後、脱走したとされる。箱館戦争の降伏人に、伝習士官隊の林鐘吉という人物がおり、生国は尾張、以前の所属が靖共隊とされている。誕生が弘化三年と、一年違っているが、おそらく正吉と同一人と思われる。

藤原和三郎

備中岡山の出身で、文政十三年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛する。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て、江戸帰還後に脱走した。

明治四年に元隊士の和田屋和三郎という人物が捕らえられ、入牢したことが記録されているが、同一人物である可能性がある。

古川小二郎

江戸の出身で、嘉永元年に生まれる。心形刀流剣術、立身流槍術、甲来流馬術を使う。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いにおいて四日に淀で戦死した。三日に伏見ともされる。二十一歳。新選組慰霊碑に名前がある。

細井鹿之助

天保十三年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するものの、七月以前に死亡したものと思われるが、埋葬の記録はない。あるいは上洛中か、上洛直後に死亡したのだろうか。二十四歳。新選組慰霊碑に刻名されている。

正木織之助

鉄之助とも。丹波の出身で、天保十四年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを前に脱走した。

松原幾太郎

惟之。尾張出身で、弘化四年十月十日に松原岩次郎の次男として生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、このときの記録では弘化三年の生まれとなっている。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受け、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還。甲陽鎮撫隊の敗戦後に脱走して、彰義隊に参加して上野戦争で負傷した。のちに白河で漢学塾を開き、明治三十年代には法律事務所を開く娘婿を頼って上京したが、数年で白河に帰って、大正十二年四月三日に死亡した。

三品一郎

京都の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けるが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いにおいて五日に淀で戦死した。二十八・九歳と伝わる。新選組慰霊碑に名前がある。

三井丑之助

貫助とも。源勝久。常陸館林の出身で、天保十二年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、三月の五兵衛新田駐屯後に脱走して新政府軍に投降する。同時期に脱走した大石鍬次郎と懇意だったことから、加納鷲雄の家に大石をおびき寄せて捕縛させた。明治二年には西郷隆盛の推薦によって新政府に出仕して、四年には開拓使農業掛使掌を拝命するが病欠し、七年には佐賀の乱が勃発して現地へ向かい、同年中に依願退職した。

宮川信吉

天保十四年、武州多摩郡大沢村の宮川弥五郎の次男として生まれる。母親のリノが近藤勇の父親である宮川久次郎の妹で、勇の甥にあたる。文久二年に天然理心流近藤道場に入門し、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛する。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、十二月七日の天満屋事件で討死し、紀州藩より四十二両の弔慰金が贈られた。墓は光縁寺と、東京都三鷹市大沢の龍源寺にあり、新選組慰霊碑にも名前がある。

宮武織蔵

近江の出身で、天保八年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月以前に離隊している。

武藤又三郎

奥州仙台の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同三年六月以前に離隊した。

村上清

肥後の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。諸士取調役兼監察をつとめ、四年一月の鳥羽伏見の戦いに負傷し、大坂城で治療中に城外の火災を敵兵の攻撃によるものと誤認して自刃した。新選組慰霊碑に名前が刻まれている。

森下平作

森本、森とも。三河の出身で、天保十年に生まれる。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けた。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還後、永の暇を与えられている。明治九年に建立された新選組慰霊碑に名前があることから、それ以前の死だったことは確実だが、おそらくは鳥羽伏見の戦いで負傷したため、暇を与えられ、直後に死亡したものと考えられる。

森鷹之介

京都の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同三年六月までに離隊している。

矢金繁造

矢倉とも。繁三とも。大坂の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊し、同二年二月に死亡した小川信太郎の頼越人として光縁寺を訪れている。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けたが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸帰還後に脱走した。

山寅之助

弘化三年に生まれ、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛するが、七月以前に離隊している。

吉沢平三

天保六年に生まれ、慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛したが、同三年六月以前に離隊する。

吉村貫一郎

奥州南部の出身で、天保十一年に生まれる。北辰一刀流を使った。慶応元年五月、土方歳三の江戸での隊士募集に応じて上洛し、同年夏の編成では諸士取調役兼監察となり、剣術師範を兼任する。同三年六月には調役として見廻組並の格を受けるが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いに

敗走し、大坂で脱走した。出身の南部藩邸に出頭して帰藩を懇願したが容れられず、切腹したとのエピソードも伝えられる。二十九歳。鳥羽伏見の戦いで戦死したとされる嘉村権太郎と同一人物の可能性がある。

『新選組物語』で伝えられる貫一郎は、妻子五人を抱えて困窮した南部の下級藩士で、文久二年に脱藩し、大坂で新選組に入隊した中年の人物とされるが、実際の年齢も入隊時期も場所も事実とは異なっている。また切腹したさいに、遺品を妻子のもとへ届けてくれるよう、血文字でしたためたということもフィクションである。

吉村新太郎

筑前秋月の出身で、慶応元年七月までの京坂における隊士募集に応じて入隊したが、『新撰組始末記』によると筑前藩士伊藤清兵衛の命を受け、スパイとしての内情偵察が目的だったとされる。同三年六月の幕臣取立てでは平士として見廻組並御雇の格を受けているが、途中での脱隊が困難なために在隊を続けていたという。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還するが、脱走することなく、会津では差図役をつとめ、四月二十五日に白河関門での戦闘で重傷を負ったために離隊している。

和栗吉次郎→谷川辰吉

慶応三年 幕臣取立てまでの入隊者

荒木信太郎

信三郎とも。慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、脱走。

岩崎一郎

南一郎と改名する。陸奥盛岡の出身で、天保十五年に生まれる。慶応三年前半に入隊したものと思われ、同年六月の幕臣取立てで仮同志ながら見廻組並御雇の格を受け、のちに平隊士となる。翌年一月鳥羽伏見の戦いを経て江戸帰還後に脱走した。彰義隊に加わったが、のちに沼津に住居して元隊士の竹内元太郎や結城有無之助と交流し、明治二年十一月十二日に日野の佐藤彦五郎宅を訪れ、翌年十一月十日には勝海舟を訪ねて金二両を無心している。墓は静岡県沼津市千本緑町の観音長谷寺にある。

梅戸勝之進

慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。十二月の天満屋事件で負傷し、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還した。その後、会津に転戦し、同年六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では籠役とあり、九月十二日に仙台で降伏している。新選組慰霊碑に名前があることから、同碑が建立された明治九年までに死亡したことが確認される。

岡田克己

克見、克鬼とも。慶応三年前半に入隊したものと思われ、同年六月の幕臣取立てで仮同志ながら見廻組並御雇の格を受けているが、佐野七五三之助らと幕臣となることに反対し、十名で会津藩に脱隊を求めるが果たせず、首謀者の佐野ら四名は切腹し、克己ら六名は雷同者として追放処分となった。

小幡三郎

慶応三年前半に入隊したものと思われ、同年六月の幕臣取立てで仮同志ながら見廻組並御雇の格を受け、のちに平隊士となった。鳥羽伏見の戦い直後に脱して会津藩大砲隊に合流して逃げ延びているが、このときの会津藩の記録には「小県三郎」とされている。江戸帰還後は会津まで戦い、八月の母成峠の戦いに敗走すると斎藤一らと会津に残留し、九月に守備中の如来堂を襲撃されて死亡。ただし、如来堂の隊士は全員が戦死者として扱われているものの、斎藤以下の生存者が確認されるため不詳とすべきだろう。

加賀爪勝之進

加々爪とも。勝太郎とも。貞則。元美濃加納藩士。慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。鳥羽伏見の戦いを経て江戸帰還後、甲陽鎮撫隊として出陣し、三月六日の勝沼の戦いで討死した。新選組慰霊碑に名前が刻まれている。

加藤羆

慶応二年に入隊し、同年九月の三条制札事件では組物見同心として出動し、七両二分の恩賞金を与えられ、翌三年六月の幕臣取立てでは平

士として見廻組並御雇の格を受けている。六月二十三日に死亡しているが、その前日、武田観柳斎が殺害された事件があり、これに出動して死亡したものとも、そのときに武田の同志一名が枚方まで逃走し、同所で切腹したということから、それが羆だったとも考えられる。墓は光縁寺にある。

木幡勝之進

慶応三年前半に入隊したものと思われ、同年六月の幕臣取立てで仮同志ながら見廻組並御雇の格を受けているが、茨木司らと幕臣となることに反対し、十名で会津藩に脱隊を求めるが果たせず、首謀者の茨木ら四名は切腹し、勝之進ら六名は雷同者として追放処分となった。

佐久間顕助

慶応三年前半に入隊したものと思われ、同年六月の幕臣取立てで仮同志ながら見廻組並御雇の格を受け、のちに平隊士となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、各地を転戦して仙台より蝦夷に渡り、箱館での四分隊編成では第二分隊嚮導役をつとめた。明治二年五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されるが、以後の消息は不明。新選組慰霊碑に名前があり、同碑が建立された明治九年までに死亡したことが確認される。

柴山徳三郎

芝山とも。徳太郎とも。慶応三年前半に入隊したものと思われ、同年六月の幕臣取立てで仮同志ながら見廻組並御雇の格を受け、のちに平隊士となる。慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、脱走した。

白原七郎右衛門

慶応三年前半に入隊したものと思われ、同年六月の幕臣取立てで仮同志ながら見廻組並御雇の格を受けるが、十二月までに離隊している。

高野良右衛門

慶応三年前半に入隊したものと思われ、同年六月の幕臣取立てで仮同志ながら見廻組並御雇の格を受けているが、中村五郎らと幕臣となることに反対し、十名で会津藩に脱隊を求めるが果たせず、首謀者の中村ら四名は切腹し、良右衛門ら六名は雷同者として追放処分となった。

田村大三郎

慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。十二月の天満屋事件に出動していたとされる「市村大三郎」と同一人物だろう。翌年一月の鳥羽伏見の戦いにおいて、五日に淀で戦死した。新選組慰霊碑に名前がある。

中井三弥

慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。このとき富川十郎らと幕臣となることに反対し、十名で会津藩に脱隊を求めるが果たせず、首謀者の富川ら四名は切腹し、三弥ら六名は雷同者として追放された。

中村小次郎

小二郎、小三郎とも。慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。のちに伍長をつとめ、十二月の天満屋事件で負傷し、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還した。永倉新八と洲崎遊郭の品川楼に登楼したとのエピソードを残し、ほどなくして脱走している。

橋本皆助

会助とも。本名は藤井勇七郎。水野八郎と改名。利長。大和郡山の出身で、天保六年に生まれる。水戸天狗党の筑波山挙兵に加わったが、敗れて上洛し、慶応二年に仮同志として入隊する。同年九月の三条制札事件では物見として出動し、十五両の恩賞金を受け、隊士となる。のちに伍長をつとめるが、翌年三月に伊東甲子太郎らが御陵衛士として新選組から分離するさいに同行した。

八月下旬には御陵衛士を離れて水野弥太郎の名で土佐陸援隊に加盟し、十二月には鷲尾隆聚に従って高野山挙兵に加わる。鳥羽伏見の戦いののち親兵となって軍曹に任じられ、二条城中人数取締の役についた。その後、官職について公金の管理を行っていたが、失策があって明治二年に罷免されたものの、三年には郡山藩への復籍が命じられる。翌年四月十六日、三十七歳で急死した。病死だったらしいが、何者かによる暗殺説もあったという。墓は奈良県大和郡山市西岡町の常光寺にある。

舟津釜太郎

船津とも。鎌太郎とも。慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。同年十二月の天満屋事件で重傷を負い、永倉新八は「戦死」と記録するが、同事件で戦死した宮川信吉に紀州藩からの弔慰金が贈られ、光縁寺に埋葬されているのに対し、釜太郎にはそうした記録がないことから、新選組が京都を離れてからの死亡と考えられる。新選組慰霊碑に刻名されている。

本多太一郎

慶応三年前半に入隊したものと思われ、同年六月の幕臣取立てで仮同志ながら見廻組並御雇の格を受け、のちに平隊士となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いのなか、淀で脱走した。

前野五郎

阿波徳島藩士前野健太郎自敏の次男として、弘化二年に生まれる。慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。十二月の天満屋事件では斎藤一らと警護にあたっており、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、三月には甲陽鎮撫隊として出陣するが敗走。その後、永倉新八らの靖共隊に加わって歩兵取締となり、北関東から会津に転戦するが会津で投降し、薩摩兵の一員として従軍していた加納鷲雄により薩摩藩付属となった。

明治二年九月に開拓判官の岡本監輔に従って樺太に渡るが、病気のため札幌に移り住み、薄野で貸座敷業を行って財をなす。二十四年に岡本と再会し、彼の千島開発計画に賛同、みずからも「千島共済組合」を設立した。二十五年四月十九日、択捉島探検中に橋から転落し、猟銃の暴発によって死亡。四十八歳。墓は札幌市豊平区里塚の里塚霊園にある。

松本俊造

俊蔵とも。慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。このとき中村五郎らと幕臣となることに反対し、十名で会津藩に脱隊を求めるが果たせず、首謀者の中村ら四名は切腹し、俊造ら六名は雷同者として追放処分となった。

松本主税

新選組の幕臣取立てに佐野七五三之助・茨木司・中村五郎・富川十郎が反対して会津藩に脱隊を求めたさいに、岡田克己・木幡勝之進・高野良右衛門・中井三弥・松本俊造と同意し、同行したひとりで、佐野ら四名が切腹すると、雷同者として岡田以下と追放処分を受けたとされる。しかし、主税をのぞく九名は幕臣取立ての名簿に記名されているが、彼の名前はない。入隊直後の出来事だったのだろうか。

水野八郎→橋本皆助

南一郎→岩崎一郎

村上万次郎

万二郎とも。慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、脱走。

矢口健一郎

鎌助、健治とも。藤原定孝、定幸とも。慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。同年九月の三条制札事件に組同心物見として出動し、七両二分の恩賞金を受けた。翌三年四月二十九日に死亡し、切腹ともされるが死因は不明。光縁寺に墓碑があり、死亡日を「四月晦日」としているが、慶応三年四月の晦日は三十日であるため、刻名時に誤認したものと思われる。

吉村助右衛門→吉村芳太郎

吉村芳太郎

助右衛門。越中富山藩士吉村万兵衛の次男として、天保十年四月一日に生まれたという。慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津では什長をつとめ、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では大砲差図役とある。八月の母成峠の戦いに敗れ、仙台で降伏したさいに吉村助右衛門を名乗った。明治三年に放免され、大正六年二月二十三日に七十九歳で死亡したという。

和田六郎

慶応三年六月の幕臣取立てで平士として見廻組並御雇の格を受けているが、おそらくは前年中の入隊と思われる。十二月までに離隊した。

慶応四年
鳥羽・伏見の戦い以前の入隊者

足立林太郎

麟太郎、林五郎、五郎、林之介とも。民治。美濃厚見郡岐阜町の出身で、弘化四年に生まれる。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いに負傷し、江戸帰還後に脱走した。在京中の闘いで刀を損傷したため、屯所に戻って代わりの刀を持って現場に駆けつけたとのエピソードが伝わるが、真偽は不詳。明治四年に開拓使となって北海道へ渡り、四十年に札幌区会議員となった。大正八年八月十六日、七十三歳で死亡。墓は神奈川県鎌倉市十二所の鎌倉霊園にある。

阿部隼多

隼太、集多、準多とも。江戸の出身で、小普請役阿部弥七郎の子として生まれる。慶応三年九月、日光奉行高木伊勢守の転任にともなって暇を出され、上洛して十月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田駐屯後、流山より会津に入って什長下役をつとめ、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では歩兵差図役下役とある。八月の母成峠の戦いに負傷し、蝦夷渡航後、明治二年四月ごろの四分隊編成では第三分隊嚮導役となるが、それ以前に箱館市中で番兵取締の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏、弘前の薬王院に収容された。

天海勝之進

勝之助とも。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、流山より会津に入って大炮役下役をつとめ、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿には大砲警備隊下役とある。八月の母成峠の戦いに敗走し、仙台で離隊した。

新井破魔男

荒井とも。波摩男、波磨男、破魔雄とも。甲州の出身で、天保十四年に生まれる。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、流山より会津入りした。五月一日の白河口の戦いで負傷したが、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では隊長附をつとめている。八月の母成峠の戦いに敗れたのち斎藤一らと会津に残留し、九月に如来堂守備中を襲撃され戦死した。二十六歳。新選組慰霊碑に名前が刻まれる。

池田七三郎

本名を稗田利八。源貞利、利定とも。上総山辺郡田間村の商人稗田佐五七の三男として、嘉永二年十一月十三日に生まれる。慶応元年に江戸へ出て、飯田町の天野静一郎道場で一刀流剣術を学び、旗本永見貞之丞の家来となった。毛内有之助を慕って慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いに負傷し、江戸帰還後の三月に甲陽鎮撫隊として出陣したさいにも銃傷を負った。久米部正親を隊長格とした負傷者のグループに加わって会津へ先発し、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では隊長附をつとめている。

八月の母成峠の戦いに敗れたのち斎藤一らと会津に残留し、九月に如来堂守備中を襲撃され戦死したとされるが、久米部らと脱出して十月に銚子警備の高崎藩兵に降伏した。東京に護送され、一年間の謹慎後に放免となり、昭和十三年一月十六日に九十歳で死亡。墓は東京都港区麻布台の真浄寺にある。

昭和四年、東京の富ケ谷在住中に子母沢寛の取材を受け、往時を回顧した「新選組聞書」を残している。

石井清之進

慶応三年十二月十八日、近藤勇が御陵衛士の残党に狙撃されたさいに護衛として闘い、討死したとされる隊士だが、永倉新八がその名を伝えるのみで、在隊者としての記録はない。同日、同様に討死した隊士として、島田魁は井上新左衛門の名をあげており、同一人物と思われる。新選組慰霊碑に名前がある。

市村辰之助

辰之介とも。美濃大垣の出身で、市村鉄之助の兄。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、三月の五兵衛新田駐屯時まで在隊していたが、ほどなく脱走した。明治五年二月七日に死亡し、戒名を有隣院一官宗徳居士、墓は岐阜県大垣市船町の全昌寺にある。

市村鉄之助

美濃大垣の出身で、市村辰之助の弟。慶応三年六月以降に入隊し、両長召抱人となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、三月には五兵衛新田に駐屯し、四月に流山で近藤勇が投降したのちに会津へ向かう。その後、蝦夷に渡航して土方歳三の付属となるが、土方の命により明治二年四月十五日に箱館を脱し、七月下旬に日野の佐藤彦五郎宅を訪れて土方の遺影などを届けた。三年ほど佐藤家の食客となって過ごしたのち、郷里へ帰ったが、十年の西南戦争で西郷軍に身を投じて討死したとも、桐野利秋の馬丁となって田原坂に戦死したとも。

一色善之丞

善之介とも。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いに負傷し、江戸帰還後に脱走した。

井上新左衛門

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。同年十二月十八日に近藤勇が御陵衛士残党に狙撃されたさいに、護衛として応戦したが討死した。永倉新八はこれを石井清之進としているが、彼の在隊は確認されていない。

井上泰助

大助とも。武州日野の出身で、井上松五郎の次男として安政四年十二月五日に生まれる。井上源三郎の甥。慶応三年六月以降に入隊し、両長召抱人となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いでは、千両松で戦死した井上源三郎の首級を持ち帰ろうとしたが、その重さに断念して近くの寺の門前に埋めたという。江戸帰還後の三月、甲陽鎮撫隊に同行として日野にやってきたときに離隊した模様で、昭和二年二月十日に七十一歳で死亡した。墓は東京都日野市日野本町の宝泉寺にある。

上田馬之丞

上田馬之介、上原馬之介、植原右馬之助とも。遠江浜松の出身で、安政元年に生まれる。慶応三年六月以降に入隊し、両長召抱人となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田駐屯から会津に戦い、蝦夷に渡航した。箱館では土方歳三付属となり、松前もしくは江差で捕縛されたという。また、松前で戦死ともされる

上原栄作

植田とも。遠江浜松の出身で、慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、甲陽鎮撫隊として出陣するが、三月六日に勝沼の戦いで討死した。

内山元次郎

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還直後、品川において脱走した。

大内鎗之助

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田駐屯までは在隊していたが、四月に近藤勇が投降したさいに脱走したものと思われる。

大月藤三

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還するが、脱走とも死亡とも伝えられる。

大町通南太郎

綱太郎とも。慶応三年六月以降に入隊し、平隊士に列せられる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いで負傷し、江戸帰還後は神田和泉橋の医学所で療養し、同月二十七日にはその他の負傷者とともに医学館に移る。会津に従軍し八月の母成峠の戦いに敗れたのち、仙台で降伏した。翌明治二年一月、やはり仙台で降伏した星川三平らとともに勝海舟を訪れ、十両の無心をしている。

岡田五郎

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津戦争では器械方をつとめたが、八月の母成峠の戦いに敗れたのち、仙台で降伏した。翌明治二年十一月十四日に大橋半三郎と勝海舟を訪れ、三両の無心をしたことが記録されている。

小沢宗司

大輔、信濃とも。成教。甲州都留郡上吉田村の出身で、小沢成徳の次男として天保四年に生

まれる。天保三年生まれとも。文久三年の浪士組に加盟して上洛ともされるが、浪士組の帰途、分部宗右衛門の勧誘によって同志十二名とともに小沢信濃の名前で加入し、新徴組隊士となった。新選組へは慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。同年十二月に同郷の高山次郎とともに脱走し、翌年四月に尾張藩帰順正気隊に加わり戊辰戦争に出陣した。

梶谷麟之助

憐之助、憐之介、隣之助とも。天保十二年生まれで、慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、永の暇が与えられて離隊した。その後、どのような経緯でか会津如来堂を脱出した久米部正親のグループに合流し、十月には彼らと銚子警備の高崎藩兵に降伏する。放免後の明治二年三月三十日、勝海舟より三両の無心をした記録がある。

川村隼人→近藤隼雄

菊地央

英、央五郎とも。陸奥弘前の出身で、弘化四年に生まれる。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、閏四月二十五日に会津白河口の戦いで討死した。二十二歳。墓は福島県白河市大工町の皇徳寺にあり、央五郎の名前で葬られている。

熊沢元蔵

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、暇を与えられて離隊した。

小堀誠一郎

誠一とも。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津まで従軍した。六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では隊長附をつとめていたが、八月二十一日の母成峠の戦いに討死した。新選組慰霊碑に名前が刻まれる。

近藤隼雄

集雄とも。川村隼人。近江国友村の出身で、近藤芳助の兄。慶応三年六月以降に入隊し、平隊士に列せられ、のちに諸士取調役兼監察をつとめる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田駐屯後は会津で歩兵頭取となり、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では歩兵差図役頭取改役兼帯とある。会津では近藤勇の義弟を名乗り、新選組隊長と称していたことを、望月光蔵が回顧している。八月の母成峠の戦いに敗れたのち、仙台で降伏した。東京で病死したという。

斎藤一諾斎→斎藤秀全

斎藤秀全

一諾斎。江戸の出身で、幕臣鈴木伴次郎重斯の次男として文化十年に生まれる。幼少から仏門に入り、甲州都留郡強瀬村の全福寺住職となる。新選組入隊は慶応四年三月、甲陽鎮撫隊出陣時ともされるが、同三年十月に土方歳三が江戸で隊士募集をしたさいのことと思われ、入隊後は局長附人数となっている。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、三月には甲陽鎮撫隊として勝沼に戦い、会津では器械方となり、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では器械方頭取とされる。八月の母成峠の戦いに敗れたのち、仙台で降伏した。維新後は教育者となり、明治七年十二月十八日に病死し、墓は東京都八王子市堀之内の保井寺にあり、同市大塚の御手観音には顕彰碑がある。

坂本平三

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いにおいて、六日に橋本で戦死した。

桜井数馬

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いにおいて、五日に千両松で戦死する。

佐々木一

並河一。江戸の出身で、清水家で目付役をつとめる中山敬二郎の子として、嘉永四年六月四日に生まれる。子孫宅には、近江彦根の出身で、彦根藩士小川友八の三男として生まれ、幕臣並河省三の養子となり、慶応四年三月ごろに入隊したものと伝わる。彦根藩の小川家の養子となったのち、佐々木名で入隊したのではないだろうか。その時期も慶応三年六月以降から十二月までのことであり、局長附人数となっている。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、三月には甲陽鎮撫隊として勝沼に戦い、近藤勇

を助けて奮戦した。会津では五月一日の白河口の戦いに負傷し、八月の母成峠の戦いに敗れたのち、蝦夷に渡航する。明治二年四月ごろの四分隊編成では第三分隊に所属し、それ以前には西組一番の一員として市中警備の任についていることが記録される。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されるが、放免後の明治四年一月二十九日に吉村一策・村上一とともに勝海舟を訪れ、七両を無心している。並河家の養子となったのは、おそらくは明治四年以後、七年に明治政府に出仕するまでのことであり、その後は青森、新潟などの警察署長を歴任し、大正十三年に退職。同十五年五月二十四日に宇都宮市今泉町居住の次男並河政雄宅で死亡した。七十六歳。墓は東京都豊島区雑司が谷の雑司ケ谷霊園にある。

沢忠輔

忠介とも。慶応三年六月以降に入隊し、両長召抱人となる。馬丁の忠助とは別人。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、四月に流山で近藤勇が投降すると、島田魁らと土方歳三に従って旧幕軍と宇都宮などに戦い、会津で新選組本隊と合流した。八月の母成峠の戦いに敗れたのち蝦夷に渡航し、箱館では土方付属となる。明治二年五月、箱館総攻撃を前に湯ノ川へ落ち延び、三年中に土方の遺品である刀の下げ緒を日野の佐藤家に届けた。

鹿内主税

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦い前後に大坂で脱走した。

柴岡剛三

西岡万助。芝岡とも。剛造、剛蔵とも。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。同年十一月十八日の油小路事件に出動し、その活躍によって平隊士に列せられたものと思われる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津戦争で討死した。西岡は芝岡の誤読であり、剛三を万助に改名したものか、あるいは前名なのか、永倉新八は万助としている。

清水卯吉

宇吉とも。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田駐屯から会津入りして、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では隊長附をつとめたが、八月の母成峠の戦いに敗れたのち斎藤一らと会津に残留し、九月に如来堂守備中を襲撃され戦死したとされる。

白戸友衛

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田駐屯後、会津で大炮護衛の役につき、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では大砲警備隊下役とある。八月の母成峠の戦いに敗れたのち蝦夷に渡航し、箱館戦争で戦死したとされる。

鈴木練三郎

徠三郎、連三郎、伝三郎とも。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津では什長下役となり、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では歩兵差図役下役とある。八月二十一日の母成峠の戦いで討死した。新選組慰霊碑に名前がある。

諏訪市次郎

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いにおいて、五日に千両松で戦死した。

千田兵衛

陸奥弘前の出身で、弘化三年に生まれる。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津では什長下役をつとめ、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では歩兵差図役下役とある。八月二十一日の母成峠の戦いで討死した。二十三歳。新選組慰霊碑に名前がある。

相馬主計

肇、主殿。胤貫。常陸笠間藩士船橋平八郎の子として、天保十四年に生まれる。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。同年十二月の天満屋事件に参戦し、翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還した。三月の甲陽鎮撫隊にも加わり、四月に流山で近藤勇が投降したさいに、土方歳三とともに江戸へ潜入して、勝海舟らの手紙を持って板橋の東山道軍本営におもむくが捕縛される。放免後は春日左衛門の陸軍隊とともに海路江戸を脱走し、奥州平潟方面の戦いに奮戦し、八月には会津で輪王寺宮より金千疋を贈られる。蝦夷に渡航後は、安富才助とともに陸軍奉行添役となって土方の配下となった。明治二年一月十日には、捕虜とした松前藩勘定小頭代理の三橋栄作らに、許可なく外出することを禁じた申し渡しをしている。同年三月には軍艦回天に乗り込み、宮古湾海戦に土方らと参戦して負傷し、同年五月十五日に土方の戦死を受けて隊長となり同日、弁天台場で降伏。その後、東京へ送られ、坂本龍馬殺害事件などの取り調べを受け、三年十月に流罪の判決が下され、十一月より翌々年十月まで新島で生活する。流刑中に島の植村マツと結婚し、放免後は江戸蔵前に住んだが、突然の切腹死を遂げたと伝えられる。

高山次郎

本名は兵蔵。甲州上暮地の出身で、天保十一年に高山九平の長男として生まれる。新徴組の暮地義信より北辰一刀流を学び、慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。同年十二月に小沢宗司とともに脱走し、大正三年二月二十七日、故郷で死亡した。七十五歳。墓は山梨県富士吉田市上暮地の福昌寺にある。

立川主税

鷹林巨海。筑前宗像郡鐘崎浦の町人喜六の子として、天保六年に生まれる。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、三月の甲陽鎮撫隊から会津に転戦し、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では器械方頭取下役をつとめる。八月の母成峠の戦いに敗れたのち蝦夷に渡航し、箱館では土方歳三附属となった。明治二年五月十一日に土方が戦死したさいに従っており、十二日には戦死の報告を日野に届けるため五稜郭から湯ノ川に落ちるが、捕らえられて秋田藩に預けられる。明治五年ごろに日野の佐藤家を訪れ、土方の最期などを語り、従軍記の『立川主税戦争日記』を示した。その後、鷹林巨海と号して仏門に入り、山梨県東山梨郡春日居村の地蔵院で住職をつとめるなどして、土方の菩提を弔った。六十九歳で死亡し、地蔵院に墓がある。

田中律造

幕府若年寄永井尚志の家来で、慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津では什長下役をつとめ、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では大砲警備隊下役とある。八月の母成峠の戦いに負傷し、仙台で降伏した。

玉置良三

玉沖良蔵、良造とも。安政二年に生まれ、慶応三年六月以降に入隊し、両長召抱人となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田駐屯後に会津へ入り、八月の母成峠の戦いに敗走した。蝦夷に渡航して箱館では土方歳三附属となるが、明治二年三月に十五歳で病死した。新選組慰霊碑に刻名されている。

玉川将之助

将之介とも。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いにおいて、六日に淀で脱走とも戦死ともされる。

田村銀之助

陸奥岩城平の出身で、田村半右衛門の五男として安政三年八月一日に生まれる。田村一郎、田村録四郎の弟。慶応三年六月以降に入隊し、両長召抱人となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、八月の会津母成峠の戦いには参戦せず、大寺に待機していた。その後、蝦夷に渡航し、箱館では榎本武揚の総裁附となり五稜郭に詰めていた。また、経緯不明ながら陸軍隊長春日左衛門の養子となり、負傷した春日の介護をしていたという。

箱館戦争終結後は弘前の薬王院に収容されたが、六月十八日付で多岡太郎・西村五十五郎ら四名とともに「右之者共幼少ニ付、市中往来差許候」との申し渡しがされている。放免後は黒田清隆の世話になり、のちに警察に奉職もした。明治十年の西南戦争にも参加し、大正三年八月二十日、六十五歳で死亡。墓は東京都文京区大塚の智香寺にある。『史談会速記録』に談話を寄せている。

田村録四郎

緑五郎、銀五良、六五郎とも。義忠。陸奥岩城平の出身で、田村半右衛門の子として弘化三年、江戸に生まれる。田村一郎の弟で、田村銀之助の兄。清水家の家臣板橋徳蔵のもとに身を置いていたが、慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田駐屯後に会津へ

入り、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では隊長附とある。八月の母成峠の戦いに敗走し、蝦夷に渡航して明治二年四月ごろの編成では第三分隊に所属し、明治二年五月十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院などに収容されたのち、名古屋藩預けとなり、五年六月に解放された。

富永政之助

慶応三年六月以降に入隊し、平隊士に列せられる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、脱走した。のちに神奈川で病死とも。

長島五郎作

永島とも。五良作、五郎助とも。安房の出身で、嘉永五年に生まれる。慶応三年六月以降に入隊し、両長召抱人となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津戦争後に蝦夷へ渡航した。明治二年四月の二股口の戦いに戦功があったとされるが、これに新選組は出陣しておらず、事実とすれば土方歳三に付属しての参戦と思われる。同年五月十一日、箱館山の防衛戦に討死した。十八歳。新選組慰霊碑に名前がある。

中島 登

初名は峯吉。武州八王子の出身で、中島又吉の長男として天保九年二月二日に生まれる。天然理心流を使い、元治元年の近藤勇が東下したさいに入隊を申し入れるが、近国の状況偵察を命じられ、身分を隠して活動し、翌年の隊士募集に大きな成果を上げたものと思われる。

正式に入隊が許されたのは、慶応三年十月に土方歳三が江戸で隊士を募集したときのことで、上洛して局長附人数に加えられている。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田に駐屯するが、四月に流山で近藤勇が投降すると、島田魁らと土方歳三に従って旧幕軍と宇都宮などに戦い、会津で新選組本隊と合流した。六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では隊長附とあり、八月の母成峠の戦いに敗れたのち蝦夷に渡航し、明治二年四月ごろの四分隊編成では第二分隊嚮導役をつとめるが、それ以前に箱館市中で番兵取締の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、箱館の称名寺から油川の明誓寺、弘前の薬王院に収容され、青森の蓮華寺から再び弁天台場に移されている。『戦友姿絵』『中島登覚書』を残す。

中村吉六

慶応三年六月以降に入隊し局長附人数となるが、鳥羽伏見の戦い直前に伏見で脱走した。

並河一→佐々木一
西岡万助→柴田剛三
西館 登→向館登
沼尻愛次郎

慶応三年六月以降に入隊し、両長召抱人となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還すると、ほどなくして脱走した。

野村利三郎

理三郎とも。源義時。美濃大垣の出身で、弘化元年に生まれる。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田駐屯後、四月に流山で近藤勇が投降したさいに従者として板橋の本営に同行し、捕らえられた。のちに捕縛された相馬主計とともに釈放され、六月に春日左衛門の陸軍隊に属して海路江戸を脱走し、奥州平潟方面の戦いに参戦する。

蝦夷渡航後、箱館では相馬とともに陸軍奉行添役となって土方歳三に従う。明治二年三月二十五日には軍艦回天に乗り込み宮古湾海戦に土方らと参戦し、敵艦甲鉄に飛び移って討死とも、海中に落ちて死亡ともされる。二十六歳。箱館の称名寺に墓碑が建立されたが、現在は散逸して供養碑が同寺境内にある。宮古湾海戦後、宮古藤原海岸に首のない旧幕軍人の遺体が漂着し、藤原観音堂近くに葬られているが、利三郎であったのかもしれない。

畠 山芳次郎

畑山とも。芳二良、二郎とも。慶応三年六月以降に入隊し、両長召抱人となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田に駐屯するが、四月に流山で近藤勇が投降すると、島田魁らと土方歳三に従って旧幕軍と宇都宮などに戦い、会津で新選組本隊と合流した。その後、八月に母成峠の戦いに敗れ、仙台で降伏する。

稗田利八→池田七三郎
本田岩吉

京都の出身で、慶応三年六月以降に入隊して局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津を転戦して蝦夷に渡航。明治二年四月ごろの四分隊編成では第二分隊に所属し、それ以前には西組二番の一員として市中警備の任にあったことが記録され、五月十五日に弁天台場で降伏した。降伏人名簿に元島田魁の家来と記されており、正式隊士となるまでは島田に従っていたものと思われる。弘前の薬王院などに収容され、名古屋藩に預けられたのち、五年六月に放免される。

松沢乙造

音造、乙三、二三とも。慶応三年六月以降に入隊し、両長召抱人となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田に駐屯するが、四月に流山で近藤勇が投降すると、島田魁らと土方歳三に従って旧幕軍と宇都宮などに戦い、会津で新選組本体と合流した。八月の母成峠の戦いに敗走して蝦夷地に渡り、土方附属となるが、明治二年五月一日に屯所の称名寺から行方不明になったとも、離隊して箱館に残留したともされる。

松本捨助

捨介、棄助、捨吉とも。武州多摩郡本宿村名主の松本友八の長男として、弘化二年四月二十四日に生まれる。天然理心流を学び、文久三年二月の浪士組上洛に参加を希望したが家族の反対にあって断念した。十一月ごろには単身で上洛して土方歳三に入隊を求めるが、容れられずに帰郷した。新選組入隊は慶応四年三月の甲陽鎮撫隊出陣のときともされるが、慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となっている。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、三月の甲陽鎮撫隊出陣では勝沼の戦いに負傷したという。五兵衛新田から会津入りして局長附小頭助役をつとめ、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では隊長附とされている。八月の母成峠の戦いに敗れ、仙台で離隊して郷里に戻った。松前で土方に助けられた藩主夫人を、斎藤秀全とともに江戸に送ったとも伝えられるが、ふたりに蝦夷渡航の事実はない。

帰郷後、家督を土方歳三の兄隼人の四男で、松本家の里子となっていた土方錠之助に譲り、井上源三郎の姪のモトを後妻に迎えて東京牛込に住む。その後、三河渥美郡や名古屋で米穀商を営み、晩年は八王子に暮らして、大正七年四月六日に七十四歳で死亡した。墓は東京都府中市西府町の墓地にある。

円尾啓二郎

丸尾とも。桂次郎、路次郎とも。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津入りをして五月二十七日の大谷地村で負傷したが、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では隊長附とある。その後、離隊して会津に残るとも、八月の母成峠の戦いに敗れて、斎藤一らと如来堂を守備中に襲われて戦死ともされる。

万田河三

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田に駐屯したが、四月に近藤勇が流山で投降したさいに脱走した。

三浦恒次郎

恒五郎、常三郎とも。慶応三年六月以降に入隊するが、高齢であったために仮同志として局長附人数に加えられた。同年十一月の油小路事件では、恩義のある藤堂平助を殺害したため、神経症を病んで死亡したとされるが、翌年一月の鳥羽伏見の戦いにおいて負傷し、大坂敗走後に死亡したとの記録に信がおける。

三品二郎

次郎とも。品川、早川とも。京都の出身で、三品一郎の弟。慶応三年六月以降に入隊し、平隊士に列せられた。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津では什長下役をつとめ、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では歩兵差図役下役とある。八月の母成峠の戦いに敗れて仙台で降伏したが、翌明治二年五月十五日に勝海舟を訪れ、三品仲司とともに五両の無心をしている。

宮本騰太

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、暇を許されて離隊した。

向 館 登

西館登。向山とも。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いにおいて、六日に橋本で戦死した。新選組慰霊碑に名前がある。

村上三郎

慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田に駐屯する。四月に流山で近藤勇が投降したさいに従者として途中まで同行するが、帰隊して会津におもむく。大炮役をつとめるが、閏四月二十五日の白河口の戦いに重傷を負い、仙台で降伏した。

森庵六之助

六之介とも。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いに戦死とも、伏見で脱走ともされる。また、会津如来堂での戦死を伝える記録もある。

森権次郎

権二郎とも。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、ほどなく脱走した。また、会津如来堂での戦死を伝える記録もある。

山本二十六

治十六とも。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、ほどなく脱走とも死亡ともされる。

吉田俊太郎

駿太郎とも。丹波篠山の出身で、嘉永二年に生まれる。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田駐屯後に会津入りし、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では隊長附とある。八月の母成峠の戦いに敗れて、斎藤一らと如来堂を守備中に襲われて戦死とされるが、久米部正親らと脱出して、十月に銚子警備の高崎藩兵に降伏した。

吉田万吉

吉田川とも。江戸の出身で、元力士だったという。慶応三年六月以降に入隊し、両長召抱人となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五兵衛新田駐屯後、会津板室村の戦いで負傷するが、蝦夷に渡航して明治二年四月ごろの隊編成では第二分隊に所属した。明治二年五月十五日に弁天台場で降伏している。

和高小刀太

和高虎之助とは親子もしくは兄弟と思われる。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いに負傷し、江戸に帰還後に脱走した。

和高虎之助

和高小刀太とは親子もしくは兄弟と思われる。慶応三年六月以降に入隊し、局長附人数となる。翌年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、会津戦争に参戦した。六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では隊長附とあるが、八月の母成峠の戦いに敗れて仙台で降伏する。

渡辺市造

市蔵とも。武州多摩郡牟礼村の出身で、尾田辺七郎左衛門の長男として生まれる。慶応三年六月以降に入隊し、両長召抱人となる。同年十二月に京都で暇を与えられて離隊した。

維新後は埼玉県川越に住み、明治四十一年四月八日に死亡し、墓は川越市宮元町の真行寺にある。

慶応四年 会津戦争までの隊士たち

漢一郎

湊とも。大坂の出身で、天保九年に生まれる。慶応四年三月の五兵衛新田駐屯までに入隊し、四月に流山で近藤勇が投降すると、島田魁らと土方歳三に従って旧幕軍と宇都宮などに戦う。会津で新選組本隊と合流し、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では籠役をつとめている。

八月の母成峠の戦いに討死し、新選組慰霊碑には、湊一郎の名前で刻名されている。

石井七郎

明治元年十月に仙台で降伏した「徳川旧藩無宿浪士」二十三名のひとりで、そのなかに十数名の新選組隊士がいることから、会津戦争時には入隊していたものと思われる。

石田入道

慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、八月二十一日に母成峠の戦いで負傷と中島登は記録し、死亡者の印を付している。それ以外に在隊の記録はない。

大宮友実

明治元年十月に仙台で降伏した「徳川旧藩無宿浪士」二十三名のひとりで、そのなかに十数名の新選組隊士がいることから、会津戦争時には入隊していたものと思われる。

大宮友賢

慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿に、唯一の医者として記録される。仙台で降伏する大宮友実のことと思われる。

加藤熊五郎

明治元年十月に仙台で降伏した「徳川旧藩無宿浪士」二十三名のひとりで、そのなかに十数名の新選組隊士がいることから、会津戦争時には入隊していたものと思われる。

加藤定吉

寅吉とも。慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では歩兵小頭役とあるが、八月二十一日の母成峠の戦いに戦死した。新選組慰霊碑には、加藤寅吉と名前が刻まれている。

河合鉄五郎

美濃渥美郡岐阜の出身で、弘化三年に生まれる。松平兵庫守の貫義隊に属して北関東を転戦し、会津に投じたという。その後、新選組に入隊し、八月の母成峠の戦いに敗れて斎藤一らと会津に残留し、九月五日に如来堂守備中を襲撃され戦死とされるが、久米部正親らと脱し、十月に銚子警備の高崎藩兵に降伏した。

河合弥三郎

慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿に歩兵小頭取締役と記録される。

岸田兼吉

慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿に歩兵小頭役として記録される。

木村勝之助

明治元年十月に仙台で降伏した「徳川旧藩無宿浪士」二十三名のひとりで、そのなかに十数名の新選組隊士がいることから、会津戦争時には入隊していたものと思われる。

黒川佐吉

慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿に歩兵小頭役として記録される。

渋沢吉之助

明治元年十月に仙台で降伏した「徳川旧藩無宿浪士」二十三名のひとりで、そのなかに十数名の新選組隊士がいることから、会津戦争時には入隊していたものと思われる。

鈴木乙治

慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿に歩兵小頭役として記録される。

関口房太郎

明治元年十月に仙台で降伏した「徳川旧藩無宿浪士」二十三名のひとりで、そのなかに十数名の新選組隊士がいることから、会津戦争時には入隊していたものと思われる。

高田文二郎

江戸の出身で、天保九年に生まれる。慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿では器械方下役とある。八月の母成峠の戦いに敗れて斎藤一らと会津に残留し、九月五日に如来堂守備中を襲撃され戦死したとされるが、如来堂を脱した隊士は多く、死亡の確認はされていない。

高橋　渡

慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、八月の母成峠の戦いに敗れて斎藤一らと会津に残留したが、九月五日に如来堂守備中を襲撃され戦死したものとされる。新選組慰霊碑に名前がある。

永田鎌三郎

慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿に歩兵小頭役として記録される。

中村清七

慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、

六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿に歩兵小頭役として記録される。八月の母成峠の戦いを経て仙台で降伏したことが「徳川旧藩無宿浪士」に記されている。

西沢武吉

明治元年十月に仙台で降伏した「徳川旧藩無宿浪士」二十三名のひとりで、そのなかに十数名の新選組隊士がいることから、会津戦争時には入隊していたものと思われる。西沢義吉と同一人物か。

西沢義吉

慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿に歩兵小頭役として記録される。

林久吉

慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿に歩兵小頭役として記録され、仙台で降伏したことが「徳川旧藩無宿浪士」に記録される。

林竹之助

明治元年十月に仙台で降伏した「徳川旧藩無宿浪士」二十三名のひとりで、そのなかに十数名の新選組隊士がいることから、会津戦争時には入隊していたものと思われる。

藤本吉之介

慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、六月に猪苗代湖南の三代で作成された名簿に歩兵小頭役として記録される。

星川三平

明治元年十月に仙台で降伏した「徳川旧藩無宿浪士」二十三名のひとりで、そのなかに十数名の新選組隊士がいることから、会津戦争時には入隊していたものと思われる。翌年一月に、一緒に降伏した大町通南太郎と勝海舟を訪れ十両を無心している。

松本正

明治元年十月に仙台で降伏した「徳川旧藩無宿浪士」二十三名のひとりで、そのなかに十数名の新選組隊士がいることから、会津戦争時には入隊していたものと思われる。このとき斎藤秀全も一緒に降伏していることから、あるいは松本捨助の変名とも考えられる。

丸山駒之介

駒之助、鍋之介とも。慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、八月二十一日の母成峠の戦いに負傷したが、新選組慰霊碑に名前があることから、そのまま死亡した可能性もある。

横山鍋二郎

鍋三郎とも。慶応四年三月の五兵衛新田駐屯以降の入隊で、閏四月二十五日の白河口の戦いに討死した。新選組慰霊碑に刻名されている。

吉村二郎

明治元年十月に仙台で降伏した「徳川旧藩無宿浪士」二十三名のひとりで、そのなかに十数名の新選組隊士がいることから、会津戦争時には入隊していたものと思われる。

箱館戦争終結までの隊士

青木連

江戸に生まれ、代々の浪人だった。旧幕軍に加わり、会津戦争では慶応四年閏四月二十八日に大桑で負傷し、蝦夷渡航後の十一月五日に松前でも負傷していることから、入隊は明治二年になってからのことと考えられる。同年四月ごろの編成で第二分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏する。弘前の薬王院に収容されたのち、再び弁天台場に送られ、翌年四月に静岡藩預けとなった。

青地源太郎

沢釆女。元桑名藩士。沢図書の養子となり、天保十四年に家督を相続し、御奏者番、御番頭などを歴任して、松平定敬に随従して江戸から藩領の柏崎へおもむく。桑名軍の編成において御供方御政事御惣宰となり、北越を転戦しながら会津に入るが、九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷渡航後、明治二年四月ごろの編成で改役下役と会計頭取を兼務し、五月十五日に弁天台場で降伏する。その後、弘前の薬王院に収容され、東京に送られて三年一月に放免された。

青山次郎

治郎とも。幕府遊撃隊の青山濤太郎の弟で、江戸に生まれ、青山に住居していた。慶応四年四月に回天隊を結成して頭取となり、各地を転戦し、蝦夷渡航後の明治二年一月十五日に隊士二十名を引き連れて入隊する。同年四月ごろの編成では差図役となるが、五月十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院に収容されたのち再び弁天台場に送られ、三月には台場内二番長屋収容人の人数取扱を申し付けられている。翌年四月に静岡藩預けとなった。

明石覚四郎

元唐津藩士で、江戸で生まれる。小笠原長行に遅れて北行し、八月に白石で一行と合流。その後、仙台におもむいて九月中旬に入隊し、蝦夷渡航後の明治元年十月二十四日に七重村の戦いで負傷する。明治二年四月ごろの編成で第二分隊に所属し、明治二年五月十五日に弁天台場で降伏した。その後、弘前の薬王院に収容され、東京に送られて三年一月に放免。

秋山義三郎

儀三郎とも。元会津藩士。慶応四年八月の会津母成峠の戦いに敗れたのち、仙台付近で青山の回天隊に加わったものか、弁天台場での降伏人名簿に「青山次郎厄介」とある。入隊は青山と同じく、蝦夷渡航後の明治二年一月十五日のことと思われる。同年四月ごろの編成で第三分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏。弘前の薬王院に収容されたのち、東京に送られて松代藩預けとなり、三年三月に放免。

天野十郎

高仲重次郎。元唐津藩士で、天保十二年に江戸で生まれる。小笠原長行が江戸を脱したときに随従し、九月に白石から仙台におもむき、中旬に入隊した。蝦夷渡航後の明治元年十月二十四日、七重村の戦いに負傷し、翌年四月ごろの編成で会計方をつとめたが、五月十五日に弁天台場で降伏する。その後、弘前の薬王院から東京へ送られ、旧藩に引き渡されて三年一月に放免。

五十嵐伊織

会津出身ともされ、慶応四年八月の会津母成峠の戦いに敗れたのち、仙台付近で青山の回天隊に加わったものか、弁天台場での降伏人名簿に「青山次郎厄介」とある。入隊は青山と同じく、蝦夷渡航後の明治二年一月十五日のことと思われる。裁判役附属として、弁天台場で戦死とするものもあるが、入隊前の所属だったのだろうか。同年五月十二日に弁天台場防戦中に負傷し、十五日に弁天台場で降伏したが入院のため、その後の収容者名簿に名前はない。豊津藩に送られて三年一月に放免。

石井勇次郎

元桑名藩士で、石井文弥の長男として弘化三年一月五日に江戸で生まれる。直心影流剣術を使い、安政元年に家督を相続して御馬回役をつとめるが、江戸開城を前に脱走して鴻ノ台の旧幕軍に加わる。土方歳三とともに北関東を進軍し、宇都宮城を攻略したさい腰に被弾した。その後、会津から柏崎におもむいて桑名軍致人隊に属し、北越などに戦って負傷を重ねるが、会津から仙台に向かい、九月中旬に入隊した。蝦夷に渡航し、嚮導役に任命されて峠下、七重に戦う。同年十二月には差図役下役となり、明治二年四月ごろの編成で差図役並となるが、五月十五日に弁天台場で降伏。その後、弘前の薬王院に収容され、東京に送られて旧藩に引き渡しとなり、三年一月に放免された。三重県職員などを経て新潟県に移り住み、三十六年六月十七日に五十八歳で死亡。弘化二年生まれの五十九歳とも。墓は新潟県柏崎市若葉町の極楽寺にある。『戊辰戦争見聞略記』を残す。

市橋秀松→高橋恭助

岩崎勝次郎

勝二郎とも。入沢安左衛門の子として、嘉永二年に江戸で生まれる。田安家の家臣岩崎新太郎厄介ということだが、新選組入隊までの経緯は不明。明治二年四月ごろの編成で第三分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏する。弘前の薬王院に収容されたのち、再び弁天台場へ送られ、三年四月に静岡藩へ引き渡された。

印具馬作

帆足徹之助。幼名を馬之助、のちに三治。唐津藩士印具官太輿治の長男として、天保十四年五月二十二日に生まれる。嘉永二年に出仕し、勘定役、御徒目付席などを経て、慶応四年三月に朝廷の命によって藩兵と唐津を出立し、さらに京都から江戸へ到着すると、単独で脱走した。旧幕艦長鯨で八月十九日に塩釜に上陸し、白石の小笠原長行に合流を果たすと、九月中旬に仙台で入隊する。蝦夷渡航後の所属をはじめ、降伏の月日、場所、収容先ともに不明。明治元年十月二十四日に七重村で三好胖が討死し、その

相手を発見して仇を討ったという。旧藩に引き渡されてからも永蟄居を命じられていたが、明治三年三月になって許され、親戚筋の帆足家に入って跡を継いだ。明治三十三年五月二十七日に五十七歳で死亡し、佐賀県唐津市西寺町の近松寺に位牌がある。

上田安達之助

上総飯野藩の出身ともされるが、旗本松平民部家来の中山幸右衛門の子として安政元年に江戸で生まれ、本郷菊坂台町に兄の大橋山三郎と同居していたことが記録される。新選組入隊までの経緯は不明だが、明治二年四月ごろの編成で第一分隊に所属し、同年五月十五日に弁天台場で降伏。弘前の薬王院に収容ののち東京に送られ、名古屋藩預けとなり五年六月に放免。

内山栄八

元桑名藩士で越後に生まれ、戊辰戦争における桑名軍の編成では御勘定方に属し御勘定方下役をつとめ、北越から会津へと転戦し、九月中旬に仙台で入隊する。蝦夷渡航後の明治元年十月二十四日に七重村の戦いで負傷し、同二年四月ごろの編成では第二分隊に所属し、それ以前にも東組二番の一員として市中警備の任にあったことが記録されている。同年五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち、東京芝の最勝院で旧藩に引き渡され、三年一月に放免される。

江川七郎

助之。旗本本堂内膳の家臣で、江戸に生まれる。新選組入隊までの経緯は不明だが、明治二年四月ごろの編成で第二分隊に所属し、同年五月十五日に弁天台場で降伏する。弘前の薬王院に収容されたのちに東京へ送られ、名古屋藩預かりとなって三年一月に禁錮を解かれ、五年六月に放免された。

大河内太郎

山脇隼太郎正勝。桑名藩士山脇十左衛門正軌の嫡男として、嘉永二年に桑名城下に生まれる。御小姓役をつとめ、戊辰戦争では柏崎において恭順派の吉村権左衛門を斬って主戦論を唱える。その後、衝鉾隊に加わって五月には越後口の戦いに負傷、桑名軍の致人隊に復帰したものの庄内で降伏した。明治二年二月十九日に箱館への使者を命じられるが、仙台で木村忠次郎・長瀬清蔵と合流して見国隊とともに蝦夷へ渡航する。四月十四日に佐原港に到着し、入隊すると第四分隊に所属した。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち、三年一月に放免され渡米。その後、明治三十年まで三菱長崎造船所の初代所長をつとめ、三十八年五月六日に五十七歳で横浜に死亡した。墓は東京都豊島区駒込の染井霊園にある。

大野右仲

又七郎。松川精一。元唐津藩士で、大野勘助の長男として天保七年十二月八日に江戸で生まれる。九年とも。小笠原長行に重用され、長行が江戸を脱するにあたって会津入りを画策し、会津では同行藩士たちの統率心得方となる。四月二十九日には負傷のため後送された土方歳三を七日町の清水屋に訪れ、戦争の模様などを聴取した。その後、長岡に向かい河井継之助と面談し、会津を経て九月中旬に仙台で入隊する。蝦夷渡航後、十月二十四日の七重村の戦いに参戦し、箱館では新選組頭取から陸軍奉行添役となる。明治二年四月の二股口防衛戦では、土方の不在中にも兵士を指揮して戦い、二次にわたる攻撃を撃退した。五月十一日の箱館総攻撃前夜より榎本武揚らの幹部と別杯を交わし、開戦後に五稜郭へ向かう途中の千代ケ岡陣屋で出陣する土方と出会い、一本木関門より市中に攻勢をかけるが敗走し、千代ケ岡陣屋で土方の戦死を知る。弁天台場降伏の使者として台場入りしており、降伏は五月十五日の台場でのことかと思われる。

その後、弘前の薬王院に収容されて東京に送られ、旧藩に引き渡されて三年一月に放免となった。翌年より明治政府に出仕して、長野、秋田、青森などの警部長を歴任して退官し、二十六年より東京に住み、四十四年六月十一日に芝田町の自宅に七十六歳で病死した。墓は東京都台東区谷中の天王寺墓地にある。『函館戦記』を残す。

大野内蔵之介

内蔵介、内蔵之助とも。元旗本で、江戸に生まれる。戊辰戦争にさいして新選組に入隊するが、それまでの経緯は不明。明治二年五月十五日に弁天台場で降伏するが、病院入りとされており、十一日からの箱館総攻撃に負傷した可能性もある。退院後の八月に東京へ送られ、久保田藩預けとなって三年一月に放免された。

大橋山三郎

旗本松平民部家来の中山幸右衛門の子として天保三年に江戸で生まれ、本郷菊坂台町に弟の上田安達之助と住んでいた。新遊撃隊に召し出され、戊辰戦争にさいして新選組に入隊するが、それまでの経緯は不明。明治二年五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち東京に送られ、名古屋藩預けとなって三年一月に禁錮を解かれ、五年六月に放免。

小笠原胖之助→三好胖

岡田米太郎

備中帯江の農民京右衛門の子として生まれ、戊辰戦争にさいして新選組に入隊するが、それまでの経緯は不明である。明治二年四月ごろの編成で会計方をつとめ、五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されてのち東京に送られた。

岡村亀太郎

元桑名兵で、明治元年九月中旬に仙台で入隊する。蝦夷渡航直後の十月二十四日、七重村の戦いで負傷したが石井勇次郎に助けられ、フランス軍人の手で後送された。重傷だったのか、その後は復帰の記録もなく、翌年八月に東京へ送られて島原藩へ引き渡され、三年一月に放免。

粕屋小次郎

小治郎とも。嘉永三年に江戸で生まれ、四ツ谷西念寺横町に住居していた。旧幕軍で炮兵差図役をつとめていたが、新選組に入隊し、明治二年四月ごろの編成で第一分隊嚮導役となる。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち、再び弁天台場に送られ、三年四月に静岡藩へ引き渡される。

粕屋十郎

十一郎、糟谷伊三郎とも。元幕臣で、天保十一年に生まれる。慶応四年三月に結成された回天隊に加わり江戸を脱し、大鳥圭介の旧幕軍とともに北関東を転戦して会津に入り、八月の母成峠の戦いに敗走して蝦夷へ渡航。明治二年一月十五日、青山次郎とともに入隊したものと思われる。嚮導役をつとめたが、箱館総攻撃の五月十一日、寒川警備中に襲撃され箱館山に討死した。長州兵五名と斬り合いとなって三名を傷つけたが、ついに額を割られて死亡したとの風聞が伝えられる。新選組慰霊碑に粕屋十一郎として刻名されている。

角谷糺

角ケ谷とも。桑名藩士角谷文内の子として、弘化二年に江戸で生まれる。御馬廻役、御小姓役をつとめ、柏崎での桑名軍の編成で御軍事方御小姓軍監退助勤となる。北越を転戦しながら会津に入るが、九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷渡航後は差図役下役をつとめ、明治二年四月ごろの編成で改役となる。五月十一日からの弁天台場防戦中に負傷し、十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院に収容されたのち東京送りとなって、十一月に芝の最勝院から旧藩に引き渡されて深川の霊巌寺に入り、桑名に送られて三年一月に放免となる。

金子庄兵衛

桑名藩領越後苅羽郡新道村の農民善三郎の次男として、天保三年に生まれる。柏崎での桑名軍の編成で御供方に属し、北越を転戦しながら会津に入るが、九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷渡航後の明治元年十月二十四日に七重村の戦いに負傷し、翌年四月ごろの編成で第四分隊に所属。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち東京へ送られ、旧藩に引き渡されて三年一月に放免された。

河村八十右衛門

川邨、川邑とも。八十左衛門とも。元備中松山藩士で、文政十一年に江戸で生まれる。慶応四年に彰義隊と同調しようとしたが果たせず、旧幕艦長鯨で江戸を脱出し、九月中旬に仙台で入隊。蝦夷に渡航し、明治二年四月ごろの編成で会計方となるが、それ以前には沖之口取締の任にあったことが記録される。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち東京へ送られ、芝の最勝院で旧藩に引き渡されて三年一月に放免される。

神戸四郎

高木剛次郎、貞作。桑名藩士高木貞烈の次男として、嘉永元年十一月二十三日に桑名城下で生まれる。御小姓役をつとめ、松平定敬に随従して柏崎に入り、恭順派の吉村権左衛門を斬って主戦論を唱える。その後、衝鉾隊に加わって五月には越後口の戦いに負傷し、桑名軍に復帰して致人隊指揮役となるが庄内で降伏する。明

治二年二月十九日、大河内太郎とともに箱館への使者を命じられるが、仙台で木村忠次郎・長瀬清蔵と合流して見国隊とともに蝦夷へ渡航する。四月十四日に佐原港に到着し、入隊すると第四分隊に所属した。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち三年一月に放免されて渡米。帰国後、昭和八年一月十四日に東京市荏原郡玉川村奥沢において、八十六歳で死亡した。墓は三重県桑名市萱町の法盛寺にある。

木下勝蔵（きのしたかつぞう）

三河吉田藩士の松井郷右衛門の子として、嘉永元年に生まれる。戊辰戦争にさいして新選組に入隊するが、それまでの経緯は不明。明治二年一月前後には東組一番の一員として市中警備の任にあったことが記録され、五月十五日に弁天台場で降伏。弘前の薬王院に収容され、東京に送られ芝の最勝院に入り、旧藩に引き渡されて豊橋で禁錮ののち、三年二月に放免された。

木村忠次郎（きむらちゅうじろう）

忠二郎、忠治郎とも。桑名藩士木村良右衛門重敬の次男として、嘉永二年五月九日に桑名で生まれる。柏崎での桑名軍の編成で御軍事方御小姓軍監退助勤となり、会津に入って軍監となる。会津より庄内に向かう途中で、使者として長瀬清蔵とともに仙台へおもむく。その後、神戸四郎・大河内太郎と合流して見国隊とともに蝦夷へ渡航する。四月十四日に佐原港に到着し、入隊すると第三分隊に所属したが、五月十五日に弁天台場で降伏。弘前の薬王院に収容ののち、三年一月に放免された。十年の西南戦争に新選旅団として従軍したという。

栗原仙之助（くりはらせんのすけ）

栗山とも。元唐津藩士で、弘化四年に生まれる。彰義隊の戦いに参加し、三好胖とともに旧幕艦長鯨で平潟に出て、会津入りをする。八月の母成峠の戦いに敗れて仙台に向かい、九月中旬に入隊した。蝦夷渡航直後に病気のため峠下村に療養するが、明治二年一月前後には番兵取締の任にあったことが記録される。五月十一日の箱館総攻撃で弁天台場において討死した。二十三歳。新選組慰霊碑に栗山仙之助と刻まれ、函館市船見町の称名寺に慰霊碑があり、古くは墓碑もあった。

小久保清吉（こくぼせいきち）

小窪とも。小久保弥吉の長男として、弘化四年に生まれる。三好胖の従者。三好に従って江戸から会津に入り、九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷渡航直後の明治元年十月二十四日、七重村の戦いに三好が討死し、仇を討とうとして銃撃を浴び死亡した。二十五歳。遺体は三好とともに七重村の宝琳庵に葬られたが、佐賀県唐津市西寺町の近松寺にも墓碑が建立されていたという。新選組慰霊碑にも名前がある。

小島造酒之丞（こじまみきのじょう）

造酒之允とも。元備中松山藩士で、出羽新庄に生まれる。板倉勝静が江戸から日光へ脱したさいに同行し、会津軍に加わって戦うが、九月中旬に仙台で入隊。明治二年四月ごろの編成で第二分隊に所属し、それ以前には西組一番として市中取締の任にあったことが記録されている。五月十一日の箱館総攻撃では、持ち場から山背泊へ援兵に向かったことが伝えられるが、十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院に収容ののち東京へ送られ、芝の最勝院で旧藩に引き渡され、三年一月に放免となる。

小林幸次郎（こばやしこうじろう）

幸二郎、幸治郎とも。小笠原長行の従僕で、上野吾妻郡川島村に生まれる。長行が江戸を脱するさいに従い、九月中旬に仙台で加入した。蝦夷渡航後、明治二年四月ごろの編成で第二分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏する。青森の明誓寺から弘前の薬王院に収容され、この間に病死する。函館市船見町の称名寺に慰霊碑があり、古くは墓碑があった。

酒井要次郎（さかいようじろう）

陽二郎とも。上野安中藩用人酒井守人の次男として、弘化二年に江戸で生まれる。戊辰戦争にさいして新選組に入隊するが、それまでの経緯は不明。明治二年四月ごろの編成で第一分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院に収容ののち東京へ送られ、旧藩に引き渡されて三年一月に放免となる。

佐久間銀太郎（さくまぎんたろう）

銀次郎とも。土岐善次郎。元唐津藩士で、嘉永元年に唐津で生まれる。小笠原長行が江戸を脱したさいに同行し、九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷渡航後、明治二年四月ごろの編成で第四分隊嚮導役をつとめるが、五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容される。東京に送られ、旧藩に引き渡されて三年一月に放免。

指田竹次郎（さしだたけじろう）

嘉永三年に江戸で生まれ、御家人として下谷御具足町に住居した。伝習第一大隊嚮導役をつとめ、宇都宮などに転戦して会津に入り、九月中旬に仙台で入隊したものと思われる。明治二年四月ごろの編成で差図役兼教授方となるが、五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち再び弁天台場に送られ、三年四月に静岡藩引き渡しとなる。

佐治寛（さじひろし）

佐次広とも。桑名藩士佐治頼母為約の三男として、嘉永元年三月二十二日に生まれる。柏崎での桑名軍の編成で御供方御小姓となって、北越を転戦しながら会津に入り、九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷渡航直後の明治元年十月二十四日に、七重村の戦いで戦死したともされるが、死亡は十一月三十日のことであり、重傷を負っての死亡と思われる。二十一歳。遺体は箱館の高龍寺に葬られた。

佐藤房太郎（さとうふさたろう）

房吉とも。元唐津兵で、嘉永六年に江戸で生まれる。慶応四年五月に前場小五郎に従って江戸を脱し、旧幕艦長鯨で平潟に到着して会津に入り、九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷渡航後の明治二年四月ごろの編成で第三分隊に所属し、それ以前にも東組二番の一員として市中警備の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容ののち東京に送られて旧藩引き渡しとなり、三年一月に放免された。

沢采女（さわうねめ）**↓青地源太郎**

鈴木量平（すずきりょうへい）

元備中松山藩士で、弘化三年に松山城下鉄砲町に生まれる。御中小姓をつとめ、板倉勝静が江戸から日光に脱したさいに同行したが、再び江戸に戻って旧幕艦長鯨で仙台に入った。九月中旬に入隊し、蝦夷渡航後の明治二年一月前後には東組一番の一員として市中警備の任にあったことが記録されている。五月十一日の箱館総攻撃では、称名寺の屯所から弁天台場へと駆けつけたことが伝えられ、十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院に収容されて東京送りとなり、芝の最勝院で旧藩に引き渡され、三年一月に放免となった。

関川代次郎（せきかわだいじろう）

代治郎、代二郎とも。桑名藩寄合番関川代左衛門の次男として、天保九年に桑名城下で生まれる。京都勤番ののち、柏崎での桑名軍の編成で御供方御下横目となった。北越を転戦しながら会津に入り、九月中旬に仙台で入隊。蝦夷渡航後の明治二年四月の編成で第四分隊に所属し、それ以前には番兵取締の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容ののち東京へ送られ、旧藩へ引き渡された。明治十年の西南戦争には新選旅団として出兵し、帰郷後は三重県尾鷲警察署巡査となり、四十二年に桑名矢田川原の自宅において七十一歳で死亡する。墓は三重県桑名市西矢田町の善西寺にある。

多岡太郎（たおかたろう）

多賀権太郎。元唐津藩士で、江戸に生まれる。慶応四年三月に小笠原長行が江戸を脱したさいに同行し、会津から白石を経て九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷渡航後の明治二年一月前後には、西組二番として市中取締の任にあったことが記録され、五月十五日に弁天台場で降伏する。弘前の薬王院に収容されたが、田村銀之助らとともに年少者として外出を許され、三年一月に放免された。

多賀男也（たがおとや）**↓福与男也**

多賀権太郎（たがごんたろう）**↓多岡太郎**

高岡倉太郎（たかおかくらたろう）

蔵太郎とも。旗本神保忠家の家臣麻島角右衛門の子として弘化三年に江戸で生まれ、深川富川町に住居した。戊辰戦争にさいして新選組に入隊するが、それまでの経緯は不明。明治二年四月の編成では第一分隊に所属するが、十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院に収容されて再び弁天台場に送られ、二番長屋に収容されていたが、三月十八日に病院入りが許されている。翌年四月に静岡藩へ引き渡され放免。

高須熊雄（たかすくまお）

元唐津藩士で、天保十四年に生まれる。慶応四年五月の彰義隊の戦いに参加し、三好胖とともに旧幕艦長鯨で平潟から会津に入る。八月の

母成峠の戦いに負傷したのち、九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷渡航後の明治二年一月前後には沖之口取締の任にあったことが記録され、五月十五日に弁天台場で降伏する。弘前の薬王院に収容されたのち、東京に送られて旧藩に引き渡され、三年一月に放免された。

高仲重次郎（たかちゅうじゅうじろう）→天野十郎

高田錠之助（たかだじょうのすけ）→古屋丈之助

高橋恭輔（たかはしきょうすけ）

市橋秀松。元唐津藩士で、嘉永三年に唐津城下に生まれる。小笠原長行が江戸を脱したさいに同行し、会津から白石を経て九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷渡航後の明治二年四月ごろの編成で第四分隊に所属する一方、長行の蝦夷脱出にも尽力したが、五月十五日に弁天台場で降伏する。弘前の薬王院に収容されたのち東京に送られ、旧藩に引き渡されて三年一月に放免された。

高橋珊瑚郎（たかはしさんごろう）

三五郎とも。江戸に生まれ、元旗本で箱館奉行所支配蝦夷地在住。入隊の時期、場所ともに不明だが、明治二年四月ごろの編成で第二分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏する。弘前の薬王院に収容され、再び弁天台場に送られたのち、三年四月に静岡藩預けとなった。

竹内篤平（たけうちとくへい）

長岡藩士で、城下表町に住居していた。相馬主計家臣とされるが、入隊までの経緯は不明。明治二年四月ごろの編成で第一分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏する。弘前の薬王院に収容されたのち東京に送られて旧藩に引き渡され、三年一月に放免された。

竹内武雄（たけのうちたけお）

桑名藩士竹内惣太夫の長男として、嘉永元年に柏崎で生まれる。竹内徳雄の兄。柏崎での桑名軍の編成で大砲方となり、北越を転戦しながら会津に入り、九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷渡航直後の明治元年十月二十四日に七重村の戦いで負傷し、翌年四月六日に死亡する。箱館の実行寺に葬られ、新潟県柏崎市西本町の浄願寺の墓碑には「於松前箱館戦死」とあるが、傷病死と思われる。

竹内徳雄（たけのうちとくお）

桑名藩士竹内惣太夫の次男として、柏崎に生まれる。竹内武雄の弟。兄とともに北越を転戦しながら会津に入り、九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷に渡航し、明治二年四月ごろの編成で第二分隊に所属するが、五月十五日に弁天台場で降伏、弘前の薬王院に収容された。東京へ送られ芝の最勝院に入り、旧藩に引き渡され三年一月に放免となる。明治中期には東京に住み、巡査になっていたという。

武部銀次郎（たけべぎんじろう）

乙部剛之進。元備中松山藩士で、板倉勝静が江戸から日光に脱したさいに同行し、勝静とともに投降して宇都宮藩預けとなった。旧幕軍の宇都宮城攻略戦の混乱に逃走し、勝静とともに会津から仙台に入る。九月中旬に入隊し、蝦夷渡航後の明治二年一月前後には番兵取締の任にあったことが記録され、五月十一日の箱館総攻撃では、本武権平とともに箱館山から逃げ延びたことが伝えられるが、弁天台場で討死した。墓は岡山県高梁市頼久寺町の頼久寺にある。

谷口四郎兵衛（たにぐちしろべえ）

桑名藩士谷口四郎兵衛守敬の子として、天保十一年十二月二十六日に城下一色町で生まれる。御大小姓役をつとめ、北越戦争では致人隊に所属して会津まで転戦し、九月中旬に仙台で入隊する。蝦夷に渡航し、十一月、十二月と松平定敬の命によって、庄内で降伏した藩兵の主力を迎えに行くが果たせなかった。明治二年四月ごろの編成では差図役となり、五月十一日の箱館総攻撃では弁天台場防戦中に左肩を負傷し、十五日に弁天台場で降伏した。病院入りとなって、八月に東京へ送られ、芝の隆崇院で旧藩に引き渡され、三年一月に放免となる。十年の西南戦争に新選旅団として参戦し、四十三年十二月三十一日に七十一歳で東京赤坂に死亡した。墓は東京都文京区音羽の護国寺墓地にある。

千葉栄（ちばさかえ）

東本願寺派の僧侶で、弘化三年に箱館大野村で生まれる。板倉勝静が宿とした箱館谷地頭の料理屋佐吉の縁者で、勝静に懇請して備中松山藩の御中小姓の身分となり、新選組に入隊した。明治二年四月ごろの編成で第三分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏するが、病気のため入院した。弘前の薬王院に収容されたのち東京に送られ、芝の最勝院で旧藩に引き渡され、

三年一月に放免となる。

津田丑五郎（つだうしごろう）

牛五郎とも。弘化二年に京都で生まれ、新選組入隊までの経緯は不明だが、歩兵として入隊し、戦功があって隊士に取り立てられたという。蝦夷地では明治二年一月前後には西組一番として市中取締の任にあったことが記録され、五月二日の七重浜夜襲で負傷し、五月十一日の箱館総攻撃のさいに弁天台場で討死した。二十五歳。新選組慰霊碑に名前がある。

土田新之丞（つちだしんのじょう）

桑名藩士土田外真記の子として、嘉永三年に桑名で生まれる。御馬廻役をつとめ、江戸開城にさいして鴻ノ台集結の旧幕軍に加わり、桑名藩隊として宇都宮城を攻略し、柏崎に至って桑名軍の編成で大砲方に属した。越後与板の戦いに負傷し、九月中旬に仙台で入隊。蝦夷渡航後、明治二年四月ごろの編成で第二分隊に所属、それ以前にも東組二番の一員として市中警備の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち東京に送られ、旧藩へ引き渡されて三年一月に放免。墓は三重県桑名市萱町の顕本寺。

坪田忠蔵（つぼたちゅうぞう）

忠三とも。播州葛東郡八代村の喜兵衛の子として、天保十四年に生まれる。戊辰戦争にさいして鴻ノ台集結の旧幕軍に参加し、慶応四年閏四月二十一日に今市の戦いで負傷した。入隊時期は不明だが、明治二年四月ごろの編成で第三分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏する。弘前の薬王院に収容されたのち東京に送られ、旧藩へ引き渡されて三年一月に放免。

鶴岡健四郎（つるおかけんしろう）

鎌四郎とも。元唐津の兵で、江戸に生まれる。慶応四年五月、前場小五郎らと江戸を脱し、旧幕艦長鯨に乗船し、三好胖らと合流して平潟から会津に入る。八月の母成峠の戦いに敗走して、九月中旬に仙台で入隊。蝦夷渡航後、明治二年四月ごろの編成で第三分隊に所属し、それ以前にも東組二番の一員として市中警備の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容ののち東京に送られ、旧藩に引き渡されて三年一月に放免された。

寺井主税（てらいちから）

旗本武田兵庫の家来で、江戸に生まれる。戊辰戦争にさいして新選組に入隊するが、それまでの経緯は不明。明治二年五月十一日の箱館総攻撃では弁天台場防戦中に負傷し、十五日に弁天台場で降伏した。病院入りとなるが、その後の消息は不明。

寺島繁三（てらしまはんぞう）

繁蔵、繁造、半三とも。文政十年に江戸で生まれ、神奈川奉行の支配下にあった。新選組入隊までの経緯は不明だが、明治二年四月ごろの編成で第三分隊に所属し、それ以前には番兵取締の任にあったことが記録されている。五月十一日の箱館総攻撃に弁天台場防戦中を負傷し、十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容ののち再び弁天台場に送られ、台場では二番長屋に収容されたが、三月十三日に病院入りが許されている。三年四月に静岡藩に引き渡され、放免となった。

土岐善次郎（ときぜんじろう）→佐久間銀太郎

鳥羽順平（とばじゅんぺい）→鳥羽多喜松

鳥羽多喜松（とばたきまつ）

順平。唐津藩士鳥羽杢右衛門信徳の子として、唐津城内埋門小路に生まれる。戊辰戦争での行動は不明だが、九月中旬に仙台で入隊し、蝦夷渡航後の明治二年五月十一日には弁天台場で負傷し、十五日に弁天台場で降伏ののち、病院へ送られた。

中川小十郎（なかがわこじゅうろう）

小次郎とも。武州玉賀郡四谷村の医師吉田宇桂の子として、嘉永元年に生まれる。新選組入隊までの経緯は不明だが、蝦夷渡航後、明治二年四月ごろの編成で第四分隊に所属し、それ以前には番兵取締の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、病院に送られたのち、弘前の薬王院から再び台場に収容され、三年四月に静岡藩引き渡しとなって放免となった。

中沢務（なかざわつとむ）

唐津藩士中沢泉安久の長男として、弘化二年に唐津大名小路で生まれる。小笠原長行が江戸を脱したさいに同行し、会津から白石を経て、九月中旬に仙台で入隊し、蝦夷に渡航した。明

治二年四月ごろの編成で第一分隊に所属し、それ以前には西組一番として市中取締の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち東京に送られ、旧藩に引き渡されて三年一月に放免された。佐賀県東松浦郡北波多村において七十一歳で死亡。生年には諸説もある。

長沢政之丞

松平栄助。桑名藩士松平左二郎親秀の子として、嘉永二年に桑名で生まれる。慶応四年閏四月の桑名軍の編成では大砲方に所属し、五月には妙見山の戦いに軽傷を負い、会津を経て九月中旬に仙台で入隊して蝦夷に渡航する。明治二年四月ごろの編成で第四分隊に所属し、それ以前には沖之口取締の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち東京送りとなって、芝の最勝院で旧藩に引き渡され、三年一月に放免された。

長瀬清蔵

清三、清造とも。元桑名兵で、桑名に生まれる。慶応四年閏四月の桑名軍の編成では御軍事方下目付となり、会津より庄内に向かう途中で、使者として木村忠次郎とともに仙台へおもむく。その後、仙台で箱館への使者となった神戸四郎・大河内太郎と合流して見国隊とともに蝦夷へ渡航する。明治二年四月十四日に佐原港に到着し、入隊すると四分隊編成の第三分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院に収容後、東京送りとなって旧藩に引き渡され、三年一月に放免となった。

成合 清

桑名藩士成合平三郎常存の三男として、弘化五年二月二日に桑名内堀で生まれる。慶応四年閏四月の桑名軍の編成では御軍事方御小姓軍監退助勤となって、北越を転戦しながら会津に入り、松平定敬に随従して蝦夷地渡航を果たす。その後、新選組に入隊して明治二年四月ごろの編成で差図役下役となり、それ以前には番兵取締の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、収容先の弘前薬王院では応接方を命じられ、三年一月に放免された。五年には陸軍に出仕し、西南戦争に従軍して帰京したが、十年九月二十七日にコレラのため東京本所緑町の病院で死亡。三十歳。麻布永坂町の大長寺に葬られたが、同寺は東京都府中市に移転し、墓碑はない。

西村五十五郎

磯五郎とも。西村劇之助の次男として、安政二年に京都で生まれる。桑名藩に召し抱えられて明治元年九月中旬に仙台で入隊するが、その間の経緯は不明。明治二年四月ごろの編成で会計方となり、五月十五日に弁天台場で降伏した。青森の明誓寺から弘前の薬王院に収容されるが、田村銀之助らとともに年少者として外出を許され、三年一月に放免となった。

西村小左衛門

依田織衛。備中松山藩士依田小左衛門の子として、天保七年に江戸で生まれる。慶応四年二月に板倉勝静が江戸から日光へ脱したときに同行し、勝静が投降したことを江戸に報告している。八月に旧幕艦隊に乗船して仙台に至り、藩士十一名を統率して新選組に入隊する。入隊を勝静と蝦夷へ渡航するための方便と発言して、土方歳三の怒りを買い、備中松山藩士は平隊士に列せられた。明治二年四月ごろの編成で第三分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏するが、当日は山背泊の警備から台場に籠城したことが記録されている。弘前の薬王院に収容後、東京へ送られて芝の最勝院で旧藩に引き渡され、三年一月に放免された。

五兵衛新田で隊士だったともされるが、そのような事実はなく、駐屯者の名簿に「与田」と同姓が記されているにすぎない。

西脇乾三郎

乾次郎とも。元唐津藩士で、嘉永三年に唐津で生まれる。慶応四年三月に小笠原長行が江戸を脱したさいに同行し、会津では八月二十一日の母成峠の戦いに負傷して仙台に向かい、九月中旬に入隊した。蝦夷渡航後、明治二年四月ごろの四分隊編成で第一分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏すると弘前の薬王院に収容され、東京で旧藩に引き渡されて三年一月に放免となった。

西脇源六郎

元唐津藩士で、文政十一年に唐津で生まれる。慶応四年三月に小笠原長行が江戸を脱したさいに同行し、その後も側近として仕えた。白石から仙台に入り、九月中旬に入隊し、蝦夷渡航直後の十月二十四日には七重村の戦いで負傷し、明治二年四月ごろの編成で第一分隊嚮導役となり、五月十五日に弁天台場で降伏する。弘前の薬王院に収容ののち、東京へ送られて旧藩に引き渡され、三年一月に放免された。

野部小作→野辺民雄

野辺民雄

野部小作。元唐津藩士で、嘉永二年に唐津で生まれる。慶応四年三月に小笠原長行が江戸を脱したさいに同行し、棚倉から会津に入って三好胖と合流する。九月中旬に仙台で入隊し、蝦夷に渡航して明治二年四月ごろの四分隊編成で第四分隊に所属する。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容ののち、東京で旧藩へ引き渡されて三年一月に放免となった。

野村遊喜

遊吉とも。嘉永元年に江戸で生まれ、御家人として下谷御徒町に住居していた。慶応四年四月に江戸を脱して純義隊に加盟し、旧幕軍とともに宇都宮城の防衛戦を戦う。会津から仙台に出て彰義隊に参加し、蝦夷渡航後の明治二年一月十五日に新選組入隊を果たしたものと思われる。四月ごろの編成で第一分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏後、弘前の薬王院に送られたが再び台場に収容され、三年四月に静岡藩引き渡しとなって放免された。

福田勝之進

美濃本巣郡真桑村の郷士長左衛門の次男として天保十四年に江戸で生まれ、御家人として本所松井町に住居していた。戊辰戦争にさいしての行動は不明で、入隊時期、場所ともに判然としない。

明治二年四月ごろの編成で第一分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏後、弘前の薬王院に収容されたのち東京に送られた。

福与男也

多賀男也。元唐津藩士で、嘉永六年に江戸で生まれる。慶応四年三月に小笠原長行が江戸を脱して棚倉に向かったさいに同行し、会津で三好胖に従って白石から仙台に出る。九月中旬に入隊し、蝦夷渡航後の明治二年四月、長行の箱館脱出時にいったんは前場小五郎と随従するが、新選組に復帰し、同年四月ごろの編成では第三分隊に所属している。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容後、東京で旧藩に引き渡されて三年一月に放免された。

藤井安八

八十八とも。天保十一年に桑名で生まれ、慶応四年閏四月の桑名軍の編成では御軍事方御下横目となり、北越から会津へと転戦し、九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷に渡航して明治二年四月ごろの編成で第四分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏する。弘前の薬王院に収容後、東京芝の最勝院で旧藩に引き渡されて、三年一月に放免された。

古屋丈之助

高田錠之助。備中松山藩士高田亘の子として、嘉永五年に江戸で生まれる。御供番をつとめ、慶応四年二月に板倉勝静が江戸を脱して日光へ向かったさいに同行し、勝静の投降時にも従い、宇都宮城攻略戦の混乱にさいして会津へ入った。九月中旬に仙台で入隊し、明治二年四月ごろの編成で第三分隊所属となり、五月十一日の箱館総攻撃では寒川の番所に詰めており、市中に引き上げたことが記録される。十五日に弁天台場で降伏ののち弘前の薬王院に収容され、東京へ送られて旧藩に引き渡しののち、三年一月に放免となった。

帆足徹之助→印具馬作

細川千太郎

山城淀に生まれる。入隊の時期、場所ともに不明だが、戦功があって歩兵から隊士に取り立てられ、明治二年四月ごろの編成では第二分隊に所属し、それ以前には西組二番として市中取締の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのちに東京へ送られた。

前田岩太郎

越前鯖江藩士の坂井宇右衛門の子として、弘化二年に越前で生まれる。慶応四年三月に江戸を脱し、第七聯隊に加入する。鴻ノ台集結の旧幕軍に合流し、宇都宮城防衛を経て柏崎の桑名軍で神風隊に所属した。転戦して会津に入り、九月中旬に仙台で入隊して蝦夷地へ渡る。明治二年四月ごろの編成で第四分隊に所属し、それ以前にも市中警備の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのちに東京へ送られ、旧

藩へ引き渡しとなって三年一月に放免。

前場喜司馬（まえばきじま）

唐津藩士前場善之助景正の長男として、弘化三年七月十五日に唐津で生まれる。慶応四年三月に小笠原長行が江戸を脱したさいに同行し、九月に白石より仙台に向かい、中旬に入隊する。蝦夷渡航後、明治二年四月ごろの編成で第三分隊嚮導役となり、五月十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院に収容され、東京で旧藩に引き渡したとなり三年一月に放免される。大正四年四月二日、七十歳で東京芝白金に死亡。

前場小五郎（まえばこごろう）

唐津藩家老前場幸右衛門景福の子として、天保十二年七月九日に唐津で生まれる。城内大手小路に住居し、慶応四年一月には家老となる。同年二月に小笠原長行が江戸を脱したため、五月には旧幕艦長鯨に乗り込んで平潟に至り、三好胖らと会津に入った。以後、城下に滞在していたが、新政府軍の進攻に仙台へ向かい、九月中旬に入隊する。蝦夷渡航後の明治二年一月に新選組を離れて長行に従い、四月には長行とともに箱館を脱した。維新後も小笠原家に仕えたのち政府に出仕するが、やがて東京や郷里で教鞭をとり、小笠原流礼法師範となって明治三十八年十一月二十四日、六十五歳で死亡する。

真崎宅太郎（まざきたくたろう）

真ケ崎とも。天保十一年に江戸で生まれ、箱館奉行所支配蝦夷地在住で浦河場所牧場掛をつとめた元旗本。入隊の時期、場所ともに不明だが、明治二年四月ごろの四分隊編成で第三分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院に収容ののち再び台場に送られ、三年四月に静岡藩引き渡しとなって放免。

松井徳太郎（まついとくたろう）

徳三郎とも。天保十一年に清水家近習の松井八十五郎の子として江戸に生まれ、四ツ谷左門町の組屋敷に住居した。近藤勇の妻ツネの弟。新選組入隊までの経緯は不明で、入隊後は明治二年四月ごろの編成で第一分隊に所属し、それ以前にも東組二番の一員として市中警備の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院から再び台場に送られ、三年四月に静岡藩引き渡しとなって放免された。

松沢弾治（まつざわだんじ）

弾司とも。元代官手代手付で、嘉永四年に武州玉賀郡で生まれる。戊辰戦争にさいして新選組に入隊するが、その時期、場所ともに不明。明治二年以降には東組一番の一員として市中警備の任にあったことが記録され、五月十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院に収容ののち再び台場に送られ、三年四月に静岡藩引き渡しとなり放免された。

松平栄助（まつだいらえいすけ）→長沢政之丞

三浦松五郎（みうらまつごろう）

三河岡崎駕籠駄町の農民安三の子として、嘉永三年に生まれる。入隊の時期、場所ともに不明で、戦功があって歩兵から隊士に取り立てられたという。明治二年四月ごろの編成で第一分隊に所属し、それ以前には山背泊見廻りの任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち東京へ送られた。

水谷藤七（みずたにとうしち）

元桑名兵で、天保二年に桑名で生まれる。戊辰戦争における行動は不明だが、九月中旬に仙台で入隊している。蝦夷渡航直後の明治元年十月二十四日に七重村の戦いに軽傷を負ったが、翌年四月ごろの編成で第一分隊に所属し、それ以前には山背泊見廻りの任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容されたのち東京送りとなって、芝の最勝院で旧藩に引き渡されて三年一月に放免。九年には三重県に居住という。

宮崎繁之丞（みやざきはんのじょう）

元旗本で江戸に生まれ、御留守居支配だった。新選組入隊までの経緯は不明で、明治二年四月ごろの編成で第二分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院に収容されたのち台場に送られ、三年四月に静岡藩引き渡しとなって放免される。

三好胖（みよしゆたか）

小笠原胖之助。唐津藩十代藩主小笠原長泰の四男として、嘉永五年に生まれる。慶応四年五月の彰義隊の戦いに参戦して、敗れて三河島まで輪王寺宮を警護したのち、旧幕艦長鯨に乗船して輪王寺宮とともに会津へ入る。八月に新政

府軍が会津に進攻してきたため、上山から白石、さらに仙台へと向かい九月中旬に入隊した。差図役とも小隊司令官ともされ、蝦夷渡航直後の明治元年十月二十四日、七重村の戦いにおいて銃弾を浴びて討死し、遺体は同村の宝林庵に埋葬され、現宝琳寺の過去帳に記載がある。十七歳。鷲ノ木の霊鷲院でも法要が営まれ、同寺よりも戒名が授けられ、墓は佐賀県唐津市西寺町の近松寺にある。

本武権平（もとたけごんぺい）

元備中松山藩士で、文政九年に江戸で生まれる。慶応四年に板倉勝静が江戸を脱したさいに同行し、会津から米沢を経て仙台に至り、九月中旬に入隊する。蝦夷へ渡航し、十一月に江差で旧幕艦開陽が沈没したさいには、家臣への褒美用に仙台より持参した刀剣類の入った大小の箱の捜索を命じられるが、発見することはできなかった。明治二年四月ごろの編成で会計方となり、五月十一日の箱館総攻撃では武部銀次郎とともに箱館山から逃げ延びたことが記録され、弁天台場に籠城して十五日に降伏した。弘前の薬王院に収容されたのちに東京送りとなり、芝の最勝院で旧藩に引き渡され、三年一月に放免となった。

森常吉（もりつねきち）

弥一左衛門。陳明。桑名藩士小河内殷秋の長男として、文政九年六月十二日に江戸藩邸で生まれる。伯父の森陳功を継ぎ、松平定敬の京都所司代就任により公用人一席となり、慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いを経て江戸に帰還し、五月の彰義隊の戦いに藩士を率いて参戦するが敗走し、仙台に向かって定敬と出会う。九月中旬に新選組へ入隊し、蝦夷渡航直後の明治元年十月二十四日に七重村の戦いで負傷するが、二年四月ごろの編成で改役頭取となるが、五月十五日に弁天台場で降伏した。弘前の薬王院に収容されたのち東京へ送られ、十月十七日に入牢、十一月十三日に旧藩へ引き渡しのため出牢するが、その日のうちに深川の藩邸で主戦派藩士の責任を負って切腹を命じられる。四十四歳。遺体は東京都江東区白河の霊巌寺に埋葬され、墓碑もある。また三重県桑名市伝馬町の十念寺に分骨墓がある。

柳沢騰馬（やなぎさわとうま）

榊沢とも。藤馬、東馬とも。盛岡藩士柳沢寿太郎の子として盛岡に生まれる。新選組入隊までの経緯は不明だが、伝習第一大隊と行動をともにしていたともされる。明治二年四月ごろの編成で第三分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏ののち弘前の薬王院に収容され、東京に送られて旧藩に引き渡しとなり、三年一月に放免された。

山形時太郎（やまがたときたろう）

弘化三年に江戸で生まれ、伝習第一大隊嚮導役をつとめる。慶応四年四月に江戸を脱走し、鴻ノ台結集の旧幕軍とともに宇都宮、今市、会津と転戦し、八月の母成峠の戦いに敗れ、九月中旬に仙台で入隊した。蝦夷渡航後、明治二年四月ごろの編成で成合清とともに差図役下役となり、五月十五日に弁天台場で降伏する。弘前の薬王院に収容されたのちに再び台場へ送られ、三年四月に静岡藩へ引き渡しとなって放免。

山際平三郎（やまぎわへいざぶろう）

元唐津兵で、山際平吉の長男として弘化三年二月十五日に江戸で生まれる。慶応四年五月に前場小五郎とともに江戸を脱し、旧幕艦長鯨で平潟に入り会津へ向かう。八月の母成峠の戦いに敗れ、三好胖に従って白石から仙台に出て、九月中旬に入隊した。蝦夷に渡航して明治二年四月ごろの編成で第四分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏して弘前の薬王院に収容される。その後、東京へ送られて旧藩に引き渡され、三年一月に放免となった。

山久知文次郎（やまくじぶんじろう）

唐津に生まれ、唐津藩士山久知又左衛門高安の養子となる。慶応四年三月に小笠原長行が江戸を脱したさいに同行し、会津に入って大野右仲らと長岡に出張し、また長行に従って白石へおもむく。やがて仙台に向かい、九月中旬に入隊して蝦夷に渡る。明治元年十月二十四日に七重村の戦いで負傷するが、翌年四月ごろの編成で差図役並となり、それ以前には西組二番として市中取締の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院収容後に東京へ送られ、旧藩に引き渡されて三年一月に放免された。

山崎八蔵（やまざきはちぞう）

成瀬杢右衛門。桑名藩士成瀬幾右衛門正直の長男で、文政九年二月二十四日に桑名城下で生

まれる。京都所司代では公用人をつとめ、慶応四年五月の彰義隊の戦いに参戦し、敗走して外国船で塩釜に向かう。九月上旬に福島で松平定敬と出会い、仙台で蝦夷に渡航する定敬に随従することになる。入隊は蝦夷渡航後のことで、俗務方をつとめ、明治二年四月ごろの編成で会計方となっている。五月十五日に弁天台場で降伏して弘前の薬王院に収容後、東京に送られて最勝院で旧藩に引き渡され、三年一月に放免となった。明治三十五年九月十一日、七十七歳で愛知県宝飯郡鹿菅村に死亡。墓は三重県桑名市伝馬町の十念寺にある。

山崎林五郎

京都壬生村の浪人林五郎左衛門の子として生まれ、永井尚志に仕えていた。山崎烝の弟と思われる。新選組入隊の時期、場所ともに不明だが、明治二年四月ごろの編成で第四分隊に所属し、それ以前にも市中警備の任にあったことが記録されている。五月十五日に弁天台場で降伏し、弘前の薬王院に収容ののち東京に送られ、名古屋藩に引き渡された。三年一月に禁錮が解かれ、五年六月に放免される。

山脇隼太郎→大河内太郎

依田織衛→西村小左衛門

若田栄吉

旗本若田重三郎義章の三男として、嘉永四年一月二日に江戸で生まれ、麻布古川町に住居した。新選組入隊の時期、場所ともに不明だが、明治二年四月ごろの編成で第一分隊に所属し、五月十五日に弁天台場で降伏している。弘前の薬王院に収容ののち再び台場に送られ、三年四月に静岡藩に引き渡しとなって放免された。大正八年六月十八日、六十九歳で東京小石川に死亡したという。

その他の隊士たち

赤羽音吉

元会津藩士で、天保十四年に生まれる。間宮魁や宮氏岩太郎の名簿には新選組隊士と記録されるが、明治元年十一月五日の松前城攻略戦において死亡していることから、土方歳三の指揮下にあったことは確かだが、浅倉隼之助の回天隊としての出陣であって新選組隊士とは認めがたい。二十六歳。

墓は松前市松前町の法華寺。

飯田七九郎

鳥羽伏見の戦いの戦死者を記した『戊辰東軍戦死者霊名簿』で隊士とされ、慶応四年一月五日に淀の死亡とあるが、文政十二年生まれの見廻組隊士であることが判明している。同年付の記録があることから、生存の可能性が高い。

飯沼粂之進

鳥羽伏見の戦いの戦死者を記した『戊辰東軍戦死者霊名簿』で隊士とされ、慶応四年一月五日に淀で死亡とあるが、文化六年生まれの会津藩士で、会津戦争に参戦して負傷し、同年十月三日に六十五歳で入院中に死亡したことが判明している。

池田庄司

慶応三年九月の薩摩藩目付の文書に「薩大隅侯、京都に於いて壬生浪士にて池田庄司と唱え候者、御抱え入に相成り候由の事」とある人物だが、事実関係は不明。

石井伊之助

永倉新八の『同志連名記』に平同士と記載がある。その他の在隊記録はなく、入隊時期は不明。

石尾健吉

間宮魁の名簿には松前戦死の新選組隊士と記録され、死亡時期は不明だが、新選組に関連があるとすれば明治元年十一月五日の松前城攻略戦においてのものと思われる。回天隊としての出陣であって新選組隊士とは認めがたい。

石川伊太郎

永倉新八は『同志連名記』に平同士と記載し、新選組慰霊碑にも名前が刻まれており、同碑建立の明治九年までの死者ということになる。

一瀬寛治

永倉新八は「土方歳三函館へ脱走のさい募集せし同志なり」として、新選組慰霊碑には会津戦争での犠牲者の位置に名前がある。五兵衛新田から会津戦争前までの入隊者だろうか。

稲吉竜馬

稲葉五六郎、伊藤竜馬。下総銚子出身。水戸天狗党の筑波山挙兵にさいして、獄中の同志を救出するために目明かしを殺害し、その後、京都へ逃亡して慶応元年ごろに入隊したが、まもなく身元を怪しまれたために脱走した。慶応三年には沢五六郎の名前で、江戸薩摩藩邸に集結する浪士に合流し、相楽総三の赤報隊に加盟している。稲芳雄三郎と同一人物かと思われる。

入崎丞

慶応三年四月十九日に中山忠能邸を訪れた隊士で、中山の日記に「新選組入崎丞、田中一両人来乞面会由」と記録される。山崎烝の誤記。

上田清蔵

若狭大飯郡本郷村の豪農船谷善兵衛の次男として生まれる。幼名を金蔵。京都に遊学し、のち入隊するが、近藤勇と意見が合わず郷里に帰ったと伝わる。三年後に再上洛したが、三条大橋近くで殺害されたという。

碓氷昇之助

間宮魁の名簿には松前戦死の新選組隊士と記録され、死亡時期は不明だが、新選組に関連があるとすれば明治元年十一月五日の松前城攻略戦においてのものと思われる。回天隊としての出陣であって新選組隊士とは認めがたい。

大槻銀蔵

大月、大都奇とも。元治元年ごろに在隊し、諸士取調役兼監察をつとめたが、離隊時期は不明。時期不明ながら備後で獄中死したとされる。安政年間に江戸の玄武館で北辰一刀流を修行していた記録があり、天然理心流を試衛館で学び、近藤勇らとも親交があった。

大場久輔

久助とも。元会津藩士で、弘化二年に生まれる。松前の法華寺にある墓碑には「明治二年己四月二十戊辰之役松前ニテ戦死元会津藩士大庭久輔」とあり、間宮魁の名簿には松前戦死の新選組隊士と記録される。明治二年の松前戦に新選組は参戦しておらず、隊士とは認めがたいのだが、同年一月前後には西組一番の一員として市中警備の任にあったことが記録されている。一時的に入隊していたということなのだろうか。四月二十日に法華寺墓地で切腹している二名が発見され、その一方が久輔だった。二十五歳。脱漏があるようだが、どちらかの辞世として「命をばさらに惜しまぬむしの心に懸かる花の行く末」の和歌が伝えられる。

岡島品三郎

永倉新八の『同志連名記』によると慶応三年十二月に不動堂村屯所より伏見奉行所へ移ったさいの平同士として記録されるが、島田魁や横倉甚五郎の名簿からは在隊が確認できない。誰かの変名なのだろうか。

小田数馬

慶応四年一月十一日、大坂の天満橋に梟首された人物で、長州の名を騙って町家で狼藉を働いたとの風聞が伝わり、身分について新選組隊士とする記録もある。桜井数馬あるいは宮川数馬の変名だろうか。

柏尾一郎

永倉新八が「土方歳三函館へ脱走のさい募集せし同志なり」とする人物だが、これ以外に記録はない。

加納惣三郎

京都押小路にある越前屋の次男で、剣術を好んで近所の道場で師範代をつとめ、新選組には見習隊士として入隊したが、小頭に取り立てられ島原に通うようになった。しかし、金に困って金策や辻斬りを行ったため噂が広まり、島原から帰ったある夜、屯所の塀を乗り越えたところを土方歳三らに斬殺されたという。このエピソードは明治のころには語られており、これを素材に司馬遼太郎の短編小説「前髪の惣三郎」が生まれたが、惣三郎の実在は確認されていない。

桐山銭三郎

宮氏岩太郎の『箱館脱走海陸軍総人名』で箱館での隊士とされる人物。入隊の経緯、戦争後のことも不明で、誰かの変名とも考えられる。

鈎木伝三郎

新選組慰霊碑に刻名のある隊士とされるが、向かって右側面の下から二段目の、左から二番目に「鈴木傳三郎」と刻まれている。傳三郎ともされる、鈴木練三郎のことである。

越ノ海

西村兼文の『新撰組始末記』に、慶応元年五月ごろに入隊した元力士とされ、文久三年十一

月に京都の薩摩藩邸で同名の力士が相撲をとっていたことが確認される。同一人物だった可能性もあるが、入隊時に四股名を捨てたため、隊士としての名前は不明。

佐藤安二郎

安次郎、保次郎とも。元治元年二月、幕臣で奥詰の戸田祐之丞が安二郎を訪ねて屯所を訪れ、慶応二年三月には広島出張中の近藤勇らと接触し、翌年十一月と翌々年二月には『金銀出入帳』に合計百十八両の支給が記録されており、隊士だったと思われるのだが、名簿からは在隊時期を知ることはできない。また同名の人物が明治九年三月二十二日に、勝海舟から五十円の無心をしているが、同一人であるかは不明。

白石五六郎

甲陽鎮撫隊として出陣し、慶応四年三月六日に勝沼の戦いで死亡している。隊士ともされるが、佐藤彦五郎の率いた春日隊に所属していたものと思われる。

関清輔

清助、情助とも。元水戸藩士で、松前の法華寺にある墓碑には「明治二年己四月二十戊辰之役松前ニテ戦死元水戸藩士関清輔」とあり、間宮魁の名簿には松前戦死の新選組隊士と記録される。明治二年の松前戦に新選組は参戦しておらず、隊士とは認めがたい。

高橋良之助

慶応二年九月七日の岩倉具視の日記に「新選組脱士高橋良之助ヲ召抱」とあるが、実際に脱走隊士であれば変名を用いていたはずであり、隊士名簿に名前を確認することはできない。

田中一

慶応三年四月十九日に中山忠能邸を訪れた隊士で、中山の日記に「新選組入崎丞、田中一両人来乞面会由」と記録される。

入崎は山崎烝の誤記で変名ではないことから、田中も変名ではないと思われるが、該当する隊士はいない。

田辺太三郎

『戊辰東軍戦死者霊名簿』は慶応四年一月の鳥羽伏見の戦いで三日に伏見戦死の隊士とするが、田村大三郎の誤認と考えられる。

谷山誠一郎

慶応三年中、綾小路俊英の家臣田村帯刀による佐幕派同志募集に呼応し、山崎烝らが江州八日市に出張したさいの同行者として記録されるが、これ以外に在隊を示す記録はない。

玉置伊之助

永倉新八の『同志連名記』に平同士との記載があり、入隊時期は不明ながらも慶応四年の江戸帰還隊士とされていることから、同三年六月以降に入隊した玉置良三のことと考えられる。

角田五郎

永倉新八の『同志連名記』に平同士と記載されるのみで、岡田五郎の誤記と思われる。

服部幸次郎

鳥羽伏見の戦いの戦死者を記した『戊辰東軍戦死者霊名簿』で隊士とされ、慶応四年一月三日に伏見の死亡とあるが、黒谷の会津藩墓地の慰霊碑に記録されるように会津藩士である。

浜田善次

鳥羽伏見の戦いの戦死者を記した『戊辰東軍戦死者霊名簿』で「土方歳三附」とされ、慶応四年一月六日の戦死とあるが、隊士としての確認はできず、他藩士などの誤認と思われる。

早川林平

遊撃隊士玉置弥五左衛門の『戊辰戦争参加義士人名録』で新選組差図役下役とされるのみで、在隊を確認することはできない。

土方幸太郎

永倉新八の『同志連名記』に平同士として記録され、入隊時期は不明ながらも慶応四年の江戸帰還隊士とされるが、伏見奉行所への移転者とはされていないことから、伏見移転後の入隊者となる。ただし、永倉は上坂甲太郎を伏見移転者として「上坂幸太郎」と記載しており、彼を江戸帰還隊士とはしていない。姓の不一致に問題はあるが、おそらく上坂甲太郎と思われる。

藤沢竹城

西村兼文の『新撰組始末記』に「藤沢竹城ハ文芸ノミニテ武事ノ用ヲナサズト倦シテ退去ス」とあり、慶応年間の一時期に在隊したものの、ほどなく離隊したことがうかがえる。

藤沢彦次郎

慶応二年八月一日付で大石鍬次郎が、相続問題について近藤勇の次兄宮川粂次郎にあてた手紙に「同志藤沢彦次郎」とあり、隊士だと確認される。藤沢竹城と同一人物と考えられる。

松田六郎

宮氏岩太郎の名簿に隊士として記載され、また松田六太郎の名前で、明治二年一月前後に山背泊見廻りの任についていたことが記録されていることから、入隊の事実はあったのだろう。桑名人とも、蝦夷で死亡ともされる。

松山幾之介

元治元年七月六日に探索先の岡山奥市谷で、正体が露見したため藩士によって斬殺された隊士と伝わる。岡山池田藩の記録にも「新撰組松山幾之介」とあるが、自称もしくは他称による隊士であった可能性もあり、隊士としては未確定とせざるをえない。

村上一

明治二年十月二十五日に勝海舟より一両を無心したことが記録され、「近藤勇隊村上一」とあることから隊士だったと思われる。その後も三年五月二十四日と四年一月二十九日にも無心しており、村上三郎と同一人かと思われる。

村山謙吉

村上とも。入隊時期は不明ながら、土佐陸援隊に密偵として潜入し、慶応三年十月初頭に武力討幕の計画があることを新選組屯所に通報する。新選組では誤認逮捕をしてしまったとして、七日に陸援隊へ復隊させるが、坂本龍馬と中岡慎太郎が刺客に襲われた翌十一月十六日、嫌疑を受けて捕縛された。十七日に取り調べを受けているが、その後については不明。

梁田佐太郎

大坂の出身と伝えられ、慶応元年夏の編成では篠原泰之進らと柔術師範に就任している。文久三年から慶応元年七月以降まで在隊していた柳田三次郎のことと思われる。

矢部兵吾

元備中松山藩の日光宿坊南照院の小姓で、慶応四年二月に板倉勝静が江戸を脱し、同院に入っている。勝静の仙台行に同行したものか、同地で新選組に入隊して蝦夷に渡航したものと思われる。宮氏岩太郎の名簿に隊士として記載され、また明治二年一月前後に山背泊見廻りの任についていたことが記録される。同年一月前半に、勝静の随臣が体調を崩したため、新選組を離れて勝静に従い、四月には勝静の箱館脱出に随従して浦賀で別れる。

山浦鉄四郎

明治三十四年の『史談会速記録』一〇四輯で「山浦鉄四郎といえる者は殊に其数年前、一時新撰組に入たることも有り、藤堂平助には懇親なる友人なりき」とされた人物で、弘化元年生まれの会津藩士であったことが判明している。おそらく、元治元年の池田屋事変後に加藤民弥と同様、応援として派遣されていたのではないだろうか。会津戦争に参戦したのち、明治十二年十一月八日に三十六歳で死亡し、墓は青森県八戸市湊町館鼻の会津墓地にある。

結城有無之助

無二三。甲州山梨郡日川村に医師結城景仲の子として、弘化二年四月十七日に生まれる。慶応三年には入隊していたとされるが、事実は翌年二月の甲陽鎮撫隊編成時の入隊で、地理に詳しいところから軍監となった。三月六日の勝沼の戦いには同志を募集中で不参加で、敗報に駿河へ落ちて沼津で生活する。同地で岩崎一郎・竹内元太郎らと交わり、明治二年十一月二十八日に勝海舟より十両の無心をした記録がある。四十五年五月十七日に六十八歳で死亡し、山梨県山梨市南に墓がある。

吉田寅之助

永倉新八の『同志連名記』では平同志とされ、切腹死を遂げたことになっているが、新選組慰霊碑には吉田寅三の名前で刻まれている。慶応三年に切腹した田中寅蔵のことと思われる。

和田屋和三郎

大鳥圭介は明治二年七月四日の『獄中日記』に「元新選組の和田屋和三郎、此人元新選組なりしが、昨春隊を辞し市人となり山谷にて渡世せしに、他の新選組の人捕はれしに由り、其連累にて昨冬入牢せし由」と記す。藤原和三郎のことと思われる。

五十音順索引

【あ】
相場薫三郎……131
青木連……152
青地源太郎……152
青柳牧太夫……131
青山次郎……152
明石覚四郎……153
赤羽音吉……164
秋山義三郎……153
浅野藤太郎……114
芦谷昇……131
足立林太郎……143
阿比留鋭三郎……108
阿部十郎……115
阿部隼多……143
甘地一撰……131
天野十郎……153
天海勝之進……143
漢一郎……150
新井忠雄……131
新井破魔男……143
荒木信太郎……140
荒木田左馬之介……115
蟻通勘吾……115
蟻通七五三之進……115
蟻通甚五郎……115
安藤早太郎……115
安藤勇次郎……124
飯田七九郎……164
飯沼粂之進……164
家木将監……116
家里次郎……108
五十嵐伊織……153
伊木八郎……116
池田小三郎……124
池田七三郎……143
池田庄司……164
石井伊之助……164
石井七郎……150
石井清之進……143
石井勇次郎……153
石尾健吉……164
石川伊太郎……164
石川三郎……131
石田入道……150
一瀬寛治……164
市橋鎌吉……131
市村辰之助……143
市村鉄之助……144
一色善之丞……144
逸見勝三郎……131
伊東甲子太郎……124
伊藤主計……132
伊藤鉄五郎……124
伊東浪之介……132
伊東隼之助……132
伊藤与八郎……116
稲吉雄三郎……132
稲吉竜馬……164
井上源三郎……108
井上新左衛門……144
井上泰助……144
茨木司……132
今井祐次郎……132
入崎丞……165
岩崎一郎……140
岩崎勝次郎……153
印具馬作……153
上田安達之助……154
上田馬之丞……144
上田金吾……116
上田清蔵……165
植田末次……132
上原栄作……144
碓氷昇之助……165
内山栄八……154
内山元次郎……144
内海次郎……124
梅戸勝之進……140
江川七郎……154
越後三郎……116
江畠小太郎……132
遠藤丈庵……108
大石鍬次郎……125
大内鎗之助……144
大河内太郎……154
大谷勇雄……125
大谷良輔……132
大槻銀蔵……165
大月藤三……144
大野右仲……154
大野内蔵之介……154
大場久輔……165
大橋半三郎……133
大橋山三郎……155
大町通南太郎……144
大宮友実……151
大宮友賢……151
大村安宅……125
岡島品三郎……165
岡田克己……140
岡田五郎……144
尾形俊太郎……116
岡田米太郎……155
岡戸万次郎……133
岡村亀太郎……155
小川一作……125
小川佐太郎……133
小川信太郎……133
沖田承之進……133
沖田総司……108
奥沢栄助……116
小沢宗司……144
尾関雅次郎……116
尾関弥四郎……116
小田数馬……165
小幡三郎……140
小原銀蔵……125
小原険太郎……125
小原孔三……126
【か】
加賀爪勝之進……140
柏尾一郎……165
梶谷麟之助……145
粕屋小次郎……155
粕屋十郎……155
粕谷新五郎……109
葛山武八郎……117
加藤熊五郎……151
加藤定吉……151
加藤民弥……126
加藤羆……140
角谷紀……155
金子庄兵衛……155
金子次郎作……126
加納惣三郎……165
加納鷲雄……126
上坂甲太郎……126
神代仁之助……109
亀井造酒之助……117
辛島昇司……133
河合耆三郎……117
河合鉄五郎……151
河合弥三郎……151
川島勝次……117
川津平三……133
河村八十右衛門……155
川村林次郎……133
神崎一二三……126
神戸四郎……155
木内峰太……117
菊地央……145
岸島芳太郎……126
岸田兼吉……151
木下巌……133
木下勝蔵……156
木下弥三郎……126
木幡勝之進……141
木村勝之助……151
木村忠次郎……156
木村広太……133
木村良之助……133
清原清……134
桐山銭三郎……165
日下部四郎……134
日下部遠江……134
楠木小十郎……117
熊沢元蔵……145
久米部正親……134
栗原仙之助……156
黒川佐吉……151
鈎木伝三郎……165
小久保清吉……156
越ノ海……165
小島造酒之丞……156
後藤大介……134
小林桂之介……134
小林幸次郎……156
小林峰太郎……134
小堀誠一郎……145
近藤勇……109
近藤周平……118
近藤隼雄……145
近藤芳助……126
【さ】
斎藤秀全……145
斎藤清一郎……134
斎藤一……110
佐伯又三郎……110
酒井兵庫……118
酒井要次郎……156
坂本平三……145
佐久間銀太郎……156
佐久間顕助……141
佐久間荘太郎……134
佐久間登人……135
桜井数馬……145
桜井勇之進……135
佐々木愛次郎……118
佐々木蔵之介……118
佐々木一……145
笹塚峰蔵……118
佐治寛……157
指田竹次郎……157
佐藤房太郎……157
佐藤安二郎……166
真田四目之進……135
佐野七五三之助……127
佐野牧太……135
沢忠輔……146
塩沢麟次郎……135
鹿内主税……146
篠崎信八郎……135
篠原泰之進……127
司馬良作……135
斯波緑之介……135
柴岡剛三……146
柴田彦三郎……127
柴山徳三郎……141
渋沢吉之助……151
島田魁……118
島田幸之介……136
島田弥一郎……128
清水卯吉……146
清水休左衛門……136
清水五一……110
志村武蔵……136
宿院良蔵……119
小路平三郎……136
白井鷹之進……136
白石五六郎……166
白戸友衛……146
白原七郎右衛門……141
菅野六郎……119
杉山腰司……119
鈴木乙治……151
鈴木長蔵……111
鈴木直人……136
鈴木量平……157
鈴木練三郎……146
諏訪市次郎……146
関清輔……166
関川代次郎……157
関口房太郎……151
瀬山多喜人……136
芹沢鴨……111
千田兵衛……146
相馬主計……146
【た】
大松系斎……119
田内知……136
多岡太郎……157
高岡倉太郎……157
高須熊雄……157
高田文二郎……151
高野良右衛門……141
高橋恭輔……158
高橋珊瑚郎……158
高橋良之助……166
高橋渡……151
高山次郎……147
竹内元太郎……119
竹内篤平……158
武城九良太……136
武田観柳斎……119
竹内武雄……158
竹内徳雄……158
武部銀次郎……158
立川主税……147
田所弘人……120
田中伊織……120
田中梅太郎……136
田中寅三……128
田中一……166
田中律造……147
田辺太三郎……166
谷三十郎……120
谷万太郎……120
谷川辰吉……136
谷口四郎兵衛……158
谷山誠一郎……166
玉置伊之助……166
玉置良三……147
玉川将之助……147
田村一郎……137
田村金七郎……137
田村銀之助……147
田村大三郎……141
田村録四郎……147
千葉栄……158
塚本善之助……128
津田丑五郎……159
土田新之丞……159
角田五郎……166
坪田忠蔵……159
鶴岡健四郎……159
寺井主税……159
寺島繁三……159
藤堂平助……111
殿内義雄……111
鳥羽多喜松……159
富川十郎……137
富永政之助……148
富山弥兵衛……128
【な】
中井三弥……141
中川小十郎……159
永倉新八……111
中沢務……159
長沢政之丞……160
長島五郎作……148
中島登……148
中条常八郎……137
長瀬清蔵……160
永田鎌三郎……151
中西小六……128
中西登……128
中村吉六……148
中村久馬……121
中村金吾……121
中村玄道……137
中村小次郎……141
中村五郎……137
中村清七……151
中山重蔵……138
成合清……160
新見錦……112
西沢武吉……152
西沢義吉……152
西村五十五郎……160
西村小左衛門……160
西脇乾三郎……160
西脇源六郎……160
新田革左衛門……121
新田寅之介……138
沼尻愛次郎……148
沼尻小文吾……128
根岸友山……112
野口健司……112
野辺民雄……161
野村遊喜……161
野村利三郎……148
【は】
橋本皆助……141
畠山芳次郎……148
服部幸次郎……166
服部武雄……128
浜口飛一……121
浜田善次……166
早川林平……166
林久吉……152
林小五郎……138
林正吉……138
林信太郎……121
林竹之助……152
原田左之助……112
土方幸太郎……166
土方対馬……121
土方歳三……113
平間重助……114
平山五郎……114
福田勝之進……161
福与男也……161
藤井安八……161
藤沢竹城……166
藤沢彦次郎……167
藤本吉之介……152
藤本彦之助……121
藤原和三郎……138
舟津釜太郎……142
古川小二郎……138
古屋丈之助……161
星川三平……152
細井鹿之助……138
細川千太郎……161
細川内匠……121
本田岩吉……148
本多太一郎……142
【ま】
前田岩太郎……161
前田蔵人……129
前野五郎……142
前場喜司馬……162
前場小五郎……162
牧野源七郎……129
馬越大太郎……121
正木織之助……138
真崎宅太郎……162
松井徳太郎……162
松井竜三郎……122
松崎静馬……122
松沢乙造……149
松沢弾治……162
松田六郎……167
松永主計……122
松原幾太郎……138
松原忠司……122
馬詰信十郎……122
馬詰柳太郎……122
松本喜次郎……122
松本俊造……142
松本捨助……149
松本正……152
松本主税……142
松山幾之介……167
円尾啓二郎……149
丸山駒之介……152
万田河三……149
三浦敬之助……129
三浦繁太郎……122
三浦恒次郎……149
三浦松五郎……162
三木三郎……129
御倉伊勢武……122
三品一郎……138
三品二郎……149
三品仲司……123
水口市松……129
水谷藤七……162
三井丑之助……139
宮川数馬……129
宮川信吉……139
宮崎繁之丞……162
宮武織蔵……139
宮本騰太……149
三好胖……162
向館登……149
武藤又三郎……139
村上清……139
村上三郎……150
村上一……167
村上万次郎……142
村山謙吉……167
室宅之助……130
毛内有之助……130
元井和一郎……130
本武権平……163
森権次郎……150
森鷹之介……139
森常吉……163
森六郎……123
森庵六之助……150
森下平作……139
【や】
矢金繁造……139
矢口健一郎……142
安富才輔……130
矢田健之介……130
柳沢騰馬……163
柳田三次郎……123
梁田佐太郎……167
矢部兵吾……167
山寅之助……139
山浦鉄四郎……167
山形時太郎……163
山際平三郎……163
山久知文次郎……163
山崎烝……123
山崎八蔵……163
山崎林五郎……164
山田春隆……123
山南敬助……114
山野八十八……123
山本二十六……150
結城有無之助……167
横倉甚五郎……130
横山鍋二郎……152
吉沢平三……139
吉田俊太郎……150
吉田寅之助……167
吉田万吉……150
吉村貫一郎……139
吉村二郎……152
吉村新太郎……140
吉村芳太郎……142
【わ】
若田栄吉……164
和田重郎……131
和田隼人……123
和田六郎……142
和高小刀太……150
和高虎之助……150
渡辺市造……150
和田屋和三郎……167
輪堂貞三……131

□取材協力／八木喜久男・田野十二雄・本徳寺・万福寺
□写真協力／小島資料館・伊東成郎・古賀茂作・清水隆・釣洋一・やまだしげる
□表紙・目次デザイン／フレッシュ・アップ・スタジオ
□写植／池袋工芸

別冊歴史読本　第83号
新選組隊士録
1998年9月8日発行

編集人＝牧野　洋　編集協力＝㈲ペンの事務所
発行人＝菅　英志
発行所＝株式会社 新人物往来社
〒100-0005　東京都千代田区丸の内3-3-1　新東京ビル
☎ 03-3212-3931（営業）　03-3212-3936（編集）
FAX 03-3214-7355　振替口座・00160-5-151643
雑誌コード＝69647-83（第23巻第41号）
印刷所＝共同印刷株式会社
© 新人物往来社　1998
本誌記事および図版の無断転載を禁じます。